

二訂版

# 音楽鑑賞教育における批評能力育成プログラムの開発

第 1 部

研 究 報 告

第 2 部

批評を取り入れた新しい音楽鑑賞授業のためのガイドブック（中学校編）

－見つけ、考え、生みだし、広げる、楽しい鑑賞－

（課題番号 20530822）

平成 20～22 年度科学研究費補助金・基盤研究（C）

研究成果報告書

平成 25（2013 年）2 月

研究代表者 宮 下 俊 也

（奈良教育大学大学院教育学研究科 教授）



## はじめに

本書は、平成 20 年度から平成 22 年度にわたる 3 年間、日本学術振興会科学研究費補助金・基盤研究 (C)「音楽鑑賞教育における批評能力育成プログラムの開発」(課題番号 20530822) として行ってきた研究成果を報告するものです。

この 3 年間、私たちが常に意識してきたことは、理論に支えられた確かさと、音楽鑑賞の魅力を十分に蓄え、新しさをもった実践可能な授業プランを、教育現場の先生方に提供しようとするものでした。そのために、「鑑賞」や「批評」についての美学的・哲学的概念の検討を丁寧に行い、同時に、平成 20 年告示の学習指導要領の趣旨を正確に踏まえ、そして、生徒が楽しく創造的に音楽に立ち向かっていくことのできるプランを開発しました。

このプランによって育成する批評能力は、鑑賞する教材楽曲に対して批評できる能力のみに留まるものではありません。音楽を客観的に理解すること、直感や感受性やイメージによって音楽を豊かに感じ取ること、音楽によってうごかされた自分の感情をしっかりと見つめること、そしてその上で、音楽と自分との関係を「価値判断」によって築き、それらを自分以外の人々や社会に向けて発信することを、批評能力育成プログラムとして求めています。そのことが「新しい音楽鑑賞授業」であると捉えました。

この報告書に収めた研究成果と、第 2 部に編んだ「批評を取り入れた新しい音楽鑑賞授業のためのガイドブック (中学校編) - 見つけ、考え、生みだし、広げる、楽しい鑑賞 -」が、日々、より優れた音楽鑑賞授業をめざして努力を重ねている中学校の先生方にとって、少しでもお役に立てれば幸いです。

最後になりましたが、本研究開発に多大なご協力をいただきました研究メンバーの先生方に、心より厚く御礼申し上げます。

平成 25 年 (2013 年) 2 月

研究代表者

奈良教育大学大学院教育学研究科 (教職大学院) 教授 宮下 俊也

## 研究メンバー一覧（平成24年4月1日現在）

### 研究代表者

宮下 俊也 奈良教育大学大学院教育学研究科（教職大学院）教授

### 研究分担者

大熊 信彦 国立教育政策研究所教育課程研究センター研究開発部  
教育課程調査官

### 研究協力者（五十音順）

白井 学	長野県総合教育センター	専門主事
勝山 幸子	東京都港立六本木中学校	主任教諭
佐久間 敦子	熊本県熊本市立芳野中学校	教諭
嶋田 歩	北海道教育大学附属函館中学校	教諭
松岡 聡	熊本県熊本市立東町中学校	教諭
松野 由美子	福井県坂井市立丸岡中学校	教諭
森長 はるみ	奈良県生駒郡斑鳩町立斑鳩中学校	教諭

# 目次

はじめに	
研究メンバー一覧	
研究の目的・方法	9
第1部 研究報告	11
第1章 「鑑賞」と「批評」の一般的概念	13
第1節 「音楽鑑賞」の意義	13
1. 「観照」と「鑑賞」の相違	13
2. 「音楽鑑賞」の意義	13
第2節 「批評」の意義	14
1. 「批評」と「批判」－Kritikの邦訳としての－	15
2. 批評の目的	16
3. 批評の対象－「価値」とその意義－	16
4. 批評の方法－「判断」とその意義－	17
第3節 「芸術批評」の意義	17
1. 「芸術批評」の意義	17
2. 芸術批評の対象としての価値	18
(1)「作品そのものの価値」－芸術における形式(form)と内容(content)	19
(2)「芸術を創造する時の人間の精神」	19
(3)芸術批評の対象としての価値と鑑賞者との関係	20
3. 芸術批評における規準	21
第4節 「音楽批評」の意義	21
1. 「音楽批評」の意義	23
2. 音楽批評の対象	23
3. 音楽批評における規準	23
第2章 音楽鑑賞学習における批評の意義と構造	27
第1節 デューイによる芸術教育における批評の概念	27
1. デューイによる批評の概念	27
2. 鑑賞における批評についての見解	28
3. 芸術教育における批評活動に対する示唆	29
第2節 フェルドマンによる美術鑑賞教育における批評の概念	30
1. 批評の段階	30
2. 美術鑑賞教育における批評活動からの示唆－フェルドマンへの批判を踏まえて－	31
第3節 音楽の認識についての概念	32
1. 芸術の認識	33
2. 音楽の構造とその認識方法－知覚・感受・理解－	33
第4節 音楽の認識と音楽的思考	34
第5節 音楽鑑賞における批評によって育成される学力	35
1. 表現における生成の原理	35
2. 鑑賞における生成の原理	35
3. 批評によって生成されるものと育成される学力	36
第6節 音楽の認識、音楽的思考、批評によって育成される学力についてのまとめ	36

第7節	音楽鑑賞学習における批評の構造	37
第3章	学習指導要領における音楽鑑賞学習	44
第1節	学習指導要領(平成20年告示)改訂の特徴	44
1.	法律の改正を踏まえた学習指導要領の改訂	44
2.	〈生きる力〉と開かれた個	44
3.	中教審答申における鑑賞の指導の改善	45
第2節	鑑賞領域に関する指導内容	48
1.	音楽の学習指導要領改訂の要点	48
2.	鑑賞に関する目標及び内容	49
	(1)鑑賞領域の目標	49
	(2)鑑賞領域の内容	50
	(3)[共通事項]の内容と指導計画作成上の配慮事項	53
第3節	音楽鑑賞学習の課題と改善の方向	57
1.	「特定の課題に関する調査」の結果から見た課題と改善の方向	57
	(1)調査と結果の概要	57
	(2)中学校における鑑賞に関する調査結果	58
	(3)言語活動にかかわる意識調査結果	59
2.	題材の指導計画作成上の課題と改善の方向	60
3.	学習指導とその評価に係る課題と改善の方向	63
	(1)学習指導上の実践的な課題	63
	(2)音楽の新しい評価の観点	63
	(3)学習指導とその評価に係る改善の方向	64
第4章	米国カリフォルニア州音楽スタンダードにおける批評の検討と実践	67
第1節	CSの枠組み	67
第2節	4.0「美的評価」(Aesthetic Valuing)の内容	68
1.	内容	70
2.	「意味の創出」(Derive Meaning)	71
3.	「分析と批評的評価」(Analyze and Critically Assess)	72
第3節	カリフォルニア州立大学デビッド・コナーズ教授が語る「美的評価」の意図と実践の現状	72
1.	インタビューの結果	73
2.	インタビューから得られた知見	78
	(1)カリフォルニア州における「美的評価」の実践状況について	78
	(2)「美的評価」に対する指導方法について	79
	(3)言語によって表現することについて	79
	(4)「美的評価」に対する実践の難しさについて	79
第4節	CSMにおける「美的評価」と「音楽鑑賞学習における批評の構造」との関連	79
1.	「美的評価」の特色	80
2.	「音楽鑑賞学習における批評の構造」に対応させた検討	81
第5節	カリフォルニア州ミドルスクールの音楽教員が語る「美的評価」と鑑賞教育の実践	81
1.	C.ノーデル教諭に対するインタビュー結果	82
2.	D.ブレイク教諭に対するインタビュー結果	84
3.	P.カルドザ教諭に対するインタビュー結果	85
4.	インタビューから得られた知見	89

	(1)鑑賞授業の実践現状について	89
	(2)「美的評価」の実践現状について	90
第6節	カリフォルニア州ミドルスクールにおける「美的評価」を取り入れた授業実践	90
1.	シナロア・ミドルスクールの「コンサートバンド」の授業	90
	(1)授業記録	91
	(2)「美的評価」に関わる部分の考察	94
2.	シナロア・ミドルスクールの「音楽探検」(「一般音楽」)の授業	95
	(1)授業記録	95
	(2)「美的評価」に関わる部分の考察	96
3.	フロスト・ミドルスクールの「一般音楽」の授業	96
	(1)授業記録	97
	(2)「美的評価」に関わる部分の考察	99
4.	ソミス・ユニオンスクールの「一般音楽」の授業	99
	(1)授業記録	99
	(2)「美的評価」に関わる部分の考察	102
5.	ソミス・ユニオンスクールの「マリンバ」の授業	102
	(1)授業記録	103
	(2)「美的評価」に関わる部分の考察	104
6.	パレービュー・ミドルスクールの「コンサートバンド」の授業	104
	(1)授業記録	105
	(2)「美的評価」に関わる部分の考察	107
第5章	世界の芸術教育が求める指針 ―ユネスコ「ソウル・アジェンダ」(2010)を通して―	109
第1節	「ソウル・アジェンダ」の背景	109
第2節	「ソウル・アジェンダ」の内容	109
第3節	「ソウル・アジェンダ」からの示唆	113
第6章	第1部のまとめとガイドブックのコンセプト	115
第1節	諸概念のまとめと「音楽鑑賞学習における批評の構造」	115
第2節	米国カリフォルニア州音楽スタンダードから得た知見のまとめ	119
第3節	「ソウル・アジェンダ」から得た知見のまとめ	120
第4節	「ガイドブック」の概要	120
1.	キーコンセプト	120
2.	タイトル	120
3.	キーコンセプトと学習活動のテーマ	120
4.	学習活動のテーマとステージ	121
5.	各ステージの概要	123
	(1)ステージ1	123
	(2)ステージ2	124
第2部	批評を取り入れた新しい音楽鑑賞授業のためのガイドブック(中学校編)	
	―見つけ、考え、生みだし、拡げる、楽しい鑑賞―	125
	このガイドブックを使用するにあたって	127
	実践のキーコンセプト	128
	各ステージの概要	130
	実践例の見かた	132
	実践例一覧表	134

ステージ1 事例1 音楽を鑑賞することの意味 .....	136
ステージ1 事例2 美しさ探し .....	140
ステージ1 事例3 抱いたイメージからストーリーを描く .....	144
ステージ1 事例4 表現の特徴から演奏者の心を探る .....	148
ステージ1 事例5 歌曲《魔王》の表現方法 .....	153
ステージ1 事例6 世界のいろいろな子守歌 .....	159
ステージ1 事例7 人間と音楽の関わり .....	167
ステージ1 事例8 日本の声を考えよう .....	171
ステージ1 事例9 形式をもつ音楽の魅力を探ろう .....	178
ステージ1 事例10 歌劇における音楽の魅力 .....	182
ステージ1 事例11 心と対話してみよう .....	189
ステージ1 事例12 音楽評論家のエッセイを読む .....	194
ステージ1 事例13 能に親しもう .....	199
ステージ1 事例14 文楽に親しもう .....	207
ステージ1 事例15 音楽から風景を見る .....	211
ステージ2 事例16 尺八音楽の魅力の世界に .....	218
ステージ2 事例17 「先生、こんな音で弾いてみて！」ー批評で音楽をつくるー .....	223
ステージ2 事例18 私たちの町の伝統音楽 .....	227
ステージ2 事例19 人生と音楽ーピアニスト 館野泉さんへのメッセージー .....	235
ステージ2 事例20 友と語り家族に伝える《展覧会の絵》 .....	240
ステージ2 事例21 作曲家とともに新しい音楽文化を創造しよう .....	248
ステージ2 事例22 音楽による平和の希求と社会貢献 .....	253
事例についての問い合わせ先 .....	263
おわりにー謝辞にかえてー .....	265
付録 .....	269

# 研究の目的・方法

## 1. 研究の目的

本研究の目的は、批評を取り入れた新しい鑑賞教育の実践プログラム「批評を取り入れた新しい音楽鑑賞授業のためのガイドブック（中学校編）－見つけ、考え、生みだし、広げる、楽しい鑑賞－」を開発することにある。このガイドブックは、平成24年度完全実施の学習指導要領に対応した新しい鑑賞授業の実現に寄与する、具体的な授業実践事例を多く掲載するものである。

その事例を作成するにあたり、次の5つの下位目的を定め、そこで得られた知見を事例に反映させることとした。

- ① 「鑑賞」「音楽鑑賞」「批評」「芸術批評」「音楽批評」の美学的・哲学的概念と、芸術教育学の先行知見より「音楽鑑賞学習における批評の教育的意義」を検討し、それらを総括し「音楽鑑賞学習における批評の構造」として示す。
- ② 平成20年告示の中学校学習指導要領（音楽）の趣旨やそこに示された事項、及び、我が国の教育行政の立場から、音楽鑑賞学習の課題と改善の方向を明確化する。
- ③ 「批評」に対応する「美的評価」をすでに音楽カリキュラムに位置付けている米国カリフォルニア州音楽スタンダードと、同州ミドルスクールにおける授業実践を検討して知見を得る。
- ④ これからの世界の芸術教育が求める指針を明らかにし、我が国の音楽鑑賞教育において今後取り扱わなければならない内容を明らかにする。
- ⑤ 以上の①～④より、「批評を取り入れた新しい音楽鑑賞授業」のキーコンセプトを定める。

## 2. 研究の方法

研究は、まず上記5つの下位目的に向けて実施する。

### （1）①について

研究代表者が、主として先行文献によって検討する。

### （2）②について

研究分担者である、国立教育政策研究所教育課程研究センター研究開発部教育課程調査官によって、まず、学習指導要領改訂までの経緯、改訂の特徴、鑑賞領域に関する目標と内容、〔共通事項〕の内容、指導計画作成上の配慮事項を概説する。さらに、国立教育政策研究所教育課程研究センターが平成20年度に実施した「特定の課題に関する調査」の結果から、中学校音楽鑑賞教育に関わる課題と改善の方向を示す。

### （3）③について

まず、研究代表者が米国カリフォルニア州音楽スタンダード（CSM）のうち、4.0「美的評価」の趣旨を分析する。続いてカリフォルニア州立大学デビッド・コナーズ教授を訪ね、その意図と実践現状をインタビューによって聞き取り調査する。さらに、研究分担者とともに同州公立ミドルスクールを訪問し、実践者としての立場から音楽教諭に「美的評価」についての考えを聞き取り、それを取り入れた授業を参観し、分析する。

(4) ④について

研究代表者が、2010年5月に開催されたユネスコの第2回芸術教育世界会議（World Conference on Arts Education）に出席し、そこで提出された「ソウル・アジェンダ」（Seoul Agenda: Goals for the Development of Arts Education）を分析する。

(5) ⑤について

①～⑤を通して得られた知見より、研究代表者が「批評を取り入れた新しい音楽鑑賞授業」のキーコンセプトの原案と実践例（案）を作成し、研究分担者及び研究協力者とのミーティングによって検討する。研究分担者は行政の立場から、研究協力者は実践の立場から議論に参画し、キーコンセプトを確定する。

(6) ガイドブックの開発について

研究協力者と研究代表者が過去の実践経験を活かしながら、授業実践例を開発する。それを研究分担者が行政の立場から検討し、確定する。

### 3. 本報告書の構成

本報告書は、第1部と、第2部によって構成する。

第1部は「研究報告」として、下位目的①～⑤の結果を掲載する。第2部は「批評を取り入れた新しい音楽鑑賞授業のためのガイドブック（中学校編）－見つけ、考え、生みだし、広げる、楽しい鑑賞－」となる。

# 第 1 部

## 研究報告



# 第1章 「鑑賞」と「批評」の一般的概念

## 第1節 「音楽鑑賞」の意義

### 1. 「観照」と「鑑賞」の相違

「鑑賞」(appreciation)という用語は、美学上の用語としてはあまり使用されない<sup>1</sup>。美学では「観照」(Betrachten 独)が用いられる。そして「鑑賞」は芸術以外の対象には適用されない<sup>2</sup>。美的観照の概念は、美学では美的享受と同様に美意識における受動的側面をさすものとして用いられる。「観照」は「本質上、自我と対象との間に距離をおくことにおいて成立」し、それは「自我がかような態度をもって対象を受容する作用であり、この受容性からして享受と密接に結合」する。したがって「すべての美的享受は『観照における享受』である」とされる<sup>3</sup>。また、『美学事典』では「鑑賞」について次のように述べている。「鑑賞というのも受容的美意識をさすことは観照や享受と同様であるが、主として芸術のばあいに適用され、かつ特に対象についての積極的な価値認識の意味を含む」<sup>4</sup>。すなわち、観照と鑑賞の意義的な相違は、前者が受動的に対象を享受するのに対し、後者は能動的・積極的に価値認識を指向する点であると言える。

### 2. 「音楽鑑賞」の意義

それでは、音楽を鑑賞するとはどういうことなのか。

丹羽正明は、「音楽が成り立つためには、創作(作曲)、演奏、享受(鑑賞)という三つの立場があり、その担い手は、作曲家、演奏家、聴衆である」<sup>5</sup>と述べる。また、谷村晃も「音楽の営み」(Musizieren)とは作曲と演奏と鑑賞であると示す<sup>6</sup>。まずここで確認できることは、鑑賞は人間と音楽との関わりの1つであるということである。それでは音楽と人間との関わりにおいて、鑑賞とは具体的にどのような関わりを築き、どのような意義をもつものなのか。これらは『音楽大事典』の「鑑賞」の項からその解答を見出すことができる。『音楽大事典』における音楽鑑賞の定義を要約すると以下の10点にまとめられる<sup>7</sup>。

- ① 鑑賞 (appreciation) は、美的享受 (Ästhetischer Genuss) とほとんど同義に使われるが、「享受」には受容面が強く伴うのに対し、「鑑賞」には価値評価が含まれる。
- ② 鑑賞において評価や批判の要素を強調すれば、鑑賞は批評につながっていく。
- ③ 対象を知覚しただけでは鑑賞にはならず、感性以外の働きの参加が必要になる。
- ④ 感性以外の働きの参加することによって感性的知覚自身も生き生きとし、見るとか聴くという知覚自体の機能的な喜びが見られる。
- ⑤ 鑑賞には、見たいままに見、聴きたいままに聴くという態度の自由さがある。
- ⑥ 鑑賞は単に主観的な行為ではなく、ある種の客観性が含まれている。
- ⑦ 鑑賞は対象のみに依存するものではなく、鑑賞者の働きのほうが重要であり、鑑賞者はその力(鑑賞眼)に応じた程度しか鑑賞できない。
- ⑧ 美や芸術に対して自己の感情を投入し美や芸術を受容するという感情移入説 (empathy) があつたが、そのみでは作者の意図を理解したり、作者の意図に沿って自己を対象において拡充するという芸術鑑賞の面を説明できない。
- ⑨ 美的な鑑賞は、対象において新しい意味を発見するような積極的な働きであり、感情面ばかりではなく直観面の参加も必要になる。
- ⑩ 鑑賞と創造は照応し、根底において1つでなければならない。ゆえに、真の鑑賞と

は、鑑賞者の中に対象に即して自由な創造的働きがわきたつものである。

この10項目はおおよそ次の4つの要点に集約される。第1は、鑑賞は受容という自由な面があるものの、価値評価や批評が鑑賞の意義として存在していること(①②⑤より)、第2は、鑑賞は主体である鑑賞者と対象である音楽との関係において、鑑賞者が新しい意味を発見するなどして積極的に対象に関わるものであるということ(⑦⑨より)、第3は、鑑賞は鑑賞者の感性による知覚、感情、それ以外の客観的なものによって行われるということ(③④⑥⑧より)、第4は、それらゆえに、鑑賞は創造的な行為であるということ(⑩より)。

前項の鑑賞の定義に加えて、ここで重要となる意義は、音楽に対する価値評価や批評が鑑賞の意義として存在していることと、音楽鑑賞もまた、創造的な行為であるということである。鑑賞と批評との具体的な関係は、次節以降、「批評」の定義を論じながら検討していくが、まず、音楽鑑賞もまた「創造的な行為」であることについてここに整理しておく。

とかく、作曲や演奏は言うまでもなく創造的な行為であることはだれもが認めているものと思われる。それに対して、鑑賞もまたなぜ「創造的な行為」として認められるのか。そのことに対して、丸山桂介は、雑誌『音楽鑑賞教育』に長きに渡って連載した「鑑賞こそが音楽の創造」において広範にわたって論じている。その最終回の最終章で述べられた全文を引用する。

『鑑賞』という言葉は一般的には消極的意味に解されているようであるが、この語を広い意味でとらえるとき、鑑賞はその本質において『世界』の意味の探求に一致する。従って、そもそも哲学は『世界』の論理的鑑賞であり、宗教はその神的鑑賞であり、音楽ないし芸術はその美的鑑賞であるといえるであろう。

この構造は、人間の前に自然があり、ひとりの人間の前に自己が存在する以上不変である。なぜなら人間は自己に対して在るものが不明であるとき、その在ることの意味を探求しようとするからであり、その探求の結果を論理的に、あるいは美的に表現する。ひとつの音楽作品は、このような『世界』の探求の結果であり、同時に、そこから、聴く人々を新たな『世界』の意味の探求と発見への道に誘うものである。

鑑賞は人間の本性に根ざした活動であり、鑑賞においてこそ、私たちは創造という、『世界』の意味の発見の場に立たされるものであることを忘れてはならない<sup>8</sup>

この丸山の主張は、2段の論理を踏んでいる。第1段は、表現者が「意味の探求」の結果として表現した音楽に対し、鑑賞者はその音楽から「新たな世界の意味」を探求し発見するということ。そして第2段は「世界の意味の発見」は「創造」であるということ。ゆえに「鑑賞も創造的な行為」となるということである。しかし、では鑑賞者は具体的に何を創造するのか。それは、事物なのか、あるいは事象なのか。さらに、作曲家や演奏家が音楽を創造することと同様、鑑賞もまた音楽を創造していると言えるのか。その問いは、音楽鑑賞の意義に存在する批評の意義を明らかにすることによって解明される。

## 第2節 「批評」の意義

ここでは「批評」の概念を主に哲学と美学から探る。

『哲学辞典』<sup>9</sup>において「批評」の項はない。しかし「批判」の項はある。一方『美学辞典』<sup>10</sup>においては、「批評」の項はあるが「批判」の項はない。また、『美学事典』<sup>11</sup>では、

「批評」そのものの項はなく「芸術批評」や「音楽批評」、「文芸批評」がある。それでは、哲学と美学において「批評」と「批判」はどのように規定されているのか、また「批評」に関連する「判断」、「価値」、「規準」といった諸概念と「批評」との概念上の関係性はどのようなものか。この節では、これらについて辞（事）典的文献を用いて整理する。

## 1. 「批評」と「批判」－“krinein”の邦訳としての－

一般的には、「批判」は物事を否定的に評価するというニュアンスがあり、それが「批評」とは異なるものとして捉えられているようだがどうだろう。『広辞苑』では、「批評」は「事物の善悪・美醜・是非などについて評価し論じること」<sup>12</sup>としている。一方、「批判」は「①批評し判定すること。②人物・行為・判断・学説・作品などの価値・能力・正当性・妥当性などを評価・検討すること。否定的内容をもつものをいう場合が多い。③事物を分析してその各々の意味・価値を認め、全体の意味との関係を明らかにし、その存在の論理的基礎を明らかにすること。（以下省略）」<sup>13</sup>としている。この、「批評」と「批判」の①からは、「批評」は「批判」のためのプロセスであるように捉えられる。すなわち、「批評」は「判定」するための議論のプロセスである。しかし、②、③を読み比較すると、「批判」はより厳密的で、「批評」はその一般的呼称のようにも解釈できる。

一方『哲学辞典』では、「批判」は、「1)一般的な用語としては批評ともいい、a) なんらかの対象について一定の評価をあたえるために、その対象について吟味・検討をくわえること。（中略）b) ある対象について否定的な評価をくわえること。」<sup>14</sup>と記されている。

須田朗は『『批判』という言葉は、日常的には、問題点の指摘、反論・非難という否定的な意味で使われることが多いが、もともとは人物や作品についてその価値を批評し判定するという一般的な意味を持つ言葉である。』<sup>15</sup>と述べる。また、ドイツ語の Kritik や英語の critique は、「区別する・識別する・判別する」を意味するギリシャ語の krinein に由来していると述べている<sup>16</sup>。

また美学の立場では、佐々木健一が、criticism や critique をわれわれは「批評」のほか「批判」や「評論」などの語を充ててきた<sup>17</sup>とし、また、「英語での critique は、批評の意味で十七世紀中葉から用いられていた critic が、フランス語の影響を受けて十八世紀初めから変化した語形」<sup>18</sup>であり、「認識批判の哲学そのものは criticism と呼ばれる。」<sup>19</sup>と述べている。英和辞典でも criticism の第一義は批評、批判、非難、あら捜し、critique の第一義は、(文芸・美術作品などの) 批評、評論、となっている<sup>20</sup>。

これらから次の点が明瞭になる。すなわち、krinein を語源とする Kritik や critique や criticism が「批判」や「批評」と邦訳されたこと<sup>21</sup>、一般的・日常的においては「批判」は否定的な意味で使われることが多いということ、さらにまた、「批判」は哲学において用いられ<sup>22</sup>、「批評」は「芸術批評」「音楽批評」「文芸批評」のように美学において用いられていること。しかし、その意義は、『広辞苑』や須田の定義から汲み取れるように、「批評」は「批判」のために行う議論までのことを言い、「批判」は議論を経て判断をくだす段階までも含むという規定は『哲学辞典』の a) とは一致しない。また言うまでもなく、「芸術批評」や「音楽批評」においても当然、判断は含まれている。よって、訳語としての「批評」と「批判」の概念的峻別はつけがたいものと考えるのが妥当だろう。

しかし教育実践においては、krinein の邦訳語として「批判」ではなく、「批評」(criticism) を用いることは妥当なことである。その理由は、前述した中から導いた次の3点による。第1は日常的・一般的に用いられている用語であること、第2は教育実践においては否定的な「批判」を求めることに限定されないこと、第3は特に、音楽科教育は芸術教育であること、すなわち、その鑑賞においては芸術であるところの音楽が対象となり、その批評

は美学でいう「芸術批評」の範疇にあるからである。

## 2. 批評の目的

すでに引用した諸文献から、批評の前提は、「批評すべき対象の価値を判断すること」と一応規定できる。つまり、善か悪か、美か醜か、是か非か、正当か否か、妥当か否か、という判断を下すために行うものである。しかし、それが目的のすべてというには単純すぎる。例えば、マルクス主義でいう批判は、学説・イデオロギー・人々の行動・制度などについて、それらの誤謬・矛盾・欠陥などを単に指摘するだけでなく、その根源となるものを変革し、また同時にその対象の肯定的な面も明らかにするものであったように<sup>23</sup>、判断自体が目的のすべてではなく、判断は「変革」という目的のためのステップであった。

批評の目的を考えると、批評をする「人」はなぜ批評をするのか、ということも考えなければならない。しかしそれは、「価値を判断するため」だけに行おうとしているのだろうか。

例えば佐々木は、美学の立場から批評を「具体的な芸術現象を主題とし、そこに見出される諸々の意味を論じ、もって作家と鑑賞者たちに指針と手がかりを与える活動」<sup>24</sup>としている。また荒井徹は、批評家は「公衆の十全たる芸術鑑賞を助長し誘導するとともに、他方芸術家に対してはその創造の秘密を探り、作品の意義を洞察することによって芸術家の活動に有益な示唆や指導を与える」<sup>25</sup>と述べる。音楽評論家の丹羽正明は「批評としての専門的立場からの判断の一例を示すことによって読者に材料を提供する機能を、いま現在においては果たしつつ、それが活字になって定着しているという意味においては、後代に対して、同時代者の証言としての資料的役割を担っていく」<sup>26</sup>とし、それが音楽批評の「社会的機能」であると述べている。

これらより、批評は、「対象に対して価値を判断し、判断した結果をその対象の作者や他の鑑賞者や読者に対して伝え、そうした人々、あるいは社会に対して指針や手がかりなど有益な知見を提供する目的をもつ行為」と規定されることが正しいと考える。

## 3. 批評の対象 — 「価値」とその意義 —

先に見たように、批評の対象は『広辞苑』では「事物」「人物」「行為」「判断」「学説」「作品」、『哲学辞典』では「なんらかの対象」、としている。すなわち、批評の対象はあらゆるものがそれに該当し、批評はその中にある「価値」を判断するもの、と言える。では「価値」とは何か、その意義を整理する。

「価値」(value)とは、「人間の実存にとって好ましいもの (the preferable)、好適なあり方のうち、それが単にわたしだけの、そしてこの場だけの恣意的な好みによるのではなく、ある客観的な合理性に基づいている、という意識を伴うもの」<sup>27</sup>とされる。「好ましいもの」とは、「対象もしくは状況と実存との関係を表している」と言われるように、対象のみに存在するものではなく、価値を判断しようとする、すなわち価値を批評しようとする人間と対象との関係性の中に築かれるものである、ということがわかる。またそれは、人によって一致するものではなく、「一致しないとき、利害が衝突する」<sup>28</sup>のだが、「価値とは、個人の利害関心を超えるものとして意識されるような好ましさである」<sup>29</sup>と佐々木は述べる。

「美的価値」を例に挙げよう。「美的価値」とされるものは「美的質」(aesthetic qualities)と不可分の関係にある<sup>30</sup>。「美や優美、崇高など、美的価値とされるものは美的質」<sup>31</sup>であり、美的価値を捉える美的判断は、美的質の質的な価値を美的に知覚すること以外ではなされえない<sup>32</sup>。美の価値は「主客いずれかの一面には帰せられず、一方において対象の性

状や形態に依拠するとともに、他方において主体の態度や活動に依存する。この両面の条件が相よって美的価値の成立を可能ならしめ<sup>33</sup>。すなわち、対象と主体である人間との間に関係づけられたところにあるものと言える。つまり「美的価値は意識の作用とその対象との緊密不離の一義的に規定された相関関係において成り立つ」<sup>34</sup>ものなのである。

また、佐々木は次のような重要な指摘もする。価値とは必然的に他の価値との比較に立つ概念であり、文化も変動し特に現代は価値も常に変動する。とりわけ芸術の価値については、その根拠を問うことが、常に、特に今は必要である<sup>35</sup>、と。

#### 4. 批評の方法 — 「判断」とその意義 —

これまで批評を検討した結果、批評には、価値を判断するという行為と、その結果を他の鑑賞者や読者に対して伝達する、という2つの行為を必要とすることがわかった。よってこの2つが概念的に批評の方法として捉えることができる。しかし、この2つの概念はどのように関係づけて捉えられるのか、次に検討する。

「判断」とは「なんらかの対象について、ある主張をすること」<sup>36</sup>であり、一般的に判断は「命題の形でもって言語的に表現」<sup>37</sup>される。そのとき、真または偽であるか、または証明されることによってそれが明らかになるものが判断であり、真・偽の性格づけができないものは、命題の形で言い表されていてもそれは判断とはいわない<sup>38</sup>。このことは、善・悪、美・醜といった価値を、あいまいではなく明確に主張することを意味するものと考えられる。

佐々木は、例えば主語のなかに述語が含まれている「忘却とは忘れることである」のような判断を「分析判断」といい、「この絵は美しい」のように新たな知識をもたらすような主語の概念からだけでは知ることのできないことを述語する判断を「総合判断」という、と述べる<sup>39</sup>。特に「美的判断」の場合は、「この絵」、つまり主語については直接、美的に経験されていなくてはならず、それが美的判断の特殊性であると、佐々木は言う<sup>40</sup>。前項で例示した「美的価値」の概念と併合すると、美的価値の判断とは「美や優美、崇高など美的価値とされる美的質を美的に知覚し、その知覚の経験により、捉えた美的価値を明確に言語によって主張すること」と意義づけられる。

美的価値判断ではなく一般的な価値判断においても、「価値を含む対象を知覚し、その知覚の経験により、捉えた価値を明確に言語によって主張すること」と置換することができる。つまり、一般的に我々が生活の中で用いる「判断」とは、真・偽、善・悪などを内的思考において決定するまでを意味する場合が多いが、哲学や美学においては決定した結果を言語的に主張することまでを含むことがわかる。つまり、判断することと、判断した結果を言語的に主張することは、哲学的、美学的概念上、包含関係にある。

以上、批評の方法は「判断すること」という1点であることが確認された。しかしながらその「判断」の下位には、判断するための「規準」とそれを備えるための方法、また、対象を認識するための方法、あるいは言語主張のための方法等も存在している。それらもまた批評の方法としてさらに加わってくるだろう。このことについては、以下の「芸術批評」と「音楽批評」の概念規定の中で見ていく。

### 第3節 「芸術批評」の意義

#### 1. 「芸術批評」の意義

『美学事典』では「芸術批評」を次のように定義する。「ごく一般的に芸術批評は、芸術

作品に対してなされるなんらかの判断、ことに価値判断」であり、「なんらかの規準 (criterion) にしたがって芸術作品の良否、長所と短所を判別し、評価を下すもの」である<sup>41</sup>。また佐々木は『美学辞典』における批評の項で次のように芸術批評を定義する。「具体的な芸術現象を主題とし、そこに見出される諸々の意味を論じ、もって作家と鑑賞者たちに指針と手がかりを与える活動。批評の論ずる『意味』は、個々の作品の内容や形式的特徴から芸術一般の本質や価値まで多岐にわたるが、特に新作を対象とする批評の場合には、その価値評価が重要な役割と考えられる」<sup>42</sup>。

この両者の定義をまとめると次のようになる。すなわち、「芸術作品を含む具体的な芸術現象に対し、なんらかの規準によってその価値や意味を論じ評価を下し、それによって作家と鑑賞者たちに指針と手がかりを与える活動」である。

この定義は、以下の点で、前節で検討した批評の定義と合致している。すなわち、まず対象があること。芸術批評における対象は「芸術作品を含む具体的な芸術現象」である。そして「その価値や意味を論じ」ということが「価値判断」になる。また「論じ」という点でそれは能動的・積極的な行為として認められる。また「作家と鑑賞者たちに指針と手がかりを与える」ために「言語的な主張」が必要となる。

## 2. 芸術批評の対象としての価値

「芸術批評」の対象は、ごく一般的に「芸術作品」である<sup>43</sup>。そうすると芸術の「価値」を判断することが「芸術批評」の基盤ということになるが、それでは芸術作品の価値とは何か、が問題になる。これを検討するとき、やはり「芸術」とは何か、ということ概観しておかなければならない。

佐々木は「芸術」について、「予め定まった特定の目的に鎖されることなく、技術的な困難を克服し常に現状を超え出てゆこうとする精神の冒険性に根ざし、美的コミュニケーションを指向する活動である。この活動は作品に結晶して、コミュニケーションの媒体となり、そのコミュニケーションは、ある意図やメッセージの解釈というよりも、その作品を包摂性としての美という充実相において現実化する体験となる」<sup>44</sup>と述べる。

「芸術とは何か」という芸術の概念を定義することは、「詩や絵画や彫刻や建築や音楽等の作品が芸術品として考えられねばならない共通の特質を見出すこと」<sup>45</sup>として美学の課題であった。そのために客体（すなわち芸術品）における共通の特質の探求と、「内的洞察」すなわち「人間が芸術を創造するときの精神活動」の2方法によって試み続けられてきたが、前者は「種々の言葉や形や色や音の中には、いかなる共通の特質も見いだされなかった」と言う<sup>46</sup>。それに対して内的洞察は「好ましい結果をもたらした」と言う<sup>47</sup>。しかし、人間が芸術を創造する時の精神活動として、それはイメージーション（想像）や幻想（ファンタジー）であるとヴェントゥーリは述べる<sup>48</sup>。特にイメージーションとは「感覚による諸経験の総合を実現するところの精神活動」であり、「感覚的経験からイメージーションの活動へと向かう発展過程で、芸術家は、感情と呼ばれる世界を経過し、「感動とか感情とかいったものは、あらゆる芸術作品の根元の位置にある」と主張する<sup>49</sup>。

したがって、芸術批評において批評の対象となるものは、少なくとも芸術作品における次の2つがあると言えよう。1つは、「ごく一般的な」意味での芸術作品における価値、これはすなわち「作品そのものの価値」と言える。そしてもう1つは「芸術作品を創造する時の人間の精神」、すなわちそれは、ヴェントゥーリが述べるイメージーションやファンタジー、佐々木が述べる困難の克服やオリジナリティを求める冒険性などである。よって芸術批評はそれらの存在を判断することとなる。

次に、芸術批評の対象となるこの2つ、すなわち「作品そのものの価値」と「芸術作品

を創造する時の人間の精神」についてさらに検討する。

(1) 「作品そのものの価値」 — 芸術における形式 (form) と内容 (content) —

芸術批評の対象のうち、「作品そのもの」についてはそのどういった価値が批評の対象となるのかを、もっと明確に規定しなければならない。

哲学は、「なにものにも形式と内容なしには存在しえない」と規定する<sup>50</sup>。形式とは「存在する諸要素やその移りゆく過程をまとめて、一定の存在・一定の過程とするもの」であり、内容はそれを「そのようにまとめている」ものである<sup>51</sup>。そしてこの2つには相互作用があつてたがいに切り離すことはできず、事物を認識するには欠くことのできないカテゴリーとされる<sup>52</sup>。芸術 (作品) においてもまた、形式と内容が存在し、それを認識することとはその両者と相互作用を認識することとなる。芸術批評は芸術を対象としてそれを認識することによって判断が行われることであるから、その対象の具体は芸術の形式と内容とその相互作用ということになる。では、芸術 (作品) における形式と内容とは何か、美学の知見から整理しておく。

佐々木は、形式と内容という対概念について2つの区分があると述べる。1つは形式<sup>53</sup>を「質料もしくは素材あるいは材料 (matter)」の対語 (すなわち「形式」—「素材」) とするか、もう1つは内容 (content) の反対概念とするか (すなわち「形式」—「内容」) である。この2つの関係性への関心は、歴史的に前者から後者へ、そして20世紀になって再び前者へと傾いたり、ハンスリック (E. Hanslick) が徹底して「形だけが音楽の内容であり対象である」と主張したり、アドルノ (T. Adorno) が「形式こそが芸術の本質である」と捉えたり<sup>54</sup>、芸術における形式と内容の議論は今なお芸術学においても美学においても決着がついているものとは言えない。しかし、芸術批評として芸術 (作品) の対象となるものは、形式と内容の融合に存在する価値、と捉えておくことには問題はないだろう<sup>55</sup>。しかし、それらにある価値とは何かは、後に取り上げるデューイ (J. Dewey) の芸術論に見出さなければならない。

(2) 「芸術を創造する時の人間の精神」

ヴェントゥーリが述べた「人間が芸術を創造する時の精神活動」について、さらに詳しく検討する。そこで重要な概念は「イマジネーション」と「感情」である。

1) イマジネーション

ヴェントゥーリは次のように述べる。

「芸術作品を創造するイマジネーションは、現実から離反するのではなく、むしろそこにわけ入り、そこから芸術家の感じ方に一致する様相を把握するのであり、したがって、現実の、理性の認識からは隠れているものを浮かび上がらせるのである。人間にとり、外的世界についての最初の経験というのは、感覚によってなされるものであるがゆえに、イマジネーションとは、感覚による諸経験の総合を実現するところの精神活動のことである。」

<sup>56</sup>

また、芸術創造におけるイマジネーションの役割について、「形—つまり、感覚的経験や感情的生活にあてがわれた精神的秩序であるところの形—を創造することである。われわれが、精神活動の<sup>しるし</sup>徴や、日常生活からの超越や、創造という特別の行為を認識するのは、形においてである」<sup>57</sup> (傍点著者) と述べる。ここで述べられている「形」とは、前項で

検討した「形式」と一致する。つまり芸術においてイメージーションが形を生み出すということになる。その過程は、ヴェントゥーリは次のように例を示しながら論ずる。すなわち、ある画家が1本の木を描こうと欲するとき、まずその木を見る。そして画家は、その時、その木についての科学的データには関心をもたず、木を見て、例えばその木が強靱であるか弱々しいか、平静であるか荒れているか、鬱然としているか惨めであるかといった「主観的現実」を「感じ取る」。「イメージーションが明瞭ならんとし、イメージを実現せんとして働くのは、この主観的現実において」であり、「主観的現実の形体が解き明かされたときに、明瞭さが得られ、イメージが実現する」<sup>58</sup>。つまり、「木」という「客観的現実」と、それを見て感じ取って生まれる「主観的現実」との間にイメージーションの明瞭化とイメージの実現化が生じるということである。そして、「主観的現実」が、まず形を創造することへとつながっていくのである。

そうすると、芸術批評の対象としての価値において、その1つとなる「芸術を創造する時の人間の精神」について、その何を批評の対象とするか、という問いの解答は、「芸術を創造する時の人間（芸術家）のイメージーション」ということになる。つまり、鑑賞者は批評において、芸術家が表した形を見（あるいは聞き）、そこから芸術家がそれを表す根源となった客観的現実を想像し、さらにどのようなイメージーションが働いて、その形となって表されるに至ったのかを論ずることになる。

## 2) 感情

ヴェントゥーリは次のようにも述べる。

「感覚的経験からイメージーションの活動へと向かう発展過程で、芸術家は、感情と呼ばれる世界を経過する。人間の生命活動が、まだ、イメージーションとか理性とか意志とかにより与えられる明瞭さに達しなくて混乱状態にあり、しかしそれが、受動的感性と頭脳の初期的活動との入り混じる錯綜した衝動を通して、外界と交流しているそのときには、人間は、情念とか、感情とかの生命を生きているのである。したがって感動とか感情とかいったものは（確認）、あらゆる芸術作品の根元の位置にある（傍点著者）」<sup>59</sup>。

また、先の例での「木」など、芸術家にとってのあらゆる有形無形の材料は、芸術家を鼓吹し、芸術家の感覚や感情を覚醒する条件を持つものとヴェントゥーリは言う<sup>60</sup>。「芸術作品の根元にある」ということの意味はここにある。「客観的事実」としての「材料」からイメージーションが働くときに芸術家自身の感情が作用する。そして、感情によってイメージーションが働き「主観的現実」を形成して「形」に至るのだ。

そうすると、芸術批評の対象としての価値において、その1つとなる「芸術を創造する時の人間の精神」について、その何を批評の対象とするか、という問いのもう1つの解答は、「芸術を創造する時の人間（芸術家）の感情」ということになる。それは鑑賞者が、芸術家が表した形を見（あるいは聞き）、そこから芸術家がそれを表す根源となった感情を想像し、その感情と表された形との関係から、その感情がどのようなものであったのかを論じることであると考える。

### (3) 芸術批評の対象としての価値と鑑賞者との関係

以上より、芸術批評の対象としての価値を、「作品そのものの価値」と「芸術を創造する時の人間のイメージーションや感情」の2つであると規定した。「作品そのものの価値」は当然、作品にあり、鑑賞者と作品との関係において、鑑賞者が作品の形式と内容を認識することによってそれを判断することができる。認識するためには芸術に対して積極的・能

動的な行為を必要とする。

一方「芸術を創造する時の人間のイマジネーションや感情」は、芸術家の内にある。しかしそれは、鑑賞者と作品との関係において、鑑賞者が作品から想像し、思考しなければならない。想像することはそれ自身、積極的・能動的な行為である。

以上、鑑賞において、価値を判断することが積極的・能動的な行為であることがここでも確定できる。

### 3. 芸術批評における規準

判断には判断するための規準 (criterion) が必要になる。

芸術批評は、何らかの規準によって対象を価値判断するものであるが、そのさまざまな規準や手続きに応じて批評はさまざまな立場に分類される<sup>61</sup>。それは大きく 3 つの立場に分かれる。1 つは「裁断批評」(judicial criticism)、もう 1 つが「印象批評」(impressionistic criticism)、そして「科学的批評」(scientific criticism) である。

「裁断批評」は、「なんらかの美学的な規準にしたがって芸術作品に固有の価値を判定するものと、作品が社会や個人に及ぼす影響という倫理的価値の観点から作品を評価しようとするもの」との二類型に区別される。しかし、裁断批評は美学や倫理学が提供する規準を固執するあまり、「規準に適うものを良しとし、それに反するものをただ一方的にしめだしてしまう」<sup>62</sup>といった危険性を伴うものである。

一方、「印象批評」は、「あらゆる体系的理論や価値規準を拒否して、もっぱら直接的観照による批評家の経験や印象にその基礎をおく」<sup>63</sup>。「印象批評」は、「高度に鋭敏な感受性をもって生きいきとした直接体験を如実に伝えようとするものであるが、元来、芸術作品によって与えられる印象や効果は豊かなニュアンスにとみ、概念的にはとらえられがたいものであるから、その言語的表現はどうしても変形し、あるいは歪曲することが免れない」<sup>64</sup>という欠点を持つ。

また、「科学的批評」は「科学によってもたらされた法則や理論、特に社会学・心理学・生理学・進化論などの理論や知識を豊富に援用して諸々の芸術作品を広く包括的にとりあげ、これを解釈し説明しようとする」<sup>65</sup>ものである。しかし、「この種の科学的・実証主義的方法にもとづく批評が、芸術作品に先行するさまざまな心理的・社会的・歴史的条件をいかに精密に因果的に分析し解明しえたにしても、一つの作品がなぜ他の作品より優れているか、あるいは芸術作品のいかなる固有性がそれ独自の価値を生み出すかといった問題を説明することはできない」<sup>66</sup>という。

以上より、3 つの芸術批評の立場におけるその規準は、美学的な規準、倫理的な規準、批評家の経験や印象に基づく主観的な規準、科学によってもたらされた法則や理論、知識による規準が挙げられる。しかしそれらはどれも批評者のうちに備わった過去の知的経験や美的経験によるものであることに疑いはない。特に批評がそれ自身「鑑賞者や作家へ直接はたらきかけるべき実践的活動」<sup>67</sup>であることや「批評家は芸術家に匹敵する創造性をもって芸術作品に肉薄し、そのあらゆる細部にわたってみずからの感覚を浸透させつつ再創作を行う」<sup>68</sup>のであるから、「批評家自身の個性的な犀利と直観と豊かな体験」<sup>69</sup>によって批評のための規準が得られるものと考えられる。また、それは専門家としての批評家のみならず、芸術を鑑賞し、そこで批評を行う鑑賞者にも同時に求められる規準となる。

## 第 4 節 「音楽批評」の意義<sup>70</sup>

### 1. 「音楽批評」の意義

『美学事典』では「音楽批評」を、「現実に生起する日々の音楽現象について報告し価値判断をくわえる」<sup>71</sup>こととしている。また『標準音楽辞典』では「われわれの社会生活のなかで提示される音楽作品や演奏についての報告や、価値判断をのべる」<sup>72</sup>こととしている。まとめると、「音楽作品や演奏を含む現実に生起する日々の音楽現象について報告し価値判断する活動」となる。

この、「音楽を批評する」という営みは、人間と音楽との関わりの中でどこに位置づくのであろうか。谷村晃は、音楽の本来の姿は、楽譜でも、CDでも、作曲家でも、演奏家でもなく、「音の創造と模倣—作曲、演奏、享受—」であり、音楽することないしは音楽の営み (Musizieren) そのものに他ならないと述べる<sup>73</sup>。「音楽の営み」とは作曲と演奏と鑑賞であり、音楽と諸科学の関係を示す図1の中心円に位置している。「音楽の営み」の1つとして「鑑賞」が位置付けられていることは、「人間の音楽行動については、他人がそれについて意見を述べたり、賛同したり、拒否したりする可能性を本来的に持っている。誰かが歌を歌って、それを聞いた人々が何の反応を示さなかった場合には、その歌は単なる音響として人びとの耳に伝達されたのに過ぎない」<sup>74</sup>という、音響とは異なる音楽の特性の1つを表しているということである。また、中心円の1つ外側にある第2の円環は、「音楽について意見を述べたり、批評したり、規則を見定めて態度を決定したり、視点を変換したりする働きがある」<sup>75</sup>とし、批評はそこに位置づけることを表している。そして、音楽は批評や批判にさらされることによってその伝統を保持したり、革新したりしながら生きていく、という、社会における文化の一部として存在するための社会的特性がある<sup>76</sup>。このことは、図1が表すように、音楽の周辺科学から批評へと接近していくのではなく、「Musizieren から出発して、外へ外へと広がっていきながら、中心とその円環に焦点を絞って音楽を考えていかなければならない」<sup>77</sup>とする谷村の「最も人間的な行動と考えられる音楽を文化の中に正しく位置づけて考える」<sup>78</sup>という主張の中にも窺うことができる。

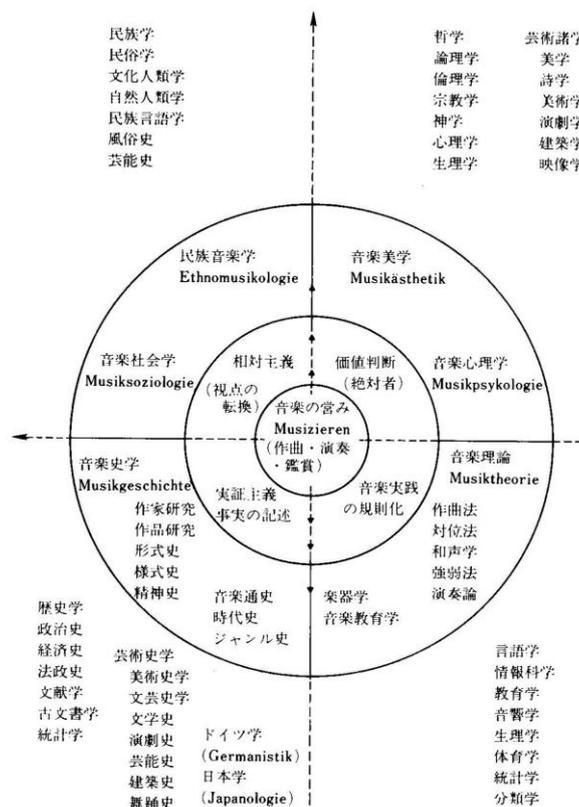


図1 音楽学と諸科学 (谷村他 (1991)、p. 13 より)

## 2. 音楽批評の対象

上に述べたように、「音楽批評」の一般的定義より、その対象は「音楽作品や演奏を含む現実に生起する日々の音楽現象」とされる。なお、批評の対象は過去の音楽作品に対するものではなく、「現代の生活のなかで行われる芸術的創造」<sup>79</sup>になるとしている。「現実に生起する日々の」という記述がそれを表している。また音楽批評においては、「音楽の本質とその様態、背景にある歴史や社会に関する知識および定見が基礎になければならない」<sup>80</sup>とされる。しかし、それを基礎にして音楽作品の、あるいは演奏の何を具体的に批評の対象とするのかは、美学や音楽学では明示されていない。当然それは、批評や芸術批評の基本的意義からして音楽に存在する美的価値なのであろうが、それを判断するためにさらに具体的に音楽の何を対象とするのだろうか。

それは、先の芸術批評の対象で提示した、「形式」と「内容」及び、「芸術を創造する時の人間のイメージーションや感情」の音楽における具体、ということになるだろう。

音楽における「形式」とは、「音楽の諸要素とその構造」である。音楽の諸要素とは「音色、リズム、旋律、和声を含む音と音とのかかわり合い、形式、強弱、速度」などである。音楽の形式は、これらが選択され構成されることによって構造化される<sup>81</sup>。音楽における「内容」とは、音楽の諸要素が構造化されることによって生み出される質であり、気分、曲想、雰囲気、豊かさ、美しさなどである<sup>82</sup>。

そして「音楽を創造する時の人間のイメージーションや感情」である。音楽の場合、音楽を創造する人間は作曲者と演奏者であるが、作品と演奏における彼らの表現、表象に「音楽を創造する時の人間のイメージーションや感情」が表れるということになる。

## 3. 音楽批評における規準

谷村は「批評の場では、当然のことながら比較が行われ、モデルが設定され、そのモデルを基準に批評される」<sup>83</sup>と述べる。このように谷村は基準が「モデル」であることを示唆している。では、そのモデルと何か。谷村は、人が他人の音楽に対して批評するということには2つの立場があると述べる。1つは「歴史的立場」で通時的な批評、もう1つは「体系的理論的立場」で共時的な批評である。前者は、批評する人に経験化されている過去の音楽批評の結果をモデルにしそれとの比較によって批評する場合である。後者は、同一の場において2つの音楽を比較し批評する場合である<sup>84</sup>。

前者においても後者においても、批評の基準（モデル）は、批評者の過去の批評経験によって保存されているものと理解できる。すると、批評者の1回1回の批評の正確性や厳正性が問題になろう。谷村は「自分の感じたままを主観的に述べただけでは演奏家も作曲家も納得しない」<sup>85</sup>と指摘する。このことは先の「印象批評」に対する警告である。一方、音楽美学や音楽心理学は、「批評の重要な根拠」<sup>86</sup>となるものであるが、どちらも音楽そのものから離れたところから得られる論理は批評の根拠としてこれもまた危険であることを谷村は示唆する。これは先の「裁断批評」と重なる部分がある。

谷村は、多くの人びとを承服させるような批評のためには、1つは、音楽美学や音楽心理学、音楽理論などを通して音楽について思索すること、もう1つは、「現在及び過去の音楽について厳密、詳細に調査」することが求められるとする<sup>87</sup>。このことは、批評者の正当な批評のための拠り所を築くことであり、それは正当な規準を備えることであると言える。

## 第1章の註

- 1 竹内敏雄編集 (1978)『美学事典 増補版』, 弘文堂, p. 166
- 2 佐々木健一 (2006)『美学辞典』, 東京大学出版会, p. 228
- 3 以上の引用は、前掲書, 竹内 (1978), p. 166 より。
- 4 前掲書, 竹内 (1973), p. 166
- 5 丹羽正明 (1979)「音楽批評の機能—読者に向けての発言」『音楽芸術』10月号, 音楽之友社, p. 51
- 6 谷村晃・山口修・畑道也編(1991)『音は生きている』(芸術学フォーラム6), 勁草書房, p. 13の図より。
- 7 下中弘編集兼発行(1990)『音楽大事典』第2巻, 平凡社, pp. 646-647
- 8 丸山桂介 (2005)「鑑賞こそが音楽の創造 第二部 人間と世界」『音楽鑑賞教育』3, 財団法人音楽鑑賞教育振興会, p. 31
- 9 森宏一編集 (2000)『普及版 哲学辞典』, 青木出版
- 10 前掲書, 佐々木 (2006)
- 11 前掲書, 竹内敏雄 (1978)
- 12 新島出編 (1977)『広辞苑』, 岩波書店, p. 1886
- 13 前掲書, 新島 (1977), p. 1885
- 14 前掲書, 森 (2000), p. 386
- 15 木田元編『哲学キーワード事典』(新書館, 2004年)における「批評」の項(須田朗による。p. 172。)より。ここで使われている「判定」は、後に検討する「判断」(judgment)と同義である。
- 16 前掲書, 木田 (2004), p. 172
- 17 前掲書, 佐々木 (2006), p. 218
- 18 前掲書, 佐々木 (2006), p. 224
- 19 前掲書, 佐々木 (2006), p. 224
- 20 市河三喜顧問 (1979)『新英和大辞典』, 研究社, p. 414
- 21 『哲学辞典』の「批判」の項にはその英訳として critique と criticism が併記されている。
- 22 「批判」が哲学に対して最も大きな影響を及ぼしたのがカント (I. Kant) の著、『Kritik der reinen Vernunft』、『Kritik der praktischen Vernunft』、『Kritik der Urteilskraft』であり、それらは『純粹理性批判』、『実践理性批判』、『判断力批判』と邦訳されている。
- 23 前掲書, 森 (2000), pp. 389-390
- 24 前掲書, 佐々木 (2006), p. 217
- 25 前掲書, 竹内 (1978), p. 144 (荒井徹の執筆による「芸術批評」の項より)
- 26 前掲書, 丹羽 (1979), p. 53
- 27 前掲書, 佐々木 (2006), p. 167
- 28 前掲書, 佐々木 (2006), p. 167
- 29 前掲書, 佐々木 (2006), p. 167
- 30 前掲書, 佐々木 (2006), p. 172
- 31 前掲書, 佐々木 (2006), p. 172
- 32 前掲書, 佐々木 (2006), p. 172
- 33 前掲書, 佐々木 (2006), p. 147
- 34 前掲書, 佐々木 (2006), p. 148
- 35 前掲書, 佐々木 (2006), p. 169
- 36 前掲書, 森 (2000), p. 382
- 37 前掲書, 佐々木 (2006), p. 200
- 38 前掲書, 森 (2000), p. 382
- 39 前掲書, 佐々木 (2006), p. 200
- 40 前掲書, 佐々木 (2006), p. 200
- 41 前掲書, 竹内 (1978), pp. 141-142
- 42 前掲書, 佐々木 (2006), p. 217
- 43 前掲書, 竹内 (1978), pp. 141-142。西洋における「芸術批評」は「文芸批評」を中心として今日まで発展してきた。「芸術批評」の意は多義的であり、ここで「ごく一般的に」と記されていることもそ

の理由であろう。

- 44 前掲書, 佐々木 (2006), p. 31
- 45 ヴェントゥーリ.L. (1990)『美術批評史』(辻茂訳), みすず書房, p. 11
- 46 前掲書, ヴェントゥーリ.L. (1990), pp.11-12
- 47 前掲書, ヴェントゥーリ.L. (1990), p. 12
- 48 前掲書, ヴェントゥーリ.L. (1990), p. 12
- 49 前掲書, ヴェントゥーリ.L. (1990), p. 12
- 50 前掲書, 森 (2000), p. 115
- 51 前掲書, 森 (2000), p. 115
- 52 前掲書, 森 (2000), p. 115
- 53 佐々木は form を「かたち (形)」として述べている。
- 54 前掲書, 佐々木 (2006), pp. 109-112
- 55 音楽における形式と内容については、後述する。
- 56 前掲書, ヴェントゥーリ.L. (1990), p. 12
- 57 前掲書, ヴェントゥーリ.L. (1990), p. 13
- 58 以上、前掲書, ヴェントゥーリ.L. (1990), pp. 12-13 からの引用。
- 59 前掲書, ヴェントゥーリ.L. (1990), p. 12
- 60 前掲書, ヴェントゥーリ.L. (1990), p. 13
- 61 前掲書, 竹内 (1978), p. 142
- 62 前掲書, 竹内 (1978), p. 142
- 63 前掲書, 竹内 (1978), p. 142
- 64 前掲書, 竹内 (1978), p. 142
- 65 前掲書, 竹内 (1978), p. 142
- 66 前掲書, 竹内 (1978), p. 143
- 67 前掲書, 竹内 (1978), p. 143
- 68 前掲書, 竹内 (1978), p. 143
- 69 前掲書, 竹内 (1978), p. 143
- 70 ここでの「音楽批評」は、いわゆるプロフェッショナルとしての批評家が行う、あるいは、美学におけるその定義である。すなわち、本研究で問題とする学校音楽教育において学習者が行う音楽批評とは、重なる面もあれば異にする面もある。この概念をおさえることは、後に音楽科の学力としての批評能力を検討する際に必要となる。
- 71 前掲書, 竹内 (1973), p. 316
- 72 浅香淳編集兼発行 (1991)『新訂標準音楽辞典』, アーテ, 音楽之友社, p. 349
- 73 前掲書, 谷村他 (1991), p. 7
- 74 前掲書, 谷村他 (1991), p. 9
- 75 前掲書, 谷村他 (1991), p. 12
- 76 前掲書, 谷村他 (1991), p. 10
- 77 前掲書, 谷村他 (1991), p. 12
- 78 前掲書, 谷村他 (1991), p. 12
- 79 前掲書, 浅香 (1991), p. 350
- 80 前掲書, 竹内 (1978), p. 316
- 81 西園芳信 (2005)『小学校音楽科カリキュラム構成に関する教育実践学的研究－「芸術の知」の能力の育成を目的として－』, 風間書房, pp. 75-76
- 82 前掲書, 西園 (2005), pp. 76-77
- 83 前掲書, 谷村他 (1991), p. 9
- 84 前掲書, 谷村他 (1991), pp. 9-10
- 85 前掲書, 谷村他 (1991), p. 10
- 86 前掲書, 谷村他 (1991), p. 11. 谷村は、音楽美学、音楽心理学、音楽理論 (Musiktheorie) は批評の重要な根拠となると述べる。音楽美学は「音楽の本質、音楽のあるべき姿を追求する学問であるが、それは同時に人間の有する様々な価値の世界の内に、音楽の美的価値を正しく位置づけようとする」学問、音楽心理学は「音楽を人間の心理現象の一面として捉えようとする」学問、音楽理論は「音楽

---

の技術的側面を整理、体系化して、いわば音楽の中に含まれている、法則や規則を探し出そうとする」  
ものと谷村は述べる（以上、pp. 10-11）。

<sup>87</sup> 前掲書，谷村晃他(1991)，pp. 10-11

（宮下 俊也）

## 第2章 音楽鑑賞学習における批評の意義と構造

第1章では鑑賞や批評の概念を検討して明示した。それは哲学、美学、音楽学から導いたもので、一般的な（専門家が行うような）芸術批評や音楽批評の概念として留まっている。また、前章の末尾に示したように、音楽鑑賞における批評のための規準となるものは何なのかもまだ定義が保留されている。そこで本章では、学校教育での音楽鑑賞における批評の概念を検討する。このことによって、音楽科の授業に適応できる批評の意義を描き出すことと、それによって習得できる学力が明確になる。

検討は以下の手続きによって行う。まず、芸術教育における批評を論じたデューイ（J. Dewey）の見解を概観する。続いて、教育における批評の学術的研究としては音楽教育よりはるかに先行している美術教育<sup>1</sup>より、フェルドマン（E. Feldman）の「批評の段階」を検討する。その後、音楽鑑賞における批評の前提となる、音楽の認識と音楽的思考について検討する。そのことで、批評のための「規準」が明確になる。

以上により、音楽鑑賞学習における批評の意義を確定し、それを「音楽鑑賞学習における批評の構造」として図示する。それは後に提出する「批評を取り入れた新しい音楽鑑賞授業」の基軸となる。

### 第1節 デューイによる芸術教育における批評の概念

まず、デューイの芸術論における「批評」の概念を検討する。

これまで日本におけるデューイの批評に対する先行研究は見られなかったが、最近になって西園芳信（2008）がその検討を芸術教育の立場から初めて試みた<sup>2</sup>。西園によるこの研究は、日本の芸術研究における批評の在り方を視座とするものであり、本研究に最も強く関連する先行研究として認められる。本節ではこの西園による検討を基盤に、デューイの『Art as Experience』（『芸術論—経験としての芸術—』）の第13章「Criticism and Perception」（「批評と認識」）<sup>3</sup>を再検討し、前節までに規定してきた批評の一般的概念と照合させながら、教育における批評の概念を定式化していく。

#### 1. デューイによる批評の概念

西園は、デューイによる批評の概念を次のように整理した。

「芸術共通に備わる形式と内容を判断としての規準にし、批評者の感受性や知識・経験によって芸術作品を知覚し、その分析と総合を通して作品の特質と要素を把握することで、その価値を評価し読者自身の経験の中に新たな手がかりと指針が得られるように提供すること」<sup>4</sup>。

この概念を、第1章第3節で明らかにした批評の定義と照合させてみよう。

まず、デューイも批評の前提は、「観念的にも語源的にも、判断である」<sup>5</sup>と述べる。では芸術批評において判断するものは何か。それはやはり「価値」であり、それは芸術作品の中にある特質や要素であるとデューイは言う<sup>6</sup>。

批評の目的についてデューイは、「読者自身の経験の中に新たな手がかりと指針を見いだしうるように仕向ける」<sup>7</sup>ことと述べる。これも先にまとめた目的「対象に対して価値を判断し、判断した結果をその対象の作者や他の鑑賞者や読者に対して伝え、そうした人々、あるいは社会に対して指針や手がかりなど有益な知見を提供する目的をもつ行為」と符合

する。

さて、デューイの芸術批評に対する概念の中で、最も強調されている点は、その方法、特に判断のための方法についてである。先の西園の整理によれば次のようになる。まず、芸術共通に備わる形式と内容を判断としての規準にすること、そのためには、批評者の感受性や知識・経験によって芸術作品を知覚する活動が必要となる。そして判断のためには、作品の分析と総合を通して作品の特質と要素を把握することになる。

ここでは3つのことを述べている。1つは「芸術共通に備わる形式と内容が判断の規準になる」ということ。もう1つは、「判断の前提となる規準をもつためには批評者の感受性や知識・経験によって芸術作品を知覚する必要がある」ということ。そしてもう1つが「作品の分析と総合」である。

まず第1の規準についてデューイは詳しく論じている。デューイは、芸術には「標準」(standard)はなく、従って批評のための標準もないが「規準」(criteria)はある、と言う<sup>8</sup>。このことは、「『標準』は対象を量的に扱うときの用語で、芸術批評は対象の質を直接扱うからであるという見解」<sup>9</sup>と西園は解釈する。デューイは規準を、「内容(matter)に対する形式(form)」や、「芸術における媒介の意味(meaning of medium)」や、「表現的事物の本性」(nature of the expressive object)に対する議論によって見出そうとした<sup>10</sup>。この3つは結局「内容に対する形式」に集約される、と西園は述べる<sup>11</sup>。ゆえに、それが「芸術共通に備わる形式と内容」ということである<sup>12</sup>。

第2についてデューイが強調することは、芸術作品を知覚することと、知覚するためには経験によって得た感受性と知識が必要になるということである<sup>13</sup>。このことは、芸術批評における規準について先述した内容と一致する。すなわち、批評は批評者のうちに備わった過去の知的経験や美的経験、「批評家自身の個性的な犀利と直観と豊かな体験」<sup>14</sup>によって行われるものなのである。さらにここでもう1つ重要な指摘を見逃すことができない。それは、批評者の「知識」についてである。デューイはこう述べる。「もろもろの伝統を広範囲にわたって知ることが、適確で厳密な識別をするための条件である。なぜなら、こうした知識によってのみ、批評家は芸術家の意図がどこにあるかを見いだすことができ、またその制作活動がこの意図に添うものかどうかを知ることができるからである」<sup>15</sup>。このことは、まさにヴェントゥーリの述べる「芸術を創造する時の人間の精神」と一致する。芸術家の精神(イマジネーションや感情)、意図といったものは、批評者の感受性や知識なくしては捉えられない、ということである。

第3の分析と総合について、デューイは次のように述べる。「分析」とは、細目や部分を識別することであり、「識別」は「細目や部分がかつ重要性と機能を考慮して行われなければならない」とする。また「総合」とは、洞察であり、「芸術の客観的形式の上に立った統一的観点」をもって行われることとする。そしてそれは「判断者の創造的反応」であると言う<sup>16</sup>。例えば、芸術作品を構成する要素といった細部を認識したり識別したりするのみならず、「統一的観点」をもってそれらを総合し作品の全体を創造的に洞察していくことが、批評の方法であるとデューイは捉えている。このことは、音楽鑑賞において、音楽の「部分」の認識と「全体」の認識を往還することの重要性に通じる。

## 2. 鑑賞における批評についての見解

先に「鑑賞」と「音楽鑑賞」についてその定義を検討した。デューイは批評を鑑賞との関係において、さらに厳密に規定していることに注目しなければならない。デューイは鑑賞において批評は、価値を価値として範疇づけるものではない、と言う。批評は、色彩や配置や量感といった芸術作品の客観的な特性を問題にし、それらと「それらの相互関係」

から「検討」によって価値を探究していくことであるとする。つまり批評は価値づけではなく、「価値の探求のための考察や検討」なのである。鑑賞と批評の相違についてデューイは明確には論じていないが<sup>17</sup>、鑑賞も批評も価値を問題にはするけれども、その価値を質的關係における性質として感じるのみであれば鑑賞ではあるけれども批評にはならない。すなわち「すばらしい」とか「くだらない」といった、検討なくして得た価値づけは批評ではないとする<sup>18</sup>。これは極めて重要な示唆である。なぜなら、批評は、価値づけ自体が目的ではなく「価値の探求のための考察や検討」であるということ、つまり、価値を探究すること、そしてそのための過程、さらにその過程における「考察や検討」という「思考」を批評の意義として認めていることは、批評家の批評ではなく、教育としての批評の意義として考えられるからである。

### 3. 芸術教育における批評活動に対する示唆

デューイの批評に対する見解で注目すべき最後の点は、やはりそれが芸術教育に対する示唆を含んでいることである。それは「批評の機能」についての見解に見られる。

デューイはこう述べる。「批評の機能は芸術に関する認識の再教育という点にある。即ち、それはものの見方や聞き方を身につけるといふ難事業を補助するものである」<sup>19</sup>。デューイは当然、この「再教育」という語は批評家についてのことを意味し、学校の芸術教育について述べているものではないが、しかし、芸術に対する認識を批評によって再び「再教育」するものであるという考え方は、学校教育で芸術批評を扱う場合においても芸術に対峙する学習者に対しても求められるべきものであると言える。つまり芸術を認識するためにも批評の機能は教育的に意義あるものであるということになる。西園も「学校の芸術教育における『批評』の方法もこの芸術作品に関する知覚能力の育成、即ち、作品の見方や聞き方を身につけるといふところに意味を求めべきであろう」<sup>20</sup>と述べている。その具体として、西園はデューイの見解から芸術教育における批評活動の方法を次の5点によって示している<sup>21</sup>。

- ① 芸術作品に対するなんらかの判断をする。
- ② その際の判断の規準は、芸術共通に備わる形式と内容となる。
- ③ 判断する前提に芸術作品を知覚する。
- ④ 作品の分析と総合によって作品の特質と要素を把握し、それを評価する。つまり、値打ちを見定めることをする。
- ⑤ 評価結果（見定めた値打ち）を読者（他者）の経験の中に新たな手がかりと指針が得られるように提供する。

以上、デューイの芸術論から得られた、新たな教育における批評の意義は次のようにまとめられる。

- |   |
|---|
| <ol style="list-style-type: none"><li>① 批評は、「価値の探求のための考察や検討」に意義がある。</li><li>② 価値を探究するためには判断の規準が必要であり、その規準は、芸術作品を知覚することである。</li><li>③ 価値の探求は、構成する要素といった細部を認識したり識別したりするのみならず、「統一的観点」をもってそれらを総合し作品の全体を創造的に洞察していく方法を取る。</li><li>④ 教育における批評の意義は、「芸術に関する認識の再教育」という点にある。</li></ol> |
|---|

## 第2節 フェルドマンによる美術鑑賞教育における批評の概念

美術教育において鑑賞よりも制作に重点が置かれてきたことは、日本の美術教育のみならず、芸術史の中でも見られてきたことである<sup>22</sup>。さらにその芸術史においても、批評の問題は常に先送りされる傾向があり、特に日本においては方法論的なアプローチがほとんど行われてこなかった<sup>23</sup>。

そのような中で、1960年代のアメリカに現れたフェルドマン (E. Feldman) は、美術批評のモデルとして批評の段階を提示し、当時の美術教科教育へ大きな影響をもたらした。またフェルドマンはこのモデル構築にあたり先のデューイの影響を強く受けた人物とされている<sup>24</sup>。そこで、この批評の段階を、“*Becoming Human Through Art: Aesthetic Experience in the Schools*” (『美術による人間形成—学校における美的経験』) (1970) の第12章 “Mastering the Techniques of Art Criticism”<sup>25</sup>を用いて検討する。

### 1. 批評の段階

フェルドマンは美術批評を「記述」(Description)、「分析」(Analysis)、「解釈」(Interpretation)、「判断」(Judgment)の4段階で示した<sup>26</sup>。

「記述」は、客観的に作品を見て記述する段階である。ここでは、見ているものに注意を払い、形態、色彩、空間、量などの構成要素やその関係を客観的に記述することを求め、鑑賞者の価値判断は保留させ、「強い」、「弱い」、「美しい」といった感情や好みの入った言葉の使用を禁じる。具体的な実践方法として、雨の日の裏庭を描写させて、光の影響や陰影の変化、色彩や音等を客観的かつ詳細に記述させ、それらが自分にどのような影響をもたらしたかを考察する例を挙げている<sup>27</sup>。

「分析」は、作品を構成する要素とイメージの関係を記述させる段階である。フェルドマンは、作品におけるその関係として次の5点を述べている。第1は、位置関係とイメージの関係、第2は大きさやイメージの関係、第3は形態とイメージの関係、第4は色彩・テクスチャーとイメージの関係、第5はテクスチャー・表面とイメージの関係である。例えば、曲線的な形と角ばった形ではどのような効果の違いがあるか、ギザギザした形態やなめらかな形態はどのような影響を与えるかなどを客観的に分析させる。具体的な実践方法として、いくつかの組み合わせられた物体にシートをかぶせ、浮かび上がった形からその物体を当てたり、形と形の間を描写したりする例を挙げている<sup>28</sup>。

「解釈」は、芸術作品に意味を与える段階である。美術史や様式、作者自身の意図や言葉に捉われず、鑑賞者自身が見て感じたことに基づき、作品を統一しているアイデアやコンセプトの存在を問い、「作品からひきだされた視覚的根拠の重要な部分から意味を形成」<sup>29</sup>し、「作品と鑑賞者の生活との間に意味深い関係をつくり出す」<sup>30</sup>ことを求める。この段階が批評の段階として最も難しく、最も創造的で、最も価値のあるステージであるとフェルドマンは述べている<sup>31</sup>。具体的な実践方法として、複製画を友人たちに見せ、その作品の意味を語らせ、それを簡単に書き留めながら友人がその作品の意味を好き嫌いではなくどう捉えたかについて解釈し、それをクラスで報告し合って解釈の比較をする例を挙げている<sup>32</sup>。

「判断」は、芸術作品の価値を判断する段階である。鑑賞者自身が自分の趣味や感情から判断することなく、優れた批評の根拠をもち、芸術作品が真に注目に値するかどうかを決定する批評の最終段階である。具体的な実践方法として、もしも自分が王や独裁者でメ

ディアを操作できるとしたら、どのような芸術を禁止したり勧めたりするかを考えたり、批評家による批評について、判断や判断した根拠、そこで使用している言語の質等を分析する例を挙げている<sup>33</sup>。

そして最後にフェルドマンは、以下のように述べている。「批評の真の目的は価値の総体を増やすことであり、芸術から得る満足感を深めることなのだ」と。この見解は、教育における批評の意義としても説得力がある。

## 2. 美術鑑賞教育における批評活動からの示唆 ―フェルドマンへの批判を踏まえて―

まず、フェルドマンの美術批評の4段階、すなわち「記述」、「分析」、「解釈」、「判断」は、具体的にはそれぞれ次のように言い換えられる。「記述」は「作品の構成要素を客観的に捉え、客観的にその影響を記述すること」。「分析」は「客観的に捉えた作品の構成要素と自分のイメージを関係づけること」。「解釈」は「客観的に捉えた作品の構成要素と自分のイメージを関係づけ、作品に意味を与えること」。「判断」は「作品が芸術的に価値があるかどうかを根拠をもって判断すること」。

こうして見ると、この段階は、教育において学習者に批評の能力を培っていく過程を極めて論理的に構築し、また段階における具体的な教育実践方法を提示している点で示唆的である。とりわけ、「記述」の段階では対象をよく見、客観的にその要素を知覚することを厳格に求めている点は特徴的である。それは最後に行う「判断」において、個人的な趣味や主観によって芸術の良し悪しを決定することを避けるために必須なものとして主張されたものと言える。形式（構成要素）の知覚から始まり、最終的に論理的な芸術美の判断へと経験によって推移させるこの段階は、多分にデューイの影響を受けていることが窺える。

一方、このフェルドマンの段階に対して、やはり同じくデューイの影響を受けているゲーヒガン (G. Geahigan) はそれを批判する<sup>34</sup>。和田学 (1982) はその批判の観点を次の6点にまとめている。

- ① 生徒が自主的に美術作品の良し悪しの価値判断をすすめることが重要にも関わらず、判断の基準は予め設けられ、積極性が失われている。
- ② 美術批評の行為が、明確に4段階へ分類され、かつ段階的に (Step-by-Step)、直線形式 (Liner Fashion) を突き進む不自然な点。
- ③ 判断と評価に互換性をもたせてしまい曖昧に説明されている<sup>35</sup>。また、最終的に判断へ至る、と述べているが、それ以外の段階は判断が存在しないことになる。そもそも全く判断力の働かない状態などない。
- ④ 批評行為の間、常に批評者自身の意識していることが表明されるとは限らない。
- ⑤ 実際の美術批評家は先ず、先行研究の調査から始め、今までにない批評を述べようとする。よって最初の客観的な記述、という設定は不自然である。
- ⑥ 知覚のモデルと哲学的な弁証法のモデルが混在し、また、認知のプロセスと批評のプロセスが曖昧のまま、美術批評のプロセスとされている。

ともにデューイからの影響を受けた二人の見解の相違について、和田の以下の考察は興味深い。和田は「ゲーヒガンは、学校という教育現場特有の文脈に沿って探究心の育成と問題解決学習を重視した批評活動を提唱し、フェルドマンは民主主義社会における美術を通じたコミュニケーション技能を身につける教育を、また、自己批判と反省的思考を重視した批評活動を提唱している」<sup>36</sup>と述べる。

特に、①については、判断の基準が作品の形式（構成要素）の知覚の結果に限定されることへの批判であり、子どもが最初に作品を見た時のことについて「生徒の興味・関心を誘う最初(作品を見た瞬間)の衝撃と、それを上回る驚きの結果となった結末の意外性」(括

弧内は引用者による補足)<sup>37</sup>を重視するゲーヒガンの発想からくるものである。また②は、教育における現実性との乖離、③は、批評のすべての過程において「判断の機会」があるはずなのにそれを捨象していることの主張である。

また、フェルドマンの段階を踏まえて小学校で鑑賞の実践を行った佐藤史子(2004)は、鑑賞に不慣れな者や初心者あるいは低年齢の鑑賞者には、「描写」の段階で主観的な思考や記述を禁ずることには無理があり、彼らは作品を見ると、最初に主観的で直感的な思考が作用したり、主観や直感的思考と論理的思考の双方が混在したり、主観的な解釈から発して論理的な解釈へと進むこともある、と述べている<sup>38</sup>。例えば、「作品に複数の人物が描かれていれば、その人物同士の関係性や、背景や色彩との関係性を主観的に推測し、恣意的に作品に物語を付加する傾向がある」<sup>39</sup>という。そして佐藤は、小学生の鑑賞プログラムとして、フェルドマンの「描写」「分析」「解釈」「判断」の手順を、「直感」「分析」「解釈」「判断」の手順に変更して実践している。

以上より、美術鑑賞教育における批評の原理として、その段階は原理的にはフェルドマンの4段階、すなわち、「作品の構成要素を客観的に捉えること」→「客観的に捉えた作品の構成要素と自分のイメージを関係づけること」→「客観的に捉えた作品の構成要素と自分のイメージを関係づけ、作品に意味を与えること」→「作品が芸術的に価値があるかどうかを根拠をもって判断すること」となる。しかし一方で、実際の鑑賞の授業実践においては必ずしもそのようには進展せず、これらの段階は行き来するものと考えられる。以上は次のようにまとめられる。

- ① 批評の段階は原理的に、「作品の構成要素を客観的に捉えること」→「客観的に捉えた作品の構成要素と自分のイメージを関係づけること」→「客観的に捉えた作品の構成要素と自分のイメージを関係づけ、作品に意味を与えること」→「作品が芸術的に価値があるかどうかを根拠をもって判断すること」となる。
- ② しかし、教育実践においてその過程は必ずしも一方的に進行するものではなく、それぞれの段階において、価値を判断し記述することも意義がある。また、学習者が初めて作品を見る時、「作品の構成要素を客観的に捉えること」の他に、主観的な思考を巡らしていることは避けられない事実である。ゆえに、実際の鑑賞の授業実践では、①の4段階は行き来する。

### 第3節 音楽の認識についての概念

これまで、批評の意義や過程を検討してきた中で、「知覚」「客観的に捉える」といった語が多く使われていた。これらは対象を「認識」することの範疇にあるものである。では「音楽を認識する」とはどういうことなのか。このことは日本の音楽科教育においてこれまで曖昧に捉えられてきた。つまり音楽学習において、音楽の何をどのように認識するのか、ということが明確に把握されていなかった。この部分が曖昧だと教科における指導内容や目標も曖昧になり、また批評を教育に求める場合、その前提となる能力が不明瞭になり批評の学習へと進んでいくことが困難になる。

そのような中で、芸術や音楽の認識について哲学的に論究し、それによる厳密な概念規定を提出したのは西園芳信(1995)<sup>40</sup>(2005)<sup>41</sup>である。西園(1995)では、芸術の認識を科学の認識と対比して論じ、前者を「芸術の知」として初めてその概念を提出した。本節

では、その西園の知見に依拠して鑑賞における音楽の認識について考察する。

## 1. 芸術の認識

西園は、デューイ、ランガー、リーマーの芸術論から導き出した芸術経験の特質を認識の観点から捉え直し、また科学的経験と芸術的経験を認識の観点から比較して芸術に対する認識を次のように規定した。まず芸術とは「言語 (language) や科学による概念や論理的形式では捉えられない、人間の感情経験 (内的経験) を音や色彩、身体等の芸術媒介を通じ、誰もが知覚できるように表現したものである」<sup>42</sup>と定義した。そして芸術を認識するということは、感性・イメージ・直感・感情といった個別性、主観性、非論理性を特性とし数量では捉えられない「ものの性質 (qualia, quality)」を捉える「芸術の知」を中心にして芸術を捉えることとしている<sup>43</sup>。無論そこには、知性・理性・概念・論理といった「科学の知」も「芸術の知」とともに作用するものであるが、とりわけ芸術の認識においては、認識方法の中心が音や色彩や身体的動きといった「媒介」により、「芸術全体を知覚・感受し、感情経験として共有する」<sup>44</sup>とところに芸術認識の意味があるとしている。

それでは音楽の認識において、その「知覚」、「感受」とは何をどうすることなのか、それらの概念と認識方法について検討する。

## 2. 音楽の構造とその認識方法 —知覚・感受・理解—

第1章で引用した「なにものにも形式と内容なしには存在しえない」という哲学の論理<sup>45</sup>のように、音楽も「形式」と「内容」によって成立している。加えてそれらを支える「背景」がある。西園は音楽の「形式」を「音楽の形式的側面」、「内容」を「音楽の内容的側面」、「背景」を「音楽の文化的側面」と捉えている<sup>46</sup>。音楽の形式的側面とは、音色、リズム、速度、旋律、テクスチュア、強弱、形式、構成などの音楽を形づくっている要素や要素同士の関連である。音楽の内容的側面とは、それらの働きが生み出す気分や雰囲気や美しさなどといった質である。また、音楽の文化的側面とは、音楽の形式的側面や内容的側面を成立させる風土、文化、歴史、他芸術等である。

したがって、音楽を認識するということは、この3つの側面を認識するということになる。しかし、この3側面は認識の方法がそれぞれ異なる。

まず、音楽の形式的側面を認識するということは客観的な認識である。音色であれば木琴の音色か鉄琴の音色か、強弱であれば強いかわいいか、速度であれば速いか遅いか、形式であればソナタ形式であるかそうでないか、というように、感覚器官のうちの聴覚を用いてそれらを聞き分けて認識する。また美術では、緑色か赤色か、直線か曲線か、というように視覚を用いて見分けて認識する。このように芸術の形式的側面を客観的に認識することを、感覚器官を通して事物の状態を知るという語義をもつ「知覚」(perception) と言う。したがって、「音楽の形式的側面を認識する」ことは「音楽の形式的側面を知覚する」(perceiving aspect of form) ということになる。

一方、音楽の内容的側面の認識は、主観的な認識である。例えば、音量がだんだん強くなっていくフレーズを知覚して「何か迫ってくるよう」と認識する人もいれば「晴天から暴雨への変化」をイメージする人もいる。またある直線を静寂、また別の曲線を動きとして捉える人もいる。このように、内容的側面は形式的側面の知覚を前提にしてイメージや感情によって捉えるものであるが、それを、感覚器官によって受け入れ、その印象などを感じて心に受けとめるという語義をもつ「感受」(feel) という語によってその認識を言い表す。よって「音楽の内容的側面を認識する」ことは「音楽の内容的側面を感受する」(feeling of aspect of substance) ということになる。

また、音楽の文化的側面は、形式的側面の知覚や内容的側面の感受に基づきながら、「理解」(understanding) することによって認識し、知識として経験化されるものである。よって「音楽の文化的側面を認識する」ことは「音楽の文化的側面を理解する」(understanding of aspect of culture) と言うことになる。

なお、この音楽の文化的背景の理解を音楽の認識として認めるかどうかについては議論の余地がある。例えば西園は「音楽の認識は、音楽の形式的側面の知覚を通じ音楽の内容的側面を感受することによって成立する」<sup>47</sup>と述べていて、文化的側面は認識に加えず音楽科の指導内容としてそれを求めている<sup>48</sup>。しかし、音楽の批評が音楽を認識することが前提になること、さらに、第1章で扱った音楽批評の対象についての定義で、その1つが「音楽を創造する時の人間の精神」であること、また音楽批評の規準において「印象批評」を回避するためにも、また「多くの人々を承服させるような批評」のためにも、音楽美学や音楽心理学、音楽理論などを通して音楽について思索することや、「現在及び過去の音楽について厳密、詳細に調査すること」が求められるとされている。例えば音楽の文化的背景として、ベートーベンの交響曲第5番がどのような背景で作曲されたのか、あるいはオペラにおける美術や照明や台本となる文学等と音楽との関わりを理解して得た知識をもってその価値を判断する必要が生じるだろう。つまりそうした文化的背景を音楽から認識(理解)し、形式的側面の知覚と内容的側面の感受とを合わせて批評のための規準を用意することができるものと考えられる。

#### 第4節 音楽の認識と音楽的思考

前節により、音楽科において求める音楽の認識は、音楽の形式的側面の知覚、内容的側面の感受、文化的側面の理解であると定義された。また一方で、音楽を認識するという事は、この三側面をそれぞれの方法で認識することに留まらず、それらのつながりをも認識することが重要になる。そのことについて小島律子は、「音や音楽に働きかけるとき、頭の中で連続的に進行している意識の流れ(イメージの形成、音の選択等)」を「音楽的思考」として定義した<sup>49</sup>。また小島は、子どもの音楽づくりにおける音楽的思考の過程を、外界の諸現象に潜む論理(反復、応答、生成と消滅など)によって音楽の形をつくり、そしてイメージを働かせて音楽の中身を作る過程として提示した<sup>50</sup>。つまり、音楽の諸要素を知覚し、作り上げたいイメージに基づき諸要素を操作し、さらにそれによって生み出される内容的側面をイメージと対照させてさらに諸要素の操作を続けていく思考の過程であり、音楽づくりの過程において子どもが選んで奏でた音を知覚し、それをイメージに基づいて吟味し、よりイメージに近づけるためにさらに音を選び構成し、再びそれを知覚してイメージと照合させる、という連続的な思考を音楽的思考として捉えている。

さらに岡本信一は、音楽授業の中で進行する意識の流れにおいて「創造的・生成的性質を帯びた思考」と「批判的・評価的性質を帯びた思考」は必要不可欠かつ相補的であり、さらにそれらを促すメタ認知の形成を特に鑑賞の実践において求めるよう提案している<sup>51</sup>。岡本の言う「批判的・評価的性質を帯びた思考」とは、小島の音楽づくりの過程でのイメージに基づく選択・構成された音の吟味に相当するものと考えられる。

これは音楽づくりのみならず音楽学習におけるすべての表現活動の過程に存在すべきものである。では鑑賞活動ではどうか。第1章で明らかにしたように、鑑賞は価値認識の意味をもつものであり、「作品そのものの価値」と「芸術作品を創造する時の人間のイメージネーションや感情」を対象にそれらを判断する。またその判断のためには形式的側面の知覚、内容的側面の感受、文化的側面の理解によって得られた規準によって行われる。また

判断結果を主張することによって音楽鑑賞における批評が成立する。したがって、そのすべての過程が音楽的思考によって行われるものであると言える。

## 第5節 音楽鑑賞における批評によって育成される学力

音楽学習としての鑑賞及び批評を論じる際に、それによって学習者にどのような能力がもたらされるのかを明らかにしなければならない。すなわち、学校の音楽教育で批評の学習指導を行うことによってどのような学力育成が期待できるのか。それをここで論じる。

認識や思考は学習者の内的において行われるものであり、その結果は学習者の内に何かを生成する。一方、認識や思考の結果を主張することは学習者の外に何かを生成する。批評によってこの内と外に何かを生成しようとする能力が、批評の能力、すなわち批評によって育成される学力として規定できる。そして、批評によって生成されるものが社会的に意義をもち、それを生成しようとするのが、人間形成に関わる音楽科において教育的意義をもつことを明らかにすることによって、初めて批評の教育的意義が確定されるものと考ええる。

それではまず、批評によって内と外に生成されるものは何かを、日本学校音楽教育実践学会が開発した『生成を原理とする21世紀音楽カリキュラム』に依拠して明らかにする。

### 1. 表現における生成の原理

先に引用したように、芸術は「言語（language）や科学による概念や論理的形式では捉えられない、人間の感情経験（内的経験）を音や色彩、身体等の芸術媒介を通じ、誰もが知覚できるように表現したもの」<sup>52</sup>である。その「人間の感情経験」とは、「自然の質の世界に動かされたわれわれの心のイメージや感情などの内的経験としての意味を直感という感性的能力で捉え」<sup>53</sup>たものである。つまり芸術表現の経験とは、「イメージや感情などの内的経験の意味を音楽や美術などの素材によって組織化し表現する」<sup>54</sup>ものであり、その過程において「内部世界（内的経験）は意味が具体化されその内的経験が再構成される、すなわち経験が生成される」<sup>55</sup>ものである。その時、表現者の内部世界の変化（内的生成）と、素材によって外部世界に組織化し表現されたもの（外的生成）によって表現が成立する。

先の音楽の認識と音楽的思考に即して整理すると、表現する者が表現を行う際に、認識と思考によってイメージや感情などの内的経験の意味を音楽の素材によって組織化することが、表現における内的生成の意味であり、それによって再構成されたイメージや感情などの内的経験が再び内的に生成される。一方、認識と思考によってイメージや感情などの内的経験の意味を音楽の素材によって組織化し、それを外に生成することが表現における外的生成の意味であり、結果として作りあげられる音楽作品や演奏が外的に生成されるものとなる。

### 2. 鑑賞における生成の原理

一方、鑑賞においては「作品にみられる音楽の諸要素を知覚し、それらの組織化から生み出される質をイメージや感情を伴って感受したことを、身体や批評文によって外部世界に生成することで、知覚・感受・イメージ・感情といった内部世界を生成する」<sup>56</sup>。すなわち、表現された音楽に対し、音楽の認識と思考によって音楽の形式的側面を知覚し、内容的側面を感受し、文化的側面を理解し、さらにそれを外部に表すことによって鑑賞者の内部世界（内的経験）が再構成される。つまりまず、鑑賞による内的生成は、認識と思考

による形式的側面の知覚、内容的側面の感受、文化的側面の理解に加え、それを外的に表す行為によって鑑賞者のイメージや感情が再構成されることであり、その結果もまた再び内的に生成される。

一方、鑑賞による外的生成は、内的に生成されたものを外部に主張するために身体や批評文によって表すことである。そこで表されるものが外的に生成されたものとなる。

### 3. 批評によって生成されるものと育成される学力

この鑑賞における生成の原理と、先に整理した音楽鑑賞の学習における批評の意義とを照合させると、批評によって生成されるものが明らかになる。すなわち、批評という学習活動によって鑑賞者（すなわち学習者）の内に生成されるものは、「音楽の形式的側面の知覚と内容的側面の感受、及び文化的側面の理解という音楽の認識によって発生したイメージや感情の変化、及び批評という一連の音楽的思考によって再構成される鑑賞者自身のイメージや感情」となる。

一方、批評によって鑑賞者（すなわち学習者）の外に生成されるものは、「音楽の形式的側面の知覚と内容的側面の感受、及び文化的側面の理解という音楽の認識によって築かれた規準により価値を判断し、記述によってその結果を主張したもの」となる。その生成されたものは、音楽作品やその作品の創造者（作曲家や演奏家）、他の鑑賞者（学習者）など社会や文化に貢献する。

そしてこれらを学習者の内と外に生成することを通して育成される学力は、まず第1は音楽の形式的側面を知覚し、音楽の内容的側面を感受し、音楽の文化的側面を理解する能力である。これが、音楽を認識する能力となる。第2は、音楽（楽曲）の特徴を知覚し、感受し、理解する能力である。第1と異なる点は、前者が音楽の諸要素といった楽曲を構成する仕組み（部分）を対象とするものであり、後者は、楽曲の全体における特徴を対象とするものである。そして第3は、音楽の価値を判断し、その結果を記述言語で主張する能力である。

## 第6節 音楽の認識、音楽的思考、批評によって育成される学力についてのまとめ

以上、第3節、第4節、第5節をまとめると、以下のようになる。

- ① 音楽の認識とは、音楽の形式的側面の知覚、音楽の内容的側面の感受、音楽の文化的側面の理解である。
- ② 音楽的思考とは、「音や音楽に働きかけるとき、頭の中で連続的に進行している意識の流れ（イメージの形成、音の選択等）」である。特に鑑賞における音楽的思考とは、音楽の認識とそれに基づいて音楽の価値を判断するための一連の思考である。
- ③ 音楽鑑賞学習における批評によって育成される学力は、次の3つである。
  - 1) 音楽の形式的側面を知覚し、音楽の内容的側面を感受し、音楽の文化的側面を理解する能力（＝音楽を認識する能力）。
  - 2) 音楽（楽曲）の特徴を知覚し、感受し、理解する能力。
  - 3) 音楽の価値を判断し、その結果を記述言語で主張する能力。

## 第7節 音楽鑑賞学習における批評の構造

これより、本章のまとめとして、音楽鑑賞学習における批評の構造を構築する。まず、第1章で定義された音楽批評の一般的定義を再掲する。

### 音楽批評

豊かな経験によって得られた直感や感受性や知識によって音楽（作品や演奏）を知覚し、それを規準にして、音楽の形式と内容からなる「作品そのものの価値」と「作曲家や演奏家のイメージーションや感情」を判断し、それを言語で明確に主張することである。直感や感受性や知識はやはり過去の経験によって得られるものであるが、とりわけ、音楽美学や音楽心理学、音楽理論などを通して音楽について思索した経験が正当な批評のための拠り所となる。そしてその主張によって、作曲家や演奏家、また他の鑑賞者や読者、あるいは社会に対して新たな手がかりや指針など有益な知見を提供することを目的とするものである。

次に、本章第1節で明らかにした、デューイの芸術論から得られた、新たな教育における批評の意義を再掲する。

- ① 批評は、「価値の探求のための考察や検討」に意義がある。
- ② 価値を探求するためには判断の規準が必要であり、その規準は、芸術作品を知覚することである。
- ③ 価値の探求は、構成する要素といった細部を認識したり識別したりするのみならず、「統一的観点」をもってそれらを総合し作品の全体を創造的に洞察していく方法を取る。
- ④ 教育における批評の意義は、「芸術に関する認識の再教育」という点にある。

さらに、本章第2節で明らかにした、美術鑑賞教育からの批評の示唆を再掲する。

- ① 批評の段階は原理的に、「作品の構成要素を客観的に捉えること」→「客観的に捉えた作品の構成要素と自分のイメージを関係づけること」→「客観的に捉えた作品の構成要素と自分のイメージを関係づけ、作品に意味を与えること」→「作品が芸術的に価値があるかどうかを根拠をもって判断すること」となる。
- ② しかし、教育実践においてその過程は必ずしも一方的に進行するものではなく、それぞれの段階において、価値を判断し記述することも意義がある。また、学習者が初めて作品を見る時、「作品の構成要素を客観的に捉えること」の他に、主観的な思考を巡らしていることは避けられない事実である。ゆえに、実際の鑑賞の授業実践では、①の4段階は行き来する。

続いて、本章第3節～第5節で明らかにした、音楽の認識、音楽的思考、音楽鑑賞の学習における批評によって育成される学力を再掲する。

- ① 音楽の認識とは、音楽の形式的側面の知覚、音楽の内容的側面の感受、音楽の文化的側面の理解である。
- ② 音楽的思考とは、「音や音楽に働きかけるとき、頭の中で連続的に進行している意識の流れ（イメージの形成、音の選択等）」である。特に鑑賞における音楽的思考とは、音楽の認識とそれに基づいて音楽の価値を判断するための一連の思考である。
- ③ 音楽鑑賞学習における批評によって育成される学力は、次の3つである。
  - 1) 音楽の形式的側面を知覚し、音楽の内容的側面を感受し、音楽の文化的側面を理解する能力（＝音楽を認識する能力）。
  - 2) 音楽（楽曲）の特徴を知覚し、感受し、理解する能力。
  - 3) 音楽の価値を判断し、その結果を記述言語で主張する能力。

以上より、まず学校教育での音楽鑑賞学習における批評の意義と過程は次のように規定される。

### 音楽鑑賞学習における批評の意義と過程

- ① 感性による直感や感受性や知識によって、音楽の形式的側面を知覚し、内容的側面を感受し、文化的側面を理解する。すなわち、音楽を認識する。＝「認識」
- ② 音楽を認識することによって、学習者の内にイメージや感情の変化といった内的経験が為される。＝「内部世界の生成」
- ③ 認識した結果や、自己の内に生成されたイメージや感情の変化を規準に、音楽の価値や意味を思考によって探求する。このとき、音楽の部分のみの認識にたよった分析的思考のみならず、それらを総合して音楽全体を創造的に洞察することが必要となる。音楽の価値や意味とは「作品そのものの価値」や、「芸術作品を創造する時の人間のイメージーションや感情」である。＝「価値や意味の探求」
- ④ 探求を通して、音楽の価値や意味を判断する。判断されたその音楽の価値や意味は、鑑賞者自身の「自分にとってのその音楽の意味や価値」となる。すなわち、「自分が探求した『作品そのものの価値』」であり、「自分が探求した『芸術作品を創造する時の人間のイメージーションや感情』」となる。これらは当然、音楽の認識が前提になっていることが条件になる。＝「判断」
- ⑤ 判断の結果を、根拠を携えて記述言語で主張する。根拠は認識の結果やそれによる内的に生成されたものになる。これが外的に生成されるものとなる。＝「主張」

ここまでの音楽鑑賞学習における批評の原理的過程となる。加えて、以下の2点が教育的意義として加わる。

- ⑥ 以上の過程は学習においては、行き来させ、過程で判断の結果を主張させることも重要である。
- ⑦ この過程によって、鑑賞者自身の認識が再構成される。そこに批評の教育的な意義がある。

これを次の図2によって示す。図中の実線矢印は批評の原理的な進展を表す。点線双方向矢印は教育実践において想定される学習の過程を表し、二重矢印は、批評の教育的意義として、批評によって鑑賞者自身の認識が再構成される意味を表す。

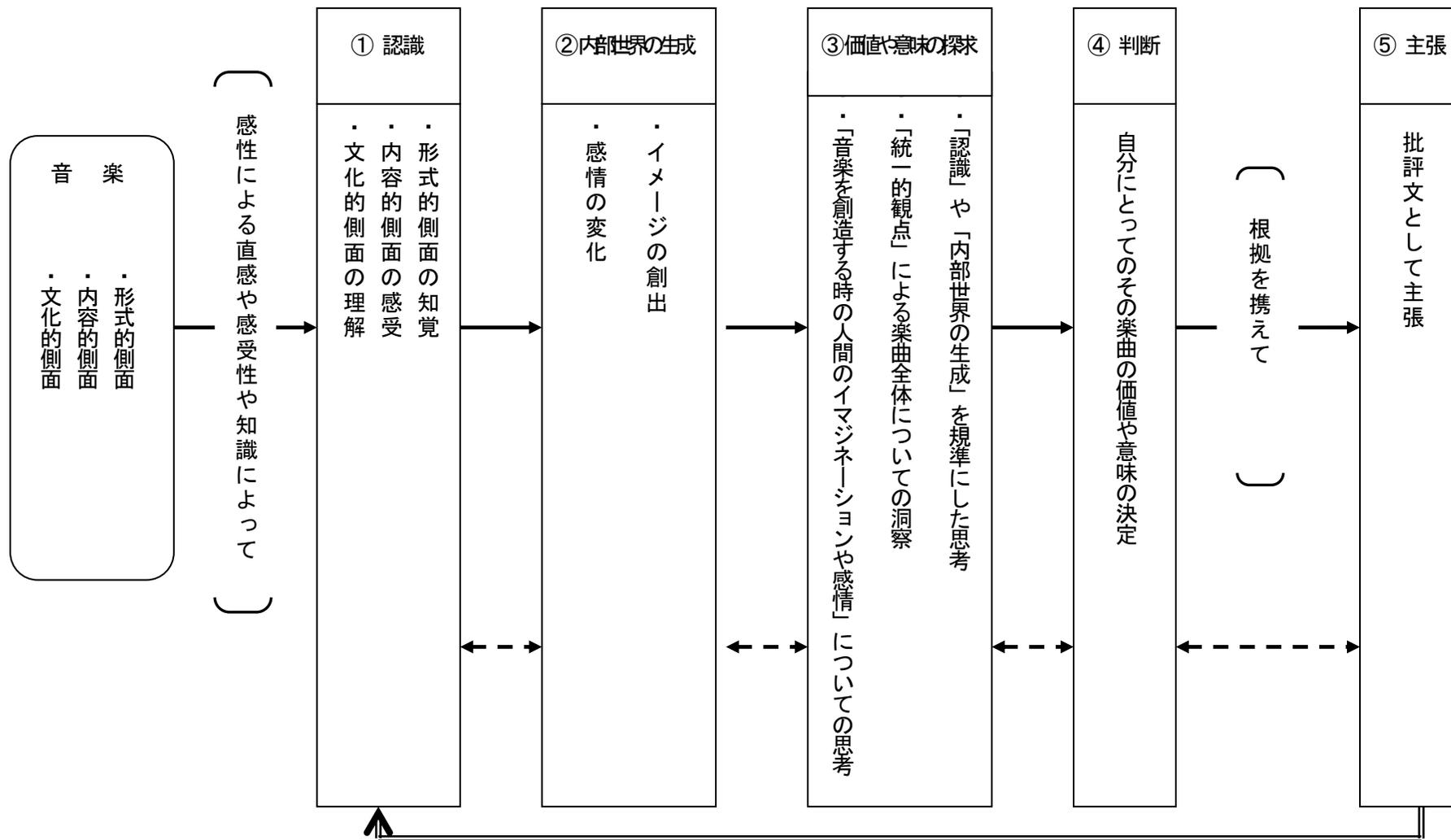


図2 音楽学習鑑賞学習における批評の構造

## 第2章の註

- <sup>1</sup> 例えば、米国ではここで取り上げるフェルドマンの研究や、米国の美術教育において鑑賞教育と批評の隆盛を萌芽させた DBAE (Discipline-Based Art Education)、オズボーン (H. Osborne) (1970), *The Art of Appreciation*, Oxford University Press., アイスナー (E. W. Eisner) (1972), *Educating Artistic Vision*, Macmillan Publishing Company, Inc., New York、またアメリカ・アレナス (Amelia Arenas) によるギャラリー・トークの実践などがある。また日本では、新井義文 (1997) 「美術批評の観点による鑑賞指導の方法1ーミケランジェロ作-ダビデの授業例ー」(『北海道教育大学釧路校研究紀要釧路論集』第29号, pp. 99-114)、佐藤史子 (2004) 「鑑賞教育プログラムの開発と実践ー美術批評の方法論の研究ー」(『愛媛大学教育実践総合センター紀要』No. 22 など数多くの研究がある。さらにアメリカ・アレナスや、上野行一監修 (2001) 『まなざしの共有』(淡交社) などによりギャラリー・トークの実践も活発化しており、そこには批評に関わる場面が多くある。また、2008年には美術科教育学会が「リサーチ・フォーラム2000ー第2回美術科教育学会課題研究会ーく美術批評と鑑賞の問題ー「批評」の意味と鑑賞教育の実践ー」を実施している。
- <sup>2</sup> 西園芳信 (2008) 「J. デューイの芸術論にみる『批評』(criticism)の概念についての考察」(『日本デューイ学会紀要』, 第49号, pp. 1-9。西園は其中で「我が国において、デューイの芸術論にみる『批評』の概念についての先行研究は、管見する中では見あたらない」と述べている (p. 1)。
- <sup>3</sup> J. Dewey (1934) *Art as Experience*, Capricorn Books (邦訳 鈴木康司 (1969) 『芸術論ー経験としての芸術』, 春秋社, pp. 329-360。なお、同書の他の翻訳では、「批評と認識」が「批評と知覚」と訳されている (河村望訳 (2003) 『経験としての芸術』, J. デューイー=G. H. ミード著作集, 12, 人間の科学社)。
- <sup>4</sup> 前掲書, 西園 (2008), p. 3
- <sup>5</sup> 前掲書, J. デューイ・鈴木訳 (1969), p. 329
- <sup>6</sup> デューイは、芸術批評の対象は価値である、とは直接的には述べていないが、「批評家は実際そこにある特質や要素を把握して、これをはっきり表示し」(前掲書, J. デューイ・鈴木訳 (1969), p. 347) との記述から判断がつく。また西園 (2008) も、デューイの批評の概念を成立させる条件として「作品の分析と総合によって作品の特質と要素を把握し、それを評価すること、つまり、値打ちを見定めること」と解釈している (前掲書、西園 (2008), p. 3)。
- <sup>7</sup> 前掲書, J. デューイ・鈴木訳 (1969), p. 347
- <sup>8</sup> 前掲書, J. デューイ・鈴木訳 (1969), p. 342
- <sup>9</sup> 前掲書, 西園 (2008), p. 4
- <sup>10</sup> 前掲書, J. デューイ・鈴木訳 (1969), p. 342
- <sup>11</sup> 前掲書, 西園 (2008), p. 3
- <sup>12</sup> 規準についてのデューイの主張の背景には「裁断批評」と「印象主義的批評」の両方に対する強い批判がある。「裁断批評」は「裁判官的批評」とも訳されているが、裁判官の判決のようにあらゆる判例に当てはまるような一般的規則は芸術批評においては存在し得ないと言うこと、「裁断批評」を行ってきた批評家たちが打ち立てた「権威」の愚かさ、そして「特殊な技巧と美的な形態との混同」という誤謬を含んでいたこと、の3点によりそれを批判した。一方、「裁断批評」の反動から起こった「印象主義的批評」についても、客観の制御を受けない混沌とした主観性に走ったものであり、「芸術が呼び起こす感情や心像などの感応の叙述」が判断から置き換わってしまうことを強く否定する (J. デューイ・鈴木訳 (1969), p. 336)。つまり、デューイは、批評を導く判断は、批評する主体の存在なく過去の権威や偏狭した規準によるのではなく、また逆に主体の印象や根拠のない主観による規準によってもできないとした。これらのことは第3節で取り上げたこととも一致する。
- <sup>13</sup> 知覚については後に詳述する。
- <sup>14</sup> 前掲書, 竹内 (1973), p. 143
- <sup>15</sup> 前掲書, J. デューイ・鈴木訳 (1969), p. 345
- <sup>16</sup> 以上、引用はすべて前掲書, J. デューイ・鈴木訳 (1969), p. 347 より。
- <sup>17</sup> 西園 (2008) は、「鑑賞は、価値を問題にし、そして価値を範疇づけることまでするのに対し、批評は、芸術作品の特質がどこにあるかを探し、評価し」(p. 6) とあるが、そのように鑑賞と批評の位置付けを規定しているデューイの見解は見あたらなかった。
- <sup>18</sup> 前掲書, J. デューイ・鈴木訳 (1969), p. 341
- <sup>19</sup> 前掲書, J. デューイ・鈴木訳 (1969), p. 359

- 20 前掲書, 西園(2008), p. 6
- 21 前掲書, 西園(2008), p. 8
- 22 石川千佳子 (1989)「美術批評の方法論—*Becoming Human Through Art*にみる批評の方法論とその実践について—」『宮崎大学教育学部紀要 芸術・保健体育・家政・技術』第66号, p. 1。石川はそこで「芸術史においては制作(ポイエーシス)が第一義的であり、美術的享受の問題はどちらかといえば二義的に位置づけられてきた」と述べる。
- 23 前掲書, 石川(1989), p. 1
- 24 和田学(1982)「フェルドマン(Edmund Feldman)の美術批評教育に関する研究」『美術教育学』、28号, 美術科教育学会編, pp. 416-417
- 25 Edmund Burke Feldman (1970), “*Becoming Human Through Art, Aesthetic Experience in the School*” Prentice-Hall, Inc., pp. 348-383
- 26 前掲書, 和田(1982), pp. 413-428によれば、フェルドマンのこの4段階は、E. Feldman(1967), *Art as Image and Idea* (Englewood Cliffs, NJ: Prentice Hall, Inc.)において初めて原型が示され、その後、1996年のE. Feldman(1996), *Philosophy of Art Education* (Upper Saddle River, NJ: Prentice Hall)まで、13の著書や編著のすべてにその原型がされているという。“*Becoming Human Through Art: Aesthetic Experience in the Schools*”には、この4段階に基づく具体的な実践例が掲げられている。
- 27 前掲書, E. B. Feldman(1970), p. 354の“What You Can Do”より。
- 28 前掲書, E. B. Feldman(1970), pp. 361-362の“What You Can Do”より。
- 29 前掲書, 石川(1989), p. 5
- 30 前掲書, 石川(1989), p. 5
- 31 前掲書, E. B. Feldman(1970), p. 362
- 32 前掲書, E. B. Feldman(1970), pp. 366-367の“What You Can Do”より。
- 33 前掲書, E. B. Feldman(1970), p. 379の“What You Can Do”より。
- 34 George Geahigan, “From Procedures, To Principals, and Beyond: Implementing Critical Inquiry in the Classroom”, *Studies in Art Education*, Vol. 39, No. 4 (Winter 1998), pp. 204-207
- 35 和田は、「フェルドマンは最終段階において、この2つの言葉を曖昧のまま用いている」と指摘する。和田(1982)では、この最終段階に限り「判断/評価」と表記している(前掲書, 和田(1982), p. 414)。
- 36 前掲書, 和田(1982), p. 420
- 37 前掲書, 和田(1982), p. 419
- 38 前掲書, 佐藤(2004), p. 412
- 39 前掲書, 佐藤(2004), p. 41
- 40 西園芳信(1995)「思考力育成における『芸術の知』の重要性」『初等教育資料』, No. 638, 東洋館出版社, pp. 72-75。
- 41 西園芳信(2005)『小学校音楽科カリキュラム構成に関する教育実践学的研究—「芸術の知」の能力の育成を目的として』, 風間書房
- 42 前掲書, 西園(2005), p. 50
- 43 前掲書, 西園(2005), p. 55。「芸術の知」は、「科学の知」に対する用語として西園(1995)「思考力育成における『芸術の知』の重要性」『初等教育資料』No. 637, 東洋館出版社、で初めて用いられた。
- 44 前掲書, 西園(2005), p. 56
- 45 森宏一編集(2000)『普及版 哲学辞典』, 青木出版, p. 115
- 46 前掲書, 西園(2005), p. 78
- 47 前掲書, 西園(2005), p. 81
- 48 しかし、前掲書, 西園(2005)のp. 78の図6「音楽の認識と学習」において、「認識」に知覚、感受、理解が含まれており、音楽の認識と音楽学習における音楽の認識との境界線に曖昧さが認められる。
- 49 「音楽的思考」については日本学校音楽教育実践学会におけるラウンドテーブルで1997年から2000年にかけて議論された。小島の定義はそこで提出された(日本学校音楽教育実践学会(1999)『学校音楽教育研究』vol. 3, p. 189)。
- 50 同上。
- 51 日本学校音楽教育実践学会(2000)『学校音楽教育研究』vol. 4, p. 146。及び、岡本信一(1998)「音楽科教育における創造的思考に関する研究—音楽の解釈・表現を促すメタ認知の効果」『教育方法学研究』, 日本教育方法学会紀要, 第24巻, pp. 105-113。
- 52 前掲書, 西園(2005), p. 50
- 53 前掲書, 日本学校音楽教育実践学会(2006), p. 12

- 
- <sup>54</sup> 前掲書, 日本学校音楽教育実践学会 (2006), p. 12  
<sup>55</sup> 前掲書, 日本学校音楽教育実践学会 (2006), p. 12  
<sup>56</sup> 前掲書, 日本学校音楽教育実践学会 (2006), p. 14

(宮下 俊也)

## 第3章 学習指導要領における音楽鑑賞学習

### 第1節 学習指導要領（平成20年告示）改訂の特徴

#### 1. 法律の改正を踏まえた学習指導要領の改訂

平成20年に告示された中学校学習指導要領第2章第5節音楽（以下、「学習指導要領」という。）は、教育基本法の全面的な改正（平成18年12月）や学校教育法の一部改正（平成19年6月）を踏まえて改訂されたという特徴がある。

例えば、改正教育基本法で新設された教育の目標<sup>1</sup>のうち、知・徳・体の調和（第1号）、日本の伝統や文化（第5号）に関する目標を実現することは、音楽教育の存在意義に直接結び付いている。同時に、目標に掲げられた個人の自立（第2号）、他者や社会との関係（第3号）に関しても、子どもが自己理解を深めて、自分と他者や社会との関係を築いていく力を育むために音楽教育が担うことのできる役割は大きい。

すなわち個人の自立の観点では、音楽から喚起されたイメージや感情を子ども自身が意識し、自分との対話を促すような音楽の実践が有効である。また、他者との関係を築く観点では、音によるコミュニケーションである音楽の特性を生かし、自分と他者とのかかわりを重視した音楽活動を展開することの意義は大きい。さらに、他者や社会との関係を築く観点では、我が国及び諸外国の様々な音楽について、それらの共通性や固有性を理解する視点で教材化を図り、郷土や自国の文化のよさに気付き親しみをもつとともに、異なる文化にも敬意を払い、他者と共存していくことのできる態度を養うような実践も重要である。

学校教育法の一部改正では、義務教育の目標が新設されるとともに、「生涯にわたり学習する基盤が培われるよう、①基礎的な知識及び技能を習得させるとともに、②これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力をはぐくみ、③主体的に学習に取り組む態度を養うことに、特に意を用いなければならない」<sup>2</sup>と示され（①②③は筆者による）、学校で育成する学力とは何かが法律上規定された。

学習指導要領の指導内容は、音楽教育の特性に即して前述の①②③のそれぞれ、及び、それらを有機的にかかわらせた学習を重視して示されている。この趣旨を十分に生かした指導を実施することが、条文の冒頭にある「生涯にわたり学習する基盤が培われるよう」にするために、生涯にわたり音楽にかかわっていく喜びや意味を子どもたちが実感できる音楽の学習に結実していく。

#### 2. 〈生きる力〉と開かれた個

平成10年告示の学習指導要領において、これからの学校教育の在り方として〈生きる力〉<sup>3</sup>の育成を基本とすることが示された。この〈生きる力〉の概念は次の3つによって構成される。

- ・基礎・基本を確実に身に付け、いかに社会が変化しようと、自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質や能力
- ・自らを律しつつ、他人とともに協調し、他人を思いやる心や感動する心などの豊かな人間性
- ・たくましく生きるための健康や体力 など

平成20年1月の中央教育審議会答申『幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について』（以下、「答申」という。）では、「〈生きる力〉は、

自己の人格を磨き、豊かな人生を送る上でも不可欠である」<sup>4</sup>こと、さらに「社会の構造的な変化の中で、〈生きる力〉をはぐくむという理念はますます重要になっている」<sup>4</sup>ことが示され、引き続き〈生きる力〉を育成する必要性が強調された。

前述したとおり〈生きる力〉は、「自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に主的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質や能力」だけではなく「自らを律しつつ、他人とともに協調し、他人を思いやる心や感動する心などの豊かな人間性」なども含めた考え方である。後者の「自らを律し・・・他人とともに強調し・・・感動する心などの豊かな人間性」は、「1. 法律の改正を踏まえた学習指導要領の改訂」の中で、教育基本法の目標に掲げられた個人の自立（第2号）、他者や社会との関係（第3号）について前述したように、音楽教育が担う役割の1つとして「子どもが自己理解を深めて、自分と他者や社会との関係を築いていく力を育む」ことと軌を一にしている。

さらに答申では、「知識基盤社会化やグローバル化は、アイデアなどの知識そのものや人材をめぐる国際競争を加速させるとともに、異なる文化・文明との共存や国際協力の必要性を増大させている」<sup>4</sup>と述べている。そして、こうした認識の下、「このような社会では、自己との対話を重ねつつ、他者や社会、自然や環境と共に生きる、積極的な『開かれた個』であることが求められる」<sup>5</sup>と述べている。この点においても、子どもが自己理解を深めつつ他者や社会と積極的にかかわっていくことのできる人間の育成が極めて大切であることを意味している。

また「グローバル化の中で、自分とは異なる文化や歴史に立脚する人々と共存していくためには、自らの国や地域の伝統や文化についての理解を深め、尊重する態度を身に付けることが重要になっている」<sup>5</sup>と述べている。ここでは音楽教育において子どもが我が国の伝統音楽への理解を基盤として、我が国や諸外国の様々な音楽文化の価値などを捉えていくような学習の充実を図ることの重要性が示唆されている。

以上に述べたような今後の教育に求められる方向性は、本研究「音楽鑑賞教育における批評能力育成プログラムの開発」において、我が国の伝統音楽をはじめとする多様な音楽を学習の対象とし、子ども自身がその音楽から感じ取ったことを基に、価値などを思考・判断し、言語等で表現する学習を組み入れるとともに、子どもが自分と他者や社会とのかわりを十分に意識できるような仕組みをもたせること、すなわち「見つける・考える・生み出す・広げる」ことを重視した音楽鑑賞学習を進めていく必要があるという考え方の基底となっている。

### 3. 中教審答申における鑑賞の指導の改善

前述の答申において、小学校、中学校、高等学校を貫く音楽教育の「改善の基本方針」として次の1～4の4点が示された。

(1～4及び下線は筆者による。1～4について答申の原文は○印で示されている)

#### 【音楽、芸術（音楽） 改善の基本方針】

- 1 音楽科、芸術科（音楽）については、その課題を踏まえ、音楽のよさや楽しさを感じるとともに、思いや意図をもって表現したり味わって聴いたりする力を育成すること、音楽と生活とのかかわりに関心をもって、生涯にわたり音楽文化に親しむ態度をはぐくむことなどを重視する。
- 2 このため、子どもの発達の段階に応じて、各学校段階の内容の連続性に配慮し、歌唱、器楽、創作、鑑賞ごとに指導内容を示すとともに、小・中学校においては、音楽に関する用語や記号を音楽活動と関連付けながら理解することなど表現と鑑賞の活動の支えとなる指導内容を〔共通事項〕として示し、

音や音楽を知覚し、そのよさや特質を感じ取り、思考・判断する力の育成を一層重視する。

- 3 創作活動は、音楽をつくる楽しさを体験させる観点から、小学校では「音楽づくり」、中・高等学校では「創作」として示すようにする。また、鑑賞活動は、音楽の面白さやよさ、美しさを感じ取ることができるようにするとともに、根拠をもって自分なりに批評することのできるような力の育成を図るようにする。
- 4 国際社会に生きる日本人としての自覚の育成が求められる中、我が国や郷土の伝統音楽に対する理解を基盤として、我が国の音楽文化に愛着をもつとともに他国の音楽文化を尊重する態度等を養う観点から、学校や学年の段階に応じ、我が国や郷土の伝統音楽の指導が一層充実して行われるようにする。

資料の下線部に着目すると、方針の1点目では「味わって…」という言葉が、鑑賞の指導において今後重視すべき方向を示している。「味わう」とは対象のもつよさや美しさなどを自ら確認する行為と言える<sup>6</sup>。味わって聴くためには、自ら音楽にかかわり、知覚・感受し、理解を深め、その価値などを判断していく力が必要となる。

方針の2点目はそのための手立てである。「活動の支えとなる指導内容を〔共通事項〕として示し、音や音楽を知覚し、そのよさや特質を感じ取り、思考・判断する力の育成を一層重視する」という方針を受けて、平成20年告示の学習指導要領では、「A表現」、「B鑑賞」に加えて〔共通事項〕が新設された。

方針の3点目は、より具体的に「・・面白さやよさ、美しさを感じ取ることができるようにするとともに、根拠をもって自分なりに批評することのできるような力の育成を図る」ことが示されている。美しさを感じ取る、根拠をもって批評するためには、感じ取ったことを基に自ら解釈したり価値を考えたりして、思考・判断し、自分なりに評価したことを言葉で表す能動的な活動を重視することが求められる。

方針の4点目では「我が国や郷土の伝統音楽の指導が一層充実して行われるようにする」ことが示されている。そのためには、我が国や諸外国の様々な音楽の中から適切な教材を選択して扱い、それらの共通性や固有性などをから音楽の多様性を理解できるような学習が必要である。そのためにも方針の1点目から3点目の趣旨を生かした学習指導を行うことが重要となる。その際、音楽は、その音楽が生まれ、はぐくまれてきた国、地域、風土、人々の生活、文化や伝統などの影響を受けているといった音楽の背景にも思いを馳せることができるようにすることが、人間と音楽との結び付きを考える上で大切である。

以上に述べた小学校、中学校、高等学校を貫く音楽教育の「改善の基本方針」を踏まえ、答申においては、中学校音楽の改善の具体的事項が次のように示された。

【中学校音楽の改善の具体的事項】

- 多様な音や音楽を感じ取り、創意工夫して表現したり味わって鑑賞したりする力の育成や、音楽文化についての理解を深め、豊かな情操を養うことを重視し、次のような改善を図る。
- (ア) 表現領域（「歌唱」、「器楽」、「創作」の三分野）、鑑賞領域及び〔共通事項〕で内容を構成する。〔共通事項〕については、例えば、音楽を形づくっている様々な要素を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じ受けること、音楽に関する用語や記号などを音楽活動と関連付けながら理解することなどを具体的に示す。
- (イ) 「創作」については、生徒が、音のつながり方を試しながら短い旋律をつくったり、音素材を選び

まとまりを工夫して音楽をつくったりするなど、音を音楽へと構成していく体験を重視するようにする。

(ウ) 鑑賞領域においては、音楽に関する言葉などを用いながら、音楽に対して、生徒が、根拠をもって自分なりに批評することのできるような力を育成するようにする。

(エ) 我が国の伝統文化に関する学習を充実する観点から、和楽器については、簡単な曲の表現を通して、伝統音楽のよさを一層味わうことができるようにするとともに、我が国の伝統的な歌唱の指導も重視するようにする。

また、我が国の音楽文化に親しみ一層の愛着をもつ観点から、我が国の自然や四季、文化、日本語のもつ美しさなどを味わうことのできる歌曲を更に取り上げるようにする。

(オ) 合唱や合奏など全員で一つの音楽をつくっていく体験を通して、表現したいイメージを伝え合ったり、協同する喜びを感じたりする指導を重視する。学習全体を通じて、音楽文化の多様性を理解する力の育成を図るとともに、音環境への関心を高めたり、音や音楽が生活に果たす役割を考えたりするなど、音楽と生活や社会とのかかわりを実感できるように指導するようにする。

さらに、答申では、「言語が、知的活動（論理や思考）だけではなく、コミュニケーションや感性・情緒の基盤でもある」<sup>7</sup>とし、全ての教科等の学習において言語活動の充実を図ることを提言している。例えば、豊かな心の育成に関する言語能力の重要性について「国語は、コミュニケーションや感性・情緒の基盤である。自分や他者の感情や思いを表現したり、受け止めたりする語彙や表現力が乏しいことが、他者とのコミュニケーションがとれなかったり、他者との関係において容易にいわれるキレてしまう一因になっており、これらについての指導の充実が必要である」<sup>8</sup>と述べている。音楽から喚起されたイメージや感情を他者と伝え合うなど、音楽の学習に即した言語活動を適切に取り入れることは、「自分や他者の感情や思いを表現したり、受け止めたりする語彙や表現力」を豊かにしていくこととも深くかかわってくる。

また、答申では、思考力・判断力・表現力等の育成に資する学習活動として、次の①～⑥の内容が例示されている<sup>9</sup>。

- ①体験から感じ取ったことを表現する
- ②事実を性格に理解し伝達する
- ③概念・法則・意図などを解釈し、説明したり活用したりする
- ④情報を分析・評価し、論述する
- ⑤課題について、構想を立て実践し、評価・改善する
- ⑥互いの考えを伝え合い、自らの考えや集団の考えを発展させる

①「体験から感じ取ったことを表現する」ことは、②～⑥の内容と密接な関係にある。例えば、①を音楽鑑賞学習に即して「音楽を鑑賞する体験から感じ取ったことを言葉で表現する」学習活動と想定すると、④「情報を分析・評価し、論述する」ことについては次のように言える。すなわち、④の「情報」を広義に捉え、音楽も情報の1つと考えると、音楽という情報の内容は、様々な音楽を形づくっている要素から成り、その音楽固有の曲想を醸し出しているため、④は「学習の対象となる音楽について、その音楽を形づくっている要素や要素同士の関連から分析し、よさや美しさなどを評価して、その内容について論述する」ことと考えることができる。

また、⑥の「互いの考えを伝え合い、自らの考えや集団の考えを発展させる」ことについては、「音楽について、自分が感じ取ったことや解釈したことなどを言葉で表して友達

に伝えたり、友達が感じ取ったことや解釈したことなどを聞いたりして、他者とのかわりの中から自分の価値意識を確認したり深めたりして、集団全体の学習の質を高め、発展させる」ことと考えることができる。

以上のような考え方から、音楽鑑賞学習において批評能力を育成する実践の成果は、子どもが生涯にわたり音楽にかかわっていく基礎的な能力を身に付けることや音楽文化に対する理解を深めることなどの音楽に関する力を高めることに留まらず、本章の冒頭で述べた〈生きる力〉の育成にも大きな貢献をする。

## 第2節 鑑賞領域に関する指導内容

### 1. 音楽の学習指導要領改訂の要点

学習指導要領は、これまでに各学校等が積み重ねてきた実践の成果を生かしつつ、第1節で述べた教育基本法や学校教育法の改正などで規定された教育理念を踏まえ、答申における「改善の基本方針」や「改善の具体的事項」などを受けて改訂された。特に、指導のねらいや手立てを明確にし、生徒が感性を高め、思考・判断し、表現する一連の過程を重視した学習指導の実施を求めていることは、改訂の最も重要な点である。

このような学習指導を実施するため、ここでは学習指導要領改訂の要点として①指導内容の全体構成、②創作の指導、③鑑賞の指導、④我が国や郷土の伝統音楽の指導、⑤音楽の学習に即した言語活動の5点を取り上げて、それぞれの内容を実践課題の視点から簡単に整理する。

まず①指導内容の全体構成については、「A表現」領域において、歌唱、器楽、創作ごとに指導事項が示された。さらに、表現（歌唱、器楽、創作）及び鑑賞に関する能力を育成する上で共通に必要な〔共通事項〕が新設された。こうした内容構成の見直しによって、すべての生徒が学習する内容を明確にした指導計画を作成して、学習指導を実施することが実践課題と言える。

次に②創作の指導については、指導内容が「旋律創作」と「音素材の特徴、反復、変化、対照などの構成を生かした創作」に絞り込んで示されるとともに、「内容の取扱いと指導上の配慮事項」に、「即興的に音を出しながら音のつながり方を試すなど、音を音楽へと構成していく体験を重視すること」が示された。

また、本研究の対象である③鑑賞の指導については、学年の目標に「音楽のよさや美しさを味わい、幅広く主体的に鑑賞する」ことなどが規定され、言葉で説明する・根拠をもって批評するなどの活動が取り入れられた。

これらを踏まえ、②創作の指導と③鑑賞の指導のいずれにおいても、音楽がどのように形づくられているのかを捉え、音楽を形づくっている要素の働きによってどのような表情が生み出されているのかを感じ取る力を高めることを大切に、生徒が、音楽をつくる喜びや、主体的・能動的に味わって音楽を聴く喜びを体験できるような学習へと改善することが実践課題と言える。

次に④我が国や郷土の伝統音楽の指導については、中学校3年間のうちに必ず和楽器を取り扱うという従前の規定に加えて、新たに民謡や長唄などの我が国の伝統的な歌唱の表現活動を行うこと、また、鑑賞教材として、我が国や郷土の伝統音楽を含む我が国及び諸外国の様々な音楽のうちから指導のねらい等に適切なものを取り扱うようにすることが示された。これらを踏まえ、我が国や郷土の伝統音楽の学習を充実していくことが実践課題と言える。

次に⑤音楽の学習に即した言語活動については、「③鑑賞の指導」で前述した、言葉で説明する・根拠をもって批評することに加えて、表現と鑑賞の指導全体にわたって「生徒が自己のイメージや思いを伝え合ったり、他者の意図に共感したりできるようにするなどコミュニケーションを図る指導を工夫すること」が「内容の取扱いと指導上の配慮事項」に示された。言語活動そのものが学習の目的とならないよう十分留意しつつ、音楽表現や鑑賞の学習を充実するために、音楽の学習に即した言語活動を適切に取り入れるための指導を工夫することが実践課題と言える。

## 2. 鑑賞に関する目標及び内容

### (1) 鑑賞領域の目標

学習指導要領の学年の目標は、情意面に関すること、音楽表現に関すること、鑑賞に関することの3つの項目から成る。このうち鑑賞に関する目標については、答申における「改善の基本方針」や「改善の具体的事項」などを受けて次のように規定された。

ここでは小学校から中学校までの音楽鑑賞学習の接続性・系統性の観点から〔小学校第1・2学年〕及び〔中学校第1学年〕の学年の目標の(3)について、平成20年告示の学習指導要領と平成10年告示の学習指導要領を対照する。

#### ○平成20年告示

〔小学校第1・2学年〕

「様々な音楽に親しむようにし、基礎的な鑑賞の能力を育て、音楽を味わって聴くようにする。」

〔中学校第1学年〕<sup>10</sup>

「多様な音楽のよさや美しさを味わい、幅広く主体的に鑑賞する能力を育てる。」

#### ○平成10年告示

〔小学校第1・2学年〕

「音楽の楽しさを感じ取って聴き、様々な音楽に親しむようにする。」

〔中学校第1学年〕<sup>11</sup>

「多様な音楽に興味・関心をもち、幅広く鑑賞する能力を育てる。」

上に示したように、小学校では、平成10年告示において「音楽の楽しさを感じ取って聴き、様々な音楽に親しむようにする」ことが目標として示されていたが、平成20年告示においては、「様々な音楽に親しむようにし、基礎的な鑑賞の能力を育て、音楽を味わって聴く」ことが目標として示された。すなわち、様々な音楽に親しむことが最終的なねらいではなく、それを通して、鑑賞の能力を育て、音楽を味わって聴くことが音楽鑑賞学習のねらいであることが明確化された。

中学校では、平成10年告示において「音楽に興味・関心をもち」と示されていたが、平成20年告示において「音楽のよさや美しさを味わい」に、同様に「幅広く鑑賞する」が「幅広く主体的に鑑賞する」にそれぞれ改訂され、小学校における鑑賞の学習の上に立ち、生徒が多様な音楽について主体的・能動的に鑑賞することのできる力を育成することが音楽鑑賞学習のねらいであることが強調された。

さらに、小学校の目標に「味わって聴く」という言葉が、また、中学校の目標に「よさや美しさを味わい」という言葉が入った。前述したように答申の改善の基本事項等で示された、味わって聴くこと、すなわち子ども自らが音楽にかかわり、知覚・感受し、理解を深め、その価値などを判断していく力を育成することが音楽鑑賞学習の目標の中に義務教

育全体を貫いて掲げられたと言える。

## (2) 鑑賞領域の内容

中学校学習指導要領解説音楽編（以下、「解説書」という。）では、鑑賞領域の指導内容を構成する考え方について、解説書では、次のように①～⑤の5つの観点から説明している。

### 【鑑賞領域の指導内容を構成する考え方】

#### ① 音楽の素材としての音

音楽は音から成り、音楽表現は音を媒体とする。したがって、まず音について知ることが必要となる。音楽を鑑賞するときは、音楽の素材として使われている音そのものの質感を感じ取ることが重要である。

声については、我が国や諸外国の様々な言葉の特性がかかわって、それぞれに固有の声質や声域がある。また、曲種によって、固有の発音法、発声法、歌唱法が見られ、演奏者の表現意図もそれらに影響してくる。

言葉の特性は、旋律やリズム、曲の構成などと深くかかわり合って音楽を成り立たせている。例えば、言語のもつ抑揚、アクセント、リズム、音質、語感などが音楽と深く結び付き、それらを生かした音楽が生み出されている。

楽器については、材質、形状、発音原理、奏法などによって音の特徴が異なる。同じ発音原理の楽器でも、地域や国によって音色や奏法などに違いが見られ、それぞれに特徴をもっている。

鑑賞においては、どのような音であるかということ、声については発音法、発声法、歌唱法などから、楽器については材質、形状、発音原理、奏法などからとらえることが大切である。

また、ここで言う音には自然音や環境音も含まれる。風の音、川のせせらぎ、遠くに聞こえる寺の鐘の音などから音楽的な感興を得ることも少なくない。自然音や環境音を聴き、感じ取ったことが、イメージや感情を広げたり深めたりする契機となるのである。なお、楽器によっては、風土や文化・歴史などの中で培われた美意識から、自然を象徴するような独特な音色や奏法をもつものがある。これらのことから、自然音や環境音について音楽とのかかわりにおいてとらえることは、音や音楽への興味・関心を一層養うことにつながっていく。

#### ② 音楽の構造

音楽を鑑賞する上では、対象となる音楽がどのようにできているか、どのような形となって表れているかなどをとらえることが重要となる。

音は、一音だけでも音楽と成り得るが、基本的には、音と音との関係の中で意味をもち音楽となる。そして音楽は、音色、リズム、速度、旋律、テクスチャ、強弱、形式、構成などの要素によって形づくられている。これらの要素は総合的かつ複雑にかかわり合いながら音楽としての全体像を成している。さらに、リズムの構造、テクスチャの構造のように、それぞれの要素をより細かく見る場合もあり、構造は様々なレベルや関係性の中でとらえることが可能である。このように、音楽を形づくっている要素そのものや要素同士のかかわり方及び音楽全体がどのように成り立っているかなど、音や要素の表れ方や関係性、音楽の構成や展開の有様などが、音楽の構造である。

鑑賞の学習では、こうした音楽の構造をとらえることが極めて重要となる。すなわち、学習の対象となる音楽において、要素がどのように働いているのか、要素同士がどのように関連し合っているのか、音楽全体がどのように成り立っているのかなどの学習が求められる。また、用いられる教材のほとんどで、生徒が表現活動で取り組む楽曲の水準を超えた、より複雑で洗練された音楽の構造を経験することになる。例えば、反復、変化、対照などの音楽を構成する原理も、実際の楽曲では壮大で複雑に展開さ

れている有り様を知るようになる。教材として扱う曲種や楽曲及び生徒の学習の状況などに応じて、音や要素の働きから生まれる様相、要素間のかかわりによって生まれる様相、音楽の構成や展開の様相などを学習することによって、音楽に対する理解を一層深めることが重要となる。

### ③ 音楽によって喚起されるイメージや感情

音楽を形づくっている要素や構造の働きは、その音楽固有の表情、雰囲気、気分や味わいを醸し出す。これが曲想であり、一人一人が自己のイメージや感情を伴って、音楽との相互作用の中で感じ取ることになる。したがって、音楽に聴き入っているときには、音楽を形づくっている要素や要素同士の有機的な関連、構造の働きを感じ取ると同時に、それによって自分の内面に生まれる様々なイメージや感情を味わっていることになる。

我が国や諸外国の様々な音楽を鑑賞し、音楽を形づくっている要素や構造の働きから生み出される曲想を感じ取って聴き、その音楽によって喚起されるイメージや感情を意識することが大切である。特に幅広く主体的に鑑賞することによって、自分の中に新しいイメージや感情が生まれることを意識したり、それを確認したりすることが重要となる。例えば、異なる時代や地域の人々によってつくられた音楽を鑑賞し自己のイメージや感情が喚起されることは、多様な音楽に対する解釈や理解を深めることになる。そのことにより、異なる時代や地域の人々の思いと自己の思いとのつながりを意識することができるようになるのである。

### ④ 音楽の鑑賞における批評

音楽の鑑賞は、音楽を聴いてそれを享受するという意味から受動的な行為ととらえられることがある。しかし、音楽科における鑑賞の学習は、音楽によって喚起されたイメージや感情などを、自分なりに言葉で言い表したり書き表したりする主体的・能動的な活動によって成立する。

音楽のよさや美しさなどについて、言葉で表現し他者に伝えることが音楽科における批評である。このように自分の考えなどを表現することは、本来、生徒にとって楽しいものと言える。ただし、それが他者に理解されるためには、客観的な理由を基にして、自分にとってどのような価値があるのかといった評価をすることが重要となる。ここに学習として大切な意味がある。根拠をもって批評することは創造的な行為であり、それは、漠然と感想を述べたり単なる感想文を書いたりすることとは異なる活動である。

このような学習は、音楽文化に対する理解を深めていくとともに、生徒が自らの感性を豊かに働かせて、その音楽のよさや美しさなどを一層深く味わって聴くことにつながっていく。

### ⑤ 音楽の背景となる風土や文化・歴史など

前記①から④の背景となるものが、人間の生活の基盤である風土や文化・歴史、伝統といった環境であり、音楽はそれらの影響を受けて成立し、様々な特徴をもつことになる。また、歌舞伎、能楽、オペラ、バレエなどの総合芸術のように、演劇的要素、舞踊的要素、美術的要素などのかかわりから成立しているものもある。音楽とその背景とのかかわりなどに目を向けることは、音楽をより深く聴き味わうことに結び付いていく。

このような観点から、我が国や郷土の伝統音楽、アジア地域の諸民族の音楽を含む諸外国の様々な音楽など多様な音楽に触れることは、人間の生活と音楽とのかかわりに関心をもって、生涯にわたり音楽文化に親しむ態度を育てることになる。また、様々な音楽文化に触れ、その多様性を感じ取ったり理解したりすることは、音楽に対する価値観や視野の拡大を図ることになる。そして、それぞれの音楽のもつ固有性や多くの音楽に共通する普遍性などを知り、自己の音楽の世界を広げていくことは、自分にとって真に価値ある音楽を見いだす契機となる。

以上に述べた5つの観点による指導内容を具体化するために、次のように事項を示している。アは音

楽を形づくっている要素や構造と曲想とのかかわり、説明や批評、音楽のよさや美しさを味わうこと、イは音楽の特徴と文化・歴史や他の芸術との関連、ウは音楽の多様性を示し、それぞれ鑑賞することとしている。

さらに、上記の内容をより効果的に指導するために、取り扱う教材の範囲や観点を示している。

学習指導要領における鑑賞領域の内容は、「(1) 鑑賞領域の目標」で述べた目標を実現するため、上記の指導内容を構成する考え方に基づいて、次のように示されている。

## 中学校学習指導要領(平成 20 年 3 月告示) 第 5 節音楽 (抜粋)

### 第 2 各学年の目標及び内容

#### [第 1 学年]

#### 2 内容 B 鑑賞

(1) 鑑賞の活動を通して、次の事項を指導する。

ア 音楽を形づくっている要素や構造と曲想とのかかわりを感じ取って聴き、言葉で説明するなどして、音楽のよさや美しさを味わうこと。

イ 音楽の特徴をその背景となる文化・歴史や他の芸術と関連付けて、鑑賞すること。

ウ 我が国や郷土の伝統音楽及びアジア地域の諸民族の音楽の特徴から音楽の多様性を感じ取り、鑑賞すること。

(2) 鑑賞教材は、我が国や郷土の伝統音楽を含む我が国及び諸外国の様々な音楽のうち、指導のねらいに適切なものを取り扱う。

#### [第 2 学年及び第 3 学年]

#### 2 内容 B 鑑賞

(1) 鑑賞の活動を通して、次の事項を指導する。

ア 音楽を形づくっている要素や構造と曲想とのかかわりを理解して聴き、根拠をもって批評するなどして、音楽のよさや美しさを味わうこと。

イ 音楽の特徴をその背景となる文化・歴史や他の芸術と関連付けて理解して、鑑賞すること。

ウ 我が国や郷土の伝統音楽及び諸外国の様々な音楽の特徴から音楽の多様性を理解して、鑑賞すること。

(2) 鑑賞教材は、我が国や郷土の伝統音楽を含む我が国及び諸外国の様々な音楽のうち、指導のねらいに適切なものを取り扱う。

このように鑑賞領域の内容は、ア、イ、ウの 3 つの指導事項と教材選択の観点から成る。このうち事項アは、音楽鑑賞学習の基本となる指導内容と言える。この事項では、音楽の構造と曲想とのかかわりを感じ取る・理解することに基づきながら、生徒が、自分なりに言葉で説明する・批評する活動を学習の中に位置付けて、対象となる音楽について解釈したり価値を考えたりすること、すなわち思考・判断を促し、主体的に音楽のよさや美しさを味わうことに帰結するような指導を行うことが求められている。

この事項アに示された内容を大切にしながら、音楽の特徴と背景となる文化・歴史や他の芸術との関連に着目し、それを意識しながら鑑賞をすること(事項イ)、我が国や郷土の伝統音楽を含む我が国や世界の様々な音楽の共通点・相違点などを考え、音楽の多様性を理解して鑑賞をすること(事項ウ)など、指導のねらいや教材の特性などに応じて学習す

る内容に広がりをもたせていくことになる。

関連して、小学校学習指導要領（平成 20 年告示）においては、「楽曲を聴いて想像したことや感じ取ったことを言葉で表すなどして、楽曲の特徴や演奏のよさに気付くこと」（小学校第 3 学年及び意第 4 学年「B鑑賞」(1)の事項ウ）のように示された。小学校においても中学校と同様に、言葉で表す活動を学習の中に適切に位置付けることによって、思考・判断を促すような学習指導の実施が求められている。この事項ウに示された内容を大切にしながら、とりわけ小学校においては子どもの発達段階などに配慮しつつ、曲想を楽曲全体にわたって感じ取ることに重点を置く（事項ア）、楽曲の構造を理解することに重点を置く（事項イ）などして、指導のねらいや教材の特性などに応じて学習する内容を焦点化したり広がりをもたせたりしていくことになる。

また、高等学校学習指導要領（平成 21 年告示）においては、芸術科（音楽）の「内容の取扱い」に「楽曲や演奏について根拠をもって批評する活動などを取り入れる」ことが示された。さらに、専門教科・科目の一つとして「鑑賞研究」が新設され、「音楽作品や作曲家、演奏などについての鑑賞研究を通して、音楽に対する理解を深め、音楽や音楽文化を尊重する態度を養い、批評する能力を育てる」ことが目標に掲げられている。

このように小学校、中学校、高等学校のいずれの学習指導要領においても、批評をすること、あるいは、言葉で表すなど批評に結び付いていくような内容を適切に取り入れることによって、音楽鑑賞学習の質的な充実を図ることが系統的に示されている。

### （3）〔共通事項〕の内容と指導計画作成上の配慮事項

「1. 音楽の学習指導要領改訂の要点」で前述したように、指導のねらいや手立てを明確にし、生徒が感性を高め、思考・判断し、表現する一連の過程を重視した学習指導を実施するために、学習指導要領の内容が「A表現」、「B鑑賞」、〔共通事項〕で構成されたことは、平成 20 年の改訂の主要点である。とりわけ新設された〔共通事項〕について理解を深めることが、学習指導要領の趣旨を生かした学習指導を実施するための要となる。

解説書では、〔共通事項〕の指導内容を構成する考え方について、解説書では、次のように①～③の 3 つの観点から説明している。

#### 【〔共通事項〕の指導内容を構成する考え方】

##### ① 音楽の構造の原理

音楽の素材となる音は、長さ、高さ、強さ、音色など様々な性質をもっている。

音は、一音だけでも音楽と成り得るが、基本的には、音と音との関係の中で意味をもち音楽となる。音と音とのかかわり方により、音楽は多様な様相を示す。

音と音との時間的な関係の中でリズムや速度が生ずる。音の長短、強弱、有音と無音などが時間的に配分されたり組織化されたりすることにより、一定のパターンや間などが生まれる。言葉や息、身体の動きが影響することもある。

異なる音高や音価などを連ねると旋律になる。音の連なり方や装飾のされ方により、多様な形の旋律ができる。旋律の構成音を高さの順に並べると音階が認識される。

音と音とが同じ時間軸上で垂直的にかかわったり、時間の流れの中で水平的にかかわったりして、織物の縦糸と横糸のような様相で様々な音の織りなす状態が生まれる。これをテクスチュアという。

音量の変化は強弱に関係してくる。強弱は、強さや弱さ、その変化などを相対的に感じさせるものであり、音色ともかかわってくる。また、音量は小さいけれども強さを感じさせる音もある。

そして、旋律やリズムが反復、変化したり、あるいは対照的なものと組み合わせたりして、音楽と

してのまとまりのある形が生み出される。楽曲形式は、この形が一般化されたものである。

また、反復、変化、対照などの音楽を構成する原理においては、多様な音楽に共通するものや、時代や民族などによって様々な特徴をもつものがある。

音楽は、これらの要素によって形づくられており、それぞれの要素は有機的に関連し合っている。音楽をとらえるためには、このような音楽の構造の原理に注目することが必要となってくる。

〔共通事項〕では、音楽を形づくっている要素として音色、リズム、速度、旋律、テクスチャ、強弱、形式、構成などを示し、要素や要素同士の関連を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じ受けることを、すべての音楽活動を支えるものとして位置付けている。これらの要素は、音（音色など）、音と音との時間的な関係（リズム、速度など）、連なりや織りなす関係（旋律、テクスチャなど）、音量の変化（強弱など）、音楽の組立て方（形式、構成など）といった大きなくくりによって整理したものである。

なお、従前は要素の一つに「和声を含む音と音とのかかわり合い」を示していたが、今回の改訂で「テクスチャ」とした。「和声を含む音と音とのかかわり合い」と「テクスチャ」は同じ趣旨のものである。小学校の音楽科における「音楽の縦と横の関係」の学習の上に立ち、我が国及び諸外国の音楽に見られる様々な音と音とのかかわり合いを意識してとらえることを一層重視している。

また、従前は反復、変化、対照などの音楽を構成する原理の学習を「形式」の中に入れていた。しかしながら、リズムや旋律が反復したり変化したりすることなどによって、まとまりのある音楽が形づくられていることを意識してとらえることは音楽の理解を深める上で重要である。今回の改訂では、小学校の音楽科における反復、問いと答え、変化などの学習との系統性を図る観点からも、音楽を形づくっている要素の一つとして「構成」を示した。

## ② 音楽的な感受

音楽的な感受とは、音楽を形づくっている要素や要素同士の関連を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じ受けることを意味する。「この楽器の音色は、日本的だ」、「この旋律には、あたたかさを感じる」などといった受け止めである。この場合、対象のもつ質的な内容として、特質や雰囲気を感じ受けている。

音楽科の学習においては、音色、リズム、速度、旋律、テクスチャ、強弱、形式、構成などの音楽を形づくっている要素や要素同士の関連に着目し、それを窓口として音や音楽の一刻一刻を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じ受けることに大切な意味がある。「クラリネットによる第二主題は、まるやかな感じがする」といった場合、音色に着目し、様々な楽器の中からクラリネットの音を知覚するとともに、形式に着目し、第一主題とは異なった雰囲気の旋律を知覚し、音色と旋律の関連が生み出す質感について、まるやかな感じと感受している。このほかにも「軽やかになったのは、音が高くなり速度も速くなったから」、「踊り出したくなるような和太鼓の音楽だと感じるのは、ドンドコドンドコというリズムと独特な音色が関連しているから」といった受け止めなどが考えられる。

このように、要素や要素同士の関連がどのようになっているかを知覚することと、どのような感じがしたのかといった感受の内容とを常にかかわらせて音楽に向き合うことが大切である。

## ③ 音楽を共有する方法

音を媒体としたコミュニケーションが音楽の本質と言える。音楽は実際に鳴り響く音そのものがすべてを表しており、演奏が終了すると、その音楽は事実上、音響として存在しなくなる。こうした音や音楽の世界を他者と伝え合い、共有する方法の一つとして、音楽に関する用語や記号などが様々に工夫され用いられてきた。

適切な用語や記号などを用いて音楽の内容について解釈や説明をしたり、五線譜のような楽譜を書いて表したりそれを読み解いたりすることは、音楽を他者と共有するための基盤となり、結果として、一

一人の音楽に対する理解を深めていく。

このような観点から、歌唱や器楽の活動では楽譜から作曲者の意図を読み取って仲間と一緒に表現を工夫すること、創作の活動では表現したい内容を記譜したりイメージなどを適切な用語を用いて伝え合ったりすること、鑑賞の活動では音楽のよさや美しさなどについて音楽に関する用語などを用いて言葉で説明したり、それを基に話し合ったりすることなどの学習が意味をもつ。

音楽に関する用語や記号などを理解し用いることは、音楽についての解釈などを他者と共有し伝え合うとともに、一人一人の生活において、生涯にわたって音楽にかかわっていくことを支え、自らの表現や鑑賞の活動を充実させる。このことは、身の回りや世界に存在する多種多様な音楽に対する理解をうながすこととなり、音楽文化の継承・発展を可能にするものである。

以上に述べた3つの観点による指導内容を具体化するために、次のように事項を示している。アは音楽を形づくっている要素や要素同士の関連を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じること、イは音楽に関する用語や記号などについて音楽活動を通して理解することとしている。

学習指導要領における〔共通事項〕の内容及び〔共通事項〕に関する指導計画作成上の配慮事項は、上記の指導内容を構成する考え方に基づいて、次のように示されている。

## 中学校学習指導要領(平成20年3月告示)第5節音楽(抜粋)

### 第2 各学年の目標及び内容

#### 〔第1学年〕

#### 2 内容〔共通事項〕

(1) 「A表現」及び「B鑑賞」の指導を通して、次の事項を指導する。

ア 音色、リズム、速度、旋律、テクスチュア、強弱、形式、構成などの音楽を形づくっている要素や要素同士の関連を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じること。

イ 音楽を形づくっている要素とそれらの働きを表す用語や記号などについて、音楽活動を通して理解すること。

〔第2学年及び第3学年〕も〔第1学年〕に同じ。

### 第3 指導計画の作成と内容の取扱い

1 指導計画の作成に当たっては、次の事項に配慮するものとする。

(1) 第2の各学年の内容の〔共通事項〕は表現及び鑑賞に関する能力を育成する上で共通に必要なものであり、表現及び鑑賞の各活動において十分な指導が行われるよう工夫すること。

このように〔共通事項〕の内容は、音色、リズム、旋律などの音楽を形づくっている要素に関するものである。また、指導計画の作成に当たっては、〔共通事項〕をすべての音楽活動を支えるものと位置付けて、歌唱、器楽、創作、鑑賞の各活動と十分に関連させて取り扱うことになる。

なお、〔共通事項〕の事項アに示されている「知覚」「感受」という言葉について、解説書では、次のように説明している。

ここで言う「知覚」は、聴覚を中心とした感覚器官を通して音や音楽を判別し、意識することであり、

「感受」は、音や音楽の特質や雰囲気などを感じ、受け入れることである。本来、知覚と感受は一体的な関係にあると言えるが、指導に当たっては、音楽を形づくっている要素のうちどのような要素を知覚したのかということと、その要素の働きによってどのような特質や雰囲気を感じたのかということと、それぞれ確認しながら結び付けていくことが重要となる。

また「特質」は、音や音楽がもつ特徴的な性質であり共通に感受されやすく、「雰囲気」は、その時々状況などによって一人一人の中に自然と生まれる気分やイメージなどを包含していると考えられる。

指導に当たっては、我が国及び諸外国の様々な音楽におけるそれぞれの特徴をとらえる窓口として、表現及び鑑賞の各活動と関連させて、これらの要素に関する学習を行うことが大切である。

例えば、リズムに着目して音楽の時間的な進行における音と音との関係をとらえることによって、拍や拍子などについても理解することや、旋律に着目して音のつながり方や旋律の構成音をとらえることによって、音階や調などについても理解することが考えられる。また、速度、リズム、拍などは密接な関係にあり、同様に旋律とテクスチャ、あるいは形式と構成なども音楽の構造において密接な関係にある。

したがって、実際の音楽活動の中でこの事項に示す8つの要素に焦点を当てた指導を行うとともに、それらを窓口にしなが、音楽は様々な要素が有機的に関連し合って形づくられていることに十分配慮して指導する必要がある。

生徒が音楽を形づくっている要素や要素同士の関連を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じることによって、音楽の表現や鑑賞における主体的な思考・判断を促していくことは、我が国や諸外国の様々な音楽それぞれの音楽の魅力や価値を主体的に感じ取ったり理解したりする学習を充実させる。この意味で〔共通事項〕に示された内容の学習は、音楽文化の理解を深めるなどの教科の目標を実現することにつながっていく。このことは音楽教育によって育む学力を明確にすることでもある。さらに、解説書では、各要素に関連する学習の指導例が次のように示されている。

「音色」に関連する学習では、声や楽器の音色、自然音や環境音、曲種に応じた発声及び楽器の奏法による様々な音色、それらの組合せや変化などが生み出す響きなどについて指導することが考えられる。

「リズム」に関連する学習では、拍や拍子、リズム・パターンとその反復や変化、拍節的なリズムや拍節でないリズム、我が国の伝統音楽に見られる様々なリズム、間などについて指導することが考えられる。

「速度」に関連する学習では、ふさわしい速度の設定、速度を保ったり様々に変化させたりすること、緩急の対比、我が国の伝統音楽に見られる序破急などについて指導することが考えられる。

「旋律」に関連する学習では、音のつながり方、旋律線のもつ方向性、フレーズ、旋律装飾、旋律が基づくところの音階、調などについて指導することが考えられる。なお、旋律装飾は、装飾音、コブシ、ポルタメントなど、また、音階は、我が国や諸外国の音楽に使われている様々な音階を扱うことも考えられる。

「テクスチャ」に関連する学習では、音や旋律の組合せ方、和音や和声、多声的な音楽、我が国の伝統音楽に見られる様々な音と音とのかわり合いなどについて指導することが考えられる。

「強弱」に関連する学習では、ふさわしい強弱の設定、強弱を保ったり様々に変化させたりすること、強弱の対比、音楽の全体や部分における強弱の変化などについて指導することが考えられる。なお、物理的な音量は小さいけれども強さを感じさせる音などを扱うことも考えられる。

「形式」に関連する学習では、二部形式、三部形式、ソナタ形式、我が国や諸外国の音楽に見られる

様々な楽曲形式などについて指導することが考えられる。なお、我が国の伝統音楽に見られる序破急、音頭一同形式などを扱うことも考えられる。

「構成」に関連する学習では、反復、変化、対照などの音楽を構成する原理などについて指導することが考えられる。なお、我が国の伝統音楽に見られる手などの旋律型を基にした構成などを扱うことも考えられる。

「(2) 鑑賞領域の内容」で前述したように、鑑賞教材の選択の観点として、学習指導要領では「(2) 鑑賞教材は、我が国や郷土の伝統音楽を含む我が国及び諸外国の様々な音楽のうち、指導のねらいに適切なものを取り扱う」と示されている。上記の各要素に関連する学習の指導例を見ると、〔共通事項〕の事項アで示されている各要素は、いわゆる西洋音楽の理論に基づいて作曲された音楽を対象にするだけではなく、我が国や諸外国の多種多様な音楽それぞれの特徴を捉えるための「窓口」となるものであることが分かる。

また、指導計画作成の配慮事項において、「(1) 第2の各学年の内容の〔共通事項〕は表現及び鑑賞に関する能力を育成する上で共通に必要なものであり、表現及び鑑賞の各活動において十分な指導が行われるよう工夫すること」と示されているように、〔共通事項〕の学習は表現と鑑賞の各活動を支えるものであるとともに、歌唱、器楽、創作、鑑賞の各活動を相互に関連付けるためにも要となるものでもある。

音楽鑑賞学習において〔共通事項〕の学習を大切にすることは、対象となる音楽の構造的な面と表情などの質的な面の両者から、その音楽の本質を捉える学習を推進させる。そして、構造や表情などについて思考・判断したことを言葉で説明する・根拠をもって批評する活動を取り入れることによって、音楽という抽象的な表現の世界を言葉に置き換えようとする過程で、知識や経験などが生かされ、思考・判断を更に深め、それを自らが確認するとともに、他者と伝え合い共有し、自分と集団の学習の質を高めていくことになる。

### 第3節 音楽鑑賞学習の課題と改善の方向

#### 1. 「特定の課題に関する調査」の結果から見た課題と改善の方向

##### (1) 調査と結果の概要

国立教育政策研究所教育課程研究センターが平成20年度に実施した「特定の課題に関する調査（小学校音楽、中学校音楽）」（以下、「特定課題調査」という。）では、全国の小学生及び中学生合計約6,000人を対象として、ビデオ（DVD）の映像や音声を視聴しながら、楽譜の基礎的な知識などの音楽を形づくっている要素の働きを表す用語や記号の理解などに関する調査（調査Ⅰ）や音楽を鑑賞する力などを問う調査（調査ⅡB）、また、音楽の学習に対する意識など尋ねる調査（児童質問紙、生徒質問紙）、それらと関連して授業における教師の指導の工夫などを尋ねる調査（学校質問紙）が行われた。さらに、子ども一人一人がコンピュータとマイク付きヘッドホンを使いながら、小学校では創作（リズムづくりなど）の実技を伴う調査（調査ⅡA）、中学校では歌唱の実技を伴う調査（調査ⅡA）も行われた<sup>12</sup>。

小学校音楽、中学校音楽に共通する結果の概要として、例えば、次のような状況が報告されている。

「音楽の学習が好き・大切」、「友達と一緒に音楽活動をすることに楽しさを感じている」、

「音楽の美しさを感じ取ることが好き」と回答した子どもは、いずれも約7～8割と高い傾向であったこと。

一方、「音楽の特徴などを言葉で表すことが好き」と回答した子どもは4～5割、創作や歌唱の表現をどのように工夫するかについて〈自分が考えたこと〉と〈実際につくったリズムや歌唱の音楽表現〉とが整合していた子どもは3～4割であったこと。

また、音楽を聴いて感じ取ったことや自分が考えた表現を工夫について〈ある条件に基づいて記述をする〉問題では正答率が低い傾向であったこと。

さらに、「音楽の学習が好き」などの〈音楽を愛好する心情にかかわる質問に肯定的に回答した子ども〉は、〈歌唱、創作、鑑賞などのほとんどの問題の正答率が高い〉結果であったこと。

## (2) 中学校における鑑賞に関する調査結果

特定課題調査のうち、中学校の鑑賞に関する調査（調査ⅡB）では、大きく分けて次の3つの問題が出題された。

- 1 平易なピアノ曲（A部：短調による8小節の簡易な主題の提示、B部：A部の主題を同主長調に転調させ、スキップのような軽快なリズムに変化させた部分、C部：A部主題について、強弱や拍子、リズムなどを大きく変化させた部分の3つの部分から成る）を鑑賞して、
  - ・ A部のイメージに合う天気を選択する（問題1）、
  - ・ B部のイメージを記述する（問題2）、
  - ・ A部とB部で働きが変化した要素を選択する（問題3）、
  - ・ C部について特徴的な要素を選択して、その働きの特徴を記述する（問題4）、
  - ・ 楽曲についての紹介文を記述する（問題5）、の5つの問いで構成された問題。
- 2 リコーダーと尺八の音楽を鑑賞して、リコーダーと比べた尺八の音の特徴について、奏法と結び付けて説明する問題（問題6）。
- 3 総合的な芸術を鑑賞して、音楽と他の芸術とのかかわりを記述する問題（問題7）。

このうち、1つめのピアノ曲を鑑賞する問題の結果を見ると、

- ・ 問題3で「正しい要素を選択して正答した生徒」は45.9%、
- ・ 問題4で「選択した要素の働きによってどのような特徴がもたらされたかについて適切に記述して正答した生徒」は56.3%、
- ・ 問題5で「自分の気持ちや想像したことを書くこと、2つ音楽の要素を表す言葉を使用することを条件として、紹介文を妥当に記述して正答した生徒」は33.8%であった。

さらに、この問題5（紹介文を書く問題）の生徒の解答状況を見ると、正答した生徒は、例えば「この曲は、A～Cに変化するにあたって速度があがり、音色が明るくなってきます。最初は雲っていたり雨が降っていたり少し暗いイメージですが、B、Cとなるにつれて、雨がやみ、晴れてくるようなきれいな曲です。」のように記述をしていた。

一方、正答にはならなかった生徒は、どのような点につまずいているのかについて見ると、20.8%の生徒が「自分の気持ちや想像したことを記述しているが、音楽A、B、Cの変化には触れられてなく、かつ選択肢から2つの要素を挙げているもの」に分類されており、この類型の生徒は、楽曲がAからB、Cへと移り変わっていくこと、すなわち楽曲全体の流れに触れて記述することができていなかった。

また、16.8%の生徒が「自分の気持ちや想像したことを音楽A、B、Cの変化に触れて記述しているが具体的でなく、かつ選択肢から挙げた2つの要素を適切に用いておらず、紹介文として妥当でないもの」に分類されており、このタイプの生徒は、音楽を形づくっている要素を適切に用いて記述することができていなかった。

この結果について、国立教育政策研究所教育課程研究センターの報告書（以下、「報告書」という。）では、次のように分析・考察を述べている。

○ 楽曲全体の流れの中で、自分の気持ちや想像したことがどのように変化していくかを、要素の働きとかかわらせて言葉で表すことができるよう指導を工夫する。

本問の通過率は33.8%であり、自分の気持ちや想像したことを音楽A、B、Cの変化に触れて具体的に述べることに、要素を適切に用いて述べることに課題があると考えられる。

指導に当たっては、音楽が醸し出す表情を自己の生活経験などと結び付けて捉えることを通して、自分なりの感じ方や解釈を広げたり深めたりして、自分の気持ちや想像したことを述べるようにする必要がある。そのためには、楽曲のある一部分だけではなく、楽曲全体の流れに関心をもって聴き、自分にとってどのような意味や価値があるのかについて意識できるように工夫することが大切である。

また、音楽を形づくっている要素の働きについては、特定の要素の変化を捉えることに留まらず、様々な要素の働きによって、音楽の表情、雰囲気や味わいがどのように変化したのかを捉えることができるよう、生徒の思考を促すことが大切である。

さらに、自分の気持ちや想像したことと要素の働きをそれぞれ別に取り扱うのではなく、自分の気持ちや想像したことがどのように変化していくかを、要素の働きとかかわらせて言葉で表すことができるようにすることも大切である。

前述した「正答にはならなかった生徒は、どのような点につまずいているのか」や、報告書の分析・考察を踏まえると、音楽鑑賞学習を改善充実する視点として、次の6点を挙げることができる。すなわち、①楽曲の全体の流れに関心をもって聴くようにすること、②音楽を形づくっている要素とそれらの働きを適切に捉えるようにすること、③学習の対象となる音楽が、自分にとってどのような意味や価値があるかを意識すること、④様々な音楽を形づくっている要素の働きを捉えることができるように生徒の思考を促すこと、⑤音楽から喚起された自分の感情などの変化と、音楽を形づくっている要素の働きとをかわらせるようにすること、⑥以上の①～⑤について、自分なりの感じ方や解釈を広げたり深めたりして、言葉で表すことができるようにすることである。

また、2つめの「リコーダーと尺八の音楽を鑑賞して、リコーダーと比べた尺八の音の特徴について、奏法と結び付けて説明する問題」（問題6）で正答した生徒は44.9%、3つめの「総合的な芸術を鑑賞して、音楽と他の芸術とのかかわりを記述する問題」（問題7）で正答した生徒は42.0%であった。これらと1つめの「ピアノ曲の紹介文を記述する問題」（問題5）で正答した生徒は33.8%であったことも併せて考えると、音楽鑑賞学習の現状について、約3～4割の生徒には一定の成果が認められる一方で、そのほかの生徒の状況には改善すべき課題があることがうかがわれる。

### （3）言語活動にかかわる意識調査結果

（2）で取り上げた「ピアノ曲の紹介文を記述する問題」（問題5）で正答した生徒が

33. 8%だったように、生徒が感じ取ったことや考えたことなどを一定の条件に基づいて記述する問題については正答率に低い傾向が見られた。そこで、音楽の学習に対する意識など尋ねる調査（生徒質問紙）と授業における教師の指導の工夫などを尋ねる調査（学校質問紙）において、言語活動にかかわる意識についての調査結果を見ると次のことが言える。ここでは報告書の「Ⅳ 分析結果から見た主な課題と指導上の改善」のうち、関係部分を抜粋する。

児童・生徒質問紙調査の中で、鑑賞の学習に関する児童生徒の意識を見ると、小学校では「授業で音楽をきくとき、その音楽のよさや美しさを感じ取ることは好きですか」（質問2(7)）に肯定的な回答をした児童が78.3%であるのに対し、「授業で音楽をきくとき、その音楽の特徴や演奏のよさを言葉などであらわすことは好きですか」（質問2(12)）に肯定的な回答をした児童が48.5%であった。同様に、中学校では「その音楽のよさや美しさを感じ取ることは好きですか」（質問2(7)）に肯定的な回答をした生徒が74.8%であるのに対し、「その音楽から感じ取ったことを言葉や文章などで表すことは好きですか」（質問2(12)）に肯定的な回答をした生徒が36.5%であった。

さらに、学校質問紙調査の中で、鑑賞の授業における教師の指導の工夫を見ると、中学校では「生徒が、その音楽のよさや美しさを積極的に感じ取ることのできるように指導を工夫していますか」（質問1(6)）に肯定的な回答をした教師が89.2%であるのに対し、「生徒が、その音楽から感じ取った曲想を、言葉で表すことのできるように指導を工夫していますか」（質問1(8)）に肯定的な回答をした教師が74.5%、「生徒が、音楽の諸要素やそれらの働きと曲想とを結び付けて、言葉で表すことのできるように指導を工夫していますか」（質問1(9)）に肯定的な回答をした教師が50.0%であった。

以上のことから、児童・生徒質問紙調査の結果においては、児童生徒は音楽のよさや美しさを感じ取ることには好きであるが、音楽の特徴や音楽から感じ取ったことなどを言葉で表すことは好きではない傾向にあること、中学校の学校質問紙調査の結果においては、音楽のよさや美しさを感じ取ることのできるような指導を工夫しているが、一方で曲想を言葉で表すことのできるような指導の工夫や、特に音楽を形づくっている要素やそれらの働きと曲想とを結び付けて言葉で表すことのできるような指導の工夫について十分にはなされていないことがうかがわれる。

音楽科の学習は、声や楽器で表現したり音で表すために創作をしたり楽曲を聴き味わったりするなど、音を媒体として成り立つものと言える。それは、音楽活動が音を媒体としたコミュニケーションとしての独自の特質をもっているからである。

したがって、児童生徒が、音楽に関する言葉を適切に用いることができるようになること自体は音楽の学習の直接的なねらいではないが、音楽の表現と鑑賞の学習を充実するために、言語活動を適切に取り入れるよう指導を工夫することが重要となる。

具体的には、音楽のよさや美しさを生み出している様々な音楽を形づくっている要素やそれらの働きを言葉で表すこと、音楽の表現をどのように工夫するかについて楽曲の構造などを基にしながら考えて言葉で表すこと、音楽によって喚起された自分のイメージや感情などを意識し、生活経験などを通じて体験的に知っている情景にたとえるなどして言葉で表すことなどが考えられる。このような学習活動を、指導のねらいや児童生徒の発達の段階などに応じて積極的に取り入れるようにすることが大切である。その際に、言葉は他者と伝え合い共有する手段として重要な役割をもつことから、話し合いの場などを適切に設けることによって、児童生徒個人と集団全体の学習の質を高めていくよう配慮することが望まれる。

さらに、「この歌詞は最も大切なところなので、少しだけ rit.（リタルダンド）をするように表現したい」、「この楽曲が楽しく踊りたくなるように感じるのは、3拍子の音楽だからです」といった言語活動を取り入れることによって、「rit.（リタルダンド）」や「3拍子」が醸し出す音楽の表情を豊かに感

じ取りながら、それぞれの意味を音楽活動を通して理解できるようすることも大切である。また、音楽を形づくっている要素とそれらの働き、それらから感じ取ったことを友達同士で伝え合う活動を行うことは、音楽には様々な感じ取り方があることなどに気付き、児童生徒一人一人の音楽に対する価値意識を広げていくことになる。

以上のような音楽の学習に即した言語活動を適切に取り入れることが、音楽の表現と鑑賞の学習を充実させ、生涯にわたって音楽に親しむ上で必要となる基礎的な能力の育成を確かなものにしていく。

このように、中学生に対する質問では「音楽のよさや美しさを感じ取ることは好き」と答えた生徒は約7割5分いるが、「音楽から感じ取ったことを言葉や文章で表すことが好き」と答えた生徒は約3割5分であることが分かった。

また、中学校の教師に対する質問では「音楽のよさや美しさを積極的に感じ取ることのできるように指導を工夫している」と答えた教師は約9割いるが、「感じ取った曲想を、言葉で表すことのできるように指導を工夫している」と答えた教師は約7割5分であり、「要素やそれらの働きと曲想を結び付けて、言葉で表すことのできるように指導を工夫している」と答えた教師は約5割であったことが分かった。

特定課題調査の結果は平成20年度時点の音楽教育の成果や課題の一端が示されたものである。その段階は平成10年告示の学習指導要領に基づく教育課程であった。したがって、調査結果に見られる生徒の学習や教師の指導の状況は、言葉で説明する・根拠をもって批評するなどの活動を鑑賞の学習に取り入れることとしている平成20年告示の学習指導要領の趣旨などは反映していない。

重要なことは、これからの音楽鑑賞学習の在り方を考えるために、これまでの成果や課題を振り返り、そこから改善の方向を見いだしていくことである。特定課題調査の結果はその1つに位置付けられ、今後の改善の方向を探る貴重な手掛かりになる。

## 2. 題材の指導計画作成上の課題と改善の方向

音楽活動という人の行為を考えると、多種多様な音楽に共通することとして次のことが言える。それは、音楽をつくり出すという行為があること、声や楽器で演奏をするという行為があること、そして、他者がつくり出した音楽を聴いてその価値などを判断するという行為があることである。これらは順に、学校の教育課程では創作、歌唱、器楽、鑑賞の学習に対応する。

学校における音楽の学習は、本来、子どもの発達の段階などに応じて、これらのいずれについても適切に扱うことが求められる。しかし現状は、既成の曲を歌や楽器で表現する活動が授業時数の多くを占めている。また、既成の曲を歌や楽器で表現する過程で、そのための参考となる演奏を聴取することをもって鑑賞の学習を終えてしまっている例も見受けられる。また、音楽表現をどのように工夫するか、あるいは、どのように工夫しているかを子ども同士が演奏して聴き合いながら追求する活動をもって、音楽鑑賞学習を終えてしまっている例も見受けられる。このような活動は、音楽表現を高めていくために極めて有効ではあるが、鑑賞の能力を豊かに育む学習活動としては不十分である。

したがって、鑑賞の活動に係る授業時数を確保するといったことだけではなく、音楽鑑賞学習の在り方を質的に改善充実していくことが課題となってくる。こうした観点から指導計画上の課題を捉え、改善を図っていく必要がある。

指導計画の基本となるものは年間指導計画である。題材ごとの学習指導の内容などに応じて、題材同士の接続性・関連性に考慮しつつ1年間を見通して各題材を適切に配列する

ことによって、年間指導計画の主要部分を作成することができる。

年間指導計画を構成する個々の要素が題材の指導計画である。ここで言う題材とは、学習指導の内容に一定のまとまりをもたせ、目標や内容を組織付けて構成した指導の単位である<sup>13</sup>と言える。

題材の指導計画については、例えば次の3つのようなケースが課題として見受けられる。すなわち、

- ① 1つの題材で取り扱う指導内容について、領域、分野、指導事項などがあまりにも多過ぎて、結果的にいろいろな音楽活動が行われるだけの授業に陥るケースや、1つの題材で取り扱う複数の教材曲について、指導内容の視点からどのように関連しているのかが不明瞭で、結果的にいろいろな教材曲を順番に扱うだけの授業に陥るケース、
- ② ①のケースとは反対に、例えば、1つの指導事項や教材曲のみを扱うような題材を設定し、指導内容をあまりにも限定し過ぎてしまい、学習指導の内容に一定のまとまりをもたせる題材構成本来の意味が薄らいでいるケース、
- ③ 上の①、②に共通して、学習展開における一次から二次へ、二次から三次へとといった流れにおいて、まとまりのある学力を計画的に育成する観点から一貫性や発展性が欠如しているケース

である。

本研究で開発している事例は、鑑賞領域に関する指導内容（「B鑑賞」の指導事項及び〔共通事項〕）で題材を構成している。この意味では上記②に似たケースと言える。しかし、題材で取り扱う音楽を形づくっている要素について、例えばリズムのみを扱うといったように指導内容をあまりにも限定し過ぎることなく、学習する指導の内容に一定のまとまりをもたせるようにしている。また、上記③のケースのように、学習展開における一次から二次へ、二次から三次へとといった流れにおいて一貫性や発展性が欠如した事例に陥ることなく、見つける・考える・生み出す・広げるといったステップを意識した、創造的な鑑賞の学習を提案するようにしている。

「A表現」と「B鑑賞」の関連を図った題材を構成する場合においても、音楽鑑賞学習の質的な充実を図ることによって、上記①のケースのようにいろいろな音楽活動が行われるだけの授業やいろいろな教材曲を順番に扱うだけの授業に陥るといったことなく、音楽表現の高まりと鑑賞の深まりの両者を相乗的に目指した題材に発展させることも可能となる。

既成の曲を歌や楽器で表現する過程で、そのための参考となる演奏を聴取することをもって鑑賞の学習を終えてしまっている例が見受けられることや、音楽表現をどのように工夫するか、あるいは、どのように工夫しているかを子ども同士が演奏して聴き合いながら追求する活動をもって、音楽鑑賞学習を終えてしまったりしている例が見受けられることを前述した。これらの課題は、歌唱や器楽などの音楽表現をすることが音楽の授業の中心に位置付けられる一方、音楽を聴く活動は、音楽表現をするための従属的な位置付けになっていることから生じるものである。

こうした課題を解消するためには、鑑賞領域に関する指導内容（「B鑑賞」の指導事項及び〔共通事項〕）で題材を構成する場合においても、また、表現領域と鑑賞領域に関する指導内容（「A表現」の指導事項、「B鑑賞」の指導事項及び〔共通事項〕）の両方で題材を構成する場合においても、鑑賞の学習が、子ども自ら創造的に音楽にかかわる活動として行われるように改善充実しなければならない。

このように考えると、「A表現」と「B鑑賞」の関連を図った題材を構成した場合の学習展開例として、

- ・導入段階では、その題材で学習する内容（指導内容）への興味・関心をもたせ、その題材で取り扱う音楽を形づくっている要素の知覚・感受を深めさせるようにする。

- ・次の段階では、表現活動のねらいに適した教材を用いて音楽表現の創意工夫や技能に係る力を育みながら、主体的に音楽表現を追求させるようにする。

- ・更に次の段階では、知覚・感受や音楽表現を追求した体験などによって育まれた力を生かしながら、鑑賞活動のねらいに適した教材を用いて批評する活動を行い、音楽のよさや美しさの味わいが深まるようにする、

といった流れで題材の指導計画を作成することが考えられる。このような事例は鑑賞指導の改善充実を求めている学習指導要領の趣旨を生かした学習にふさわしいモデルの1つと言える。

### 3. 学習指導とその評価に係る課題と改善の方向

#### (1) 学習指導上の実践的な課題

学習指導要領では、感性を高め、思考・判断し、表現する一連の過程を重視した学習指導の実施を求めており、〔共通事項〕の学習を支えとしながら、生徒一人一人の音楽表現力や鑑賞の能力を高めたり深めたりすることのできる学習指導を行うことが期待されている。そのためには、育成する学力を明確にした指導計画を作成するとともに、授業改善の観点から、学習指導とその評価に係る課題を捉え、改善を図っていくことが重要となる。

例えば、学習指導上の実践的な課題として次の3点が挙げられる。それは、

- (ア) 指導のねらいや手立てを明確にするといった視点から、例えば、すべての子どもが「確実に学習する内容は何か」を明らかにし、そのための手立てを講じていくことが実際の授業において曖昧になっていなかったか、

- (イ) 感性を高めるといった視点から、例えば、音楽の表情や雰囲気などについて子ども一人一人が感性を働かせながら感じ取る場面が、実際の授業において本当に大切にされてきたか、

- (ウ) 思考・判断し、表現するといった視点から、例えば、感性を働かせて感じ取ったことを基にして子ども自らが考え、「私は、このように音楽で表したい」のように思いや意図をもって音楽表現を追求したり、「この音楽には、このようなよさがある」のように価値を判断しながら味わって聴いたりする学習が、実際の授業において本当に大切にされてきたか

ということである。

#### (2) 音楽の新しい評価の観点

学習指導要領に基づく指導を行い、生徒の学習状況を適切に把握するため、中学校では平成24年度から新教育課程を全面実施することに応じて、音楽の新しい観点別学習状況の評価の観点（以下「観点」という）が「音楽への関心・意欲・態度」「音楽表現の創意工夫」「音楽表現の技能」「鑑賞の能力」になった<sup>14</sup>。

観点別学習状況の評価は、学習状況を分析的にとらえるものであるとともに、評定を行う際の基本的な要素にもなる。したがって、観定の趣旨を理解することが、学習評価を考える際の基本と言える。

鑑賞の学習指導に係る観点は「音楽への関心・意欲・態度」「鑑賞の能力」の2つである<sup>15</sup>。「音楽への関心・意欲・態度」については、「鑑賞の能力」との結び付きを大切に

しながら、学習内容に関心をもち、主体的に鑑賞の学習に取り組もうとする意欲や態度をはぐくみ、その学習状況を評価する。また、「鑑賞の能力」については、《音楽的な感受》、すなわち音楽を形づくっている要素（要素同士の関連も含む）を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じ取る学習を支えとしながら、音楽を解釈したり価値を考えたりして、よさや美しさを味わって聴いている学習状況を評価する。

中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会において、平成22年3月に「児童生徒の学習評価の在り方について（報告）」（以下「中教審の報告」という）が取りまとめられた。中教審の報告では、「各教科の内容等に即して思考・判断したことを、その内容を表現する活動と一体的に評価する観点（以下『思考・判断・表現』という。）を設定する」<sup>16</sup>こと、また、「『思考・判断・表現』については、各教科の目標や内容を踏まえ当該教科において育成すべき能力にふさわしい名称とし、明確に位置付ける」<sup>17</sup>ことが示されている。これらを踏まえ、音楽では「鑑賞の能力」が鑑賞領域における「思考・判断・表現」に係る観点の1つに位置付けられた。

また、中教審の報告では、鑑賞の能力の評価に関して「芸術に係る鑑賞の能力を評価するに当たっては、基礎的・基本的な知識・技能のうち、特に『知識・理解』に関する観点と、自分なりに評価したり価値を考えたりする能力に関する観点とを一体的に見る観点を位置付ける」<sup>17</sup>と示されている。

《音楽的な感受》を基にしながら、解釈したり価値を考えたりして、「この音楽には、このようなよさがある」といった自分なりの意味や価値を見いだしていく力は、鑑賞の学習によって育まれる思考力、判断力と言える。そして、思考・判断していることを言葉で表すなどして、味わって聴くことのできるような力を育むことが、これからの音楽鑑賞学習に求められている<sup>18</sup>。

### （3）学習指導とその評価に係る改善の方向

新しい学習評価の在り方を考えることは、「（1）学習指導上の実践的な課題」で述べた3つの課題に対して、学習評価の立場から改善を促していくことになる。

学習指導とその評価は表裏一体の関係にある。学習指導上の実践的な課題として挙げた（ア）「指導のねらいや手立てを明確にする」といった視点から、例えば、すべての子どもが『確実に学習する内容は何か』を明らかにし、そのための手立てを講じていくことが実際の授業において曖昧になっていなかったか」に対して、その改善を図っていくために、「2. 題材の指導計画作成上の課題と改善の方向」で述べた題材の指導計画を作成する際、その題材のねらいや育成する力を明確にすることが極めて重要となる。そして、計画に基づく適切な学習指導を実施することが、学習評価の信頼性、妥当性等を確保することにも直接的に結び付いていく。

「鑑賞の能力」の趣旨は、①音楽を形づくっている要素を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じ取る、②解釈したり価値を考えたりして、よさや美しさを味わって聴くことから成る。このうち①は〔共通事項〕の事項アに示された指導内容に対応するものであり、「A表現」と「B鑑賞」それぞれの学習を支えるものであるとともに、両領域の関連を図る上でも鍵になる。

学習指導上の実践的な課題として挙げた（イ）「感性を高めるといった視点から、例えば、音楽の表情や雰囲気などについて子ども一人一人が感性を働かせながら感じ取る場面が、実際の授業において本当に大切にされてきたか」に対して、その改善を図っていくために、①（音楽を形づくっている要素を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じ取る）の学習指導とその評価を重視することが、子ども自身が音楽から喚起された自

己のイメージや感情を意識することとなり、その結果、感性や情操を養うことにつながっていく。

その上で、鑑賞領域では前述の「鑑賞の能力」の趣旨である①と②の両方に係る力を豊かに育てていく必要がある。このことによって、学習指導上の実践的な課題として挙げた(ウ)「思考・判断し、表現するといった視点から、例えば、感性を働かせて感じ取ったことを基にして子ども自らが考え、『この音楽には、このようなよさがある』のように価値を判断しながら味わって聴く学習が、実際の授業において本当に大切にされてきたか」に対して、その改善を図っていくことになる。

生徒が自分なりに批評をし、音楽のよさや美しさなどを味わって聴くことができるようになるためには、解釈したり価値などを考えたりする過程を大切にすることがある。

なお、ここで言う「解釈し」とは、学習の対象となる音楽について生徒の側から理解を深めていくこと、また、「価値などを考え」とは、対象となる音楽に対して多くの人が共通に認識しているような普遍的なよさや特徴などを学習し、その上で、自分にとっての大切さや意味を考えていくことと言える。その際、生徒一人一人が解釈したり価値を考えたりするだけでなく、友達と交流する中で、それらを一層深めていくような学習展開によって学習の質を高めていくことも重要となる。

さて、音は、目に見える形ではなく、響いている時間と空間にのみ存在する。音楽は感動的なものであるとともに、音によるコミュニケーションという意味では抽象的なものと言える。このような特性から、聴覚を中心とする感覚器官を働かせて響いている音を、自らとらえようとしめない限り、自分と音楽との関係は成り立たない。

したがって、音が現存し響いている瞬間に、音楽がどのように形づくられていて、どのような表情を醸し出しているのかに関心をもち、感性を働かせて感じ取っていく必要がある。それを手掛かりにして、時間の流れとともにイメージや感情がどのように変化していくのかを意識しながら、音の響きが存在していた一定のまとまった時間、音楽全体を主体的にとらえていくことが重要となる。

生涯にわたり学習する基盤を培うことが学校教育の役割である。次代を担う子どもたちに対し、音楽教育がこの役割を果たしていくことは、芸術文化の創造的な発展にも結び付いていく。音楽鑑賞学習を、子ども自ら音楽にかかわる創造的な活動として行われるよう改善充実することは、学校教育の中に音楽が存在する意義を確かなものにするということでもある。

本研究がねらいとしている批評能力育成を大切にすることが、以上のような学習指導とその評価の改善に大きく寄与するものと考えられる。学習展開の中に批評を適切に組み入れた指導計画を作成して授業を実施し、主体的・創造的に音楽のよさや美しさを味わうことに帰結していくような学習を実現することは、本章で述べてきた「学習指導要領における音楽鑑賞学習」の本質を明らかにし、実践の形で具現化するものである。

---

### 第3章の註

<sup>1</sup> 改正教育基本法は、豊かな情操や道徳心、自律の精神や公共の精神、生命や自然の尊重、伝統と文化の尊重、国際社会の平和と発展への寄与といった新しい理念を、次のとおり教育の目標として規定している。

(教育の目標)

第2条 教育は、その目的を実現するため、学問の自由を尊重しつつ、次に掲げる目標を達成するよう行われるものとする。

- 1 幅広い知識と教養を身に付け、真理を求める態度を養い、豊かな情操と道徳心を培うとともに、健やかな身体を養うこと。
  - 2 個人の価値を尊重して、その能力を伸ばし、創造性を培い、自主及び自律の精神を養うとともに、職業及び生活との関連を重視し、勤労を重んずる態度を養うこと。
  - 3 正義と責任、男女の平等、自他の敬愛と協力を重んずるとともに、公共の精神に基づき、主体的に社会の形成に参画し、その発展に寄与する態度を養うこと。
  - 4 生命を尊び、自然を大切に、環境の保全に寄与する態度を養うこと。
  - 5 伝統と文化を尊重し、それらをはぐくんできた我が国と郷土を愛するとともに、他国を尊重し、国際社会の平和と発展に寄与する態度を養うこと。
- <sup>2</sup> 平成19年6月に公布された学校教育法の一部改正のうち第30条第2項、第49条、第62条等
- <sup>3</sup> 〈生きる力〉は、平成8年7月の中央教育審議会答申（『21世紀を展望した我が国の教育の在り方について』）において示された。
- <sup>4</sup> 『幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について』（答申）、中央教育審議会（平成20年1月）、p.8
- <sup>5</sup> 同上書、p.9
- <sup>6</sup> 『中学校学習指導要領解説音楽編』、文部科学省（平成20年）では、『音楽のよさや美しさを味わう』とは、例えば、表層的に快い、きれいだとしたことにとどまることなく、その音楽の内容を価値あるものとして自らの感性によって確認する主体的な行為のことである」と解説している。
- <sup>7</sup> 前掲書4、p.53
- <sup>8</sup> 前掲書4、p.28
- <sup>9</sup> 前掲書4、p.25
- <sup>10</sup> 平成20年告示の学習指導要領の〔第2学年及び第3学年〕の目標(3)は「多様な音楽に対する理解を深め、幅広く主体的に鑑賞する能力を高める」と示されている。
- <sup>11</sup> 平成10年告示の学習指導要領の〔第2学年及び第3学年〕の目標(3)は「音楽に対する総合的な理解を深め、幅広く鑑賞する能力を高める」と示されている。
- <sup>12</sup> 特定の課題に関する調査は、中央教育審議会からの提言を踏まえ平成16年度から実施されているものであり、従来から実施してきた「教育課程実施状況調査」の枠組みでは把握が難しい内容について調査を行い、今後の学校における指導の改善に資することを目的としている。全国規模の音楽科の学力調査は、小学校では42年ぶり、中学校では初めての実施である。また、リズムづくり（小学校）や歌唱（中学校）などの実技調査は初めての試みである。
- 報告書（全文）、集計結果等については、国立教育政策研究所教育課程研究センターのWebページ（[http://www.nier.go.jp/kaihatsu/tokutei\\_ongaku/index.htm](http://www.nier.go.jp/kaihatsu/tokutei_ongaku/index.htm)）に掲載されている。
- <sup>13</sup> 文部省の指導資料では、「題材とは「題材は、特定の指導内容によって、まとまりのある学力を、計画的に形成するために、指導内容と授業展開の二つの側面から、課題性と方向性をもたせて組織した、学習指導上の単位である」「題材は、指導目標、指導内容、指導計画、指導過程、教材、評価などの諸要素から構成されるが、設定に際しては指導目標に基づき、指導内容に課題性と方向性をもたせるとともに、それらが適切な学習過程において効果的に展開するように、順序性と系統性をもたせて組織化する必要がある」と述べている。「中学校音楽指導資料『学習指導と評価の改善』」、文部省（平成5年5月）、68頁、平成5年5月、文部省
- <sup>14</sup> 『小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校等における児童生徒の学習評価及び指導要録の改善等について』、文部科学省初等中等教育局長通知、（平成22年5月）
- なお、平成元年及び平成10年告示の学習指導要領に基づく観点別学習状況の評価の観点は、「音楽への関心・意欲・態度」「音楽的な感受や表現の工夫」「表現の技能」「鑑賞の能力」であった。
- <sup>15</sup> 文部科学省Webページの「学習評価に関するQ&A」において、「鑑賞領域においては、これまで音楽的な感受で見ていた力の育成を大切にし、それと関連させながら、児童生徒が自分なりに音楽のよさや価値などを思考・判断し、味わって聴くことのできるような力をはぐくむこととしており、こうした学習状況を観点『鑑賞の能力』で評価することになります。このことによって、『音楽的な感受』と『鑑賞の能力』の違いが分かりにくいといった従前の課題の解消も図りものと考えています」と説明している。
- <sup>16</sup> 『児童生徒の学習評価の在り方について』（報告）、中央教育審議会初等中等教育局教育課程部会（平成22年3月）、p.14
- <sup>17</sup> 同上、p.18
- <sup>18</sup> 大熊信彦（2011）「音楽の新しい学習評価について」『音楽鑑賞教育』4、財団法人音楽鑑賞教育振興会、p.18-29で詳しく述べている。

（大熊 信彦）

## 第4章 米国カリフォルニア州音楽スタンダードにおける批評の検討と実践

この第4章では、まず、批評と深く関わる「美的評価」(Aesthetic Valuing)を幼稚園から高等学校まで一貫して位置づけている米国カリフォルニア州の音楽スタンダードを取り上げ検討する。そして、同州公立ミドルスクールの grade6～grade8(日本での中学校に相当)において「美的評価」がどのように実践されているかを視察し、授業を分析する。

「美的評価」についての検討は、カリフォルニア州教育委員会(California State Board of Education)による「カリフォルニア州公立学校のための視覚・上演芸術教科の教育内容標準」(Visual and Performing Arts Content Standards for California Public Schools、以下CS。)における「音楽」(Music、以下CSM)のコンテンツを全訳し、その中の一項目である「美的評価」についてその意味内容を、前章の音楽の認識と音楽的思考と対比しながら分析する。さらにカリフォルニア州立大学のデビッド・コナーズ(David Connors)教授に対するインタビューを行って、同州における「美的評価」の実践の現況や指導方法などを収集する。

実践の視察においては、ミドルスクールの音楽担当教諭3名に実践の立場として「美的評価」についてどのように考えているかを、聞き取り調査する。そして4つの授業を視察し、逐語記録を取りながらその特色を分析する。

### 第1節 CSの枠組み

CSには、幼稚園就園前(Prekindergarten)から高等学校3年生(Grade12)まで、ダンス、音楽、演劇、視覚芸術の4教科が置かれており、「芸術的知覚」、「創造的表現」、「歴史的・文化的文脈」、「美的評価」、「結合・関連・応用」の5項目から構成されている(表1)。

表1 CSの枠組み

		Dance	Music	Theatre	Visual Arts
Prekindergarten		1.0 Artistic Perception 2.0 Creative Expression 3.0 Historical and Cultural Context 4.0 Aesthetic Valuing 5.0 Connections, Relationships, Applications			
Kindergarten					
Grade 1					
Grade 2					
Grade 3					
Grade 4					
Grade 5					
Grade 6					
Grade 7					
Grade 8					
Grades9 through12	Proficient				
	Advanced				

この枠組みは、1994年に示された「全米芸術教育標準」(National Standards for Arts

Education) <sup>1</sup>に準拠して作成されたものであり、DBAE (Discipline-Based Art Education) <sup>2</sup>やDBME (Discipline-Based Music Education) <sup>3</sup>の影響も受けている<sup>4</sup>。また、カリフォルニア州では前述の4つを教科領域としたのは、それらが他の教科では学ぶことのできない認識や意味を伝えることのものとして捉えているからである<sup>5</sup>。

5項目の意義と目標は表2の通りである<sup>6</sup>。

表2 CSMの目標

内容の柱		目標
1.0 芸術的知覚	音楽に特有の用語や技能を通して、感覚的情報を処理し、分析し、反応する。	音楽用語を使って、音楽及び他の聴覚上の情報を、読譜し、記譜し、聴取し、分析し、叙述する。
2.0 創造的表現	音楽を創作し、演奏し、共有する。	音楽の幅広いレパートリーを演奏するために、声や楽器の音楽的技能を適用する。 音楽を作曲しアレンジし、旋律や変奏や伴奏を即興する。必要に応じてデジタル・電子機器を用いることもある。
3.0 歴史的・文化的 文脈	音楽の歴史的・文化的次元を理解する。	世界中の、過去や現在の文化における音楽の役割を分析する。その際、音楽、音楽家、作曲家に関連づけて文化の多様性に注目する。
4.0 美的評価	音楽作品について反応し、分析し、判断をする。	音楽の要素や美的質や聴き手の反応によって音楽作品や音楽家の演奏を（文化的背景と関連づけて）批判的に評価し意味を見出す。
5.0 結合・関連・応用	音楽で学んだものを、他の芸術様式や学問領域の学習や、職業に結びつけたり応用したりする。	音楽で学んだものを、教科を越えて応用する。彼らは、問題解決、コミュニケーション、時間や資料の管理における能力や創造的技能を伸ばす。それらは生涯にわたる学習および職業技能に寄与する。 音楽における職業や音楽にかかわる職業について学習する。

国立教育政策研究所（2003）『音楽のカリキュラムの改善に関する研究－諸外国の動向－』p.9の表5から転載。なお、4.0美的評価の内容の柱と目標部分は、筆者が和訳をし直した。

## 第2節 4.0「美的評価」(Aesthetic Valuing)の内容

次にCSMの4.0「美的評価」(Aesthetic Valuing)について検討する。そのスコープとシーケンスを表3に示す。

表3 GSMにおける「美的評価」のスコープとシーケンス

学 年	内 容
Prekindergarten	<p><i>意味の創出</i></p> <p>4.1 音楽に反応して動きを創造する。 4.2 音楽活動に自由に参加する。</p>
Kindergarten	<p><i>意味の創出</i></p> <p>4.1 ある特定の音楽について、その音楽に合った動きを創造する。 4.2 はっきりとした目的をもつ音楽（たとえば仕事歌や子守歌のような）に対して、その目的がわかったり、それについて語ったり、歌ったり、演奏したりする。</p>
Grade 1	<p><i>意味の創出</i></p> <p>4.1 音楽をよく聴いて動きを創造する。 4.2 音楽を通して、考えや気分がどのように伝わるのかを述べる。</p>
Grade 2	<p><i>分析と批評的評価</i></p> <p>4.1 ある特定の音楽についての自分の好みを話し合う中で音楽用語を用いる。</p> <p><i>意味の創出</i></p> <p>4.2 ピッチやテンポ、形式、ダイナミクスを表現するために、発達に即した適切な動きを創造する。 4.3 音楽の諸要素が、考えや気分をどのように伝えているのかわかる。 4.4 聴き手として適切な態度で、生の演奏に反応する。</p>
Grade 3	<p><i>分析と批評的評価</i></p> <p>4.1 音楽表現の質を判断するための具体的な規準を選んだり用いたりする。</p> <p><i>意味の創出</i></p> <p>4.2 ピッチやテンポ、形式、ダイナミクスを表現するために、発達に即した適切な動きを創造する。 4.3 ある特定の音楽の諸要素について、それが、特に音楽の考えや気分をどのように伝えているのかを述べる。</p>
Grade 4	<p><i>分析と批評的評価</i></p> <p>4.1 いくつかの音楽表現に対して、それらの質を相対的に判断する際に、具体的な規準を用いる。</p> <p><i>意味の創出</i></p> <p>4.2 表現や芸術作品の性格を述べる。</p>
Grade 5	<p><i>分析と批評的評価</i></p> <p>4.1 対照的な音楽に対して、テンポやダイナミクスの違いを見つけたり分析したりする。</p> <p><i>意味の創出</i></p> <p>4.2 具体的な音楽作品に対して、自分はこの曲が好きだという根拠となる適切な規準を築き、適用する。</p>
Grade 6	<p><i>分析と批評的評価</i></p> <p>4.1 音楽表現や、編曲や即興を含む作品の質や効果を評価するための規準を築き、自分が音楽を聴いたり表現したりするときにその規準を適用する。</p> <p><i>意味の創出</i></p> <p>4.2 いろいろな美的質が、イメージや感情や情緒をどのように伝えているのか説明する。 4.3 特定の音楽作品にある美的質がわかる。</p>
Grade 7	<p><i>分析と批評的評価</i></p> <p>4.1 音楽表現や作曲された作品の質や効果を評価するために規準を用いる。 4.2 表現や作曲された作品、編曲作品、即興の質や効果を評価するために、音楽のスタイルまたはジャンルに合った規準を、自分自身や他者と適用する。</p> <p><i>意味の創出</i></p>

		4.3 特定の音楽作品における1つの表現と、同じ作品による別の表現について、その違いを比較し対照化させる。
Grade 8		<p><i>分析と批評的評価</i></p> <p>4.1 音楽表現や作品の質や効果を評価するために詳細な規準を使い、自分が音楽を聴いたり表現したりするためにその規準を適用する。</p> <p>4.2 表現や作曲された作品、編曲作品、即興の質や効果を評価するために、音楽のジャンルやスタイルに合った詳細な規準を、自分自身や他者と適用する。</p> <p><i>意味の創出</i></p> <p>4.3 人々は、どのようにして、そしてどのような理由で、アメリカに存在する異なった音楽文化から生まれた音楽を使ったりそれに反応したりするのかを説明する。</p> <p>4.4 アメリカに存在する少なくとも2つの異なる音楽文化から生まれた音楽作品について、そこからイメージを描いたり感情や情緒を呼び起こしたりしてきた方法を比較する。</p>
Grade9～ Grade12	Proficient	<p><i>分析と批評的評価</i></p> <p>4.1 表現や作曲された作品、編曲された作品や即興の質と効果について詳しい批評的評価をするための具体的な規準をもち、これらの規準を自分が音楽にかかわるときに適用する。</p> <p>4.2 表現や作曲された作品、編曲された作品や即興を、模範的なモデルを用いてそれぞれを比較することによって評価する。</p> <p><i>意味の創出</i></p> <p>4.3 ある特別な文化の中にいる人々が、その文化の中から生まれた音楽作品をどのように用い、反応しているのかを説明する。</p> <p>4.4 いろいろな文化から生まれた音楽作品について、イメージを描いたり感情や情緒を呼び起こしたりしてきた方法を述べる。</p>
	Advanced	<p><i>分析と批評的評価</i></p> <p>4.1 作曲家の意図がどのように音楽作品に反映され、どのように音楽に用いられているかを比較し対照化する。</p> <p><i>意味の創出</i></p> <p>4.2 ある特別な文化の中にいる人々が、どのように、そしてどのような理由で、その文化から生まれた音楽に反応し、音楽を用いているのかを分析し、説明する。</p> <p>4.3 いろいろな文化から生まれた音楽作品について、イメージを描いたり感情や情緒を呼び起こしたりしてきた音楽の方法を比較し対照化する。</p>

## 1. 内容

「美的評価」は、Prekindergarten から Grade12 まですべての学年において示されており、その内容は「意味の創出」(Derive Meaning) と「分析と批評的評価」(Analyze and Critically Assess) という2つのカテゴリーに分けられている。そして学年段階におけるその趣旨が次のように示されている。

### Prekindergarten～Grade5 :

Students critically assess and derive meaning from works of music and the performance of musicians according to the elements of music, aesthetic qualities, and human responses.

(音楽作品や音楽家の演奏を、音楽の諸要素や美的特質や人間的な反応によって、批評的に評価し意味を創出する)

### Grade6～Grade12 :

Students critically assess and derive meaning from works of music and the performance of

musicians in a cultural context according to the elements of music, aesthetic qualities, and human responses.

(音楽作品や音楽家の演奏を文化的背景と関連づけて、音楽の諸要素や美的特質や人間的な反応によって、批評的に評価し意味を創出する)

この趣旨より、以下のことがわかる。まず、「美的評価」の目的は「音楽作品や演奏に対して批評的に評価し意味を創出すること」である。そのための方法は「音楽の諸要素や美的特質や人間的な反応」である。これらの意味をさらに具体的に理解するために各学年に求められている「意味の創出」と「分析と批評的評価」が示す内容を検討してみる。

## 2. 「意味の創出」 (Derive Meaning)

「意味の創出」はすべての学年に示されている。まず、Prekindergarten から Grade3 までは、音楽に反応して動きを創造することを求めている。その動きの創造も、Prekindergarten では即応的な反応、Kindergarten では音楽の特徴に合った動き、Grade 1 では「音楽をよく聴いて」、すなわち音楽の特徴からそれに合った動きを考えて動く、というように段階を設けている。また、Grade2 と Grade3 では、ピッチやテンポ、形式、ダイナミクスという具体的な音楽の要素に対して反応し、それに合った適切な動きを創造することを求めている。加えてこの 2 学年では、諸要素によって音楽の考え(主張)や気分(雰囲気)がどのように伝えているかがわかり (Grade2)、それを述べる (Grade3) ことをさせている。以上より、ここまでの段階で「意味の創出」ができるようになるための基礎として、音楽の形式的側面である諸要素を知覚し、その諸要素が生み出す内容的側面を感受させることを求めていることがわかる。

さらに Grade4 では、音楽の全体的な特徴としての性格を把握し、Grade5 では、自分にとっての音楽の意味を見出すための規準をもたせることを求めている。ここでは、ただ「この音楽が好きだ」ということよりも、「好きだという根拠」を言語で述べさせることにより、音楽を評価するための規準を確保することを重視していることが特徴的である。また、その規準が前学年までに身につけさせた諸要素に対する知覚によって築けることをうかがうことができる。

以上を踏まえて Grade6 では、音楽の美やその美とイメージや感情や情緒の表現の関係を、これもまた言語で説明できることを求め、Grade7 ではその発展として複数作品の比較ができるようにさせている。

Grade8 以降になると、音楽の文化的側面として音楽が生み出された背景や、それと音楽の内容的側面との関連を理解・感受できるように求めている。そして高等学校段階 (Grade9 ~ Grade12) では、音楽を創造した人間の創造理由を考えさせたり、そのことと音楽の内容的側面との関係を複数の音楽作品と比較・対照させたりすることを求めるなど、高度なものとなっている。このことは、前章までに論じてきた、音楽鑑賞の批評において認識させるべき「作品そのものの価値」と「芸術作品を創造する時の人間の精神」と一致する。

以上、CSM における「意味の創出」のスコープとシークエンスから見出されたことは、以下の 3 点に集約される。

- ① 音楽の形式的側面の知覚、内容的側面の感受、文化的側面の理解が内容となっている。
- ② 諸要素を限定しない即応的な反応から、特定の諸要素に対する知覚、そしてその諸要素がもたらす内容的側面の感受、さらに文化的側面として音楽が生み出された背景、音楽を創造する時の人間の精神を、内容的側面の感受と結びつけて思考し理解するシーケンスが認められる。
- ③ 以上の能力は、初期では動きによって、そして次第に述べたり説明したりという言葉を用いた表出を求めている。

### 3. 「分析と批評的評価」 (Analyze and Critically Assess)

この「分析と批評的評価」は、Grade2 以降に示されている。まず Grade2 では、「音楽用語を用いる」ことが示されている。単に音楽についての自分の好みを話すだけではなく、そこで音楽用語を用いることによって、客観的で分析的な音楽批評の足場を築いているように考えられる。

さらに Grade3 以降では、音楽の質に対して主観的な判断ではなく、質を判断するための具体的な規準を備え、それを活用して音楽を評価できるように求めている。この規準は、例えば、Grade5 で「テンポやダイナミクスの違いを見つけたり」とあるように、「意味の創出」で求める音楽の形式的側面の知覚や、内容的側面の感受がその規準に関連していることがわかる。

また、Grade7 以降では、音楽と関わる「自分」や自分と活動を共にする「他者」の存在を掲げており、それぞれの規準によって行われる音楽と、それを共有することを求めている。また高等学校段階の Advanced では「作曲家の意図」について思考することを求めており、これもまた「意味の創出」と関わって、音楽を創造する時の人間の精神についての思考とそれに基づく評価であると考えられる。

以上、CSM における「分析と批評的評価」のスコープとシーケンスから見出されたことは、以下の2点に集約される。

- ① 美的評価として必要となる判断規準の備えとその活用が一貫した内容となっている。
- ② 音楽用語を用いることから始まり、規準の適応、自分自身にとっての規準の確立、その規準を用いた様々な音楽に対する質の評価、作品における作曲家の意図の反映の理解と連なるシーケンスが認められる。

### 第3節 カリフォルニア州立大学デビッド・コナーズ教授が語る「美的評価」の意図と実践の現状

以上、CSM をその書面から検討してきたが、実際のカリフォルニア州では 4.0 「美的評価」 (Aesthetic Valuing) がどのように実践されているのか、また、その趣旨や意図、具

体的な指導方法を把握するために、同州の音楽科教育研究者、デビッド・コナーズ (David Connors) カリフォルニア州立大学教授にインタビューを実施し、情報を得た。氏は CSM に準拠したシルバー・バーデット社の音楽教科書『Music Making』カリフォルニアエディションの編著者の一人であり、正確な情報が得られるものとして実施した。

## 1. インタビューの結果

期日：2008年6月2日(月) 10:00～11:00  
場所：カリフォルニア州立大学ロサンゼルス校  
インタビュアー：宮下俊也  
翻訳：宮下俊也

### 質問 1

カリフォルニア州では、4.0「美的評価」について現在どのくらい実践されているのでしょうか？

How California Public Schools are implementing standard especially 4.0?

### 回答 1

いい質問ですね。それではまず、このスタンダードの背景を少しだけ話します。

(a)現場の音楽の教師は、一般に、自分たちが過去に教えられてきたように子どもたちに教えています。研究によっても、その傾向があることが立証されています。教師の意識の変化はとてもゆっくりなので、私たち大学教員が教師に意識の変化をもたらすために、大学では Preparation program (実践的な指導を改善するための教育プログラム) を実施しています。しかし、できることなら、大学が独自の教育改善プログラムを作って学生に教えていくべきだと考えます。

(b)スタンダードの7番、4.0は、おそらくあまり実践されていないものの1つでしょう。理由として、やはり、(c)現在の現場の教師にとってそれを自分が過去に受けてきた経験がないということ。そして、(d)教員養成においても、それをこれまで学生に教育してこなかったということが挙げられます。ですが、(e)現在は教師教育のプログラムの中でも、これはとても重要な部分として取り上げており、音楽教育の大学院の授業においても、その導入で大事なものとして扱っています。ですから(f)4.0は、実は、これからの教師に期待されるものと言えるでしょう。

大学1年生では、学校観察に行った時、4.0がどう実践されているのかを観察します。また、私たち大学教員は、その教師がそこで何をどのように指導したかを評価するのですが、実は、まだそれを評価する仕組みができていません。ですから、すぐ評価できることの1つとして、(授業の中で強調していることだが、)先生の発問の技術を見ます。それから、教師が子どもとやりとりをしている時、教師が自分の価値観を子どもに伝えるのではなく、子どもに対して、歌った曲、演奏した曲、自分たちの活動、オルフ楽器や吹奏楽器について、またそれを演奏しているときにどのようなことが起きたか、などをいろいろ批判的に聞き、それについて評価や判断をさせていたかどうかを見ます。

私は学生に、伝えることは教えることではないということ、子どもに教えても彼らがその概念を学び吸収するとは限らない、ということを経験したこととして、いつも言っています。こうした指導によって、教師は発問の技術について意識するようになり、歌った後に、子どもに「自分たちの歌、どうだった？」と問うようになってきました。おそらくカリフォルニアにおいて、このようなことが昨今の最も大きな変化であると思います。

こうしたことは、子どもたちにとって、芸術を評価するための基本的な経験になります。根拠と結びつけるということは重要なことです。しかし、就学前の子どもや幼稚園児には（スタンダードに基づいて）「どうだった？」「どうやって演奏していた？」と尋ねることはできませんが、それに対して子どもたちは「よくできたよ！」と答えるだけでしょう。あるいは「どうだった？」と聞けば、「とてもよかった。今までで一番よかった」などと答えます。それは、彼らが音楽を評価することの基本を知らないからで、教師はもっと具体的に「一緒に歌い出せましたか？」「みんな正しい言葉で歌っていたかな？」「みんな正しいメロディーやリズムで歌っていたかな？」などといった問いをしなければならないと思います。

私が実際に子どもたちに発問して発見したことは、ただ「どうだった？」と聞けば、「わからない」と答えるということです。またそれに続いて発問すると、「うん。全部よかったよ。」とか「大丈夫だった。」などとすぐに答えます。また、子どもたちが「わからない」と答えたとき「なぜわからないの？」と聞いても、子どもたちは「聞いていなかったから」などと大体はそう答えるものです。しかし、それらは子どもたちの学びにはなっていないことの表れにすぎませんし、そのようなやりとりだけでは教育として不十分です。繰り返しになりますが、教師は、ただ伝えるだけでは子どもたちの学びを育成できません。必要なことは、「もう一度やってみて。今度はよく聴いてね。」というようにフィードバックさせながら深めていく指示や発問をすることです。

(g)特にこの 4.0 が難しい理由の 1 つは、リスニングの技術と密接に関わっていることです。 私たちは、もし、音楽の評価を批判的にしていくのであれば、リスニングの技術を本当に発達させなければなりません。世界には、たくさんの音楽があふれているのに、それをリスニングの対象としていないのは残念なことです。テレビ、車のラジオ、店の中、ビデオゲームの中など、いろんなところから音楽が聞こえてくるにも関わらず、私たちはそれを注意して聴こうとしません。音楽を聴くことをやめることは生きていく上で必要な一種の防衛ではありますが、しかし、私たちは「聞く」ということにもっと焦点をあてなければいけないのです。つまり私たちは、子どもに音楽を聴くことについて再訓練させなければいけない。なぜなら、彼らは音楽をどうやって聴くのかを忘れてしまっているからです。リスニングスキルが必要なのです。ですから音楽の授業では、もし子どもたちが音楽を聴けていなかったら、目的を具体的に示して、例えば「鉄琴を正しい音で叩けていましたか？」「ドラムは正しいリズムで叩けていましたか？」「～について注意して聴いてくださいね」などのようなタイプの発問をすべきだと思います。

他の指導方法として、クラスを半分に分けて、1つのグループは歌い、もう1つのグループはリズム伴奏をさせ、終わった後にリズム伴奏をしていたグループに対して「歌のグループはどうだったか」と問うようなことをさせます。多くの場合、「聴いていなかったからわからなかった。」となることが多いのですが、そうしたら、もう一度やってみて、今度は歌のグループに他のグループの演奏について答えさせることをします。「リズム伴奏のグループはどうだ

ったか」「みんな一斉に音が出せていたか」「正しいリズムでできていたか」などについて聞いたりします。こういうように、他のグループの演奏について聴くことで、リスニングスキルを上げることができます。そして、そのうちだんだんと彼らは音楽用語を獲得することになっていきます。

それと同時に、私たちは、「美の質」についても彼らに問うていかなければなりません。例えば、「歌とリズム伴奏ではどちらが重要ですか？」と聞くと、ふつう子どもたちは「どちらでも自分たちがやっていた方」と答えることが多いです。しかし重要なことは、主旋律と伴奏部分については、どちらが強く、どちらが弱く演奏するべきかなどを判断できるようにさせていかなければなりません。

このようなことを通して、音楽を聴き、判断する力をつけていきます。このパートが正確に音が出せた、という判断だけではなく、弱く演奏していたか、ダイナミックはどうだったか、指揮や伴奏に合っていたか、といったように要素に対する音楽の判断ができるようにさせていかなければなりません。

ところで、あなたが質問したい内容の基本は、カリフォルニアの学校で4.0がどれだけ実践されているかということですね？ (h) 私が、今、説明してきたことは、一朝一夕にできるものではなく、長い過程が必要です。多くの経験を与え、すぐれた発問技術を用意し、美の質を理解させた上で、子どもは自分自身の演奏についてそれらを聴いたり、判断したりすることができるようになるのです。 (i) カリフォルニアの多くの学校では、音楽の授業時数が非常に少なく、授業時間も短いため、4.0は後回しになってしまっています。教師は、自分の指導技術の向上を目指し、音楽の技術も高めようとしています。しかし、この4.0が実践されている学校は、常勤で専任の音楽教師がいる公立学校、あるいは週5日ずっと学校にいて週に1度はどのクラスも指導する音楽教師がいる学校だと思います。しかし不幸なことに最近そうした学校は稀です。私立学校にはそうした教師がたくさんいますが。公立学校は、学区が音楽教師に対して1週間に1日分しか給料を払えない現実があります。学校側は週に2日分の給料を要求し、それが認められているところもありますが、これも稀です。だから、何年かにわたって継続して同じ学校に勤務し、同じ子どもたちを教えることができないので、新しい学校に赴任するたびに、最初から4.0よりも音楽リズム指導などを優先してやり直さないといけないということになります。

以上のような要因から、(j) この4.0が実践されている学校は、実はとても少ないのが現状です。なお、私立学校や常勤音楽教師がいる公立学校では、このスタンダードに焦点をあてて授業が行われているようです。

## 質問2

カリフォルニアの音楽の先生たちは、「美的評価」についてどのような指導方法を取っているのでしょうか？

How music teachers teach 4.0 in kindergarten, elementary school, middle school and high school?

## 回答2

(k)低年齢の子どもには、自分たちの歌について、歌詞、リズム、ピッチ、イントネーションはどうだったかを評価させ、語らせます。年齢が上がると、フレージング、ブレスの方法、ダイナミクス、音楽の表現について、また、どんなことを表現している音楽なのか、などに注目させます。そして、即興表現について言えば、例えば、物語の音楽に伴奏をつけるような場合、子どもは、作曲や即興表現したものの中に、動きや感情を率直に表します。

一方、(l)年齢が高い生徒たちには記録を取らせることもできます。また、仲間同士の批評は重要で、2つのグループやチームの中でペアを作り、互いに歌い合ったり演奏し合ったりして、互いに批評し合います。そこでは、どれくらい課題が達成できたかや、音楽をもっとよくしていくための提案を、お互いにし合うのです。

私は、音楽を「改善する」という言葉は好きではありません。なぜなら、表現した人には、自分の表現はとてもよかったという印象をいつももってほしいし、次にどのようにしたら、もっと違う表現ができるか、感情や音楽表現を、どうやったらもっと違う表現で伝えられるかを、考えてほしいのです。

中学校、あるいは高校の初期の段階で始められる合唱や吹奏楽についてですが、カリフォルニアの高校のカリキュラムは、演奏中心で、ほとんどの高校の音楽の授業は、演奏を中心に行われています。(m)この場合、4.0は、ポートフォリオが一般的な方法となっています。例えば、合唱では、初見やリズム読みなどをし、生徒は自分自身で評価していきます。また、アルトは他パートとどう調和していたか、母音はどうだったか、などを聴かせ、それができていたかどうか、を評価し、その記録を取り続けることなどをさせます。そして、教師の適切な発問技術で始め、グループごとや個別で評価させ、そして、それらの技能を自分たちの演奏だけでなく、他の演奏を聴いてどうだったかなども評価できるようにしていきます。

例えば、生徒にワークシートを持たせ、それに記入していくような方法もとります。合唱を聴かせる場合、そこには、発声、イントネーション、フレーズの作り方、呼吸などの演奏技術、またこの合唱団の表現方法や奏でられる音について記述させます。それを見ると、合唱団をどのように見て、どんな表現をしていたかを聴き取れていたかがわかります。これは、初歩的なポートフォリオになります。しかしここでは、ただ「とても楽しかった。よかった。」とだけ記述することは認められません。(n)なぜ楽しかったのかという根拠を伝えなければならず、それをもとに、楽しかった根拠として音楽の仕組みが反映されているかどうか、あるいは表現の質などについて話し合うことになります。そしてそこで記述の技術など芸術の批評の学習をさせることになります。

### 質問3

音楽教育を通して、言葉によって感情を表現するという力はどのようにして発展していくのでしょうか？

How do children develop the language to express their opinions or their criticism of music?

### 回答3

(o)初期段階では、子どもたちは、いろいろな経験をしなければなりません。経験をした後、ラベリングをしなければなりません。例えば、幼稚園では、教師がライオンやトラなど音

を出す動物の絵を見せます。そして、「この動物はどうやって鳴くのかな？」と聞くと、子どもたちは大きな声で「ガオー」と出しますね。そしてその時、教師は、その声に対し、「それは『大きい音』だよ」とラベリングします。そしてそこで、「大きい」という語彙を教えることができるのです。反対の「小さい」も同様です。そして、歌うことへ戻っていきます。「大きい」という新しい語彙を習得したので、「ライオンみたいに大きな声で歌えるかな？」と、教師が言うと、子どもたちは、とても大きな声で歌うことができます。そして、教師は再度、「大きい」という語彙を確かめていくのです。反対に小さい声でもやってみるのです。先に経験させ、後でラベリングする、という順番ですね。何人かの子どもに歌わせて、「ライオンみたいに歌っていたかな？」「小さいネズミみたいに歌っていたかな？」と聞いてみます。そして、「大きな声で歌っていたね」「小さな声で歌っていたね」と、確かめていくのです。

さらに学年が上がると、イタリア語でのフォルテ（大きいという代わり）、ピアノ（小さいという代わり）を教えていきます。(p) その概念を用いて、子どもに歌わせ、ラベリングしたり、子ども同士で聴き合ったり、説明させたりします。そうやって、子どもたちは、ダイナミクス（クレッシェンドやデクレッシェンドなど）についても経験することができるのです。そうしてたくさんの経験を得ることによって他の音楽の鑑賞も可能になります。「この音楽からどんなことが聴き取れたかな？」「オーケストラはだんだん大きく演奏していたよ」「どんな音楽用語を使うかわかる？」「クレッシェンド。そうだね。クレッシェンドだね」といった、やり取りの中で、子どもたちは音楽用語を獲得していくのです。「大きいっていうのはフォルテと呼ぶんだよ」と伝えるだけでは、良くありません。経験を伴わせなければいけないのです。

高校の合唱でも同じことが言えるでしょう。カリフォルニアの高校では、音楽の背景と結び付けて合唱を教えています。ダイナミクスのような概念を用いているいろいろな経験を与えることができます。そして、(q) 教師は音楽用語を教え、生徒たちはそれに基づいて、音楽を判断したり、経験したりすることができるようになるのです。高学年の生徒には、「なぜそう決めたのか？」「なぜここで大きく、あるいは小さく、クレッシェンドで、あるいは、デクレッシェンドで歌うと決めたのか」と問うことができ、「この歌詞の場面では、大きくすべきだと思う」などと応えられたら、いい判断ができた、と言えるでしょう。

#### 質問4

「美的評価」を指導することは重要なことだと思いますが、とても難しいことなのでしょうか？ また、どういう点が難しいのでしょうか？

What are the difficult and the important ones for teaching 4.0?

#### 回答4

(r) 最も重要なことは、子どもの音楽判断を受け入れるということです。教師の傾向として、子どもに音楽を聴いたり、判断したりさせずに自分が伝えてしまうということが言えます。例えば、「どうしたらこの歌詞の内容を表現できる？」とか、「テナーの母音はどうだった？」というように、彼らの判断を聞いてあげることです。重要なことは、教師が伝えるのではなく、聞くことなのです。そして、4.0が難しいのは、(s) そのようなことを、短い授業時間の中でしななければならない、ということでしょう。

## 質問5

このカリキュラムによって、子どもたちの音楽の能力はどのように変化していくと思われ  
れますか？

How has the children's ability changed since the adoption of this curriculum?

## 回答5

とても大きな変化があったと思いますよ。教育が、学習者主体のものとして焦点化され、教師が、子どもの音楽技能の発達に注目するようになってきました。また、即興や作曲にも注目するようになってきました。その実践も増えています。そして、4.0 もです。多くの教師が自覚し、カリキュラムの細部に注目するようにもなりました。授業時数はあまりないけれども、たとえ授業プログラムの一部であっても、実践されることが理想だと思います。

子どもたちは、音楽家のバックグラウンドに興味があります。だから私たちは、歌うこと、演奏すること、読譜、聴くこと、そして4.0の評価などを相互に関連させ、歴史的文化的背景に注目してきました。知識的なことについては、以前は注目されてきましたが、今は、少ない教材で焦点的に学ばせた方がいいということに気づいてきました。小学校では、歌を学び、歌います。そしてそれが別の授業で、オルフ楽器や打楽器を使って、創造的に音楽をつくっていく学習へと発展していきます。また、B部分をどのように即興的につくって、ABAの流れにしたらよいか、という学習にもつなげていくことができます。また、どこの国や州の音楽かを歴史的・文化的に見てみたり、誰が、どんな時期に、どこで歌っていたのか、などの詳細を加えて学ぶことができます。例えば、1年生のかくれんぼといったゲームで、かくれんぼが存在する他の国とのつながりを考えさせることができます。そして、4.0に移行し、他の曲を聴いたり、グループで、ともに創作していったりします。曲を一緒につくるためにどんな工夫をしたか、どんな楽器を使ったか、リズムを使ったか、ハーモニーはどうだったか、など、こうしたことは、音楽技能を高めるためにもとてもいいことであると思います。

(t)カリフォルニアの学校では、スタンダードを教室に掲示しなければなりません。ロサンゼルスに行ったら、壁にちゃんと掲示されていますよ。スタンダードに使われている言語は、どの学年にとっても、どの学校にとっても、適切でわかりやすいものになっています。子どもたちも、教室でスタンダードを見、一緒に語り合います。教師と子どもは、協力し合っていかなければなりません。教師と子どもがいっしょになって、共に、学習をつくっていくのです。

## 2. インタビューから得られた知見

以上のインタビューより得られた知見を以下にまとめる。なお、( ) はインタビュー中の下線の記号を表す。

### (1) カリフォルニア州における「美的評価」の実践状況について

CSMは、各学校に掲示しなければならないほど周知はされているが(t)、特に公立学校では「美的評価」についての実践はあまりなされていない(b) (i) (j)。その理由として以下の5点がある。第1は、多くの現場の教師は自らが受けてきた教育に強く支配されてしまう傾向があり、かつて学んだことのない「美的評価」を指導することができない状況ある

こと(a)(c)。第2は、これまでの教員養成において「美的評価」についての教育が行われてこなかったこと(d)。しかし、昨今では教員養成の大学院においてもそのことを扱うようになってきており(e)、「美的評価」の実践は今後期待される場所である(f)。第3は、その指導が音楽のリスニングについての指導と関わっているため、リスニング指導の難しさが「美的評価」の指導の難しさとなっていること(g)。第4は、「美的評価」の指導では教師の発問の技術が重要で、それは短期間の経験では会得できないものであること(h)。第5は、財政的・行政的な面により、音楽の授業時数が少なかったり、継続して同じ子どもを指導することができなかつたりという理由で、「美的評価」の取扱いが後回しにされてしまうこと(i)。これらが「美的評価」の実践が低調であることの原因としてデビッド氏は述べていた。

#### (2) 「美的評価」に対する指導方法について

幼稚園や小学校低学年の子どもには、歌詞、リズム、ピッチ、イントネーション、フレーズ、ダイナミクスといった音楽の諸要素や、表現方法に注目させ、自分たちの歌について評価し、その結果を語らせる方法を取る(k)。小学校高学年になると、互いの演奏を評価したり、それを記述したりすることをさせる(l)。中学生や高校生には、自分たちや他の演奏に対してより高度な視点で評価し合い、それをポートフォリオとして記録させる(m)。その時、評価に対しては必ずその根拠を見ようとする(n)。

#### (3) 言語によって表現することについて

CSM に示されている言語による表出については、音楽概念の獲得において経験を通してそれにラベリングすることの重要性をデビット氏は指摘している(o)。低年齢の子どもには、そのことを通して音楽概念についての語彙を獲得させ(o)、年齢が上がると、その語彙を用いて音楽を評価させていく学習を挙げている(p)。高等学校では、音楽用語を適切に用いて概念を語り、音楽の背景と結びつけて判断や評価を行う学習を述べている(q)。

#### (4) 「美的評価」に対する実践の難しさについて

「美的評価」は難しいという観念から、それを子どもにさせる前に、教師が自ら「美的評価」を行い、その結果を子どもに伝えてしまうという傾向がある。そうすることなく、まず子どもにそれを問うことが重要なのであり、教師が犯しやすい点であることを指摘している(r)。さらに限られた短時間の中で行わなければならない時間的制約も困難にしている要因である(s)。

### 第4節 CSMにおける「美的評価」と「音楽鑑賞学習における批評の構造」との関連

ここまで、米国カリフォルニア州の音楽カリキュラムCSMにおける「美的評価」を、当地の音楽教育研究者からの情報を含めて検討してきた。この第4節ではその結果を総括し、第2章で提出した「音楽鑑賞学習における批評の構造」や「批評の思考過程」と関連づけ

て新たに得られた知見を明確にする。

## 1. 「美的評価」の特色

CSMにおける「美的評価」の特色を総括すると、以下の6点にまとめられる。

### ① 「美的評価」の意義

「美的評価」の意義は、「音楽作品について反応し、分析し、判断をすること」であり、目標は「音楽の要素や美的質や聴き手の反応によって音楽作品や音楽家の演奏を（文化的背景と関連づけて）批判的に評価し意味を見出す」ことである。このことは、第1章の哲学的概念と一致している。

### ② 「文化的背景」との関連

低学年（Prekindergarten～Grade5）では、「音楽作品や音楽家の演奏を、音楽の諸要素や美的特質や人間的な反応によって、批判的に評価し意味を創出する」ことを趣旨とし、高学年（Grade6～Grade12）では、「音楽作品や音楽家の演奏を文化的背景と関連づけて、音楽の諸要素や美的特質や人間的な反応によって、批判的に評価し意味を創出する」こととなる。すなわち、高学年では音楽の「文化的背景」と関連づけた評価が加わっている。

### ③ 知覚・感受・理解と判断のための規準

「美的評価」の内容は「意味の創出」と「分析と批判的評価」の2つであり、前者は「美的評価」の基礎として、音楽の形式的側面の知覚、内容的側面の感受、文化的側面の理解を求めている。またそこには、諸要素を限定しない即応的な反応から、特定の諸要素に対する知覚、そしてその諸要素がもたらす内容的側面の感受、さらに文化的側面として音楽が生み出された背景、音楽を創造する時の人間のイメージーションや感情を、内容的側面の感受と結びつけて思考し理解するシーケンスが認められる。また初期では動きによって、そして次第に述べたり説明したりという言葉を用いた表出を求めている。後者は、美的評価として必要となる判断規準の備えとその活用が一貫した内容となっており、初期では動きによって、そして次第に述べたり説明したりという言葉を用いた表出に連なるシーケンスが認められる。

### ④ 音楽の概念の獲得

「美的評価」について子どもに言語で表出させることは重要であり、特に、低年齢の子どもには、そのことを通して音楽概念についての語彙を獲得させ、年齢が上がると、その語彙を用いて音楽を評価し、また高等学校では、音楽用語を適切に用いて概念を語り、音楽の背景と結びつけて判断や評価を行うことが重要とされている。

### ⑤ 言語による表出

「美的評価」の実践では教師の発問技術が重要になる。またその発問によって求める子どもの語り（発話）や、高学年では記述や記録が「美的評価」のための学習活動となり、それが音楽批評のための学習となる。

### ⑥ 根拠の要求

特に中学生や高校生においては、生徒が行った「美的評価」についてその根拠を求めることが必須となる。

## 2. 「音楽鑑賞学習における批評の構造」に対応させた検討

CSMでは、日本のような表現と鑑賞の2領域にはなっていない。したがって「美的評価」はすべての音楽学習において求められる。しかしデビッド氏も述べたように「美的評価」は音楽鑑賞と深く関わっている。第1章で定義した音楽鑑賞の意義のうち、「鑑賞者が能動的・積極的に音楽の価値を認識し、音楽に対して新しい意味を発見する創造的な行為である」ことについて「美的評価」はそれを満たすことになる。なぜなら「美的評価」における「意味の創出」がそれと一致するからである。

また Grade3 までに示されている諸要素に対する反応や知覚、Grade6 の 4.3「特定の音楽作品にある美的質がわかる」のような諸要素がもたらす質の感受、さらには Grade8 以降に示されている音楽の文化的背景についての思考が「意味の創出」のために必要な内容とされており、そのことは第2章で規定した音楽を認識するための形式的側面の知覚、内容的側面の感受、文化的側面の理解という音楽的思考と一致する。すなわち、音楽の認識と音楽的思考によって音楽の意味の創出を実現するという理念的枠組みが先の定義と一致する。

一方、批評の定義である、規準を用いた価値の判断とその主張についても、「美的評価」はその意義を満たしている。すなわち、Grade2 以降の「分析と批評的評価」において示されているように音楽の質や効果、また「音楽を創造する時の人間のイメージーションや感情」を批評の対象とし、それを判断するための規準の用意や活用をさせ、そして言語で説明させることを求めている。

さて、本研究がかかわる中学校における鑑賞の批評について、CSM の「美的評価」から得られる示唆は次のように焦点化される。

第1は、Grade8 以降に示されているイメージや感情や情緒についてである。CSMでは「意味の創出」において、音楽作品において「イメージを描いたり感情や情緒を呼び起こしたりしてきた方法」を思考することが示されているが、このことは、鑑賞者自身が鑑賞によってイメージを描いたり感情や情緒を呼び起こしたりする経験を通して為されるものであると考える。例えば「自分はこの曲を聴いてこのように感情が変化した」という経験の自覚があってはじめて思考できるものであろう。それを Grade8 以降で求めている CMS のように、日本の中学生においても自分の感情や情緒の変化を批評に反映させることを求めるべきであると考ええる。

第2は、教師の発問と子どもの発話による対話、そしてそれが学年段階に即して記録や記述へと発展する主張の方法である。このことは、発達段階にともなって発話から記述へと移行させていくことと同時に、発話を経て記述へと移行する批評の過程として捉えられなければならない。平成20年告示の日本の学習指導要領では言語活動の重視が掲げられたが、やはり CSM のように小学校から鑑賞において批評を扱い、その中で発話を経て記述へと至るプロセスを重視しなければならないという示唆がここから得られる。

### 第5節 カリフォルニア州ミドルスクールの音楽教員が語る「美的評価」と鑑賞教育の実践

次に、カリフォルニア州の公立中学校（ミドルスクール。G6～G8）<sup>7</sup>で音楽を担当する教諭に対してインタビューを行い、実践者としての立場として「美的評価」についてどのような見解をもっているのか、聞き取ったことを報告する。インタビューを行ったのは、シナロア・ミドルスクール（Sinaloa Middle School）のノ C. ノーデル（C. Nordal）教諭、ロス・セリトス・ミドルスクール（Los Cerritos Middle School）の D. ブレイク（D. Blake）教諭、フロスト・ミドルスクール（Frost middle school）の P. カルドザ（P. Cardoza）教諭の 3 氏である。

### 1. C. ノーデル教諭に対するインタビュー結果

期日：2009 年 9 月 23 日（水）8:45～9:30

場所：シナロア・ミドルスクール

インタビュアー：宮下俊也・大熊信彦

宮下：貴校には「音楽探検」（Music Exploratory）という授業がありますが、これは鑑賞ですか？

ノーデル：そうですね。鑑賞です。その通りです。初年度の初めに、全ての楽器をバンドやオーケストラを取っている生徒たちに紹介し、何人かは、好きな楽器がないので、その授業をあきらめて、ビギニングバンドに移ります。それはいいことだと思います。今年は、全部の楽器を見させて、5 人の生徒がビギニングバンドに移りました。それから、2～3 日前にちょうど始めたことですが、(a) 楽器や声に関するクイズ（音楽の基礎知識に関わること、メロディー、ハーモニー、形式など）を行い、音楽史に関わることもやっています。（資料を取ってきて見せながら）中世のヨーロッパ史における中世音楽、そして音楽の基礎に関すること（テンポやダイナミックの記号など）が載った教材も使っています。また是非お見せしたい（素晴らしい）ホームページがあります。2 年前に初めて教え始めたときには、何のシラバスやガイダンスもありませんでした。だから、インターネットでいろいろな検索をしました。このホームページは、北のカリフォルニア地区にあるシミバレーから 250 マイルほど離れた小学校のウェブサイトなのですが、音楽教育で修士か博士号を持った誰かが、この学区のために作ったウェブサイトです。音楽史のすべてが盛り込まれていて、とても素晴らしいウェブサイトです。私は、この中世時代の部分を使います。これが私の使っている教材です。数ページにわたっていて、これとは別に語彙を書くページも用意してあります。またリスニングの教材もあります。印刷してお渡しいたしましょう。(b) 私は、通常 1 時間に 3～4 曲の音楽を鑑賞教材として使います。タイトル、作曲者、演奏形式を書き込ませ、演奏（テンポや形式など）に関しては、あてはまるものに丸をつけさせています。できていたら、ボーナスポイントを生徒に与えています。今日は、授業で鑑賞教材に関する予備クイズを行います。これは、そのプリントです。これは私のシラバスですが、音楽史について 3～4 時間かけたら、全ての音楽史について学ばせ、その時代の音楽と現代の音楽との関連を探させます。たとえば、中世史では、グレゴリアンチャントについて学ばせ、アカペラで歌ったアメリカ合衆国の国歌を聴かせます。2 曲を比べさせるのです。これが今日やることです。

宮下：4.0 についてはどうお考えですか？

ノーデル：(c) 難しいことの 1 つに年齢のレベルがあります。小さな子どもたちに音楽を判

断させるときに、ほとんどの子どもたちは「嫌いだ。好きだ。」と言います。だからこの授業で注意して教えようとしていることは、良い音楽、悪い音楽というように音楽を振り分けないことです。音楽を選択するのは個人の興味ですから。私の仕事は、彼らに音楽家が音楽を聴くときに使う方法を教えることです。そして生徒が音楽を聴くときに、「これは多声音楽だ」「これは楽器だけの曲だ」というように聴くことができるようにさせることです。また、生徒が普段聴かないような曲を聴かせることも仕事の1つです。今は、中世音楽としてグレゴリアンチャントを聴かせていますが、私は家で座ってグレゴリアンチャントは聴きません。しかし、それが何であるかは知っています。(d) そのようになることが授業の目的です。音楽の特徴を理解させることです。(e) この年齢の子どもたち(中学生)にとっては、「好きか嫌い」だけで、真ん中はないのです。そしてその根拠がないのです。彼らは、質の高い判断手段を、まだ持っていないのです。

宮下：カリフォルニアスタンダードでは、幼稚園から12年生まで「美的評価」があるということに驚きました。

ノーデル：日本では幼稚園から12年生まで音楽教育がありますか？

宮下：はい。

ノーデル：カリフォルニアの、特に小学校においては音楽の授業があまりありません。ほとんどは中学校で始まります。小学校では音楽教育を受けた専科の先生を置く学校はあるようですが、ほとんどの先生が音楽教育のトレーニングを受けていないので、ほとんどの学区の小学校には音楽の授業がありません。しかしとてもよい音楽プログラムを行っている小学校もあります。この州、または国全体で、だいたい数を言うならば、75%の小学校が音楽の授業がないと言えるでしょう。

大熊：日本では、音楽専科でなくても小学校の先生は音楽を教えなければいけません。

ノーデル：専門でなくても全科の先生が教えないといけないということですね。音楽は全ての学校で行われているのですか？

宮下：小・中学校の音楽は必修ですが、高校では芸術科として選択必修制になっています。

ノーデル：中学校は7・8・9年生ということですね。以前は「Junior High School」として7・8・9年生でしたが、今は「Middle School」という名称で6・7・8年生となっています。それが異なる部分ですね。

宮下：小学校は1～5年生ということですか？

ノーデル：そうですね。そして高校は9～12年生です。この地域の学区では、4つの中学校があり、2つの高校があります。2つの中学校卒業生が1つの高校に集まります。しかし、「ミドルスクール」という名称に変換してから、1つの中学校が高校になり、今は、3つの高校があります。だから、3つの中学校から3つの高校に行くという形になっています。しかし、6年生を受け入れる教室が敷地内になかったため、6年生はミドルスクールの教室で授業を受けないといけないということになってしまいました。だから、136名の6年生が今も小学校の敷地内にいますが、彼らはすでに中学生です。この学区だけ特別にそのようになっています。建築の段階で、K～G6（幼稚園・小学校）、G7～G9（中学校）、G10～G12（高校）というように計画して建てられましたから。7・8年生だけが通う学校も存在します（Intermediate school）。これは、カリフォルニアの教育省から2001年に発行された『Taking center stage』という本です。そしてこれは、7・8年生に関してのことです。評価について

も示されています。1980年代には初版『Cut in the middle』が発行されました。その頃の中学校教育について述べられたものです。この本は、カリフォルニアスタンダードに沿って作られたもので、私たちは授業のガイドとして用いています。

## 2. D. ブレイク教諭に対するインタビュー結果

期日：2009年9月23日（水）13:30～14:30

場所：ロス・セリトス・ミドルスクール

インタビュアー：宮下俊也・大熊信彦

宮下：カリフォルニアスタンダードの芸術科は5領域でできていますね？

ブレイク：その通りです。

宮下：4.0は「美的評価」とされていますよね。日本の新しいカリキュラムでは、特に中・高校において初めて鑑賞の中に「批評」が示されました。日本の音楽科カリキュラムは表現と鑑賞の2領域に分かれており、表現領域は、歌唱・楽器・創作に分かれています。日本の新しいカリキュラムでは鑑賞を重視しており、子どもたちが音楽鑑賞をするときに、音楽の諸要素を知覚し、どう考えたか、どう思ったか等を説明させるようにします。今までは、子どもたちは音楽に対してとても受動的で、音楽を聴いて、好きか嫌いかを答えるだけで、批評的な思考は行っていませんでした。そこで、私たちはカリフォルニアのカリキュラムを学び、幼稚園からG12までのカリキュラムにそれがあることに大変興味をもちました。去年、マーフィー先生を日本に招き、私たちの学会でパネリストとして発表してもらいましたし、カリフォルニア州立大学ロサンゼルス校でオルフを研究しているコナーズ教授を訪ね、カリフォルニアスタンダードについてインタビューし、私がマーフィー先生の授業などについて分析しました。

宮下：日本の小・中・高等学校の音楽教師たちは、ソミススクールのマーフィー先生のプレゼンテーションやカリフォルニアスタンダードの4.0の研究によって多くのことを学びました。先生にお伺いしたいことは3つあります。まず、鑑賞の授業は行っていますか？

ブレイク：私は、5つ音楽の授業を持っています。上級バンド、中級バンド、初級バンド、ジャズバンド、そして鑑賞の授業を1つです。鑑賞のクラスは7・8年生のクラスです。他のクラスは6～8年生です。

宮下：鑑賞の授業は、どのように教えていらっしゃいますか？

ブレイク：実は、音楽の鑑賞の授業を教えるのは1年目で、まだ日々授業を行いながらカリキュラムを作っている状態です。そして、子どもたちが何に興味があるのか、どういう授業が楽しめるのかを探っている状態です。今、やろうとしていることは、子どもたちはポップ音楽を聴くことが多く、初めからクラシックや西洋音楽を聴かせることで子どもたちを退屈させたくなかったのです。だから、ポップ音楽から始め、子どもたちがどんな音楽が好きかを見ていきました。また、音楽の構成も確認しました。そして、(f) 音楽を聴いて、どのような気持ちになるか、なぜその音楽を聴くのか話し合わせました。そして、ポップ音楽に関連するジャズやブルースについて今は教えています。音楽や作曲家について教え、前の授業では、クラシックとロックの間である「アートロック」を教えました（クイーンなどの音楽）。それらの音楽を教える中で、クラシックとロックを比べ、クラシック音楽の歴史にも

触れながら話しています。また、彼らに好きな音楽を持ってこさせ、聴いたり、歌詞を書かせたりもします。例えば、ブルースを初めに聴かせ、生徒たちにも歌詞を書かせます。また、パーカッション楽器を弾かせたりもしました。まだ3週間しかたっていないので、あまりできていませんが、これらが今までやってきたことです。(g) これからは、自分たちで研究させたり、インターネットを使ったりし、作曲家や作詞家について理解させる授業も取り込む予定です。それが今行っていることです。(h) 100年、あるいは200年前に書かれた音楽も今の音楽と感情的に繋がっている部分はあります。今は、音楽をCDやラジオで聴けますが、感情表現はあまりなく、みんな同じように聞こえます。現在子どもたちはipodにポップ音楽ばかり入れていますが、クラシックには、売れる、売れないという価値観以上に、たくさんの感情が含まれています。

宮下：カリフォルニアの中学生と生活との関わりはどのようにですか？

ブレイク：そうですね、音楽と生活には関係があります。(i) 音楽表現活動をあまりしないで聴いているだけの子どもたちにとっては、BGMやダンス音楽を聴くだけに留まっています。しかし、私たち音楽家にとっての音楽とはもっと大きなものです。鑑賞教育においては、(j) 音楽家でない子どもたちに音楽家が考えるようなことを学ばせるのが挑戦です。私たち教師は、表現と音楽の関連や表現の価値（ポップ音楽だけでは学べないもの）を教える必要があると思います。

宮下：その考え方は日本の鑑賞教育の目的と同じです。日本の中学生も家で音楽を聴くことが好きですが、学校で音楽を教える理由の1つは感情表現を豊かにさせることです。日本の鑑賞の目的の1つは、音楽の諸要素を知覚させること、2つ目はそこからイメージをもって質を感じ取らせること、3つ目は、楽曲全体の特徴を捉えて批評すること、4つ目は、音楽史や総合芸術等の知的な事項と関連づけて理解させることです。

ブレイク：これは、私が初めて鑑賞のクラスを受け持つことになった時に、音楽に影響する事項をリストアップしたものです。例えば、文化は音楽に影響します。(k) アフリカ音楽は、また日本の音楽とは違いますよね。それは、楽器が違うからです。アフリカ音楽は、ほとんどドラム音楽で、パーカッション楽器を用いることが多いです。なぜなら自分自身で作れるものだからです。アメリカ音楽は、電子楽器やエレクトリックギターを用いた音楽が多いです。科学技術は、文化とともに発展します。それから、歴史、楽器の材料、器楽編成や楽器の使用法、才能、いい音楽家かどうか、どのような音楽が作曲家に影響を与えて新しい曲を作っているのか、アイデア、想像力、新奇性等です。(l) 子どもたちは、音楽を聴いて、それが独創的なものか、それとも映画のサウンドトラックにあるようなものか聴き分けることができるでしょうか。映画のサウンドトラックでしか今の新しいオーケストラを聴ける機会はありません。流行、ファッションの流行、人生経験、音楽に話があるか、ダンスとして踊れる音楽かどうか、音楽ビデオ等々です。

宮下：鑑賞のための教材は定まっていますか？

ブレイク：まだ作っていません。これが今の時点であるものです。しかし、これをもとに音楽鑑賞のカリキュラムを作っている段階です。これは、教えながら、カリキュラムに含めようと考えているものです。

宮下：どうやって音楽教材を選んでいるのですか？

ブレイク：今、販売されている音楽教材の中ではクラシックを基にしたものしかなく、あまり

適当なものがありません。現在の子どもたちは、クラシックばかりを聴かせると、何もそこに関わることがないので、考えることをやめてしまいます。音楽鑑賞の大きいところは、彼らが興味をもつポップ音楽を選ばせることです。だから今は、カリキュラムを作っている段階です。

**宮下：**それは年間を通して系統性のあるカリキュラムですか？

**ブレイク：**学校は、1学期12週間×3学期（計36週間）あります。だから、私は3回にわたって、違うクラスの子どもたちに音楽鑑賞を教えることとなります。1学期で鑑賞の授業が終了し、2学期には、また違うクラスの生徒が鑑賞の授業を受けにくる…といったシステムによって、私は12週間で行う授業計画を立てています。

**宮下：**あと3つ質問があります。1つ目。子どもたちが音楽の授業の中で得る学力とはどんなことですか？

**ブレイク：**え〜…。(悩む。沈黙)わかりました。あなた方は、器楽の授業をいくつか見てこられたことだと思います。その中で、数学も学ばせていると考えます。私は音楽を教えますが、音楽と数学、時には文学とも関わり、それらの学力を伸ばしていると考えます。このような答えでよろしいですか？

**宮下：**(日本の4観点を示す。)

**ブレイク：**アメリカの学校では、高校までみんなが同じことを学び、大学に行ったら自分の好きなことを選ぶことができます。幼稚園や小学校では同じことをみんなで一緒に学びます。そして、優等生(オーナー)クラスと大学準備(プリ・カレッジ)クラスがあり、大学準備クラスの方が少し易しく、優等生クラスでは、テストでよい成績を取った生徒たちが受けられ、レベルはもっと高いです。高校でも同じようになっています。大学に行ったら、好きな学科を選べ、専門教科を学びます。

**宮下：**小学生がテストを受けるときに難しい問題を見たら、日本の子どもたちは何も書かず白紙で提出する傾向があることが問題になっています。これは深刻な問題です。学習意欲の低下です。関心・意欲・態度、表現力、判断力などについて日本は重要視していますが、カリフォルニアではどうなのでしょう？

**ブレイク：**ほとんどの学校には、必修科目(英語や数学など)と選択科目(芸術や技術教科)があり、音楽鑑賞、オーケストラ、バンドなどは選択科目に入ります。この選択科目では、生徒の興味があるものを受けられるようになっています。例えば、6年生で音楽に興味をもったら、初級バンドに参加し、どのように楽器を演奏するか学ぶことができます。7年生では、演奏のでき具合によって中級バンドか上級バンドに参加することができます。もし、演奏することに関心をもったら続けてもいいし、嫌だと思ったらやめて他の授業に移ることもできます。関心があるものを選択するということです。

**宮下：**音楽と他教科の違いや似ているところはどんなところですか？

**ブレイク：**違うところは、中学生にとって、音楽、特に楽器は、他の教科を学ぶよりもっと難しいところです。楽器の演奏法を学ぶことは難しいです。音楽では、練習しないとイケないし、学ばないとイケないし、集中しないとイケません。静かにもしないとイケません。似ているところは…、選択科目で子どもたちが音楽を選ぶのは、必修科目にはない、違ったところを学びたいからです。音楽と他の教科には似ているところよりも違うところがたくさんあると思います。しかし、音楽と数学には似ているところもあります。リズム構成。合唱と

英語にも似たようなところがあります。歌詞がありますからね。

宮下：音楽鑑賞の評価方法についてはどうですか？

ブレイク：実は、私は日本の指導方法からたくさんを学んでいます。日本の授業の様子をビデオで見たことがあり、(m) 演奏が終わった時に、先生が話し始めるのではなく、子どもたちにどうだったか、どのような改善点があるかなどを質問していました。これによって、子どもたちはもっと集中して自分たちの音楽を聴くことができるようになりますと思います。私はそれからその方法を取り入れています。とても影響が大きいです。批評 (criticize) よりも評価 (assess) という単語の方を好んで使います。(n) 評価は、分析することも含みます。批評は、少し否定的な部分を含みます。私は、子どもたちに自分たち自身の音楽や録音された演奏を聴かせ、よかったか悪かったか、どのような感情を含んでいるかなど評価や分析ができるようにさせます。(o) 私の鑑賞の授業では、音楽に含まれている感情を書き出させました。そうしたら子どもたちは、勝利 (victorious)、嬉しい (happiness)、喜び (joy)、悲しい (sadness) などが出てきました。音楽作品は、望み (hope) についてだったので、それらを書き出してほしかったので、もともなった音楽を聴かせ、電子楽器で編曲された音楽の両方を聴かせました。この授業を通して、感情的な音楽をどのように理解させるかを教えました。(p) 評価は子どもたちにいろいろなことを書かせます。テストはしません。態度で評価する部分が多いです。選択科目なので、生徒の負担にならないように、宿題は出さず、授業内で話し合ったり、書いたものを提出させたりして、私が読みます。ほとんどの生徒は、中学校で初めて音楽を学ぶので、どのように音楽的に考えればよいかわからないので、そこは少し考慮しないといけないところです。バンドの授業では、授業の中で、私の前で演奏させ上手に演奏できたら良い成績をつけます。また、うまく演奏できなかったら、もう一度練習させて来させます。何を改善する必要があるか、伝え、単位を落とさせることはしません。全体的に重要なところは、練習させて、改善させる場所ですから。子どもたちによって進度が違いますから、改善するのに時間が必要な子には、もっと時間を与えて練習させます。

宮下：私たちもそのような方法をとります。日本では、ワークシートを使い、音楽を聴かせ、どのように音楽のテーマが変わっていったかなどを書かせ、さらにその音楽を聴いて他者に伝えるような批評文を書かせます。

大熊：嬉しい、や、悲しい、など、音楽から生まれる感情をととても大事になさっていて、私たちもそれをもっとやりたいと思います。

宮下：日本の音楽教育では、日本の伝統音楽をあまり扱ってきませんでした。しかし最近ではそれが見直され、新しいカリキュラムでは伝統音楽を重視したものになっています。

ブレイク：日本の音楽を学ぶことで、それぞれのアイデンティティーが育ちますよね。自分たちの歴史や文化と関連したことを学ぶということはとても大事なことです。音楽は、私たちの一部です。私はトロンボーンを演奏しているのですが、いまだにトロンボーンが好きなので、練習しています。音楽を聴くのは、楽しいから、そして理解できるからです。「美的」 (aesthetic) という言葉の意味は、美と関連しています。(q) だから、何が美しいかを探すと、感動的などころはどこだったかを見つけることにあり、科学や数学、どんなものでも美と関連するものがあります。美の経験とは、何に関心をもっているかということから探すことができます。誰かは、車について美的だと思うでしょう。楽しいからです。だから彼ら

にとっては、車は美的なものなのです。だからアイデンティティーはとても大事なことだと思います。音楽は、感情的なもの。音符やリズムは数学的な部分も含まれます。音符との間で自分がどう感じるかが重要な部分なのです。

大熊：アイデンティティーを育てることが違う文化や違う国を尊重する人にも成長できることになりますね。

ブレイク：そのとおりですね。(r) 自分の国や文化を尊重できないと他の国の文化を尊重することはできません。アメリカの文化には、いろいろな人種が混ざっています。私のクラスには、ヒスパニック、黒人、アジア系、白人、などみんな違う文化から来た子どもたちが混ざっています。だから、私たちは、メキシコの文化、アジアの文化などを学ばないといけません。これは、私のリストで1番目にくるものです。

宮下：ところで、音楽の教科書は使っていますか？

ブレイク：いいえ、教科書は使っていません。

宮下：来年も鑑賞の授業をしますか？

ブレイク：わかりません。たぶんそうでしょう。

宮下：もしかしたら、私たちはまた来年もまた来るかもしれません。

ブレイク：是非来てください。1日来てくださったら、いろいろな授業が見られますし、あなたの方にも授業をしていただきたいです。

### 3. P. カルドザ教諭に対するインタビュー結果

期日：2009年9月23日（水）8:45～9:30

場所：フロスト・ミドルスクール

インタビュアー：宮下俊也・大熊信彦

宮下：1週間に「一般音楽」（general music）の授業はいくつ持たれていますか？

カルドザ：1日5つの授業があります。毎日です。

宮下：毎日？

カルドザ：そうです。今年が1年目で、ギターやシアター合唱をしていました。しかし、今年はそれらを全てやめて「一般音楽」のみです。

宮下：どうしてですか？

カルドザ：わかりません。とっても悲しいです。「一般音楽」しか教えられないので。

宮下：州の考えですか？ それとも学校長の考えですか？

カルドザ：校長先生です。何年も「シアター」をやって、たくさんいい声で歌える子たちがいたのに、今はとても悲しいです。

大熊：「一般音楽」の中で、ギターや合唱はできないのですか？

カルドザ：(s) 音楽史や読譜が大半で、誰でもこのクラスを取ることができます。

宮下：「一般音楽」の中で、楽器は教えないのですか？

カルドザ：1学期12週間しかないのです、時間が限られていますが、小さなクラスだったら24のキーボードがあるので、読譜をした後に、最後の4週間くらいはキーボードを使って演奏してもいいかなと考えています。隣のクラスは、弦楽やバンドをやっています。

宮下：バンドと「一般音楽」、どちらが好きですか？

カルドザ：バンドですね。歌いたい人たちが歌って、楽器をしたい人たちが演奏できる、でも、人数は少なくなって最終的には授業がなくなるんです。重要じゃないんです。

宮下：日本の学校では、音楽という教科は全て「一般音楽」ですよ。その中で、歌唱、器楽、創作、鑑賞、歴史、理論などを教えます。

カルドザ：先生は、学校間を移動しないとイケないのですか？

宮下：いいえ。1つの学校に1人以上の音楽の先生がいます。小学校には専科の先生がいる学校が多く、学校や学年によっては担任が音楽を教えます。

カルドザ：それはいいですね。私たちのところでは、小学校の音楽の先生は、移動しないとイケません。1日に4つの授業をして、他の学校でも教えます。中学校ではバンドはありますか？

宮下：授業ではやりませんが、放課後のクラブでやっています。

大熊：3時から6時くらいまで毎日やっています。

カルドザ：すべての生徒がするのですか？

宮下：クラブ活動ですから、スポーツなどから選べます。

カルドザ：毎日ですか？

宮下：ほとんど毎日です。土日もクラブがあるので、中学校の先生は休む暇もありません。夏休みも長期休みはあまりありません。帰宅も8時になるなど、忙しいんですよ。

カルドザ：すごいですね。

大熊：日本でも音楽の授業時間数は少ないので、生涯にわたって音楽が好きになるような体験をさせたいと考えています。

カルドザ：そうですね。ここでも、同じような目的を持って指導しています。しかし、12週間という短い期間です。次は、美術など彼らの興味をもった教科を選ぶことができます。

宮下：日本では、以前は中学でも週に2時間音楽の時間があつたのですが、今はカットされてそれより少なくなってしまいました。

カルドザ：なぜですか？

宮下：やはり芸術教科の価値が理解されていないからではないでしょうか。

カルドザ：ここでもそうですよ。

#### 4. インタビューから得られた情報

以上、3教諭のインタビューから得られた情報を以下に整理する。

##### (1) 鑑賞授業の実践現状について

3校に共通していたことは、「バンド」「オーケストラ」「コーラス」「一般音楽」等の音楽科目が開講され、鑑賞はおもに「一般音楽」において行われていることである。そこで行われる内容としては、音楽に関する基礎知識に関わること、諸要素の名称や知覚、楽曲の特徴の理解、音楽史、音楽の文化的側面、音楽の多様性の理解（異文化理解）が主なものであった。特に、クラシック音楽以外を好む中学生に対して、クラシックのよさやポップスなどとの違いを理解させたり、多文化国家であるがゆえに音楽の多様性や異文化理解に力を注いでいたりすることは注目された（(a) (b) (c) (d) (f) (g) (h) (i) (k) (l) (r) (s) より）。

また、日本のように情操や感性の育成を主目的にするのではなく、「小さな音楽家」の育成ともいえる、音楽家としての考え方やそのために必要な理論を教授したい意向も窺えた。これは CSM がそれを求めているということもあるが、3 教諭ともミュージシャンとして演奏活動を行っており、やはり「一般音楽」よりも演奏に比重を置いている考え方があのように思えた（(c) (d) (j) より）。

## (2) 「美的評価」の実践現状について

コナーズ教授も述べていたように、中学生の音楽に対する価値判断は「好きー嫌い」「よいー悪い」といった根拠のない主観的な判断で行われることが多いようである。判断を客観的に行えるようにするために、音楽や音楽史に対する理解、楽曲やジャンルの特徴の把握等を求めているようである（(c) (d) (e) (n) より）。このことは判断の規準を備えることを求めている CSM と一致している。

また、音楽を聴いた時の感情についても取り扱われているようであった（(f) (o) より）。特にブレイク教諭の、音楽に含まれている感情を見つけ出させる学習 (o) や、美しさや感動的な部分を探し見つける学習 (q) は、日本の鑑賞教育においてもさらに重視しなければならないものだと考える。

実践の方法としては、鑑賞後に自分の気持ちやその音楽を鑑賞する意味を話し合わせたり (f)、演奏の改善点を述べさせたり (m)、またそれらを記述させたりしているようである。また評価の方法としては、それらの他に分析結果を記述させたりしている（(n) (p) より）。

## 第 6 節 カリフォルニア州ミドルスクールにおける「美的評価」を取り入れた授業実践

次に、視察したミドルスクールの音楽授業について、4.0「美的評価」に関わるシーンを抽出し、どのように実践されているのかを解釈する。これらの授業は、視察前に実践者に「美的評価」を扱った授業の要請に対して提供されたものである。抽出した箇所は下線で示し、考察の対象とする。

### 1. シナロア・ミドルスクールの「コンサートバンド」の授業

期日：2009 年 9 月 23 日（水）8:45～9:30

学年：G8

指導：C. ノーデル教諭

(1) 授業記録

授業の経過

(全員で音階の練習)

T: いいね。四分音符で。

(全員で演奏)

T: 1人で演奏できる人はいますか？ クリスどうぞ。

(クリスの演奏)

【1-①】

T: みんな大きな音で吹いているけれど、クリスを例に少し直していきましよう。どうやったらクリスは、次の段階に上達できると思いますか？

S: なめらかに演奏する。

T: なぜなめらかにする必要があるのですか？ どうやったらなめらかに演奏することができますか？

S: 息継ぎ

T: 息継ぎ。じゃあ、クリスの例を示してみよう。

(クリスが演奏したように T が演奏)

T: これをビデオに撮らないでくださいね(笑)。じゃあ次に模範の息継ぎをしてみるから見ていてくださいね。

(T が模範演奏)

T: わかった？ もう1回できるかどうかやってみよう。

(クリスが演奏)

T: さっきよりも息が続いていてよかったね。

T: 次は木管楽器で吹いてもらおうかな？ ハイリ。

(ハイリが演奏)

T: とてもなめらかにレガートで演奏できたね。ただもう1つ。Gを割れた音ではなく、きれいに吹けるようにしてみよう。

(ハイリ、Gのみ演奏)

T: いいね。よし。ではもう1回みんなで演奏してみよう。四分音符で。

(全員で音階を演奏)

T: 次は、B $\flat$ で、ピアノと共鳴できるように演奏してみよう。

(全員で演奏)

T: 聴けましたか？

S: はい。

T: もう1つやりたいことは、ピアノのふたを開けてみて…。もう1回ピアノと共鳴できるようにやってみよう。

(全員で演奏)

T: はい。それでは9番いきますよ。ここでは、コンサートFを使ってリズムの練習をします。

(全員で演奏)

T: よくできました。では次に行きます。1人、演奏してくれる人はいますか？ アリ、やってみよう。

(アリが演奏)

T: 下を正確な位置において演奏してみて。ちょっと柔らかすぎるよ。もう1回。

(アリが演奏)



T:素晴らしい。ではみんなで。

(全員で演奏)

T:最後の小節もしっかりと。最後だけ。

(全員で演奏)

T:Dで。

(全員で演奏)

T:最初の4小節は息継ぎも少なくてよかったよ。最後の4小節は息継ぎが多かったね。もう1回やってみよう。

(全員で演奏)

T:最後の3小節だけやってみよう。

(全員で演奏)

T:いいね。もう1回やってみよう。

(全員で演奏)

T:最初から。

(全員で演奏)

### 【1-②】

T:よかったよ。片付ける前に、紹介したい考えがあります。アーティキュレーションには、どのような種類のものがありますか？

S:スタッカート。

T:スタッカートがありますね。他には、どうですか？

S:アクセント。

T:アクセントもできますね。3個目は？

S:スラー。

T:スラーがありますね。他にはありますか？

S:普通のタータ。

T:いいですね。タータ。これは何と言いますか？

S:レガート？

T:似ているけれど少し違います。

S:マルカート

T:素晴らしい。その通りです。今日は、2番目のレガートのこれが普通のタータです。

(先生が演奏)

T:なめらかだと思ふ人は手を挙げてください。

S:(手を挙げる)

T:そうですね。レガートでしたね。今度は、タの代わりにドウを使って演奏してみます。その違いを聴いてみてください。

(先生が演奏)

T:なめらかだと思ふ人は手を挙げてください。とてもなめらかだったでしょう。

T:では、コンサートF、四分音符、ターターを使ってみんな演奏してみよう。

(全員で演奏)

### 【1-③】

T:タの代わりにトゥーを使ってもう1回演奏してみよう。

(全員で演奏)

T:初めから。トゥーの舌を使って。

(全員で演奏)

T:さっきよりもなめらかなの、わかった？

S:はい。

T:とてもなめらかだったよ。では 12 小節手前からもう 1 回。

(全員で演奏)

T:よくなったと思いますか？

S:はい。

T:そうですね。

(次の曲に移る)

T:今からマイケルジャクソンの曲をします。コーダから最後まで演奏しましょう。ベンに質問してみましょう。

T:ベン、コーダとはなんですか？

S:終わりのことです。

T:そうですね。終わりのことですね。42 小節から終わりまで。どこにコーダがありますか？

S:最後から 4 小節目です。

T:最後にありますね。じゃあ準備して演奏してみましょう。

(全員で演奏)

T:コリン、#か♭はありますか？

S:F#

T:素晴らしい。C楽器、フルート、オーボエ、ベース楽器はどうですか？ ジェイディー、どうですか？

S:♭。

T:B♭ですね。しっかり、♭間違えずに演奏しましょう。ではコーダから。

(全員で演奏)

T:ドラム、なぜ最後の 2 小節で止まったかわからない。そこだけ。

(ドラムセクションのみの演奏)

(先生がティーダタタタタータなどと言葉で模範演奏)

T:もう 1 回やってみましょう。

(ドラムセクションのみの演奏)

T:最後の小節だけ。

(ドラムセクションのみの演奏)

T:そのとおり。みんなで。

(全員で演奏)

T:トランペット、F#吹いてくれる？ F#を吹いている人がいる。もう 1 回、コーダ。から。

(全員で演奏)

T:最後の小節だけもう 1 回。

(全員で演奏)

T:今度はコーダ全体。

(全員で演奏)

T:良くなったね。姿勢を良くして、初めからやってみましょう。

(全員で演奏)

**【1-④】**

T:よくなったと思う人？

S:(手を挙げる。)

T:そうだね。じゃあ、2 番目。コーダを演奏するのを忘れた人？

S:(数名手を挙げる)

T:よかったよ。

T: (“Happy days are here again”について)これは、1930 年代の歌で、当時の経済状況が回復し、アメリカ全体の幸せな面を象徴した歌であり、当時の国歌のようなものです。それでは、準備して。

(全員で演奏)

**【1-⑤】**

T:質問があります。曲はだいぶよかったけれど、1 小節、1 音だけ飛び出していた音がありました。誰かわかりますか？

S:パーカッション楽器がうるさかった。

T:ジャレン、あなたの演奏に集中しようね。

S:50 小節目？

T:とても近い。

S:17 小節目？

T:アリの方が近かったかな。もう 1 人だけ。

S:48 小節目と 49 小節目？

T:わかりました。では、教えましょう。25 小節目の 2 音目。ベースの B♭ です。やってみましょう。

(ベースの楽器の演奏)

T:じゃあ、B♭ から B♯ の音に移るように。2 音演奏しましょう。

(ベースの楽器の演奏)

T:2 音目にすぐ移れるようにして。もう 1 回。

(ベースの楽器の演奏)

T:それができると曲全体がもっと良くなるよ。全体でもう 1 回演奏しましょう。準備して。

(全員で演奏)

T:良くなった？ よし。ダン、ドラムロールやってみよう。

(ダンのドラムロール演奏)

T:とてもいいね。

(全員で国歌演奏)

T:シンバルは、しっかり最後止めてね。では、静かに楽器を片付けて。

(2) 「美的評価」に関わる部分の考察

本授業は、「コンサートバンド」の授業の中で「美的評価」を取り入れたものである。そのため、該当するどのシーンも自分たちの演奏がどうであったかを教師が生徒に尋ね、改善を指導している。冒頭【1-①】では、「なめらかに演奏した方がよい」という生徒の発言に対して教師はその根拠を尋ねているが、以後のシーンでは生徒の意見を聞くものの、ほとんど教師主導で進めていた。また、「美的評価」のための判断において、生徒がもつ

規準がいかなるものなのか、またその規準として自分たちが奏でたい理想となるイメージや感情等の表れは不明だった。さらに、演奏に対して美的価値を判断させる経験は与えているが、その価値判断に対してどうであったのか、また価値判断の力を育成していく指導もなされていなかった。

## 2. シナロア・ミドルスクールの「音楽探検」（「一般音楽」）の授業

期日：2009年9月23日（水）10：35～11：30

学年：G7

指導：C. ノーデル教諭

### (1) 授業記録

#### 授業の経過

T:今日は、昨日やったような、音楽史の聴きとりクイズを行います。

(プリントを配布し、出席を取る)

T:プリントに名前と日付、時間を書きましょう。終わったらリスニングのプリントにも同じことを書きましょう。2ページ目には、名前だけを書いてください。テストをして、成績をつけるときにいちいち裏を見ないで済むようにね。

(名前などを書き込む)

T:リスニングでは、次のことをします。まず、ここに書いてあるのは、今までに習ってきた曲のタイトル、作曲者の名前、種類、演奏形態、です。だから全ての答えはここにあります。

S:ホワイトボードにあるのですよね？

T:そう、この答えは全部バラバラ？

T:はい。そうですね。バラバラです。だから選択して書かなければなりません。そして、他のところは昨日やったように丸をつけましょう。また、ボーナスポイントして、各答の下に自由に作品について知っていることを書ける欄を用意しています。

S:これはブレイクイズですか？

T:前に何て書いてある？

S:プリクイズ。

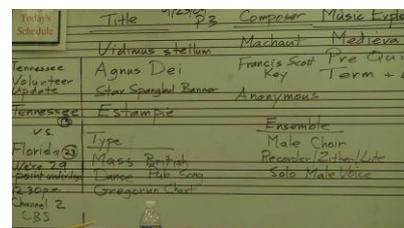
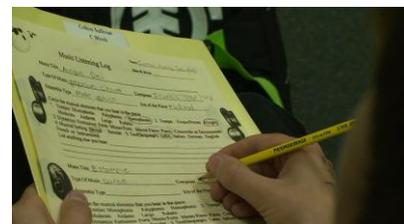
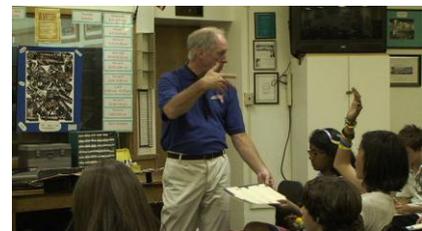
T:そう。だからこれはブレイクイズですね。さあ、始めましょう。黄色い用紙を用意して。始めと言ったら、答えを書きましょう。どうぞ始めて。

(答を書く)

T:終わったら、裏向きにして他のところをやっていきましょう。どれくらいの方がもっと時間がいりますか？

S:(手を挙げる)

T:準備はいい？ では、どうやってリスニング部分をするか説明しましょう。全ての例を3回ずつ繰り返し再生します。順番通



りに再生されるとは限りません。3回ずつ再生されるので、各曲  
3～4分時間があるので、その間に全ての情報を書き入れましょう。テクスチャー、テンポ、ダイナミック、言語  
などは、書かなければなりません、その他にわかることがあれば、下の空白に書いてください。ボーナスポイ  
ントとなります。

S: 順番通りに書かないといけないのですか？

T: そうですね。だから最後の作品は、裏に書くことになります。では、最初のリスニングに移ります。

(リスニングクイズ)

T: 第2問目にいきます。

T: 答えは？

S: 前に書いてある？

T: そう。前に書いてあるから、わかったらそれが書けるし、わからなかったら書けないね。では、第2問目にい  
きます。

(リスニングクイズ)

T: もっと時間がいる人はいる？ じゃあ、第3問目にいきます。

(リスニングクイズ)

T: もう1回聴きたい人？

S: (手を挙げる)

T: じゃあ、もう1回再生します。

(リスニングクイズに答える)

T: 最後の問題です。

(リスニングクイズに答える)

T: はい。それでは、今日は自分の答えを読みあげていきましょう。見回っていて、みんながよく書けていたこと  
に驚きました。よく聴けていました。数名は、前に書いてあることをバラバラに書いているだけだったけれど、  
明日のテストでは、再生された順番に書けていなかったら、全て間違いということになります。昨日やったこと  
を覚えていて、その順番に書いているだけではないけません。それでは、小さいプリントから答え合わせをし  
ましょう。

(リスニングクイズの答え合わせ)

T: 明日のテストでは、このようなものがそのまま出ます。それでは、片付けましょう。

## (2) 「美的評価」に関わる部分の考察

本授業は鑑賞の授業で、次回のテストの前に、これまで鑑賞してきたいくつかの楽曲を  
復習として聴き、そのタイトル、作曲者名、種類、演奏形態を当てて解答用紙に記入して  
いくクイズ形式で進められた。楽曲の内容的側面や、鑑賞者のイメージや感情には全く関  
与していないものであり、鑑賞というより聴取の授業であったといえる。これが「美的評  
価」を扱った授業ということではあったが、美的評価をするための規準となる知覚力、音  
楽史的な知識を得させるためにこのような授業を行ったものと思われる。

## 3. フロスト・ミドルスクールの「一般音楽」の授業

期日：2009年9月24日（木）8：00～8：44

学年：G8

指導：P. カルドザ教諭

(1) 授業記録

授業の経過

T: 明日テストがあるので、そのための復習をこれからします。これがそのプリントです。ブレンデンバークの演奏を今から流しますが、今渡した紙に書いてあることを誰か読んでくれますか？

S: (読む)

T: はい、それでは今から演奏を流します。楽器はチェロだということがわかっていますね。今からは、1600年当時と今とは何が違うか、今あってその当時なかったことは何か、考えてください。最も違うことは何ですか？

S: マイク。

T: マイクの電源は何？

S: 電気、延長コード。

T: そう、電気ですね。バロック時代にはなかった電気を使うということについて考えてみましょう。

T: (まだプリントが配られていなかった生徒に渡す。)

T: 2つ目は、作曲者。書きなさい。

T: この音楽のタイプはなんですか？

S: コンチェルト。

T: そうですね。今の時代でもコンチェルトはありますか？

T: ありますよね。これも、比較できますね。

T: どんな音楽が書かれていたのか考えましょう。いろんな教会音楽もありますよね。現在でもあります。

T: 3つ目の質問。バッハは、誰のためにこの音楽を書いたのでしょうか？

T: 4つ目。今日、どんな聴衆の為に作曲が行われているのでしょうか。ロック音楽を作った時、誰が買ってくれると思いますか。おばあちゃん？

S: 若い人たち。

T: そうね。たぶん、お年寄りではなく、あなたたちのような若い人たちや子どもたちでしょうね。はい、それでは、この曲を流しますから、何を演奏しているのか、この楽器は今もあるか、などを考えてください。

T: (再生する) スペルにも気をつけて書いてくださいね。

T: この当時と現在の違いについて比較しながら書いてみてください。

T: (止めて) 1つ目の質問について書きましょう。この部分で何が起きているか書きましょう。

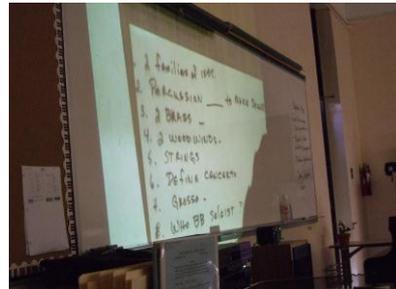
T: (再び流して) この部分です。これを何と呼びますか？

S: フーガ。

T: そう、フーガですね。素晴らしい。違うタイミングでこのように演奏されることをフーガと呼ぶんだっけ。ここで演奏されている楽器は何ですか？

S: バロックトランペット。

T: そう、バロックトランペットですね。



T: (止めて)今から書く時間をあげますから、埋めてください。

T: 今日、電気があるからこそ、音楽家たちができることは何でしょうか？

S: サウンドトラック。

T: サウンドトラックもありますね。他には？

S: ステレオ。音を大きくする。

T: そうですね。マイクやスピーカーがありますね。アンプもありますよね。他にはありますか？ ギターは？

S: エレクトリックギター。

T: そうですね。キーボード。録音できるものもあるし、シンセサイザーもありますよね。シンセサイザーって知っていますか。

S: コンピューターで作ることができる…。

T: そう、コンピューター音楽ね。いろいろな音が出せるの。

T: 明日はテストです。今日のプリントは月曜日に提出してください。今からテストに出る問題を見せます。やらないといけないことは、これを家で勉強することです。

T: 楽器の種類、2つ。

S: パーカッション、ストリングス、木管楽器、金管楽器。

T: その中の何でもいから2つ選んで書くのよ。パーカッションはどうやって音を作っていますか？ 次の質問は、金管楽器を2つ。他に何がありますか？

S: トランペット、トロンボーン、チューバ。

T: 次は、木管楽器を2つ。

S: フルート、リコーダー、オーボエ、ピッコロ。

T: 弦楽器を2つ。

S: バイオリン、チェロ、ビオラ、コントラバス。

T: そうですね。コンチェルトの説明。コンチェルトとは何ですか？

T: オーケストラの基本。他には？

S: ソロがいる。

S: ソロ演奏が1人よりも多い。

T: ブレンデンバークのソリストは誰でしたか？

S: オーボエ、トランペット…。

T: そうですね。4つの部分がありましたね。バロックとはどんな意味ですか？

S: ファンシー。

T: なぜバロックが幻想的な時代と呼ばれるのでしょうか？

S: たくさんの音で作られているから。

T: 他には？

S: 建築が素晴らしいから。

T: 絵画は？

S: 夢を描いたような、たくさんの動きが見える。

T: そうですね。家具も曲がっているものが多いですよ。バッハは、どんな人ですか？

S: オルガン演奏家。

T: 彼は、とても難しいオルガンの曲をたくさん作っています。誰のためにバッハは作曲していたのでしょうか？

S: 裕福な人。

T:そうですね。誰が買っていたのですか？

S:教会。

T:彼は、教会音楽をたくさん作っていますし、ミネソタ市のためにも音楽を作っています。この時代の作曲家たちは、最初と最後に同じメロディーを繰り返すという手法を多く取り入れています。これくらいにしましょうか。(今書いた質問をみんなでもう一度復習し)しっかり復習して、テストに臨んでくださいね。

T:それでは、今から音符の復習をします。(フラッシュカードを使って音符を読ませる。)

T:よくできました。それでは、あと10分間映画を見ましょう(バッハについての映画を見る)。

T:明日はテストで、月曜日は休みです。

## (2) 「美的評価」に関わる部分の考察

この授業もテスト前の鑑賞の復習として行われた「一般音楽」である。やはり、知識的な内容についての習得を目指しているものであったが、下線部の問いは、音楽や音楽家の役割についてのものであり、G8の4.2に相当するものであると言えなくもない。

## 4. ソミス・ユニオンスクールの「一般音楽」の授業

期日：2009年9月24日(木) 12:30~13:10

学年：G6・G7

指導：S. マーフィー教諭

### (1) 授業記録

#### 授業の経過

T:昨日、宿題のプリントを渡したね。しっかり書いてきたはずですから、出しましょう。昨日休んでいてまだこのプリントを持っていない人は手を挙げて。2本以上鉛筆を持っていますか。いつも持ってきてくださいね。それでは、B♭の音階を演奏しましょう。指づかい、音程を確認してね。B♭はトランペットにとって何の音だった？

S:A

S:C

T:どっちだった？

S:C

T:B♭はCの音だったね。どれだけ半音を上げるの？

S:2

T:トランペットで移調する時は、2つ半音をあげるんだったね。マルティン、E♭を演奏する時は？

S:F

T:そうだったね。42ページを開いているはずだね。B♭の音階を演奏しましょう。

S:(演奏)

T:臨時記号に注意して。

S:(演奏)

T:A♯? A♭? どのポジションだった？



S:ここ？

T:違うよ。セカンドポジションだったでしょ？ここ(トロンボーンで示して)がセカンドポジションだよ。吹いてみて。

S:(トロンボーンのみ演奏)

T:そう。正しい音で演奏しましょう。B♭を演奏しましょう。

S:(演奏)

T:どうだった？

S:ちょっとおかしい音だった。

T:そうだね。1日目に学校で音を習ったら家で練習してくるって、言ったよね。来週金曜日にテストします。トーマス、他の人の指づかいを見ていたら、間違えることもあるでしょう。その3人は、全員間違った音を吹いていたよ。3人だけで5小節目を演奏してください。

S:(3人のトランペットだけで演奏)

T:3つの違う音が聞こえるよ。5小節目だよ。移調するとB♭はCだよ。もう1度正しい音で演奏しましょう。

S:(演奏)

T:とっても良くなったね。よく聴かないと演奏できないよ。

#### 【④-1】

T:昨日、レイチャールズの演奏を聴いたね。今日も少しその作品を聴きながら、声について述べてもらおうと思います。みんなそれぞれ違った声質を持っています。友だちの声だけで、誰が話しているかわかりますか？家族の声だけで、誰が話しているかわかりますか。みんなわかるよね。みんなの声は少しずつ違うし、それぞれ色があるんだよ。楽器もそれと同じで違う色をもっています。aestheticという言葉を知っている人はいますか。ショーン？

S:他の人の意見についてどう思うかっていうこと？

T:なるほど。他には？美しいけど、どのように美しいかということ。絵を見て、ただ美しいというのではなくて、その絵を見てどのように感じるかということです。どのように感じる？

S:きれいだ。

T:どんな感じがする？

S:おだやかだ。

T:そう。そのような感じがするね。おだやかだよ。明るい色が使われているし。それを音楽で表わすと、timbreといいます。楽器や声もそれぞれ音色をもっています。

T:それでは、宿題を出しましょう。昨日は3つの演奏を聴いたよね。レイチャールズと何だった？

S:ショーンコネリー、ボブ。

#### 【④-2】

T:それぞれの声を聴いて、イメージが浮かんだと思うんだけど、誰か宿題を読んでもくれるかな？レイチャールズから。

S:速くなく、やさしい。

T:なめらかかっていうことかな？

S:はい。

T:いい説明だね。でも、もう少し想像しながら説明してみようか。映画を見ながら背景を想像することと同じことだよ。

S:深く低い声をしたワニみたい。

T: そう、そんな感じ。

S: 低い音のチェロ。

S: 低い声で出そうとしたチューバ。

T: ショーンコネリーはどうか。

S: とっても怒った男の人が僕に叫んでいるみたい。

T: (笑う) ほかの人の意見も紙に書いておいてね。他には？

S: 低い声がする大きいボールみたい。

S: 口から飴を取り出そうとしているみたい。

T: ボブディランは？ みんな宿題を提出してもらうから、数人だけが発表するのではなくて、みんな発表してね。

S: 怒っているみたい。

T: みんな、それぞれ受け止め方は違うからいいんだよ。2人いたら2人それぞれ意見が違っていいんだよ。

S: 老人のウェスタンカウボーイみたい

T: おおー。

S: 馬に乗っているんだ。

T: よし、じゃあレイチャールズを聴きましょう。プリントに文章を使って書きましょう。単語だけじゃなくて、例えば、電車みたいだったら、その電車はどこに行くのか、どんな電車なのか。想像して書きましょう。鉛筆は用意しましたか？

S: 1つだけ？

T: 1つは必ず書きましょう。それ以上あったらどんどん書きましょう。音楽ではなくて声について、どのようなイメージをもてるか静かに聴きながら書きましょう。

S: (レイチャールズの演奏を聴き、プリントにイメージを書く)

T: 次は、Lucille Ball 白黒で昔放送されていたものです。

S: (書く)

T: 次はショーンコネリー、「アンタッチャブル」という映画の中の彼の声を聴きましょう。

S: (書く)

T: 次は、オデッタ。マドンナみたいな人。

S: (書く)

T: 最後は、ボブディラン。

S: (書く)

T: 書いたことを発表してください。

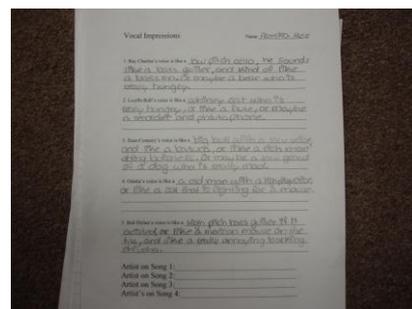
#### 【4-3】

S: レイチャールズは、マイケルジャクソンのお葬式を想像しました。

T: そうだね。この歌は、お葬式で使われそうな(使われてもいい)歌です。

S: ボブディラン。カーボーイが野生の動物の前に立って、狩りをしようとしているとき。

T: 他には？





(1) 授業記録

授業の経過

T:集中して。

S:(演奏)

T:よかったね。途中で速くなりすぎないようにね。《スコークアン》の準備をしましょう。それでは聴きましょう。今から4つのパートが一緒になった楽譜を渡します。上の2つのパートが主旋律、次の2つのパートはハーモニーです。ここに全て書いてあります。アルペジオのパート、テナーのパートは演奏します。ソプラノのパートも一部あります。ベースもあります。どこを演奏するか、書いてあるので、渡されたら自由にその部分を練習してください。

S:(練習する)

T:バチを上げて(演奏をやめて)。感情をこめてはまだ演奏できないと思うけれど、パートごとに聴かせてもらいましょう。主旋律のパート。CかGで始まるパート。

S:(演奏)

T:いいね。ハーモニー1のパート。

S:(演奏)

T:ハーモニー1はどの音から始まるの？

S:GとE。

T:そうですね。GとEを見つけて準備して弾いてみて。

S:(演奏)

T:コードを同時に弾かないといけないよ。

S:(演奏)

T:最後の音、DとFを間違えないようにね。ハーモニー2。

S:(演奏)

T:ハーモニー1と2、一緒に。混同しないようにね。

S:(演奏)

T:アルペジオパート。

S:(演奏)

T:いいね。バリトンパート。

S:(演奏)

T:いいね。ベースパート。

S:(演奏)

T:次の部分もやってみて。

S:(演奏)

T:最後の低い部分もやってみて。

S:(演奏)

【⑤-1】

T:今日は、イントロをもう少しよくするにはどうすればいいか考えてもらいます。6つのグループが演奏したそれぞれの《スコークアン》を聴いてもらいます。すべて、全然違います。その曲について、考えを書いてください。1つは、先生が所属しているグループが演奏したものですが、どの曲かは言いません。どれがいいとか



言ってほしくないしね。直感で感想を書いて下さい。例えば、一目でこの人はよさそうな人だな、怖そうだなって判断するけれど、本当はそうじゃないかもしれないよね。1 回しか流さないから、しっかり聴いて書いてください。1 曲目は、伝統的な感じの曲です。好きか嫌いかも書いていいですよ。遅すぎか、速すぎか…とかね。とにかく、どう感じたか、何が起きているかなど、書いてくださいね。

T: (1 曲目を流す) どんなことを書きましたか？

S: 1 列目の人たちは…(採録不能)。2 列目の人たちは、跳ねまわっている感じがした。

T: 前後で演奏している感じだね。「トップ、ダウン」でそれぞれの旋律が入ってくる感じでしたね。間奏は、長かったですか、短かったですか？

S: 短かった。

T: では書きましょう。2 曲目を流します。さっきとは少し違いますよ。

T: (2 曲目を流す) さっきよりも遅いかな？ どう感じた？

S: アルペジオのリズムが違った。

T: 伝統的な音楽は、楽譜なしで、演奏を真似しながら伝えられていきました。私が、楽譜を渡して弾かせているみたいにするのではなくて、こう弾くんだって見せながらそれを真似させて伝えていくのが普通でした。次も少し違うよ。歌かな？

T: (3 曲目を流す) できるだけたくさん書きましょう。だいぶさっきとは違ったね。もう 1 曲流します。

T: (4 曲目を流す) また違うでしょ。どこで弾いているかも予想して書けるといいね。ベースが少し早めに入っていたね。次の曲は、ラテンアメリカで 1954 年にルイアンシュランが学んで演奏している《スコークアン》です。

T: (5 曲目を流す) 次の曲は、言葉もつきました。

T: (6 曲目を流す) 知ってる？もう 1 曲、同じメロディーで同じ曲があります。

T: (7 曲目を流す) きっと好きだと思うよ。

T: 紙を集めて、楽器を片付けましょう。

## (2) 「美的評価」に関わる部分の考察

ソミス・ユニオンスクールでは、手作りマリンバが多くあり（写真左端）、マリンバアンサンブルの授業が開講されている。本授業では、後半部に生徒たちによる評価のシーンが見られた。

その【⑤-1】では、比較聴取によって直感で捉えたことをまず語らせている。そこでは「長いか短いか」、「速いか遅いか」といった弁別をさせ、その後、できるだけたくさん書くように指示している。同じ楽曲を違ういくつかの演奏で比較聴取させることは、CSM の G7、4.3 に示されており、それを目指した学習であったと考えられる。しかし、ここでも指導者との一問一答が繰り返されており、学びのシェアができたかどうかはわからない。

## 6. バレービュー・ミドルスクールの「コンサートバンド」の授業

期日：2009 年 9 月 25 日（金）8：30～9：20

学年：G7・G8

指導：M. シュスター教諭

(1) 授業記録

授業の経過

T: では 10 番の音階。ロングトーンで始めましょう。B♭メジャー。

S: (演奏する)

T: リズム。

S: (演奏する)

T: アルペジオ。

S: (演奏する)

T: やさしく。

S: (演奏する)

T: Fメジャー。

S: (演奏する)

T: パーカッションは、いろいろな楽器を回して、交代で演奏してくださいね。

S: (音階を演奏する)

T: はい、それでは音階をもう少ししましょう。

S: (演奏する)

T: 次は、ゆっくりなめらかに上がって下がっていく。

S: (演奏する)

T: 次は、少しゆっくりめに。

S: (演奏する)

【⑥-1】

T: いいでしょう。今日は、少しディスカッションを取り入れてみましょう。この前、aesthetic についてお話ししましたね。美しいということの意味です。音楽を演奏する時には、2 つ考えなければならないことがありましたね。何でしたか？

S: 正確に。

T: そうですね。いつも正確に演奏しなければなりません。これは正確なリズムか、正確な音程かなど、考えながら演奏しないとイケませんね。美よりも正確さを求めないとイケませんね。より高度な演奏を求めようとしたら何が必要ですか？

S: 楽しさ。

T: そうですね。観客を楽しませ、喜びに満ち溢れた演奏ができることが次の目標ですね。美しさを求め、観客を楽しませるにはどうすればいいですか？ キャロライン。

S: メロディーとハーモニー。

T: メロディーとハーモニーが…(採録不能)ユニゾンになる。ユニゾンって何ですか？

S: 一緒に同じ音を演奏すること。

T: そうですね。1 音 1 音をみんなで一緒に演奏することですね。《美女と野獣》の編曲を渡した時、もっと豊かな音楽になりましたね。なぜでしょうか？

S: ボールがあちらこちらに弾んでいるように聴こえたから。

T: そうですね。パートごとにメロディーが様々でしたね。他に？

S: バラエティー。

T: そうですね。個人で練習する時に美を意識したらどういうことに気をつければいいですか？



S: 音色の質。

T: 音色の質。そうですね。正しい音程はとれていると思いますが、質はどうか、と考える必要もありますね。より高いレベルを求めるためにも、正確な音程と質、両方のことについて考えましょう。

T: それでは《美女と野獣》をユニゾンで演奏しましょう。それから編曲した曲を演奏しましょう。

S: (演奏する)

T: いいですね。それでは編曲の方を演奏しましょう。フレーズを意識して、始め、中、終わりの音楽の文章がスムーズに観客の人に伝わるように、グループとしてメロディーとハーモニーをうまく調和させて演奏しましょう。メロディーとハーモニーはどちらが少し強い方がいいですか？

S: メロディー。

T: メロディーが少し強い方がバランスが保たれますね。レガートで。レガートって何ですか？

S: なめらかにつなげること。

T: 曲の途中に穴を開けずに、なめらかに演奏してくださいね。そのためには、あくびをするように息をしっかりと吸うことも必要ですね。話しすぎた…。さて演奏しましょう。

S: (演奏する)

### 【⑥-2】

T: うまく演奏できるようになってきたら、次のレベルを目指さないと  
いけませんね。音は正確だし、いい。なめらかに演奏できるよう  
になってきた。高レベルを目指すにはどうすればいいですか？

S: クレッシェンド。ダイナミック。

T: ダイナミックについて話しましょう。クレッシェンドは、だんだん大  
きくなるということですね。大きくするためには、最初は囁くように、  
そして、観客をだんだん引き込んでいかないといけません。そし  
て、そのためには誰か一部がするのではなく、全員でクレッシェン

ドを演奏しないといけません。たぶんベースが引っ張っていいと思います。今は、その練習はしませんが、ク  
レッシェンドの始めの部分を意識して、演奏しましょう。

S: (演奏する)

T: とてもいいですね。では最初から演奏しましょう。クレッシェンドの最後まで息が続くように、クレッシェンドの  
前なるべく息を吸いましょう。

S: (演奏する)

T: 終わりは一緒に終わって、しばらく観客を喜びに満ち溢れた感じにさせます。37 小節目からもう 1 回。

S: (演奏する)

T: B♭ に気をつけて。正確に演奏することが第一歩です。もう 1 度。

S: (演奏する)

T: いいですね。

### 【⑥-3】

T: 次は《レイダース》。さっきとは全く違う感じの曲ですね。この曲について説明するとしたらどのように説明  
できますか。

S: 行進曲みたい。

T: 速いからね。

S: ドライブのような感じ。



T: そんな感じですね。速いからトランペットを落とさないようにね。

S: (演奏する)

T: ♭を落としています。14小節、アルトサクソ、クラリネット、ホルンだけで演奏しましょう。付点八分音符と十六分音符のペアのときは、十六分音符の方をクリアに、短く切って演奏しましょう。

S: (演奏する)

T: みんなで14小節目から。

S: (演奏する)

T: 2回目だから、まあまあでしょう。賢い演奏家になってくださいね。フルート、難しい部分がありますね。八分音符の部分を少し遅めに演奏してみましょう。

S: (演奏する)

T: 間違ってもかまいません。1回1回練習しながら正確に演奏できるようにしましょう。

S: (演奏する)

T: 22小節目からみんなで。

S: (演奏する)

T: いいですね。

## (2) 「美的評価」に関わる部分の考察

本授業は、バンド演奏能力が比較的高い生徒が選択するものであった。【⑥-1】のシーンでは、「美しい演奏」について生徒に問い、「正確さ」と「楽しさ」であったことが確認された。そして、観客を楽しませるための方法として、メロディー、ハーモニー、ユニゾンに注意し、1音1音を皆で大切に演奏することを確認した。さらにそのように演奏することによって生まれるものとして、ある生徒は「ボールがあちらこちらに弾んでいるよう」な雰囲気が出せるから、とイメージと結びつけて捉えていた。さらに指導者が「より高いレベルを求めるためにも、正確な音程と質、両方のことについて考えましょう」と指示し、形式的側面と内容的側面の双方の充実によって美しい演奏が実現することを伝えていた。このようなやり取りによって、「美しい演奏かどうか」を評価するための規準を生徒に備えさせることができるものと思われ、CSMのG7やG8の4.1を目指していることがわかる。

【⑥-2】では、「クレッシェンド」の意味について、単に音量を強くするだけではなく、「最初は囁くように、そして、観客をだんだん引き込んでいかないといけません」と聴く人々への訴えかけとして説明していることは注目される。

【⑥-3】では、楽曲の特徴を人に説明することを想定した問いを出している。それに対する生徒の回答はやや稚拙なものではあったが、言葉で音楽を表す学習経験として重要なものであると考えられる。

<sup>1</sup> 「全米芸術教育標準」では、①歌唱、②器楽、③即興、④作曲と編曲、⑤読譜と記譜、⑥聴取、⑦評価、⑧音楽と他の芸術や芸術以外の教科との関連性の理解、⑨音楽と歴史・文化との関連性の理解、の9領域になっている。

<sup>2</sup> 美術制作 (art production)、美術史 (art history)、美術批評 (art criticism) そして美学 (aesthetics)

---

の4つのディシプリンで構成されている。

<sup>3</sup> 表現 (performance)、歴史 (history)、美学 (aesthetics)、批評 (criticism) の4つのディシプリンで構成されている。

<sup>4</sup> 後に示す、デビッド氏のインタビューにおいて、氏がその旨を語った。

<sup>5</sup> California State Board of Education (2001) *Visual and Performing Arts Content Standards for California Public Schools*, p. ix

<sup>6</sup> 表14は、国立教育政策研究所(2003)『音楽のカリキュラムの改善に関する研究—諸外国の動向—』p.9の表5を引用した。そのうち、4.0 美的評価の内容の柱と目標部分は、引用にあたって筆者が和訳をし直した。

<sup>7</sup> Junior High School はG7~G9、Middle School はG6~G8。最近ではMiddle School が一般的になっており、Intermediate school (G7~G8) も設立されている。

(宮下 俊也)

## 第5章 世界の芸術教育が求める指針

### ーユネスコ「ソウル・アジェンダ」(2010)を通してー

この第5章では、本研究が開発しようとする新しい音楽鑑賞授業の実践プランを、これからの世界の芸術教育が目指す潮流に沿ったものにするため、ユネスコの第2回芸術教育世界会議 (World Conference on Arts Education) に出席し、そこで得られた「ソウル・アジェンダ」 (Seoul Agenda: Goals for the Development of Arts Education) を分析して実践プランに反映させるべき点を明らかにする。

#### 第1節 「ソウル・アジェンダ」の背景

2010年5月25日～28日、韓国ソウルにおいてユネスコの第2回芸術教育世界会議 (World Conference on Arts Education) が開催された。ここでは、2006年の第1回会議を経て作成された芸術教育の本質的役割や重要性の理解と国家政策を伴った芸術教育の推奨を求める「芸術教育のためのロードマップ」 (Roadmap for Arts Education) <sup>1)</sup>に基づく実践、研究、調査等の成果について議論された。またユネスコの国際諮問委員会 (International Advisory Committee) は、2009年より「ロードマップ」が目指す目標や戦略の検討を続け、それを具体的に示した「ソウル・アジェンダ」 (Seoul Agenda: Goals for the Development of Arts Education) を本会議開催中に提出し、その決定版を2010年7月13日にウェブに公開した<sup>2)</sup>。

#### 第2節 「ソウル・アジェンダ」の内容

「ソウル・アジェンダ」の邦訳を以下に掲げる。訳出は宮下によって行った。またそれぞれの項目についてその意図する内容を検討し、キーコンセプトとして示した (表 4-1～4-3) <sup>3)</sup>。

表 4-1

Seoul Agenda: Goals for the Development of Arts Education (2010.7.13)		キーコンセプト
ゴール1	芸術教育を、質の高い教育改善を実現させるための基礎として、また持続可能性をもたせるものとして保障すること。	・教育改善と持続可能な芸術教育の重要性
1a	芸術教育は、子どもや青年、生涯学習を受ける人々にとって、創造性、認識、感情、美的感性、社会性のバランスのとれた発達の基盤となるものであると断言する。	・芸術教育の理念
	(i) 政策及び(人的・物的)資源の配置を制度化・実施することにより、次の諸局面への持続的なアクセスを保障する。	
	(i)-1 一あらゆるレベルの学校で学ぶすべての学習者のための幅広く全体的な教育の一部として、すべての芸術領域における包括的な芸術学習。	・学校における芸術教育の普及
	(i)-2 一地域コミュニティにおける多様な学習者のための、あらゆる芸術領域にわたる学校外での体験。	・学校外における芸術教育の普及
	(i)-3 一学校内外における、デジタルや他の新しい芸術形式を含む学際的な芸術体験。	・学際的な芸術教育
	(ii) 創造性、認識、感情、美的感性、社会性といったそれぞれの成長発達による相乗効果を高める。	・芸術教育の理念の実現
	(iii) 芸術教育によって学習者の調和のとれた成長を保障するために、質の高い評価システムを確立する。	・芸術教育の評価システム
1b	芸術教育を通して、教育システムと構造の建設的な変容を促進する。	・芸術教育を取り入れた新教育システムの構築
	(i) 芸術以外の学問分野において、芸術的、文化的側面を取り込んだ教育モデルの構築に取り組む。	・教育全般における芸術的・文化的側面の扱い
	(ii) 教師と学校管理者に対して、芸術教育を通して創造的な文化を築くよう促進する。	・芸術教育による学校文化の構築
	(iii) 芸術教育を適用したこれまでにない新しい教育学や、学習者の多様性を意識したカリキュラムの創造に取り組む。	・芸術を取り込んだカリキュラム開発
1c	芸術教育において、芸術教育について、そして芸術教育を通して、生涯にわたる世代間の学習システムを確立する。	・生涯教育としての芸術教育システムの確立
	(i) あらゆる社会的背景をもつ学習者が、幅広いコミュニティや制度的環境において、生涯にわたって芸術教育を受けることができるように保障する。	・生涯教育としての芸術教育の保障
	(ii) 年齢層が異なる集団の中で芸術教育を受ける機会を保障する。	・異年齢間における芸術教育の保障
	(iii) 伝統的な芸術に関して知っておくべき事項を受け継いでいくために、年齢が異なる者同士の学習を助成し、世代間の理解を促進する。	・異年齢間と世代間学習による伝統的芸術の継承
1d	芸術教育を指導し、支持し、そしてその政策を進展させるための力量を確立する。	・芸術教育の指導者養成
	(i) 芸術教育の政策立案過程において、周辺に追いやられた人々や恵まれない人々の集団の参加を含み入れた新しい芸術教育の政策改革を実現していくことのできる実践者と研究者の力量を形成する。	・社会的マイノリティーに対する芸術教育研究と実践者の養成
	(ii) 情報メディアとの関係を強化することにより、コミュニケーションと主張を拡充する。その際、意思疎通のために適切な言語を確立し、情報技術や仮想ネットワーク利用により国家及び地域における既存の構想を相互に結びつけていく。	・グローバルな視点を持つ芸術教育のためのコミュニケーションスキルの育成
	(iii) 芸術教育の価値に対する認識を高め、公的あるいは私的な場での芸術教育のサポートを促進するために、芸術教育が個人や社会にもたらす影響力を伝えていく。	・個人や社会に対する芸術の価値の認識と発信

表 4-2

<b>ゴール 2</b>		<b>芸術教育活動とプログラムは、概念において、また実施においても質の高いものでなければならない。</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・質の高い芸術教育プログラムの開発</li> </ul>
2a		地域のニーズ、社会基盤、文化的背景に対応し、誰もが合意した質の高い芸術教育のスタンダードを開発する。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・質の高い芸術教育のスタンダード開発</li> </ul>
	(i)	学校やコミュニティにおける芸術教育プログラムを供給するために、質の高いスタンダードをつくる。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学校や地域コミュニティにおける質の高い芸術教育のスタンダード開発</li> </ul>
	(ii)	芸術教育に携わる教師やコミュニティにおけるファンリテイターに与える正式な認定資格を制定する。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・芸術教育の指導者の資格・認定の制定</li> </ul>
	(iii)	芸術教育のために必要となる適切な設備や資源を提供する。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・芸術教育のための設備・資源の提供</li> </ul>
2b		芸術教育における持続可能なトレーニングが、教育者や芸術家、コミュニティにとって利用可能なものであることを保障する。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・芸術教育における教育者と芸術家の質保障</li> </ul>
	(i)	持続可能な専門技術学習の仕組みを通して、学校の教員(芸術専門であるなしに関わらず)、また教育に携わる芸術家に、必要な技能と知識を提供する。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教員の芸術的質保障、及び芸術家の教育的質保障</li> </ul>
	(ii)	教員養成の教育課程や実習生の職能開発の中で、芸術の原理と教育実践の統合を図る。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教師教育における芸術教育の原理と実践の統合</li> </ul>
	(iii)	教育評価指導やメンタリングなど、教育実践の質のモニタリング手順の開発を通して、芸術教育のトレーニングの実施を強化する。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・芸術教育のトレーニング</li> </ul>
2c		芸術教育における研究と実践との往還を活発にする。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・芸術教育における研究と実践の往還</li> </ul>
	(i)	芸術教育の理論と研究を世界的に支援し、理論と研究と実践を繋ぐ。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・芸術教育における理論と実践との融合</li> </ul>
	(ii)	芸術教育研究において連携協力を促進し、情報センターや監視所のような国際的な組織を通して、模範となるような実践や研究を広めていく。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・芸術教育の管理と支援機関の役割</li> </ul>
	(iii)	芸術教育がもたらす影響について質の高いエビデンスをまとめ、それを公平に広めていくことを保障する。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・エビデンスを携えた芸術教育の影響の候補</li> </ul>
2d		学校内外での芸術教育において、教育者と芸術家との協働を促進する。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教育者と芸術家の協働の促進</li> </ul>
	(i)	学校がカリキュラムに芸術家と教師との協力体制を積極的に取り入れようとすることを奨励する。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学校教育における教育者と芸術家の協力体制の推進</li> </ul>
	(ii)	地域コミュニティ組織が、様々な異なる学習環境での芸術教育プログラムにおいて、教師と協働することを奨励する。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・地域コミュニティにおける芸術教育への教師の参画</li> </ul>
	(iii)	様々な学習環境の中で、保護者や家族や地域のメンバーを積極的に巻き込むような文化的プロジェクトを作り出していく。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・保護者や家族、地域メンバーによる文化的プロジェクトの推進</li> </ul>
2e		様々な利害関係者及び産業部門間で、芸術教育のための協力体制づくりを積極的に開始する。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・異分野間の協力体制の芸術教育の開始</li> </ul>
	(i)	社会における芸術教育の役割を強化するために、政府内あるいは政府の枠を超えて、特に、教育、文化、社会、保健、産業などの部門間でのパートナーシップを構築する。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・政治・経済界等の異分野組織との協働体制の構築</li> </ul>
	(ii)	芸術教育の原理や、政策、実践を強化するために、政府、民間の社会組織、高等教育機関、専門的な学術団体の活動をコーディネートする。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・芸術教育推進のための官・民、教育研究機関等のコーディネート</li> </ul>
	(iii)	財団や慈善団体などを含む私的な組織をパートナーとして芸術教育プログラムの開発に巻き込む。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・私的組織との協働による芸術教育プログラムの開発</li> </ul>

表 4-3

ゴール 3		芸術教育の原理と実践を、今日の世界が直面している社会的・文化的な課題解決に貢献するために適用する。	・芸術教育の社会的・文化的貢献
3a	芸術教育によって、社会が潜在的にもっている創造性や革新性を高める。		・芸術教育による社会創造性や革新性への貢献
	(i)	学校やあらゆるコミュニティでの芸術教育によって、個人の中にある創造的でこれまでにない新しいことを生み出そうとする潜在能力を育成し、また、創造的な市民としての新世代を育成する。	・市民の芸術教育による創造性の育成
	(ii)	芸術教育によって、ホリスティックな(包括的な)社会、文化的で経済力のある社会に寄与するような創造的で革新的な実践を促進する。	・芸術教育によるホリスティックで文化的経済的に高い社会づくりへの貢献
	(iii)	クリティカルで創造的な思考の源として、コミュニケーションテクノロジーにおける新機軸を利用する。	・コミュニケーションテクノロジーの利用
3b	芸術教育にある社会や文化の健全化を果たす特質を認識し、発展させる。		・社会や文化の健全化を果たす芸術教育の認識と発展
	(i) 芸術教育にある、以下のような社会や文化の健全化を果たす特質についての認識を促す。		
	(i)-1	ー広範にわたる伝統的・現代的芸術経験の価値	・伝統文化や現代芸術の価値
	(i)-2	ー芸術教育の療法や健康に関わる特質	・療法や健康に関わる特質
	(i)-3	ー文化の多様性や文化間の対話を促進するだけでなく、アイデンティティや遺産を発展させ保護することのできる可能性	・アイデンティティや文化遺産の発展と保護
	(i)-4	ー紛争や災害の後に、そこから回復させることのできる特質	・紛争や災害からの復興
	(ii)	芸術教育の専門家養成プログラムにおいて、社会や文化の健全化に関わる知識を身に付けさせる。	・芸術教育者養成における社会や文化の健全化の教授
(iii)	学習者の教育への参加を増大し、教育から落ちこぼれていってしまうことを減らすために、学習の動機付けのプロセスとして芸術教育を適用する。	・学習の動機付けのための芸術教育の適用	
3c	社会的責任、社会的結束、文化的多様性、異文化間対話を促進する上での芸術教育の役割を高め、それらを支援する。		・芸術教育による異文化理解や異文化間交流
	(i)	学習者それぞれが持つ具体的な背景を理解することや、少数民族や移住者を含む学習者の地域との関連性に適応した芸術教育実践を促進することを優先する。	・学習者と地域の社会的背景の関連性に適応した芸術教育の促進
	(ii)	多様な文化的・芸術的表現についての知識や理解を促進し高める。	・異文化や芸術の多様性の理解
(iii)	芸術教育のトレーニングプログラムを支援する中で、異文化間をつなぐ対話の技術、教授法、機材や教材を導入する。	・異文化間交流のためのスキルや教材等の提供	
3d	芸術教育を通して、平和から持続可能性に至る主要な世界的課題に対応する能力を育成する。		・平和や持続可能性に関わる世界的課題の克服への貢献
	(i)	環境、地球規模の移民、持続可能な開発など、広範囲にわたる現代社会と文化の問題を踏まえた芸術教育活動に焦点をあてる。	・芸術教育活動による現代社会が抱える問題へのアプローチ
	(ii)	芸術教育実践における多文化教育的な側面を拡大し、世界的視野を持った市民性を育成するため、学習者や教師が異文化間交流することを活発にする。	・多文化理解や世界的視野の育成のための異文化間交流の推進
	(iii)	コミュニティにおける民主主義と平和を推進し、紛争終結後の社会の再建をサポートするために芸術教育を適応する。	・芸術教育による平和社会の構築

### 第3節 「ソウル・アジェンダ」からの示唆

「ソウル・アジェンダ」の各項目の内容を検討してみると、平成20年度告示の学習指導要領における芸術科目が求める内容とそれとが一致している側面と、乖離している側面、あるいは学習指導要領には示されていない側面が見えてきた。

特に、ゴール3の「芸術教育の社会的・文化的貢献」には日本ではなされていない内容が多く存在している。ストラテジー3aでは、「市民の芸術教育による創造性の育成」(3a(i))、すなわち、音楽科で培った創造性が、その後、社会市民として生きていく上で、何にどのように貢献するのか、例えばそれが、ホリスティックな社会や高い文化的経済的社会的構築に貢献することについての理解(3a(ii))を求める内容は示されていない。

ストラテジー3bでは、芸術としての音楽がもつ特質として「療法や健康」に寄与する特質(3b(i)-2)、及び「紛争や災害からの復興」に寄与する特質(3b(i)-4)については扱われていない。

ストラテジー3c・3dでは、世界が抱える諸問題や世界平和を目指すことを視野に入れた内容は道徳との関連で行われているかもしれないが、音楽科の指導内容には示されていない。またそのために必要となる異文化理解を果たすための異文化間交流、及びそのためのコミュニケーションスキルの育成は、グローバル社会を迎えている現在において音楽科としても取り上げなければならない喫緊の課題であると考えられる。

ゴール3は、ユネスコの理念でもある教育や文化の振興を通じて戦争の悲劇を繰り返さないという平和社会構築への貢献を目指すものである。これは、改正された教育基本法の第五条第五項「他国を尊重し、国際社会の平和と発展に寄与する態度を養うこと」と軌を一にする。しかしこの目的を、ユネスコでは芸術教育にも求めているのに対し、日本の音楽科(芸術科音楽)学習指導要領では、「音楽文化についての理解を深める」ことに留まっている<sup>4</sup>。

しかし、これらの内容を中学校音楽科の鑑賞授業に求めることは十分可能なものと考えられる。例えば、音楽が豊かな社会や文化の健全化に果たせることは自明であり、そうした事例は多くみられるものである。また、異文化理解を図るための異文化間交流は、ただ異文化としての音楽理解を求めるだけでなく、遠隔通話システムや電子メール等を用いて実際に生演奏を鑑賞し合ったり批評文を交換し合ったりすることなどで可能になるだろう。持続可能な平和社会の構築に向けても、異文化間交流やそうしたことを主張する楽曲を教材に使用してその音楽のメッセージ性を理解したりすることで実現できるものと考えられる。

これらはいずれにしても、学習指導要領の〔共通事項〕を基盤に、批評文を書いて終了するのではなく、その先にしなければならない意識化であったり理解であったり、また行動であったりする。本研究で開発する「新しい鑑賞」とは、そのことまでも求めようとするプランになる。

(宮下 俊也)

1

<http://www.unesco.org/new/en/custom-search/?cx=000136296116563084670%3Ah14j45a1zaw&cof=FORID%3A9&ie=UTF-8&q=Roadmap+for+Arts+Education&hl=en&sa=ok&siteurl=www.unesco.org%2Fnew%2Fen%2Fune>

---

[sco%2F#1258](#) (2011年3月11日確認)

2

[http://portal.unesco.org/culture/en/ev.php-URL\\_ID=41117&URL\\_DO=DO\\_TOPIC&URL\\_SECTION=201.html](http://portal.unesco.org/culture/en/ev.php-URL_ID=41117&URL_DO=DO_TOPIC&URL_SECTION=201.html)

(2011年3月11日確認) 「ソウル・アジェンダ」は、ゴール、ストラテジー、アクション・アイテムによって構成されている。

- <sup>3</sup> 表4-1～4-3の「ゴール1～3」は、「ソウル・アジェンダ」の3つのゴール、その下位にある網掛け(黄色)項目はストラテジー、さらにその下位にある(i)…はアクション・アイテムである。
- <sup>4</sup> 小学校学習指導要領の各学年の目標には「様々な音楽に親しむ」、中学校の教科目標と高等学校芸術科音楽ⅠとⅡの目標では「音楽文化についての理解を深め」ること、Ⅲでは「音楽文化を尊重する態度を育てる」ことと示されている。なお、同Ⅲの鑑賞領域の内容には「生活及び社会における音楽や音楽にかかわる人々の役割を理解して鑑賞すること」と示されており、この部分のみが「芸術教育の社会的文化的貢献」に関わるものとなっている。

## 第6章 第1部のまとめとガイドブックのコンセプト

ここまでこの第1部では、「音楽鑑賞」「批評」及びそれらに関連する概念や先行研究を検討し、それを反映させた「音楽鑑賞学習における批評の構造」を提出した（第1章・第2章）。

続いて、平成20年告示の中学校音楽科学習指導要領を中心に、批評を含むこれからの新しい鑑賞教育について教育行政の立場から検討した（第3章）。

さらに、批評と深く関わる「美的評価」（Aesthetic Valuing）を幼稚園から高等学校まで一貫して位置づけている米国カリフォルニア州の音楽スタンダードを取り上げ、その理念、趣旨、教育現場での実践現状を調査し、ミドルスクールにおける授業実践を授業分析した（第4章）。

そして、2010年にユネスコの芸術教育世界会議が、今後の世界の芸術教育の指針及び戦略として示した「ソウル・アジェンダ」（Seoul Agenda: Goals for the Development of Arts Education）を検討した。

第1部の最終章となるこの第6章では、ここまでで得られ、続く第2部で提出する「批評を取り入れた新しい音楽鑑賞授業のためのガイドブック（中学校編）」（以下、「ガイドブック」）に反映させる知見をまとめておく。

### 第1節 諸概念のまとめと「音楽鑑賞学習における批評の構造」

第1章と第2章で明らかにした諸概念を以下にまとめる。

#### 「鑑賞」（appreciation）の意義

「鑑賞」は芸術の価値認識の意味を持ち、芸術に対して積極的・能動的にそれを求める創造的な行為である。

#### 「音楽鑑賞」（Music appreciation）の意義

- ① 「音楽鑑賞」は、創作（作曲）、演奏、とともに、人間と音楽との関わり方の1つである。
- ② 鑑賞は受容という自由な面があるものの、価値評価や批評が鑑賞の意義として存在している。
- ③ 音楽鑑賞は主体である鑑賞者と対象である音楽との関係において、鑑賞者が新しい意味を発見するなどして積極的に対象に関わるものである。
- ④ 音楽鑑賞は鑑賞者の感性による知覚、感情、それ以外の客観的なものによって行われる。
- ⑤ 音楽鑑賞は創造的な行為である。

### 「批評」 (criticism) の意義

- ① 「批評」は、対象にある価値を判断するための議論や検討と、その結果を読者に伝えることであり、そのことにより作者や他の鑑賞者や読者、あるいは社会に対して新たな手がかりや指針など有益な知見を提供することを目的とするものである。
- ② 批評の対象は、対象とするものにある「価値」である。
- ③ 「価値」とは、対象とそこにある価値を判断しようとする人間との関係性の中に築かれる。一般的に、人間の実存にとって好ましいもの (the preferable) 、好適なあり方」とされるが、人間の恣意的な好みによるのではなく、ある客観的な合理性に基づいている、という意識を伴うものとされる。
- ④ 「判断」とは、真・偽、善・悪、美・醜などを決定し、それを明確に言語で主張することである。
- ⑤ 価値を判断するためには、判断するための「規準」が必要となる。その規準は、判断する者の感性に関わる直感や感受性や知識といった豊かな経験によって行われた対象の知覚結果である。

### 「芸術批評」 (Art criticism) の意義

- ① 豊かな経験によって得られた直感や感受性や知識によって対象を知覚し、それを規準にして芸術の価値を判断し、その結果を言語で明確に主張することである。その主張によって、作者や他の鑑賞者や読者、あるいは社会に対して新たな手がかりや指針など有益な知見を提供することを目的とするものである。芸術批評の対象となる価値とは、一般的には作品に見出される「意味」であり、それはまた芸術作品の良否、長所と短所、美的質などでもある。
- ② 具体的には2つある。1つは「作品そのものの価値」であり、それは芸術における形式と内容である。もう1つは「芸術作品を創造する時の人間の精神」であり、それは「芸術を創造した人間のイマジネーションや感情」である。

### 「音楽批評」 (Music criticism) の意義

豊かな経験によって得られた直感や感受性や知識によって音楽 (作品や演奏) を知覚し、それを規準にして、音楽の形式と内容からなる「作品そのものの価値」と「作曲家や演奏家のイマジネーションや感情」を判断し、それを言語で明確に主張することである。直感や感受性や知識はやはり過去の経験によって得られるものであるが、とりわけ、音楽美学や音楽心理学、音楽理論などを通して音楽について思索した経験が正当な批評のための拠り所となる。そしてその主張によって、作曲家や演奏家、また他の鑑賞者や読者、あるいは社会に対して新たな手がかりや指針など有益な知見を提供することを目的とするものである。

### 音楽鑑賞学習における批評の意義と過程

- ① 感性による直感や感受性や知識によって、音楽の形式的側面を知覚し、内容的側面を感受し、文化的側面を理解する。すなわち、音楽を認識する。＝「認識」
- ② 音楽を認識することによって、学習者の内にイメージや感情の変化といった内的経験が為される。＝「内部世界の生成」
- ③ 認識した結果や、自己の内に生成されたイメージや感情の変化を規準に、音楽の価値や意味を思考によって探求する。このとき、音楽の部分のみの認識にたよった分析的思考のみならず、それらを総合して音楽全体を創造的に洞察することが必要となる。音楽の価値や意味とは「作品そのものの価値」や、「芸術作品を創造する時の人間のイマジネーションや感情」である。＝「価値や意味の探求」
- ④ 探求を通して、音楽の価値や意味を判断する。判断されたその音楽の価値や意味は、鑑賞者自身の「自分にとってのその音楽の意味や価値」となる。すなわち、「自分が探求した『作品そのものの価値』」であり、「自分が探求した『芸術作品を創造する時の人間のイマジネーションや感情』」となる。これらは当然、音楽の認識が前提になっていることが条件になる。＝「判断」
- ⑤ 判断の結果を、根拠を携えて記述言語で主張する。根拠は認識の結果やそれによる内的に生成されたものになる。これが外的に生成されるものとなる。＝「主張」

ここまでの音楽鑑賞学習における批評の原理的過程となる。加えて、以下の2点が教育的意義として加わる。

- ⑥ 以上の過程は学習においては、行き来させ、過程で判断の結果を主張させることも重要である。
- ⑦ この過程によって、鑑賞者自身の認識が再構成される。そこに批評の教育的な意義がある。

さらに、これらの諸概念を反映させて構築した「音楽鑑賞学習における批評の構造」を以下に示す。

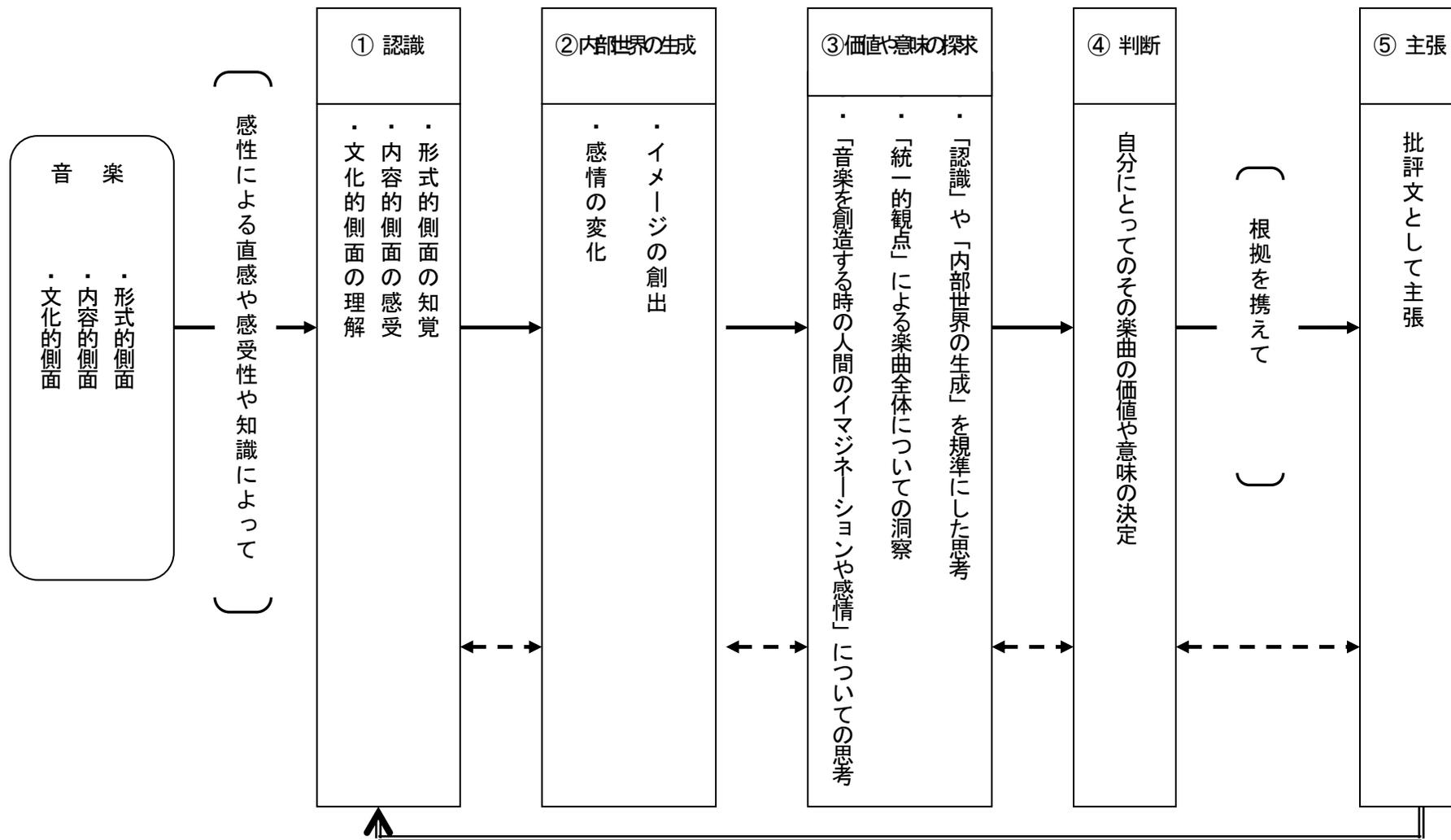


図2 音楽学習鑑賞学習における批評の構造

## 第2節 米国カリフォルニア州音楽スタンダードから得た知見のまとめ

ここでは、米国カリフォルニア州音楽スタンダード（CSM）から得た知見をまとめる。

### CSMにおける4.0「美的評価」の検討から得られた知見

#### ① 「美的評価」の意義

「美的評価」の意義は、「音楽作品について反応し、分析し、判断をすること」であり、目標は「音楽の要素や美的質や聴き手の反応によって音楽作品や音楽家の演奏を（文化的背景と関連づけて）批判的に評価し意味を見出す」ことである。このことは、第1章の哲学的概念と一致している。

#### ② 「文化的背景」との関連

低学年（Prekindergarten～Grade5）では、「音楽作品や音楽家の演奏を、音楽の諸要素や美的特質や人間的な反応によって、批判的に評価し意味を創出する」ことを趣旨とし、高学年（Grade6～Grade12）では、「音楽作品や音楽家の演奏を文化的背景と関連づけて、音楽の諸要素や美的特質や人間的な反応によって、批判的に評価し意味を創出する」こととなる。すなわち、高学年では音楽の「文化的背景」と関連づけた評価が加わっている。

#### ③ 知覚・感受・理解と判断のための規準

「美的評価」の内容は「意味の創出」と「分析と批判的評価」の2つであり、前者は「美的評価」の基礎として、音楽の形式的側面の知覚、内容的側面の感受、文化的側面の理解を求めている。またそこには、諸要素を限定しない即応的な反応から、特定の諸要素に対する知覚、そしてその諸要素がもたらす内容的側面の感受、さらに文化的側面として音楽が生み出された背景、音楽を創造する時の人間のイメージーションや感情を、内容的側面の感受と結びつけて思考し理解するシーケンスが認められる。また初期では動きによって、そして次第に述べたり説明したりという言語を用いた表出を求めている。後者は、美的評価として必要となる判断規準の備えとその活用が一貫した内容となっており、初期では動きによって、そして次第に述べたり説明したりという言語を用いた表出に連なるシーケンスが認められる。

#### ④ 音楽の概念の獲得

「美的評価」について子どもに言語で表出させることは重要であり、特に、低年齢の子どもには、そのことを通して音楽概念についての語彙を獲得させ、年齢が上がると、その語彙を用いて音楽を評価し、また高等学校では、音楽用語を適切に用いて概念を語り、音楽の背景と結びつけて判断や評価を行うことが重要とされている。

#### ⑤ 言語による表出

「美的評価」の実践では教師の発問技術が重要になる。またその発問によって求める子どもの語り（発話）や、高学年では記述や記録が「美的評価」のための学習活動となり、それが音楽批評のための学習となる。

#### ⑥ 根拠の要求

特に中学生や高校生においては、生徒が行った「美的評価」についてその根拠を求めることが必須となる。

### 第3節 「ソウル・アジェンダ」から得た知見のまとめ

ユネスコがこれからの世界の芸術教育に対する指針として示した「ソウル・アジェンダ」の中で、「ガイドブック」に反映させたい事項は次の点である。

今後の新しい鑑賞教育において図らねばならないこと。

- ① 社会や文化の健全性への貢献。
- ② 異文化理解や異文化交流。
- ③ 平和や世界的課題の克服への貢献。

### 第4節 「ガイドブック」の概要

#### 1. キーコンセプト

以上を基に「ガイドブック」のキーコンセプトを次の6点に定めた。そのうち①～⑤はこれまでの知見から得た。そして⑥の「楽しい鑑賞学習」は、音楽そのものをじっくり味わって楽しむこと、そして、音楽の仕組みや文化的背景などを学び批評する学習活動を楽しく行うことを求めようとするものである。従来の音楽鑑賞授業に散見された、聴いて感想文を書いて終了する授業、音楽史や理論的な学習に偏った授業、批評文を書く意味が生徒に理解されず「書かされる」意識を与えてきた授業等からの脱却を目指したものである。

- ① 「創造的な鑑賞」
- ② 「認識と自分の感情の変化」
- ③ 「作曲者・演奏者の創造意図や感情」
- ④ 「批評能力の育成」
- ⑤ 「批評能力の社会的貢献」
- ⑥ 「楽しい鑑賞学習」

#### 2. タイトル

これらのキーコンセプトに基づき、「ガイドブック」のタイトルを以下のように定めた。

「批評を取り入れた新しい音楽鑑賞授業のためのガイドブック（中学校編）  
－見つけ、考え、生みだし、拡げる、楽しい鑑賞－

#### 3. キーコンセプトと学習活動のテーマ

「音楽学習における批評の構造」を基本に、「ガイドブック」のキーコンセプトとそれ

を行う時の活動のテーマを表す行動動詞を関連づけて、以下の図3ように構造的に示す。テーマとしては、「…を見つける」「…を考える」「…を生み出す」「…を拡げる」とした。これらはすべて能動的な行動動詞となっており、そのことによりすべての鑑賞活動を主体的・能動的・創造的なものになることが期待される。例えば、楽曲の特徴となる諸要素の働きも、教師から教えられるのではなく、自分からそれを見つけ出そうとする意識をもって知覚・感受することが求められることになる。

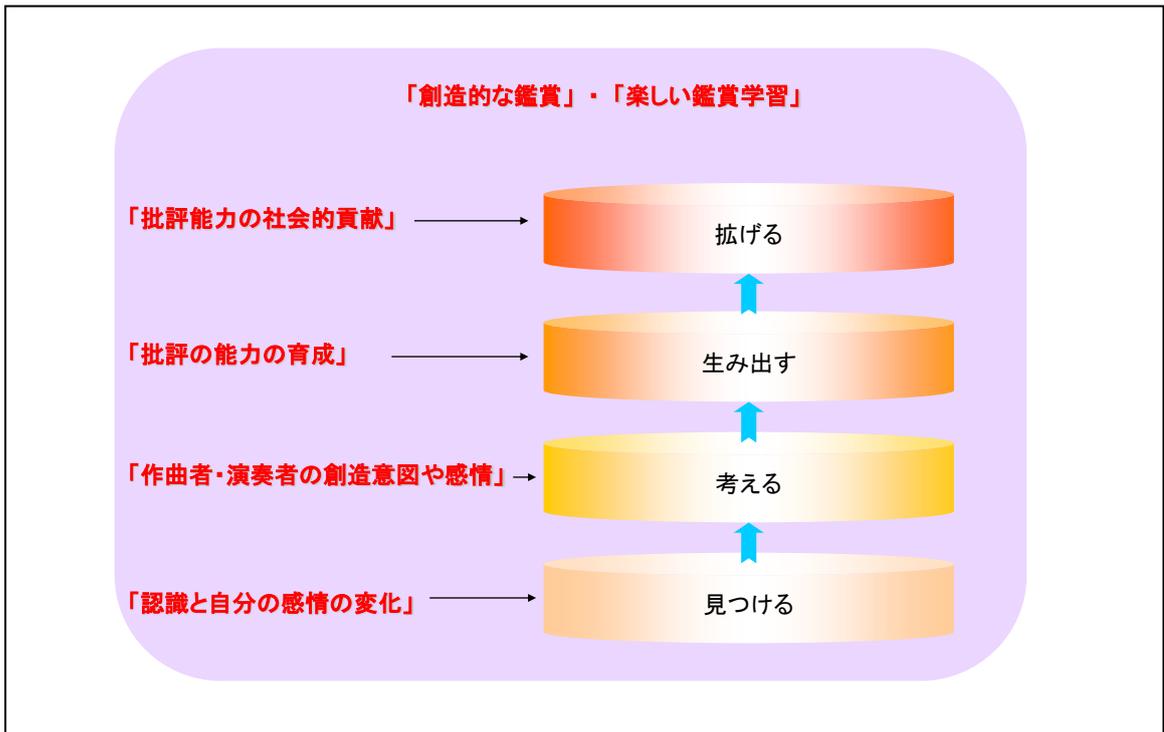


図3 「ガイドブック」のキーコンセプトに対応する学習活動のテーマ

#### 4. 学習活動のテーマとステージ

図3の構造に基づき、学習活動のテーマの具体と、題材の発展的展開を以下の図4に示す。この図に示す授業の発展的展開を「学習指導のステージ」とする。

そのステージのうち、「生み出す」までをステージ1、さらに「拡げる」までをステージ2としてまとめた。ステージ1は「音楽学習における批評の構造」のすべてのプロセスに相当し、批評文を作成する（生み出す）までを示す。ステージ2は、その生み出した批評文を、鑑賞した楽曲の作曲家や演奏者、他の国々や地域の人々などに発信して「拡げる」ことを求める。それは、キーコンセプトの「批評能力の社会的貢献」を実現させることを目指すもので、鑑賞による異文化交流や文化創造への貢献を果たす。

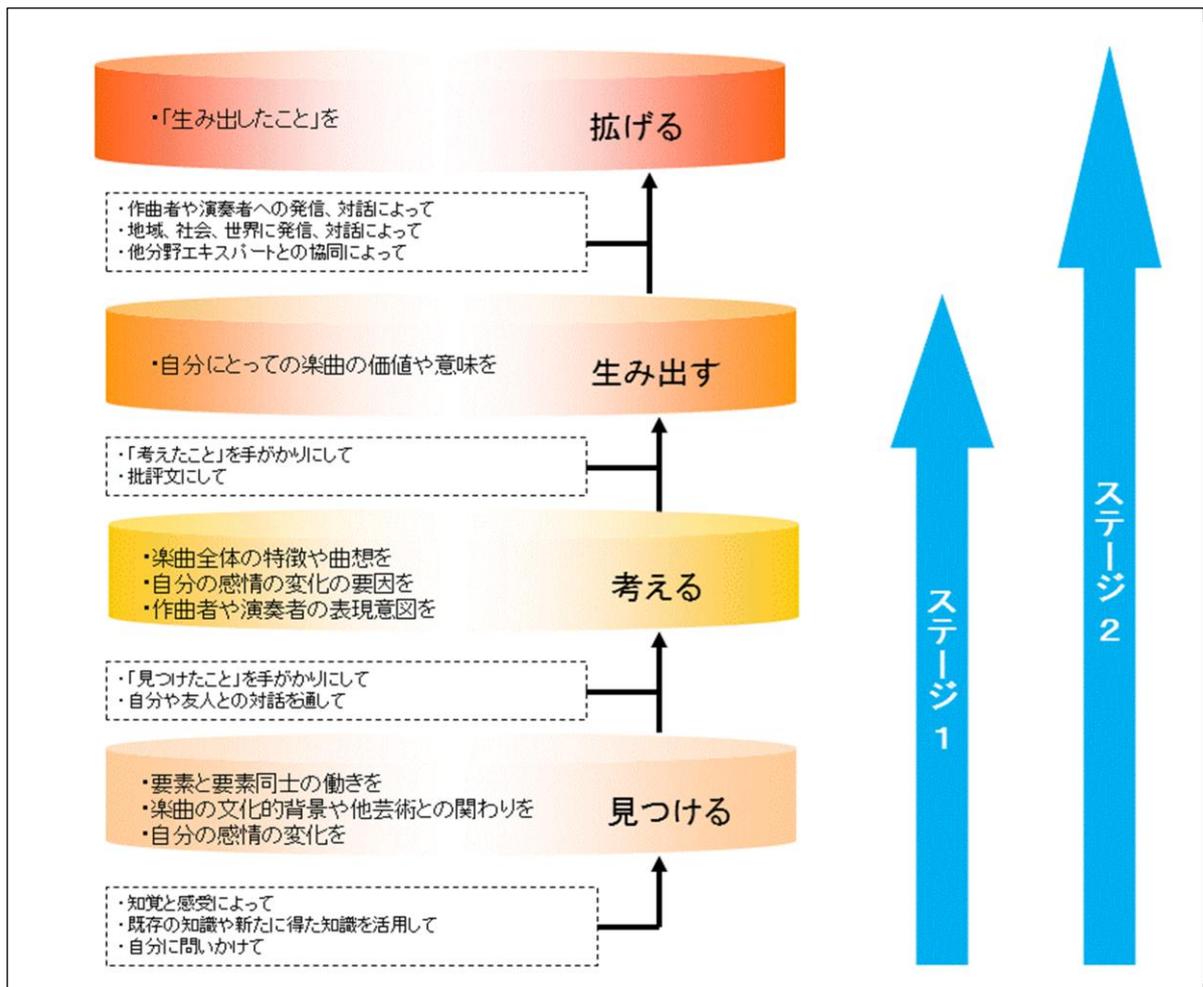


図4 「ガイドブック」における学習活動のテーマの具体とステージ

## 5. 各ステージの概要

次に、各ステージの趣旨と方法、教材、指導計画のポイントを示す。

### (1) ステージ1

趣 旨	<p>① 人間が生きていく上で必要となる、事物や事象（芸術を含む）を認識し、思考し、判断し、そして行動を起こす（表現する）こと、及び、それらと自分との関わりを築くことについての理解を目指す。</p> <p>② 音楽もまた、自分にとって価値や意味を生み出してこそ自分との関わりが築けることの理解を目指す。</p> <p>③ 認識し、思考し、判断し、自分にとっての価値や意味を生み出したことを人に伝える能力の育成を目指す。</p> <p>④ 中学校における〔共通事項〕の学習指導のあり方を提供することを目指す。</p>
方 法	<p>① 楽曲の特徴としての要素や要素同士の関連、楽曲の文化的背景や他芸術との関わり、自分の感情の変化を見つけ出す。</p> <p>② 楽曲全体の特徴や曲想、自分の感情の変化の要因、作曲者や演奏者の表現意図や感情を考える。</p> <p>③ ①を手がかりに②を考えるルート（部分→全体）、②の要因を①から探るルート（全体→部分）、の2ルートを探る。</p> <p>④ ③を経て、自分にとっての楽曲の価値や意味を生み出し、人に伝えることによって音楽のよさや美しさを味わって聴く。</p>
教 材	<ul style="list-style-type: none"> <li>・〔共通事項〕に示された要素に注目しやすく、その楽曲の特徴として知覚しやすい要素や要素同士の関連が認められるもの。</li> <li>・文化的背景や他芸術との関わりがわかりやすい楽曲。</li> <li>・日本の伝統音楽を含む、比較的オーソドックスな楽曲。</li> <li>・生徒によって価値や意味の捉え方が偏らないもの。</li> </ul> <p>等</p>
指 導 計 画 の ポ イ ン ト	<p>① 事例1（スタートアップ）において、鑑賞することの意味を中学生にわかりやすく理解させる。</p> <p>② 生活における、認識→思考→判断→表現の例を取り上げる。</p> <p>③ 価値判断など、答えが1つとは限らないものを追求するために、生徒同士や教師との対話を仕組む。</p> <p>④ その題材で知覚・感受させたい要素や要素同士の関連を明確に定め、それを生徒が見つけ出せるように仕組む。</p> <p>⑤ その題材で理解させたい楽曲の文化的背景や他芸術との関わりを、生徒が見つけ出せるように仕組む。</p> <p>⑥ 楽曲全体の特徴や曲想を要素や要素同士の関連から考える場面を仕組む。</p> <p>⑦ 生徒自身が自分の感情の変化を自覚し、それを言葉で表せるように仕組む。</p> <p>⑧ ④～⑦を通して、客観と主観の両方を備えてものを捉えること、理性的な捉えに裏打ちされた感情を抱くことの大切さを理解させる。</p>

(2) ステージ2

趣 旨	① 事物や事象（芸術を含む）を鋭敏な知覚力によって認識し、質を思考し深く探索していくこと、思考や判断の結果を適切・建設的に主張（表現）できることを目指す。 ② 自分にとっての楽曲の価値や意味を、クラスを超えた他者に伝える経験を与え、鑑賞することによる音楽文化の創造や社会的貢献を実感させることを目指す。
方 法	① 作曲者や演奏者、他分野のエキスパートとの協働によってステージ1までの学びを深める。 ② 鑑賞曲の作曲者、地域、社会、世界に向かって批評の結果を発信する。
教 材	・郷土や日本の伝統音楽（他の地域や他国に対し、自分が見つけ、考え、生み出した郷土や自国の音楽文化の価値や意味を発信し、交流するため）。 ・現代音楽（まだ価値の定まっていない音楽に対し、自分が見つけ、考え、生み出した価値や意味を、その作曲者や演奏者に発信し、交流するため）。 ・平和や環境など、社会貢献についてのメッセージ性のある音楽。 等
指 導 計 画 の ポ イ ン ト	① 生徒一人一人、あるいはクラスで見つけ、考え、生み出したその音楽の価値や意味を発信し、音楽文化の創造や社会の文化創造に貢献する経験を仕組む。 ② 「見つける」と「考える」の順序は、ステージ1のように、2ルートを採る。 ③ 作曲者や演奏者、他芸術、他領域のエキスパートと協働して授業計画や実践を行う題材を仕組む。

(宮下 俊也)

# 第2部

## 批評を取り入れた 新しい音楽鑑賞授業のためのガイドブック (中学校編)

—見つけ、考え、生みだし、広げる、楽しい鑑賞—



## このガイドブックを使用するにあたって

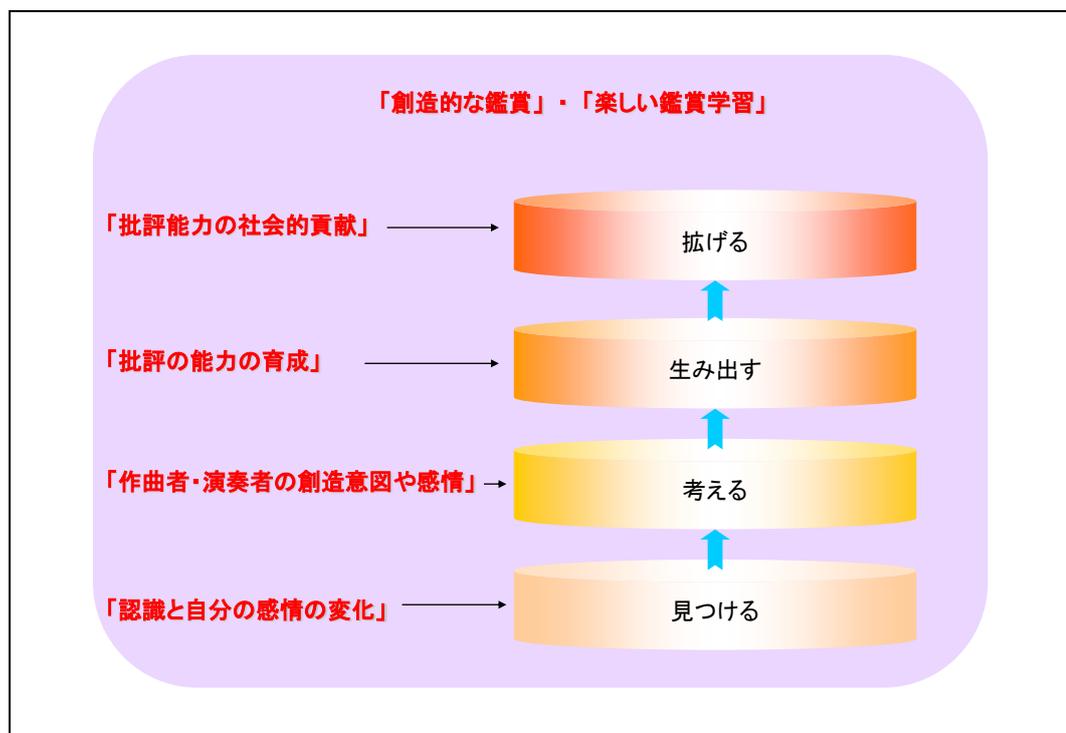
1. まず、「鑑賞」とは何か、「批評」とは何をすることなのか、「音楽鑑賞教育によって培う学力」とは何か、など、音楽鑑賞学習に関わる諸概念を正しく理解していただくことが大切です。それらは、本報告書の第1部第6章にまとめて示しています。また、それらを導いた経緯は、第1部第5章までに論じています。ぜひ、第6章だけでもお読みいただきたいと思います。
2. このガイドブックには、全部で22の実践事例を示しています。そのうち実践例1～15までをステージ1、実践例16～22までをステージ2、としています。どれも平成20年告示の学習指導要領に準じたものになっていますが、ステージ2は、学習指導要領をさらに発展させた内容になっています。
3. 各題材には、「見つける」「考える」「生み出す」「広げる」（ステージ2のみ）という学習活動のテーマが記されています。それらは鑑賞学習を能動的、創造的にする意図に基づくものです。
4. ここに掲載した実践例は、掲載順にすべて行うことを求めているものではありません。また、ステージ1の次にステージ2を行わなければならないということもありません。年間指導計画を作成する時に、生徒の実態などを考慮して、適宜、選択して実践していただければと思います。
5. ただし、実践例1は第1学年の、実践例7は第2学年の、それぞれ最初の鑑賞授業で行うとよい内容になっています。
6. 各実践例の「キーワード」と「題材の趣旨と学習指導のポイント」をご理解いただければ、教材曲をいろいろと変えて実践することも可能です。
7. 掲載されているワークシートや資料などは、コピーして使用してもかまいません。
8. この実践例を用いて実践され、その授業や成果などを公表する場合は、本ガイドブックを参考にした旨、学習指導案や報告書類などに付記してください。
9. 実践事例の作成者と連絡を取りたい場合は、それぞれの先生方の電子メールアドレスか、miyashit@nara-edu.ac.jp までお寄せください。このガイドブックを機に、先生方の中で交流が生まれ、鑑賞教育がさらに発展していくことを望みます。

## 実践のキーコンセプト

本ガイドブックに掲載している実践例は、次の6つのキーコンセプトに基づいています。

- ①「創造的な鑑賞」
- ②「認識と自分の感情の変化」
- ③「作曲家・演奏者の創造意図や感情」
- ④「批評能力の育成」
- ⑤「批評能力の社会的貢献」
- ⑥「楽しい鑑賞学習」

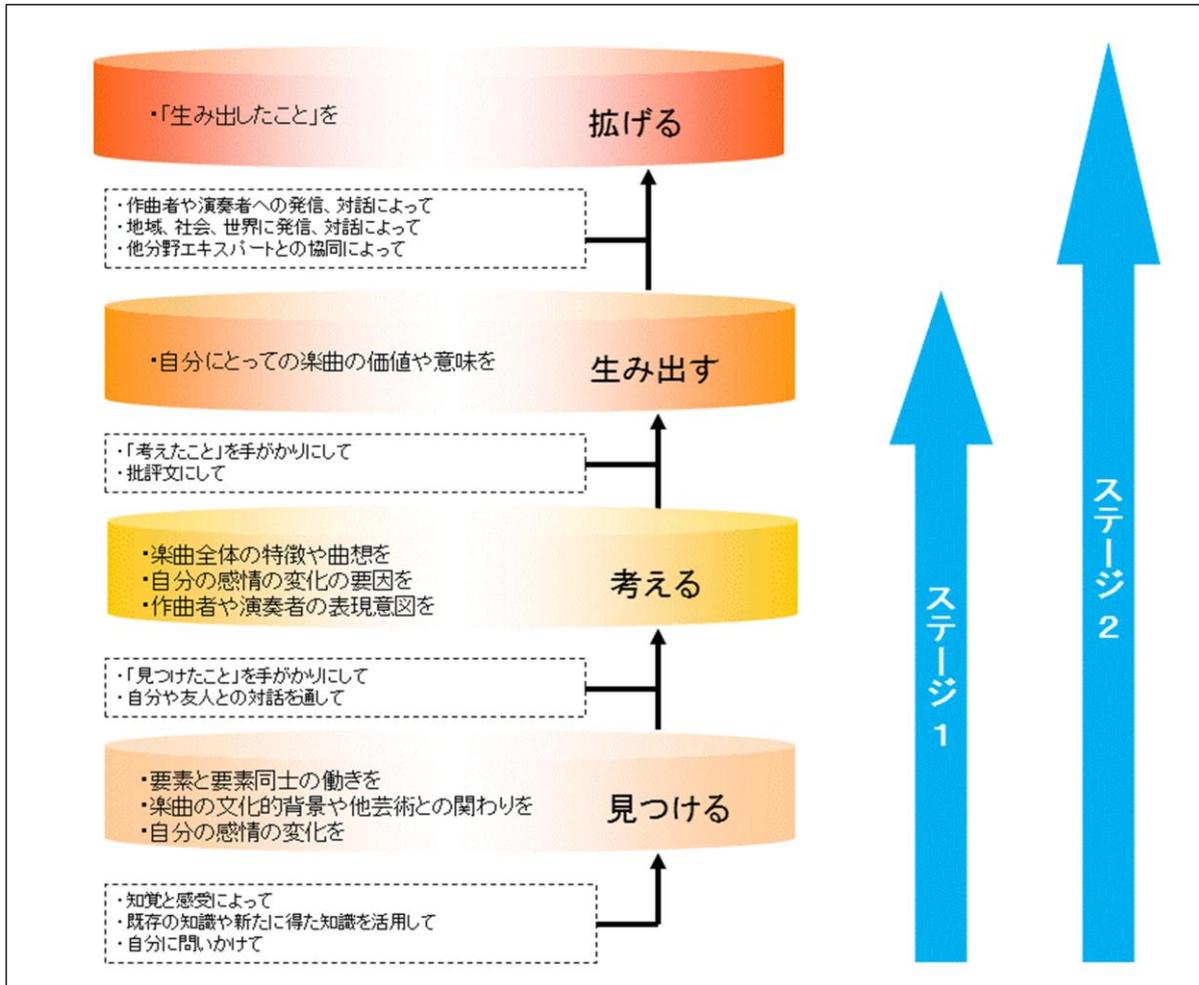
このキーコンセプトを実践に反映させるために、各題材での学習指活動を、「…を見つける」「…を考える」「…を生み出す」「…を拡げる」内容として示しています。そのことで、学習活動が主体的、能動的、創造的になることを期待しています。図で構造的に表すと次のようになります。



「見つける」「考える」「生み出す」「拡げる」は、この順序で発展していきますが、実際の授業では、例えば「考える」→「見つける」の順序になったり、それぞれが同時に並行して行われたりすることもあります。

「見つける」「考える」「生み出す」「拡げる」の具体的な内容は、次の図のようになります。

特にステージ2にある「拡げる」は、批評を行い、それをその楽曲の作曲家や演奏者、他の国々や地域の人々などに発信することを求めています。これは、キーコンセプトの「批評能力の社会的貢献」を実現させることを目指すもので、鑑賞によって異文化交流や文化創造への貢献を果たそうとする、これからの新しい鑑賞教育として求めるものです。



## 各ステージの概要

各ステージの概要は、次の通りです。

### ステージ1

趣 旨	<ol style="list-style-type: none"> <li>① 人間が生きていく上で必要となる、事物や事象（芸術を含む）を認識し、思考し、判断し、そして行動を起こす（表現する）こと、及び、それらと自分との関わりを築くことについての理解を目指す。</li> <li>② 音楽もまた、自分にとって価値や意味を生み出してこそ自分との関わりが築けることへの理解を目指す。</li> <li>③ 認識し、思考し、判断し、自分にとっての価値や意味を生み出したことを人に伝える能力の育成を目指す。</li> <li>④ 中学校における〔共通事項〕の学習指導のあり方を提供することを目指す。</li> </ol>
方 法	<ol style="list-style-type: none"> <li>① 楽曲の特徴としての要素や要素同士の関連、楽曲の文化的背景や他芸術との関わり、自分の感情の変化を見つけ出す。</li> <li>② 楽曲全体の特徴や曲想、自分の感情の変化の要因、作曲家や演奏者の表現意図や感情を考える。</li> <li>③ ①を手がかりに②を考えるルート（部分→全体）、②の要因を①から探るルート（全体→部分）、の2ルートを採る。</li> <li>④ ③を経て、自分にとっての楽曲の価値や意味を生み出し、人に伝えることによって音楽のよさや美しさを味わって聴く。</li> </ol>
教 材	<ul style="list-style-type: none"> <li>・〔共通事項〕に示された要素に注目しやすく、その楽曲の特徴として知覚しやすい要素や要素同士の関連が認められるもの。</li> <li>・文化的背景や他芸術との関わりがわかりやすい楽曲。</li> <li>・日本の伝統音楽を含む、比較的オーソドックスな楽曲。</li> <li>・生徒によって価値や意味の捉え方が偏らないもの。</li> </ul> <p style="text-align: center;">等</p>
指導計画のポイント	<ol style="list-style-type: none"> <li>① 事例1（スタートアップ）において、鑑賞することの意味を中学生にわかりやすく理解させる。</li> <li>② 生活における、認識→思考→判断→表現の例を取り上げる。</li> <li>③ 価値判断など、答えが1つとは限らないものを追求するために、生徒同士や教師との対話を仕組む。</li> <li>④ その題材で知覚・感受させたい要素や要素同士の関連を明確に定め、それを生徒が見つけ出せるように仕組む。</li> <li>⑤ その題材で理解させたい楽曲の文化的背景や他芸術との関わりを、生徒が見つけ出せるように仕組む。</li> <li>⑥ 楽曲全体の特徴や曲想を要素や要素同士の関連から考える場面を仕組む。</li> <li>⑦ 生徒自身が自分の感情の変化を自覚し、それを言葉で表せるように仕組む。</li> <li>⑧ ④～⑦を通して、客観と主観の両方を備えてものを捉えること、理性的な捉えに裏打ちされた感情を抱くことの大切さを理解させる。</li> </ol>

## ステージ2

趣 旨	<p>① 事物や事象（芸術を含む）を鋭敏な知覚力によって認識し、質を思考し深く探索していくこと、思考や判断の結果を適切・建設的に主張（表現）できることを目指す。</p> <p>② 自分にとっての楽曲の価値や意味を、クラスを超えた他者に伝える経験を与え、鑑賞することによる音楽文化の創造や社会的貢献を実感させることを目指す。</p>
方 法	<p>① 作曲家や演奏者、他分野のエキスパートとの協働によってステージ 1 までの学びを深める。</p> <p>② 鑑賞曲の作曲家、地域、社会、世界に向かって批評の結果を発信する。</p>
教 材	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 郷土や日本の伝統音楽（他の地域や他国に対し、自分が見つけ、考え、生み出した郷土や自国の音楽文化の価値や意味を発信し、交流するため）。</li> <li>• 現代音楽（まだ価値の定まっていない音楽に対し、自分が見つけ、考え、生み出した価値や意味を、その作曲家や演奏者に発信し、交流するため）。</li> <li>• 平和や環境など、社会貢献についてのメッセージ性のある音楽。 等</li> </ul>
指導計画のポイント	<p>① 生徒一人一人、あるいはクラスで見つけ、考え、生み出したその音楽の価値や意味を発信し、音楽文化の創造や社会の文化創造に貢献する経験を仕組む。</p> <p>② 「見つける」と「考える」の順序は、ステージ 1 のように、2 ルートを採る。</p> <p>③ 作曲家や演奏者、他芸術、他領域のエキスパートと協働して授業計画や実践を行う題材を仕組む。</p>

## 実践例の見かた

ステージ番号

題材名

実践例 17

題材名 「先生、こんな音で弾いてみて！」 (第2学年・全2時間)

キーワード: 批評の貢献 演奏者への発信 表現と鑑賞のつながり

題材にかかる時間数

実態に応じて他の学年でも可能

題材の趣旨を表すキーワード

題材の趣旨と学習指導のポイント、教材などについての作成者のメッセージ。

題材の趣旨と学習指導のポイント

批評の能力を身につけると、音楽に対する思考力、判断力、そしてそれを伝える表現力が、生徒の内に生成されます。一方、表現した批評は、鑑賞した音楽を一層豊かなものとして新たな生成を導きます。  
...

題材で指導すべき主たる内容を示してある。

教材名。特定の音源の場合はCD番号を示してある。

題材の目標を示してある。

1. 指導内容 批評がもたらす音楽表現の変容

2. 教材 千住 明 作曲 《Still Blue》

3. 題材目標

- 自分の批評によって音楽が創り変えられていくよこびを体験する。
- 音色、速度、強弱などの要素の働きや、楽曲全体の雰囲気などを知覚・感受し、自分のイメージに基づいた意見を適切に述べる。
- 批評によって音楽が変容したことを知覚・感受し、創造的に鑑賞する。

題材目標に対応した観点別評価の観点と評価規準、評価方法(評価の対象)を示してある。

評価の観点	評価規準	評価方法
音楽への関心・意欲・態度	① 自分の批評によって音楽が創り変えられていくよこびを感じている。	発話
鑑賞の能力	① 演奏される音楽に対し、知覚・感受したことと自分のイメージに基づく改善点を、音楽用語などを用いて適切に表現できる。	発話 WS
	② 変容した音楽について、その特徴を具体的に述べ、味わって聴いている。	発話

(この事例は説明のため加工したものです)

授業の展開を時系列で示してある。数時間扱いの題材であっても時間の区切りは示していない。

「見つける」「考える」「生み出す」「拡げる」を、矢印の違いで表してある。

授業の進め方を教師の発話例によって示してある。この通り発話する必要はない。

5. 授業展開

学習活動の内容と教師の発話例	指導上の留意点	評価
<p>① 《Still Blue》を鑑賞する</p> <p>・「これから先生がピアノを演奏します。上手に弾くから聴いてね。」  <small>(演奏後)</small>「Aさん、どうでしたか？」            ・「Bさんは？」</p>	<p>・音色の変化、強弱やアーティキュレーションなどをついて平凡に弾く。  <small>(予想される生徒の発話例)</small>            ・「いい曲だったけど、何か物足りないような気がする。」</p>	<p>関① 鑑①</p>
<p>② 書き入れた楽譜を共有し、それに基づく演奏を鑑賞する。</p> <p>・「皆さんに、Cさんと、Dさんと、Eさんの楽譜を渡りましたが、先生がそれを見ながら、それぞれの要求通りに頑張って弾いてみるね。」</p>	<p>・生徒が楽譜に示したように弾き、その生徒に批評を求め。</p>	
<p>③ 鑑賞しながら意見を述べ合い、それによって新しい音楽を創っていく</p> <p>・「Fさん、Dさんの要求通りに弾けていたと思いますか？」</p>	<p>・作曲者のイメージと自分のイメージの違いを考えさせる。</p>	<p>鑑②</p>
<p>④ 他校の中学生と遠隔通信システムで意見を交換し合う</p> <p>・「私たちが見つけられなかった新しい要素の働きはあったかな？」</p>	<p>・相手に伝わるように、根拠をもって批評の結果を述べるように指示する。</p>	

指導上の留意点と、予想される生徒の発話例や発表例などを示してある。

学習活動の段階を時系列で示してある。

行っている学習活動の内容が、4つのどのテーマのどれに対応しているのかを矢印によって示してある。

「4. 評価計画」にしめした観点と、どこでアセスメントするかを矢印で示してある。

6. 資料  
■ ワークシートの例

ワークシートの例や教材に関わる資料などを掲げてある。

(宮下 俊也)

作成者氏名。巻末に連絡先アドレスを記載してある。

(この事例は説明のため加工したものです)

実践例一覧表

ステージ1

No.	学年	題材名	キーワード	教材曲
実践例 1	1	音楽を鑑賞することの意味	<ul style="list-style-type: none"> <li>・知性によって捉えること</li> <li>・感性によって捉えること</li> <li>・価値判断</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・グロッケンの音</li> <li>・身の回りの音</li> </ul>
実践例 2	1	美しさ探し	<ul style="list-style-type: none"> <li>・美しさ</li> <li>・比喩</li> <li>・美しさの要因</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・チャイコフスキー作曲 《懐かしい土地の思い出》より</li> <li>《メロディー》</li> </ul>
実践例 3	1	抱いたイメージからストーリーを描く	<ul style="list-style-type: none"> <li>・イメージ</li> <li>・イメージの表出</li> <li>・イメージの要因</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・谷川俊太郎作詞・高井達雄作曲 《鉄腕アトム》（映像つきのオリジナル版）</li> <li>・高瀬“makoring”麻里子（ヴォーカル）、谷川賢作（ピアノ）、大坪寛彦（ベース）によるアレンジ版</li> </ul>
実践例 4	1	表現の特徴から演奏者の心を探る	<ul style="list-style-type: none"> <li>・演奏の特徴</li> <li>・演奏者の個性・考え・表現したいこと</li> <li>・表現の多様性</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・グレン・グールドの演奏による</li> <li>モーツァルト作曲 《ピアノソナタ イ長調 K.311》より</li> <li>第3楽章《トルコ行進曲》</li> <li>・他のピアニストによる 同曲</li> </ul>
実践例 5	1	歌曲《魔王》の表現方法	<ul style="list-style-type: none"> <li>・調もたらす効果</li> <li>・作曲家の意図</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ゲーテ作詞・シューベルト作曲 歌曲《魔王》D.328</li> <li>・ミュラー作詞・シューベルト作曲 歌曲集 歌曲集《冬の旅》より《郵便馬車》 D.911</li> </ul>
実践例 6	1	世界のいろいろな子守歌	<ul style="list-style-type: none"> <li>・音楽の多様性</li> <li>・音楽の文化的背景</li> <li>・生活における音楽の必然性</li> </ul>	世界の子守歌から次の4曲 <ul style="list-style-type: none"> <li>・《アイヌの子守歌》から</li> <li>・《台湾 サウ族の子守歌》から</li> <li>・《中央アフリカ サバンガ族の子守歌》から</li> <li>・《チェコ(南ボヘミア)》の子守歌から</li> </ul>
実践例 7	2	人間と音楽の関わり	<ul style="list-style-type: none"> <li>・音楽の文化的背景</li> <li>・音楽の多様性</li> <li>・音楽のもつ力</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・作曲者不詳 《アメージング・グレイス》</li> <li>・ロシア民謡 《ヴォルガの舟歌》</li> <li>・ブルガリアの伝統音楽 《ピレンツェの歌》</li> </ul>
実践例 8	2	日本の声を考えよう	<ul style="list-style-type: none"> <li>・声による表現</li> <li>・発声の違い</li> <li>・文化的背景</li> <li>・音楽の多様性</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・グレゴリオ聖歌 《アレレヤ我が過ぎ来しのいけにえ》</li> <li>・能 《羽衣》より「東遊びの数々に〜」</li> <li>・能 《隅田川》より「のう、舟人〜」</li> <li>・ブリテン作曲 オペラ 《カーリュールバー》より「Ferryman, tell me, what did it happen?」</li> </ul>
実践例 9	2	形式をもつ音楽の魅力を探ろう	<ul style="list-style-type: none"> <li>・主題の繰り返しや変化に伴う感情の移り変わり</li> <li>・形式のおもしろさや美しさ</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ベートーヴェン作曲 《交響曲第5番ハ短調》op.67より 《第1楽章》</li> </ul>
実践例 10	2	歌劇における音楽の魅力	<ul style="list-style-type: none"> <li>・総合芸術</li> <li>・歌劇における音楽の役割</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ヴェルディ作曲 歌劇 《アイダ》 第2幕第2場より「国王、聖なる神と王冠にかけて、願いを叶えようと誓われた」から</li> </ul>
実践例 11	2	心と対話してみよう	<ul style="list-style-type: none"> <li>・感情の追体験</li> <li>・自分の心への洞察</li> <li>・共感的場</li> <li>・人の暮らしと音楽</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・モンティ作曲 《チャールダーシュ》</li> <li>・ロマニー民謡《花の季節》（関連教材として）</li> </ul>
実践例 12	2	音楽評論家のエッセイを読む	<ul style="list-style-type: none"> <li>・評論家の知覚と感受</li> <li>・批評の表現</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ブラームス作曲 《子守唄》op.49の4</li> </ul>

実践例 13	3	能に親しもう	<ul style="list-style-type: none"> <li>・日本伝統音楽(能)</li> <li>・自分の感情</li> <li>・背景となる文化・歴史</li> <li>・解釈・価値判断</li> </ul>	・能 《船弁慶》
実践例 14	3	文楽に親しもう	<ul style="list-style-type: none"> <li>・日本伝統音楽(文楽)</li> <li>・解釈・価値判断</li> </ul>	・文楽 《平家女護島》
実践例 15	3	音楽から風景を見る	<ul style="list-style-type: none"> <li>・印象派の音楽</li> <li>・見えない風景のイメージ</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ドビュッシー作曲 交響詩《海》より、第2楽章《波の戯れ》</li> <li>・ドビュッシー作曲 《牧神の午後への前奏曲》など</li> </ul>

## ステージ2

No.	学年	題材名	キーワード	教材曲
実践例 16	1	尺八音楽の魅力を世界に	<ul style="list-style-type: none"> <li>・尺八音楽</li> <li>・音楽の多様性</li> <li>・世界への発信</li> </ul>	・尺八曲 《巢鶴鈴慕》(鶴の巣籠)
実践例 17	1	「先生、こんな音で弾いてみて！」 ー批評で音楽をつくるー	<ul style="list-style-type: none"> <li>・批評の貢献</li> <li>・演奏者への発信</li> <li>・表現と鑑賞のつながり</li> </ul>	・千住 明 作曲 《Still Blue》
実践例 18	2	私たちの町の伝統音楽	<ul style="list-style-type: none"> <li>・地域の文化と人々の暮らし</li> <li>・音楽の多様性</li> <li>・他の地域への発信と交流</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・熊本県芳野地域の神楽</li> <li>・熊本県蘇陽地域の神楽</li> </ul>
実践例 19	2	人生と音楽 ー ピアニスト 舘野泉さんへの メッセージ ー	<ul style="list-style-type: none"> <li>・表現することの意味</li> <li>・演奏者の感情</li> <li>・演奏者への発信</li> </ul>	舘野泉によるピアノ演奏 <ul style="list-style-type: none"> <li>・《3つの聖歌 ー左手のためのー》より</li> <li>・カッチーニ作曲・吉松隆編曲 《アヴェ・マリア》</li> <li>・シベリウス作曲・吉松隆編曲 《フィンランディア賛歌》</li> <li>・《風のしるしー左手のためのピアノ作品集ー》</li> <li>・間宮芳生作曲 《風のしるし・オフフェルトリウム》など</li> </ul>
実践例 20	3	友と語り家族に伝える《展覧会の絵》	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分が感じた魅力の要因</li> <li>・友だちが感じた魅力の要因</li> <li>・魅力の共有</li> </ul>	ムソルグスキー作曲・ラヴェル編曲 組曲 《展覧会の絵》より 第1曲 《こびと》、第3曲 《チュイルリーの庭》、第4曲 《ブイドロ》、第5曲 《卵の殻をつけた雛の踊り》、第10曲 《キエフの大きな門》
実践例 21	3	作曲家とともに新しい音楽文化を創造しよう	<ul style="list-style-type: none"> <li>・特徴の発見</li> <li>・自分の感情の変化</li> <li>・作曲家との交流</li> <li>・世界への発信</li> </ul>	西村 朗 作曲 《管弦楽のためのファンファーレ》
実践例 22	3	音楽による平和の希求と社会貢献	<ul style="list-style-type: none"> <li>・音楽のメッセージ性</li> <li>・音楽による平和への貢献</li> <li>・音楽家による社会貢献</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・宮沢和史 作詞・作曲 《島唄》</li> <li>・北川悠仁 作詞・作曲 《Hey 和》</li> <li>・谷川俊太郎作詞・武満徹作曲 《死んだ男の残したものは》</li> <li>・カタルーニャ民謡・パブロ・カザルス編曲 《鳥の歌》(パブロ・カザルスの演奏による)</li> <li>・寺島尚彦 作詞・作曲 《さとうきび畑》(森山良子によるロングバージョン)</li> <li>・カンボジアの子どもの歌</li> <li>・城之内ミサ作曲 《組曲 大和路シンフォニー〜悠久のやまと》より《Ⅱ・祈り》</li> <li>・五嶋みどり、川井郁子、北川悠仁(ゆず)、ホセ・カレーラス、飯森範親指揮による山形交響楽団の演奏</li> </ul>

### 題材の趣旨と学習指導のポイント

この題材では、なぜ、学校で音楽鑑賞をするのか、そして音楽鑑賞を通してどのようなことを学び、そこで学んだことが人生の中でどのように役立っていくのかを生徒に理解させることが目的です。ですから、1年生の鑑賞授業の1時間目に行うことがよいでしょう。

ここではまず、身の回りにある事物を取り上げ、それらを知性によって客観的に捉えることと、感性によって主観的に捉えること、そして、それらをもとにして、その事物に対する自分にとっての価値を判断することを学習させます。例えば、今着ているシャツは、木綿でできている、水色のストライプが入っている、といったことは知性によって客観的に捉えることのできる事実です。これを「水玉模様」と捉えたら誤りです。一方、水色のストライプが爽やかさを醸し出している、といった捉え方は主観的で、一人ひとりの感性によって捉え方が異なります。音楽も同様に、「だんだん強くなっていく」といった捉え方は知性的・客観的で、「だんだん強くなっていくので何かが迫ってくるような感じがした」というのは感性的・主観的な捉えです。

音楽も含めて、私たちが生活の中で接する様々な事物や事象は、このように知性と感性の両方によって捉えることができなければなりません。どちらかに偏ってははいけません。そして両方で捉えた上で、「初夏に着るシャツは、水玉よりストライプの方が爽やかなので私は好きです」というような価値判断ができること、つまり自分の意見をもつことが大切です。音楽も同様で、よく聴き、よく味わい、知性と感性の両面によって音楽を捉え、その音楽に対してしっかりした自分の意見を導くためによく考えること、これが、音楽鑑賞による学びの基本になります。そうした力がつくことで、音楽や芸術のもつよさや美しさがわかるようになり、人生を豊かにしていくことに繋がっていきます。そのことをこの題材においても、またこれからの鑑賞の時間においても、いつも生徒に意識させていってください。

1. 指導内容 事物を客観的・主観的に捉え、価値を判断すること

2. 教材  
・グロッケンの音  
・身の回りの音

3. 題材目標

物事や音を知性的に捉えることと感性的に捉えること、そしてその上で価値を判断することに興味・関心をもち、要素に対して知覚・感受しながらその意味を理解し、自分なりに価値を判断することを経験する。

4. 評価計画

評価の観点	評価規準	評価方法
音楽への関心・意欲・態度	① 物事や音を知性によって客観的に捉えることと、感性によって主観的に捉えること、そしてその上で価値を判断することに興味・関心をもっている。	発話 観察
鑑賞の能力	① 強弱などの様々な要素を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じながら、物事や音を知性的に捉えることと感性的に捉えることの意味を理解している。	発話 WS
	② 物事や音を知性と感性の両方によって捉え、その上で自分なりに価値を判断している。	発話 WS

5. 授業展開

←→ : 見つける   ←→ : 考える   ←→ : 生み出す

学習活動の内容と教師の発話例	指導上の留意点	評価
<p>① 事物を例示し、「知性的に捉えること」と「感性的に捉えること」の意味を知る</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「先生が来ているシャツは何色かな？」</li> <li>・「このシャツの模様は何かな？」</li> <li>・「生地は何でできているかな？」</li> <li>・「このシャツは白地に水色のストライプが入っているね。それに木綿 100%ってタグに書いてあるよ。」</li> <li>・「じゃあ、あなたはこのシャツを見て、どんな印象を受ける？」</li> <li>・「色や模様や生地は、誰が見ても同じだよ。『青地で水玉で化繊でできている』、と言ったら間違いだよ。でも『涼しげな感じがする』とか、『ストライプは先生に似合わない』っていった意見は、一人ひとり感じ方が違っていいことだよ。」</li> <li>・「誰が見ても同じことを『客観的』、感じ方のように一人ひとり違って捉えることを『主観的』って言うんだよ。」</li> <li>・「客観的なものは『知性』によって捉え、捉えたものに対して色々な感じ方をするのは『感性』の働きなんだよ。」</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ここまでが知性による客観的な捉え。</li> <li>・これは感性による主観的な捉え。</li> <li>・「知性と感性」「客観と主観」の意味がわかったか確認する。</li> <li>・資料2を読んで促してもよい。</li> </ul>	
<p>② 音について客観的に捉えることと主観的に捉えることを経験する</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「(グロッケンをクレッシェンドで連打して)今叩いた音を客観的に捉えると、どう言えるかな？」</li> <li>・「では、主観的に捉えてみて、感じ取ったことを言ってごらん。」</li> <li>・「A(客観的に捉えたこと)なので、B(主観的に捉えたこと)の感じがした、と1文で言えるかな？」</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・他に高音と低音での連打、金属のマレットとプラスチックのマレットでの連打などを行って問うてみる。</li> <li>・「だんだん強くなる(音が大きくなる)」という客観的な捉え方ができるか確認する。</li> <li>・「何かが迫ってくるような感じ」のように主観的な捉え方ができるか確認する。複数人に述べさせ、それぞれが違った捉え方をすることを確認する。</li> <li>・「だんだん音が大きくなったので、何かが迫ってくるような感じがした」のように述べられるか確認する。</li> </ul>	鑑①
<p>③ 客観的に捉えたことと主観的に捉えたことを根拠に、価値判断する</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「先生が感じた春の空気を、グロッケンで表現してみるね。(プラスチックのマレットで全音音階の上行形をデクレッシェンドしながら叩く=A。続いて、同様にクレッシェンドしながら叩く=B)」</li> <li>・「AとBの客観的な違いを言えるかな？」</li> <li>・「AとBの雰囲気の違い(主観的)を言えるかな？」</li> <li>・「AとBとではどちらが春の空気に近いかな？」</li> <li>・「AとBの客観的・主観的な違いを述べて、それを理由にして、どちらが春の空気に近いと思ったかを、1文</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「Aはだんだん弱くなっていく、Bはだんだん強くなっていった」という客観的な捉え方ができるか確認する。</li> <li>・「Aはふわっとそよいでいく感じがして、Bは突風のような感じがした」のように質感の違いを感受できているか確認する。</li> <li>・AあるいはBのみ答えてもよい。</li> <li>・「<u>だんだん弱くなっていくこと</u>によって<u>ふわっとした柔らかな感じがした</u>ので<u>Aの方が春の空気に</u></li> </ul>	鑑① 鑑②

<p>にして言ってみよう。」</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「物事に対して客観的に捉えたことと主観的に捉えたことを理由に『いいな』とか、『私はプラスチックの音の方が春の空気に合っていると思った』というように、自分の意見を生み出すことを『価値判断する』って言うんだよ。」</li> <li>・「身の回りで聴こえてきた音に注目して、価値判断する練習をしてみよう。」(WSを用いた宿題)</li> </ul>	<p>近い気がした」(一重加線部は客観的な捉え、二重加線部は主観的な捉え、波下線部は価値判断となる自分の意見)のように、1文で述べられるか確認する。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・WSを配布し、次時までの宿題とする。</li> </ul>	
<p><b>④ 身の回りの音に注目し、客観的・主観的に捉え、価値判断する</b></p>		
<ul style="list-style-type: none"> <li>・「皆さんが聴き取った音は、他の人は知らないわけだから、何のどんな音だったか(客観的に捉えたこと)をわかりやすく説明して、その音に対して主観的に捉えたことと、価値判断したことを話してください。」</li> </ul>	<p>(例)</p> <p>「<u>交差点でバイクが急発進して、グワグワーンと音が爆発するように轟いていて、すごく耳障りで環境にやさしくないと思いました。もしかしたら目立ちたくて、わざとあんな音を立てているのかと思いました。」</u></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・この例では、一重加線部は客観的な捉え、二重加線部は主観的な捉え、波下線部は価値判断となる自分の意見であることを確認する。どれかが欠如している発言に対しては、そのことを問う。</li> <li>・1文で言えない場合には、「繋げて言ってごらん」のように再度問う。</li> <li>・主観的な部分についてはイメージが、価値判断の部分では「自分の感情の変化や意見が反映されていることを確認する」</li> </ul>	<p>関① 鑑① 鑑②</p>
<p><b>⑤ 音楽鑑賞で学ぶことと意味について知る</b></p>		
<ul style="list-style-type: none"> <li>・「ここでしてきたように、物事や音、自然、それに音楽や美術作品など、どれも客観的に、そして同時に主観的に捉えて、自分の意見を考えること、ってとても大事なことなんだよ。」</li> <li>・「そのためには、物事をよく見たり、よく聴いたり、食べる時もよく味わったりして、自分の感覚器官を研ぎ澄まして感じる事が大切になるよね。」</li> <li>・「これから音楽の授業で色々な音楽を鑑賞するけれど、聴く耳を研ぎ澄ましたり、イメージを膨らませたり、考えたりすることは、音楽の中にかくれているよさや美しさや素晴らしさなどを発見するためにとても役に立つんだよ。この力がつくと、心のセンサーはもちろん、色々なことを考える頭脳も豊かになっていくと先生は思うよ。」</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・鑑賞の意義を中学生に分かりやすく伝える。</li> </ul>	

6. 資料

■ 資料1 ワークシートの例

身の回りの音に注目し、知性と感性によって聴き取り、価値判断してみよう

1年 \_\_\_組 \_\_\_番 氏名\_\_\_\_\_

知性による客観的な捉え	
聴いた日時	
聴いた場所	
何の音?	
どんな音?	
感性による主観的な捉え	
どんな感じがしたかな?	
どんな気持ちになったかな?	
価値判断	
音を聴いて考えたことやこの音に対するあなたの意見は?	

■ 資料2 吉松隆の文章より

「例えば、暑いとか寒いとか感じる。これは感覚だよ。それが知性に変換されると<肌寒い>とか<室温5度以下>というような言葉や数値になる。すると、その言葉は感性によってスキャンされ、その対処法が知性にフィードバックされる。そして<セーターを着よう>とか<暖房を付けよう>とか<温かい飲み物を飲もう>というアクションに変換される。そのメカニズムが感性と知性のフィードバックというわけさ。」

吉松隆「音楽の神が降りてくるところ」(小泉英明編著『脳科学と芸術』工作舎、2008年、p.219より)

(宮下 俊也)

### 題材の趣旨と学習指導のポイント

「美は自ら積極的に掘みにかかると見つからないものです。」と、ある心理学者は言っています。音楽にある美も、美を見つける耳や頭（心）を使って、積極的に音楽に立ち向かっていくことで、見つけ出すことができ、それが見つかった時に感動がおとずれるものだと思います。学習指導要領でも、第1学年の目標に「美しさを味わい」とありますが、それに続く「主体的に鑑賞する能力」は、美しさを味わうために必ず必要となるものです。

しかし、「美しさって何だろう?」と中学生に尋ねても、簡単には答えられないかもしれませんし、いろいろな考えが出てくるかもしれません。「美の正体」は、それがとても抽象的なものであるためです。しかし感じ取った美の正体を説明するときに便利なツールがあります。それは「比喩」です。例えば、美と同じように抽象的な「味わい」を説明するときに、「ワインのソムリエは巧みな比喩でそれを言い表そうとします。

本題材では、生徒が感じ取った美を比喩で表現することを通して、この楽曲に潜む美を見つけ出し、美しいと感じた要因を楽曲の仕組みから探っていくことを学びます。この学習で求めることは、「比喩を使えば抽象的なことがらを言い表すことができる」ということがわかることで、そのことがわかれば「美しさ」を見つげ出す方法を身につけた豊かな人生を送ることが期待できるでしょう。

1. 指導内容 美しさの表現とその要因

2. 教材 チャイコフスキー作曲 《懐かしい土地の思い出》より《メロディー》 op. 42

3. 題材目標

- 1 感じ取った美しさを比喩で表し、その要因がわかることに興味・関心をもつ。
- 2 知覚・感受したことを比喩で表したり要因を楽曲の構造から確認したりして、鑑賞したときの自分の感情を確認しながら、よさや美しさを味わって聴く。

4. 評価計画

評価の観点	評価規準	評価方法
音楽への関心・意欲・態度	① 感じ取った美しさを比喩で表し、その要因がわかることに興味・関心をもっている。	発話 WS
	② 感じ取った美しさについて、要因を含めて言葉で表し、鑑賞する学習に主体的に取り組んでいる。	発話 WS
鑑賞の能力	① 感じ取った美しさを比喩で言い表している。	発話 WS
	② 知覚・感受しながら、美しさの要因を楽曲の構造から確認し、鑑賞したときの自分の感情を言葉で表し、よさや美しさを味わって聴いている。	発話 WS

5. 授業展開

 : 見つける    
  : 考える    
  : 生み出す

学習活動の内容と教師の発話例	指導上の留意点	評価
<p><b>① 「味わい」を言葉で表現する</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>「ここにペットボトルのお茶がありますが、その味を言葉で伝えてみてください。Aさんどうぞ。」</li> <li>「Bさん、どんな甘さなのか、あるいは、どんな苦味なのか、飲んでない人に伝わるようにもう少し詳しく言えるかな？」</li> <li>「Cさん、その甘味や苦みや香りなど、何か似たような甘味や苦みや香りに喩えて言えるかな？」</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>「爽やかな甘味」、「少しまろやかな苦味」などのように甘味や苦みを修飾する形容語を加えて述べるかもしれない。</li> <li>「量の匂いのよう」などのような直喩による比喻表現を求める。</li> </ul>	
<p><b>② 全曲を鑑賞する</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>(鑑賞後)「この曲を聴いて、美しいと思ったかどうか、WSのQ1に評価してください。」</li> <li>「Q1で2、3、4、に丸をつけた人は、感じ取った美しさを単語1語で表してみてください。たくさん書いてもいいですよ。」</li> <li>「どのような単語で表せたかな? Dさん、Eさん、…」</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>板書する。</li> <li>これらの形容語で美しさを完全に言い表せたかどうかを確認する。</li> </ul>	
<p><b>③ 比喻で美しさを表すことを考えながら全曲を鑑賞する</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>「さっき、お茶の味わいを喩えで言い表してみましたが、この曲の美しさも、喩えを使えば、もっと明確に言い表せるかもしれませんね。他の中学生が、この曲の美しさを喩えで表したものが資料2です。」</li> <li>「もう1度聴くので、皆さんも、自分が感じ取った美しさは『…のような美しさ』かなっというように、考えながら聴いてみてください。Q1で1に丸をつけた人は、『美しいって感じた人は、どんな美しさを感じたのか考えながら聴いてみてね。』」</li> <li>(鑑賞後)「さあ、WSのQ3に書き表してみよう。」</li> <li>「発表してみよう。」</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>資料2を配布して見せる。比喻で表すことの意味が、①の学習でよく理解されていると判断されたら、例はここで示さなくてもよい。</li> </ul>	<p>関①</p> <p>鑑①</p>
<p><b>④ 感じ取った美しさを確認しながら全曲を鑑賞し、その要因を探る</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>「じゃあ、次は、音楽のどういったところにその美しさを感じたのか探してみよう。WSのQ4にメモをとりながら聴いてもいいよ。」</li> <li>(鑑賞後)「Q4に書いたことをもとに、『…が…だったので、枯葉が一枚一枚散っていくような美しさって感じたよ』っていうように伝えてくれるかな。」</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>生徒が述べる理由として、要素の働きを挙げている可能性が高い。それらについて、再度聴かせて確認したり、要素の名称や音楽用語が使えなかったりした場合は、そこで指導する。</li> </ul> <p>(例) S:「時々切ない響きがするところがあったので…。」</p>	<p>関②</p> <p>鑑②</p>

	<p>T:「もしかしたら、こういうところかな(12小節から18小節。Es-durからg-mollへの転調部を弾く)。ここは、長調なのに、少しだけ短調に変わっているよね。こういうのを『転調』っていうんだよ。」</p> <p>S:「音楽の中のどの部分が、っていうんじゃないけれど、全体的に美しさを感じました。」</p> <p>T:「全体的な雰囲気からそう感じたんだね。曲の全体を捉えて『美しいな』って思うことはとても大切な感じ方だよ。全体的なことから言えば、例えば、速度はゆっくりめだったかな? それとも速めだったかな? それに、始めから終わりまで規則正しい速度ではないよね。そういうところからあなたは「…のような美しさ」を感じ取ったのかもしれないね。もう1度かけるから確認してみようよ。」</p>	
<b>⑤ 自分の気持ちを確認しながら全曲を鑑賞し、対話する</b>		
 <ul style="list-style-type: none"> <li>・「最後にもう1度聴きますが、今度は、この曲を聴いて皆さん自身の感情や気持ちがどのようになっているか、自分の心に問いかけながら聴いてみてね。」</li> <li>・(鑑賞後)、Fさんの気持ちはどうでしたか?」</li> <li>・「似たような気持ちになった人や、違う気持ちになった人はいませんか?」</li> <li>・「自分の気持ちをWSのQ5に書いておいてね。その時、音楽のどいういったところからそのような気持ちになったのかも含めて書いてね。」</li> <li>・「この2時間では、『味わい』や『美しさ』を、何かに喩えて人に伝える学習をしました。このように過去に経験して知っている、同じようなことを使って、「まるで…のよう」って喩えることを、国語で『比喩』って習ったと思います。音楽のもつ美しさや雰囲気などは、比喩を使うと、それを言い表しやすくなりますよ。音楽を聴くときや、演奏を工夫していくときに、この比喩はとても便利なのでこれから意識して使ってみるとよいかもしれませんね。」</li> </ul>  	<ul style="list-style-type: none"> <li>・感情の変化に注目させて鑑賞させる。</li> <li>・数名に問いながら対話する。</li> <li>・鑑賞や表現活動において比喩を用いることの効果を述べる。</li> </ul>	<p style="text-align: center;">鑑②</p> 

6. 資料

■ 資料1 ワークシートの例

美しさ探し			
1年 ___組 ___番 氏名_____			
Q1	1. 全く美しさを感じなかった 2. 少しだけ美しいと感じた 3. わりと美しいと感じた 4. とても美しいと感じた		
Q2			
Q3		Q4	
Q5			

■ 資料2 ワークシートの例

- ・秋の日だまりの中で、楓のような赤い葉が落ちていくような美しさ
- ・木の下にねころんでいたときに木漏れ日が差してきたような美しさ
- ・何かをふんわりとした優しいもので包んで大事そうに運ぶような美しさ
- ・小鳥がさえずり、蝶がひらひらと飛んでいるのどかな田園のような美しさ
- ・つぼみがゆっくりとひらくような美しさ

(宮下 俊也)

題材の趣旨と学習指導のポイント

イメージをもって表現することや、音楽を聴いてイメージを抱くことは音楽学習においてとても大切なことです。では、その「イメージ」とはどういうものなのでしょうか。辞書には「①心の中に思いうかべる像。心象。②姿。形象。」(広辞苑)とあります。つまり、心の中に、絵画や風景のように描き出される映像のようなものと捉えることができるでしょう。その映像は、墨絵のようにモノクロームの世界かもしれませんが、動きや色彩のある映画のようなものかもしれません。

そして、音楽を聴いて思い描いた映像を語り合うことはとても楽しいことです。また、聴いた直後に直感的に描かれた映像が、何度も聴いていくうちに変化してくることや、同じ曲でも演奏形態や表現の違いによって異なってくるなどを実感することは、音楽の仕組みや効果を考える上でとても大切な手がかりになるものと思います。それは、イメージが音楽の仕組みを知覚することによって得られるものだからです。

この事例では、誰もが思い描くことができる「鉄腕アトム」のイメージが、そのテーマ曲のアレンジ版を聴くことによって、どのようにアトムのイメージが変わるのかを考え、その要因を探るものです。アトムはエネルギーで強くスピード感のあるイメージがありますが、この曲を聴くとどのようなアトムが描き出されるか、イメージというものの正体を再確認させるためにも効果的な題材です。

1. 指導内容 楽曲全体のイメージと様々な要素の関わり合い
2. 教材
  - ・谷川俊太郎作詞・高井達雄作曲 《鉄腕アトム》 (映像つきのオリジナル版)
  - ・高瀬“makoring”麻里子 (ヴォーカル)、谷川賢作 (ピアノ)、大坪寛彦 (ベース) によるアレンジ版 (TRBR-0012)
3. 題材目標
  - 1 音楽を聴いてイメージが描き出されることと、そのイメージが浮かんだ要因を音楽の仕組みから考えることに興味・関心をもつ。
  - 2 自分のイメージを具体的に述べ、その要因を、音楽を形づくっている要素や要素同士の関連に対する知覚をもとに探る。

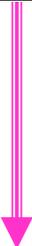
4. 評価計画

評価の観点	評価規準	評価方法
音楽への関心・意欲・態度	① イメージは音楽を形づくっている要素や要素同士の関連の働きによって描き出されることに興味・関心をもっている。	観察
鑑賞の能力	① 自分のイメージを具体的に述べている。	発話 WS
	② イメージの要因を要素や要素同士の関連の働きから探り、明らかにすることができている。	発話 WS

5. 授業展開

 : 見つける   
  : 考える   
  : 生み出す

学習活動の内容と教師の発話例	指導上の留意点	評価
<p>① 「鉄腕アトム」の主題歌とアニメの映像を鑑賞する</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>「皆さん、鉄腕アトムを知っていますか。まず、オリジナルの映像とテーマソングを視聴してみましょう。」</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>アニメのDVDにより主題歌の部分を視聴させる。</li> </ul>	
<p>② アレンジ版を鑑賞する</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>「では次に、このテーマソングの別のバージョンを聴いてみましょう。映像はありませんが、どんなアトムが皆さんの頭の中に浮かんでくるでしょうか？」</li> </ul>		
<p>③ 浮かんだイメージについて対話する</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>「どんな様子が浮かんできたかな？」</li> <li>「あなたのイメージではアトムはどこで何をしているのかな？」</li> <li>「Aさんは、『1日の仕事を終えてゆっくりとくつろいでいるアトム』って言ったけれど、Bさんはそれについてどう思うかな？」</li> <li>「Cさんのイメージは、他の人のイメージと似ているかな？ それとも違うかな？」</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>「どんなアトムが、どんなところで、何をしているのか」といったように、アトムに焦点化させてイメージを尋ねてもよい。</li> <li>相手にわかりやすくイメージを具体的に述べさせる。</li> <li>他者のイメージと関連づけて自分のイメージを述べさせることも行う。</li> <li>出てきたイメージを板書する。</li> </ul>	鑑①
<p>④ イメージが浮かんだ要因を探る</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>「Dさんは、『アトムが家のリビングルームでジャズを聴きながらリラックスしている』って言ってくれたけれど、どうしてそう思ったのかな？」</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>述べられたイメージについて、その要因となる音楽の要素や要素同士の働きを見つけ出させる。 (予想される生徒の発話例)</li> <li>「ゆったりしたテンポ。」</li> <li>「最初からしばらくの間、アカペラだったので、リラックスしているアトムが浮かんだ。」</li> <li>「ジャズのようなベースが鳴っていたので、リビングルームで音楽を聴いてくつろいでいるような雰囲気が漂っていた。」</li> </ul>	関① 鑑②
<p>⑤ イメージと、イメージが描かれる要因との関係を確認する オリジナルの映像とアレンジ版を同時に視聴する</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>「ここで面白いことをしてみるよ。このアレンジした音楽を流しながら、さっき観たオリジナルのアニメの映像を映してみるよ。どうなるかな？」</li> <li>(鑑賞後)「Eさん、どうでしたか？」</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>(予想される生徒の発話例)</li> <li>「勇ましく空を飛ぶアトムとゆったりしたテンポが合わない。」</li> <li>「今日1日の活躍を回想しているようだ。」</li> </ul>	
<p>⑥ 再度、アレンジ版を鑑賞し、アレンジの意図を考える</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>「この曲をアレンジした人は、何を表現したかったのかな？」</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>強い、速い、勇敢、といったアトムのイメージとは異なる音楽に編曲した意図を考えてみる。</li> </ul>	

	<p>(予想される生徒の発話例)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「アトムは『科学の子』であってもやはり人間。だから安らぎたい時もある、っていうことを表したかったのだと思う。」</li> <li>・「より人間に近いロボットをイメージしたのではないか。」</li> </ul>	
<p>⑦ イメージの意味や、音楽を聴いてイメージをもつことの大切さを伝える</p>		
 <ul style="list-style-type: none"> <li>・「みんなが述べてくれたように、イメージって、心の中に浮かぶ映像みたいなものだね。そして、音楽の速度や使われる和音(コード)、楽器などの要因によって、イメージができあがるのがわかったね。イメージを沸かせるっていうことは、『想像すること』なんだ。音楽を演奏する時は、どういことを表現したいのか、また鑑賞する時は、どんな情景や映像が心の中に浮かんだのか、そのイメージを豊かに描けるようになるといいね。」</li> <li>・「最後に、もしもあなたがこの曲のアレンジャー(アレンジした人)だったとしたら、何を表現したくてこのアレンジをしたかを、要素の言葉を使ってWSに書いてみてください。文章に加えて、そのイメージを絵で描いてもいいですよ。」</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・イメージの意味と、音楽活動でイメージをもつことの大切さを伝える。</li> <li>・WSはこの指示の後に配布する。</li> </ul>	<p style="text-align: center;">鑑②</p> 

6. 資 料

■ ワークシートの例

ワークシート

1年 \_\_\_組 \_\_\_番 氏名\_\_\_\_\_

もしも、あなたがこの曲のアレンジャー（アレンジした人）だったとしたら、何を表現したくてこのアレンジをしたかを、音楽の要素の言葉を用いながら書いてください。

文章に加えて、そのイメージを絵で描いてもいいですよ。



中学生によるカット

(宮下 俊也)

### 題材の趣旨と学習指導のポイント

音楽の演奏は「再現芸術」と言われます。演奏は、楽譜に書かれていることから作曲家のメッセージや音楽の背景などを理解して表現することはもちろんですが、それらに加えて、演奏者自身の創造性や個性やメッセージなどを聴く人に伝える表現方法です。聴く側からすれば、演奏者が何を表現しようとしているのかがわからなかったり、演奏者の人柄や個性が想像できなかったりする演奏は、聴いていてあまりおもしろいものではありません。

本題材は、ある演奏を聴いて、それを演奏する人の個性、感情、考えなどを思い巡らし、想像してみる学習です。想像の手がかりは、いろいろな要素の働きを知覚することです。なぜなら、演奏するということは、演奏者が表現したいものを伝えるために、音楽の仕組みとなる要素を操作して(例えば、速度を速くしたり遅くしたり、強さを増したり弱めたり、時には楽譜に記されていないのにアルペッジョをつけてみたり…)、音楽を創っているからです。

この学習によって、「表現する」ということの意味が理解でき、ひいては表現領域の学習において役立つものと期待されます。

1. 指導内容 演奏の特徴から考える演奏者の個性や表現意図

2. 教材 ・グレン・グールドの演奏による  
モーツァルト作曲 《ピアノソナタ イ長調 K.311》より第3楽章《トルコ行進曲》  
・他のピアニストによる 同曲

3. 題材目標

演奏の特徴を知覚・感受によって発見し、それをもとに演奏者の個性、感情、考え、表現したかったことなどに興味・関心をもち、自らの考えを深め、味わって聴く。

4. 評価計画

評価の観点	評価規準	評価方法
音楽への関心・意欲・態度	① 演奏の特徴を知覚・感受によって発見し、それをもとに演奏者の個性、感情、考え、表現したかったことなどを考えることに興味・関心をもち、鑑賞する学習に主体的に取り組もうとしている。	発話 観察 WS
鑑賞の能力	① 演奏の特徴を知覚・感受によって発見できている。	発話 WS
	② 発見した特徴をもとに、演奏者グレン・グールドの個性、感情、考え、表現したかったことなどに対する考えを深め、自分の意見をもち、味わって聴いている。	発話 WS

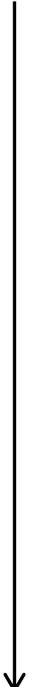
5. 授業展開

 : 見つける
  : 考える
  : 生み出す

学習活動の内容と教師の発話例	指導上の留意点	評価
<p><b>① オーソドックスな演奏（ここではイングリット・ヘブラーの演奏）を鑑賞する</b></p> <p>・「これから聴く曲は皆さんもよく知っているモーツァルト作曲の《トルコ行進曲》です。まず聴いてみましょう。」</p>	<p>・黒板には正式な楽曲名を掲示する。</p>	
<p><b>② グレン・グールドの演奏を鑑賞し、発見したことを対話する</b></p> <p>・「では次に、同じ曲を違うピアニストによる演奏で聴いてみましょう。すごく特徴的なことがあるから、それを発見するつもりで聴いてね。WSのQ1にメモを取りながら聴いてもいいよ。」</p> <p>・(鑑賞後)「ちょっと、びっくりしたかな。この演奏で何か発見したことを聞かせてくれるかな？」</p> <p>・「今、言ってくれたことを確認してみるね。」</p> <p>・「例えば、速度がこんなに遅いことで、どんな雰囲気になっていたかな？音をぼつぼつ切りながら弾くことで、どんな感じになっていたかな？」</p> <p>・「和音をばらして弾くことを音楽用語で『アルペジオ』っていうんだよ。『アルプ』はハープのことだから、『ハープのように弾きなさい』っていう意味だね。」</p> <p>・「Q2の欄に、その特徴が生み出す雰囲気を書いておいてね。」</p> <p>・「このピアニストは、グレン・グールドっていう人だけど、どうしてこんな弾き方をするんだろうね。」</p>	<p>・数名に問いかけ、板書する。</p> <p>・速度が遅い、歌いながら弾いている、ぼつぼつ音を切って弾いている、和音をばらして弾いている…などに気づくことが予想される。</p> <p>・述べられた特徴について、部分的に聴かせたり、弾いてみたりして確認する。</p> <p>・知覚した特徴に対して感受を、数名に問う。</p> <p>・適宜、音楽用語について説明する。</p> <p>・グールドの写真(ピアノの椅子を低くし、足を組みながら弾いているような特徴的な写真)を見せる。</p>	<p>関① 鑑①</p>
<p><b>③ グレン・グールドの個性や表現意図を考えながら鑑賞する</b></p> <p>・「では、もう1度グールドの演奏をかけるから、グールドはどうしてこのような表現をしたのか、WSのQ3の欄にあるヒントに注目して聴いてみよう。」</p> <p>・(鑑賞後)「では、グループで、少し話し合ってみよう。その時、さっき見つけた特徴と関連づけて考えてみてね。自分の意見とグループで出た意見をWSに書いておいてね。」</p> <p>・「では、発表してもらいましょう。『…なので、速度を遅く弾こうとしたんじゃないかな』というように、さっき見つけた特徴と結びつけて話してね。」</p>	<p>・グループで数分、討論する。</p> <p>・「行進曲だから、行進できるように速度をこんなに遅く弾いた」、「歌いながら弾いていたのは、この曲に没頭していたからかもしれない」、「速度にしても、切り方にしても、人と違ったことをしてみたかったと思う。だからすごく個性的な芸術家肌の人」…などが予想される。</p> <p>・発表されたことを適宜、板書する。</p>	<p>関① 鑑②</p>
<p><b>④ 「演奏すること」の意味を伝える</b></p>		

<ul style="list-style-type: none"> <li>・『演奏する』っていうことについて、資料3を使って説明するね。」</li> <li>・演奏する、っていうことは、演奏家が演奏によって何かを表現したいからするんです。表現したいものがなくて、ただピアノを弾いたり歌ったりしていても、それは『表現』とは言えないんだよね。では、「表現したいもの」って何かというと、演奏しようとする楽曲から得たイメージや、自分の感情、それに曲の仕組みや作曲家が伝えたかったことや、演奏家自身が聴く人に伝えたいこと、などだよ。そしてそれを表現するために『ここは少し強めに弾こう』とか、『速度は遅めの方が自分の感情に合うな』と判断して(音楽の仕組みを操作して)、それができるように練習を重ねて演奏するんだ。」</li> <li>・このことは、プロの演奏家のことだけではなくて、皆さんが歌ったり、リコーダーを吹いたりするときにもあてはまることなんだよ。」</li> <li>・皆さんが、今日考えたことは、資料2の図の中の、グールドさんの『表現したいもの』の中身だったんだね。」</li> <li>・ちなみに、学者の研究によれば、グールドがこんなにもゆっくりと演奏した理由は、作曲家が暗示したムードを誇張したため、とか、他の音楽家の演奏とは違う何か新しいことをやってみせたかったからだ、とか、曲の内省的要素、悲哀感などを誇張したかったからだ、などと考えられているよ。」</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「表現することの意味」をわかりやすく、簡潔に説明する。</li> <li>・このことは、表現領域の学習においても常に意識させなければならないことである。</li> <li>・資料2の図を配布する。</li> <li>・ケヴァン・バサーナ著、サダコ・グエン訳『グレン・グールド演奏術』(白水社、p.250)より。</li> </ul>
--	--

**⑤ 再度、オーソドックスな演奏を聴いた後、続けてグールドの演奏を聴き、表現の多様性を味わう**

 <ul style="list-style-type: none"> <li>・「では、最後にもう1度、一番初めに聴いた演奏と、グールドの演奏を続けて聴いてみるよ。みんなは、資料3の図を見ながら、2人の「演奏する人」の心の中を探りながら聴いてみてね。」</li> <li>・(鑑賞後)「ヘブラーの演奏の方が好きだなんて思った人は？ グールドの方が好きだなんて思った人は？ そしてその理由はどうしてかな？」</li> <li>・同じバラでも「赤いバラが好きだ」っていう人もいれば、「黄色いバラの方が好きだ」っていう人もいるよね。最近では、とうとう青いバラも改良されてきたらしいよ。これを改良した人たちは、世の中になくバラをどうしても作りたかったんだって。もしかしたらグールドの演奏は、今までになかった青いバラに似ているかもしれないね。同じバラでもいろいろな色があるように、同じ楽譜からいろいろな表現を生み出そうとすることは、人間の面白いところかもしれないね。」</li> <li>・WSのQ4に、あなたの好きなバラの色と、それを好きな理由、そして、ヘブラーとグールドではどちらが好きか、その理由を書いてね。」</li> </ul>	<p style="text-align: right;">鑑②</p>  <ul style="list-style-type: none"> <li>・それぞれ挙手させ、数名にその理由を問う。</li> <li>・表現の多様性と、多様な表現を求める人間の創造意欲をわかりやすく話す。</li> </ul>
--	---

6. 資 料

■ 資料1 ワークシートの例

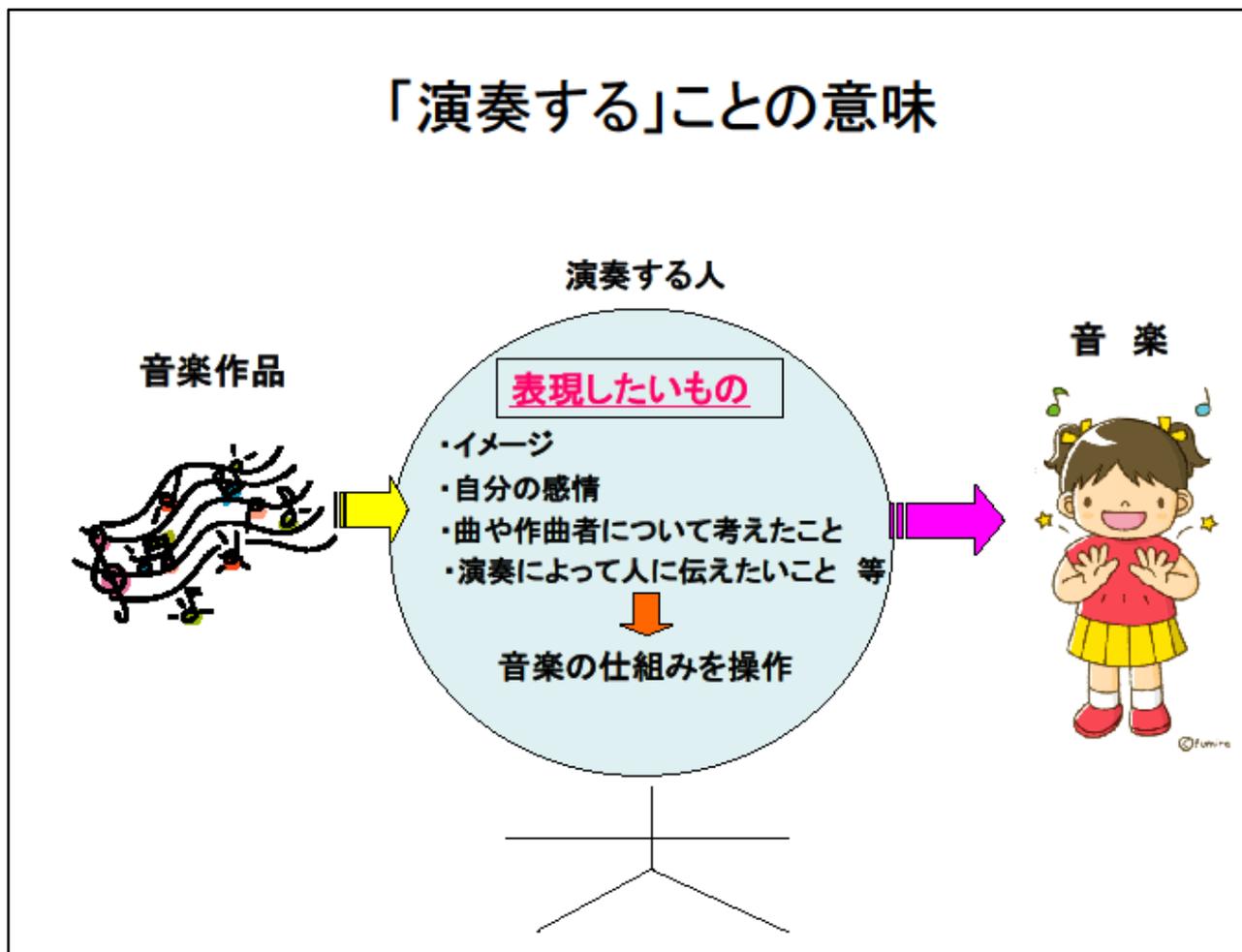
グレン・グールドの演奏を聴いて

1年 \_\_\_組 \_\_\_番 氏名\_\_\_\_\_

Q1 発見した特徴		Q2 発見した特徴が生み出す雰囲気
1		
2		
3		
4		

Q3 グレン・グールドは、どうしてこのような表現をしたのだろうか？	
考えるヒント ・グールドってどのような性格や個性をもった人だろうか？ ・グールドは、どのような感情をもって弾いているのだろうか？ ・グールドは、この曲についてどのような考えをもっているのだろうか？	
私の考え	グループで出た意見

Q4	あなたが好きなバラの色は？	その理由は？
Q5	あなたが好きな演奏は？（○で囲んでね）	その理由は？
	ヘブラーの演奏  グールドの演奏	



(宮下 俊也)

**題材の趣旨と学習指導のポイント**

シューベルトの《魔王》は中学生にとって興味をもって聴くことのできる歌曲です。劇的な詩の内容と旋律の動き、激しいリズム。これだけでも豊かなイメージが湧き、「魔王」の物語に入り込んでしまうでしょう。この事例では、さらに長調や短調、転調にも着目します。生徒たちは、例えば長調は明るい、短調は暗い、といった漠然とした印象をもっているようですが、実際には長調と短調の響きの違い、転調による変化などを父親や魔王の気持ちの変化などと関連させて考えさせると、リズムや旋律がもたらす効果と同じように、それらもまた豊かな音楽表現のための一方法であることがわかると思います。

シューベルトの歌曲では、詩やそこに現れる登場人物の心情に合わせた転調が頻繁に行われています。本事例では《魔王》とともに、歌曲集《冬の旅》の《郵便馬車》も合わせて取り上げますが、どちらも、平行調や同主調への転調が多くみられます。登場人物の心の変化を調がもたらす雰囲気と関連づけて感受することができれば、シューベルトの歌曲の特徴を、根拠をもった批評文にして表すことができるでしょう。そして、授業の終末では「シューベルトのココがすごい!」という短文をまとめ、クラス内で紹介し合います。

1. 指導内容 調がもたらす効果

2. 教材 ・ゲーテ作詞・シューベルト作曲 歌曲《魔王》D. 328  
 ・ミュラー作詞・シューベルト作曲 歌曲集 歌曲集《冬の旅》より《郵便馬車》 D. 911

3. 題材目標

- 1 音の強さや速度、リズム、長調や短調、転調などによって音楽の印象が違うことに興味・関心をもつ。
- 2 知覚・感受したことを確認し、鑑賞したときの自分の感情を言葉で表現しながら、作曲家の意図を考えて聴く。

4. 評価計画

評価の観点	評価規準	評価方法
音楽への関心・意欲・態度	① 音の強さや速度、リズム、長調と短調、転調などによって音楽の印象が違うことに興味・関心をもつ。	発話 WS
	② 感じ取った魅力について、要因を含めて言葉で表し、鑑賞する学習に主体的に取り組もうとしている。	発話 WS
鑑賞の能力	① 音の強さや速度、リズム、長調と短調、転調などによる音楽の印象の違いを言葉で言い表している。	発話 WS
	② 知覚・感受したことを確認し、鑑賞したときの自分の感情を言葉で表し、作曲家の意図を考えて聴いている。	発話 WS

5. 授業展開

 : 見つける
  : 考える
  : 生み出す

学習活動の内容と教師の発話例	指導上の留意点	評価
① 《郵便馬車》と《魔王》の相違点を考える		
<p>↑</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>「今日は、2つの歌を聴きます。これは、2つとも伴奏がピアノで、同じ作曲家が作ったものです。同じ作曲家だから、同じように聞こえるかな？」</li> <li>「Aは明るい、Bは暗い、という言葉が聞こえましたが、もう1度聴くので、明るい・暗いという言葉を使わないで表現してみましょう。」</li> <li>「これは実は2つともピアノのリズムは、ある乗り物を表しているそうです。」</li> <li>「そうです。どちらも馬なんですね。ただし、Aはゆったりした動きで、Bは急いでいる。では、違いはこれだけでしょうか。みんなは、どんな気分になったかな。」</li> <li>「Aは、なんだか落ち着く感じだけどBは不安な感じがしたようですね。これは、実は調の違いなのです。Aは長調の部分が多く、Bは短調の部分が多いです。長調か短調かに気をつけてみることで音楽の表すものが見えてくることもありますね。」</li> <li>「この2つはシューベルトという作曲家が作った歌曲で、Aは《郵便馬車》、Bは《魔王》という題名がついています。Aは郵便馬車で来るはずの彼女からのラブレターを待つ気持ちを表しているそうです。Bは、何を表しているのでしょうかね。」</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>曲名は告げず、AとBとして黒板に相違点をあげる。ABは原語で聴かせる。</li> <li>「明るい」「暗い」という言葉を使わないで表現させ、板書する。</li> </ul> <p>(予想される生徒の発話例)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>「Aはゆったりしたかんじ、何かわくわくしたかんじ、所々悲しくなるところがある。」</li> <li>「Bは追いかけてられているような感じ、恐い感じ、所々楽しそうな感じがする。」</li> <li>長調と短調の違いを簡単なメロディーで説明する。</li> </ul> <p>(予想される生徒の発話例)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>「魔王の怖さを表しているのかな？」</li> <li>「魔王が怒っているのかな？」</li> </ul>	<p>関① 鑑①</p> <p>鑑②</p> <p>↓</p>
② 《魔王》を鑑賞する		
<p>↑</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>「《魔王》は、語り手・父・子・魔王の4つの役を1人の人が歌い分けています。今から、それぞれの役割のときに紙を出しますので、それぞれがどんな人なのか考えてみてください。それぞれの声の高さや強さ、リズムの特徴、そして調に注意しながら音楽の表すものを考えていきましょう。」</li> <li>「このお話の中で、父と子と魔王の声は、どんな風に歌い分けられていたかな。」</li> <li>「班の人と相談しながら声の特徴をまとめてみましょう。」</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>『語り手』『父』『子』『魔王』のカードを用意し、提示しながら聴かせる。</li> </ul> <p>(予想される生徒の発話)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>「父は低い声」「子はだんだん叫ぶように強くなっている」「魔王は優しい歌い方」「魔王の部分は長調だ」</li> <li>プリントの表に記入させる。</li> </ul>	<p>↓</p>
③ それぞれの声の特徴と表すものの変化を考えながら鑑賞する		
<p>↑</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>「この曲を聴いたとき、なんだか不安な感じがしたのはなぜでしょう。」</li> <li>「特に不安な感じがしたのは誰の時でしたか。子どもですね。子どもは、魔王が見えるとお父さんに言っているのです。子どもの歌い方は、ずっと変化ありませんでしたか。」</li> </ul>	<p>(予想される生徒の発話例)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>「短調だから。」「激しいリズムだから。」「追いかけてられているような迫力がある。」</li> <li>「はじめは小さかったけど、だんだん声が大きくなった。」「声の高さが高くなった。」</li> </ul>	<p>鑑① 鑑②</p>

- ・「ということは、子どもの気持ちは…そう、恐くてたまらない。父に助けを求めているのですね。声の高さや大きさ変化からわかりますね。」
- ・「魔王はどうでしたか。」
- ・「子は短調でしたが魔王は長調でしたね。ずっとそうだったかな。」
- ・「声の強さも変わりましたね。優しい声から最後は…強くなりましたね。」
- ・「ということは、魔王は、どんな人だと思いますか。」
- ・「つまり、長調の部分は魔王がだまして優しく語りかけているということで、最後に短調になる部分は」
- ・「調や声の強さから魔王がどんな人かわかりますね。」

- ・「なんだか明るかった。長調だった。優しいような感じがした。」
- ・「うん。いや、最後が変わった。短調になった。恐そうになった。」
- ・「魔王は優しく声をかけているけど、あとでおどしている。」
- ・「本当は悪い人で、子を襲っているのかも知れない。」

#### ④ 特に調の変化と表すものの変化に着目しながら鑑賞し、対話する

- ・「教科書の日本語訳を見ましょう。父は、熱が出た息子を医者に見せようと馬を走らせますが、その途中で子どもは魔王が見えると言うんですね。魔王は言葉巧みに子どもを誘います。子どもは必死でお父さんに助けを求めているのですが、やっと宿に着いたときには子どもは息をひきとってしまった、という内容です。子どもと魔王の様子、皆さんが考えたことと近いですね。」
- ・「それでは、もう 1 度《魔王》を聴きます。今度は父の声に着目しましょう。父は低い声です。調はどうかかな。」
- ・「父のところの調はずっと短調だったかな。それでは、調に気をつけながら、父の気持ちの変化も考えてみましょう。その後で、班で考えてみましょう。」
- ・「父の気持ちの変化について、まとまったかな。班ごとに発表してください。」

(予想される生徒の発話例)

- ・「短調だったと思う」「長調に変わったかも知れない。」
- ・教科書の父の欄に長調なら M、短調なら m と記入しながら父の気持ちの変化を考える。

(予想される生徒の発話例)

- ・「ずっと短調だと思ったけど、違うみたい。」
- ・「2 番目と 3 番目は長調だ。」
- ・「最後は短調に戻ったかな。」
- ・「ということは、2 番目と 3 番目は子どもをなだめようとして明るい雰囲気と言っていたのかな。」
- ・「お父さんは、魔王なんかいないと思っていたのかな。」
- ・「でも、さすがに最後に不安になっているんだね。」
- ・「お父さんにも魔王が見えたのかも。」
- ・「最初は短調なので、父も子がなぜおびえているのか不安だったと思います。しかし、子どもが魔王が見えるというので、ありえないと思って安心させようとしていました。これは長調に変わったことからわかります。でも、最後は短調です。あまりに子どもが泣き叫ぶので、本当に魔王がいるのかも知れないと思って不安になったことがわかります。」

鑑①



6. 資料

■ 資料1 ワークシートの例

声の特徴から想像してみよう!

音楽の中には、作曲家が何かの情景や心の様子を表現しようとして作られた曲があります。それはいろいろな音の特徴に目を向けると「なるほど!」と思うことがありますよ。考えてみましょう。



1. 「魔王」について、それぞれの声・音の特徴をまとめてみよう。

	声の高さ	声の強さ	伴奏の変化	調性
父	低い	太く、力強い		
子	高い ↓	細く、弱い ↓		短調
魔王	少し高い (最後に)	細く、弱い (最後に)		長調
語り手	中くらい	太く、おさえた強さ ↓	激しく、同じ音が続いている ↓	

2. 音の特徴の変化からどんなことがわかりますか。

<作曲家について>  
生まれた国:

15 歳から 31 歳までで作曲した曲数:

曲以上

ニックネーム:

の王



フランツ・シューベルト  
(1797-1828)

3. ジェシー・ノーマン (ソプラノ歌手) の「魔王」を聴きましょう。

4. シューベルトの「魔王」についてあなたが考えたことを書きなさい。

1年 ( ) 組 名前

■ 資料2 シューベルトの工夫についてまとめた生徒の文章例

- 魔王の長調の部分か軽やかなリズムで、ひきこまれそうで好きです。最後に低く、短調になるところが本性が現れる感じで工夫してあってすごいと思いました。
- (伴奏のピアノが) 同じ音を何度も続けて、恐怖心を誘っているように思えます。
- (伴奏のピアノが) 最後の無音の後にドーンみたいな音を出したのが父の絶望とか衝撃とかが伝わってきて、数秒間でこれだけの感情が伝わってくるのがすごいなと思いました。
- 一人ひとり声の高さ・強さ・伴奏・調などを後から後から変えて、その人の気持ちを伝えているところが工夫されていると思います。
- 歌詞に合わせて調を使い分けたり、強さを変えたりして工夫しているので、物語がリアルに伝わってきました。

■ 資料3 生徒が記述したワークシートの例

声の特徴から想像してみよう!

音楽の中には、作曲家が何かの情景や心の様子を表現しようとして作られた曲があります。それはいろいろな音の特徴に目を向けると「なるほど!」と思うことがありますよ。考えてみましょう。



1. 「魔王」について、それぞれの声・音の特徴をまとめてみよう。

	声の高さ	声の強さ	伴奏の変化	調性
父	低い	太く、力強い	激しい音から 同じ音が続く	短調 長調
子	高い さらに高いところ	細く、弱い 強く、太い	強く、激しい音 → 静かになる	短調
魔王 (最後に)低い	少し高い (最後に)低い	細く、弱い (最後に)強い	軽やかで動きのある、明るい(弾んだ)音	長調
語り手	中くらい	太く、おさえた強さ 強く、やさしい音	激しく、同じ音が 続いている 止まった	短調

2. 音の特徴の変化からどんなことがわかりますか。

登場人物の心情の変化が、周りの様子が変わっていく様子が分かります。語り手はその違いを、うまく表現しながら声を変化させている。

<作曲家について>

生まれた国: オーストリア



15歳から31歳までで作曲した曲数: 600曲以上

ニックネーム:

歌曲

の王

フランツ・シューベルト  
(1797-1828)

3. ジェシー・ノーマン(ソプラノ歌手)の「魔王」を聴きましょう。

音の  
高さや低さを「ファ」の出し方を少しずつ変えながら伝えていたし、遠くの方の一点を見つめながら、表情も、場面ごとの非しや明りを意識していた。

4. シューベルトの「魔王」についてあなたが考えたことを書きなさい。

ピアノだけで、場面ごとのふんわりとした様子など、音に表情を出しているかのように、声では、何人かの人物が出てきたけど、1の人物だけでも重々ある声で、心情などを表していたので、想像豊かで表現力のあふれる曲が書けたと思いました。

1年(4)組 名前

この歌は元の人物の気持ちからピアノの音やリズム、歌っている人から感情が伝わってきて、最初聞いたときに、最後の方ですごく驚きました。何度聞いてもすばらしい曲だと思いました。

魔王のリズムがすばしいと思いました。長調のリズムがわかるような所が好きだと思いました。魔王が語っている所が最後で、短調になる所が工夫されていて、すばしいと思いました。

(松野 由美子)

### 題材の趣旨と学習指導のポイント

世界の人々の生活の中には豊かな音楽が息づいています。多様な生活文化に呼応するように多様な音楽が存在します。音楽は、人々の生活の中で生まれ、深く関わりはぐくまれてきたもので、人々の感性や感情などにも結びついています。そしてその感性や感情もまた、それぞれの自然環境や生活文化に根づきはぐくまれてきたもので、同じではありません。

ここでは、世界の子守歌をいくつか取り上げます。子守歌はまさにその生活の中から生まれた音楽であり、音楽が生活の中から生まれるべくして生まれたという必然性を生徒に気づかせることができるのではないかと期待します。また、世界中に無数に存在し、その歌詞はもちろん旋律やリズム、声の出し方なども異なりますので、音楽の特徴を背景となる生活や文化などに関わらせ、音楽の多様性を感じ取って鑑賞することができるでしょう。

世界の様々な音楽に主体的に関わりながら、親しみをもったりその価値を考えたりすることは、諸外国の伝統文化のよさを理解しようとする態度や能力を身につけ、国際理解に繋がっていくものと考えられます。このような学習が世界の様々な人々と交流できるような広い視野や豊かな心の育成へと寄与していければと思います。

1. 指導内容 音楽の多様性と、生活と音楽の関わり
2. 教材 世界の子守歌から次の4曲 (小泉文夫監修『世界民族音楽大集成』(キングレコード)より)
  - ・《アイヌの子守歌》から
  - ・《台湾 サウ族の子守歌》から
  - ・《中央アフリカ サバンガ族の子守歌》から
  - ・《チェコ (南ボヘミア) 》の子守歌から
3. 題材目標
  - 1 音楽の特徴を知覚・感受により見つけ、人々の生活などに関わらせて聴くことに興味・関心をもつ。
  - 2 音楽の生まれた必然性に気づき、音楽の多様性を感じ取りながら自分の意見をもって鑑賞する。

#### 4. 評価計画

評価の観点	評価規準	評価方法
音楽への関心・意欲・態度	① 子守歌の特徴を知覚・感受によって見つけ、その特徴を人々の生活などに関わらせて聴くことに興味・関心をもって、主体的に活動に取り組もうとしている。	発話 観察 WS
鑑賞の能力	① 子守歌の特徴を知覚・感受によって見つけることができる。	発話 WS
	② 子守歌が生まれた必然性に気づき、音楽の多様性を感じ取りながら、自分の意見をもって味わって聴いている。	発話 WS

5. 授業展開

 : 見つける
  : 考える
  : 生み出す

学習活動の内容と教師の発話例	指導上の留意点	評価
① 「子守歌」について考え、音楽の特徴を予想する		
<p>↑</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>「子守歌は何のための音楽でしょう。また、どんな気持ちを込めて歌われるのでしょうか。」</li> <li>「では、子どもを寝かしつけたりあやしたりするとき、子どもへかけることばや声、動作で考えられることはどんなことですか。」</li> <li>「このようなことをふまえて、子守歌の音楽の特徴を予想してみましょう。」</li> </ul> <p>↓</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>「みんなが出してくれたことから、『ことばや旋律』『曲の速さ』『声の音色』『強弱』などをポイントに、子守歌を聴き比べて音楽の特徴を見つけてみましょう。WSにメモを取りながら聴いてもいいです。先ほどの予想を絶するくらいの曲がでてくるかもしれませんよ。」</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>数名に問いかけ、板書する。 (予想される生徒の発話例)                     <ul style="list-style-type: none"> <li>子どもを寝かしつける。泣いている子どもをあやすため。</li> <li>ぐっすりおやすみ。かわいいなあ。子どもを安心させる。大切に思う気持ち。</li> <li>ことば…いいいいいいばあ。ねんねこねん。声…優しい声。明るい声で安心させるように。動作…背中を優しくたたいて寝かしつける。頭をなでて語りかける。</li> </ul> </li> <li>ことばは同じことばを繰り返すのが多いかも。</li> <li>動作から、曲の速さはゆっくりではないか。</li> <li>安心するように優しい声で歌い方もソフトに。</li> <li>生徒が予想した事柄から、聴くポイントを導き出して子守歌を聴き比べる際に生かす。</li> </ul>	<p>関①</p> <p>↓</p> <p>鑑①</p> <p>↓</p>
② 4つの子守歌を鑑賞し、見つけた音楽の特徴を述べ合い、確認する		
<p>↑</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>「みんな笑っていましたが、それはどうしてですか。」</li> <li>「そうですか。どのように予想を反していたのでしょうかね。いろいろな特徴をみつけたと思いますが、その中で特に目立ったものを挙げてみましょう。」</li> </ul> <p>↓</p>	<p>(予想される生徒の発話例)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>「子守歌とは思えないような曲もありました。」</li> <li>あらかじめ提示していた聴くポイントを中心に、挙げられた音楽の特徴について曲を聴きながら確認していく。</li> </ul>	
③ 音楽の特徴から、自分がどんな気持ちになったか、曲の雰囲気はどうだったかを対話する		
<p>↑</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>「見つけた音楽の特徴と関わらせて、あなたが感じた曲の雰囲気や気持ちを考えてみてください。」</li> <li>「となりの人と意見を交換してみましょう。」</li> <li>「出た意見をいくつか紹介してください。」</li> </ul> <p>↓</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>「この4曲の生まれた地域を紹介します。1曲目は北海道…(地域の紹介)」</li> <li>「意見の中に、自然や文化などに関するものもあったようです。次の時間は、それらと音楽の特徴との関連につ</li> </ul>	<p>(予想される生徒の発言例)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>「1曲目は、巻き舌が多く使われていたので、子どもが喜びそう。動物の鳴き声の真似に感じた。」</li> <li>「2曲目は、テンポが遅くてゆったりしていて、自分まで寝ちゃいそう。南国の風に揺られているようだ。」</li> <li>「3曲目は、1人が歌ってその同じことばを多数の人が繰り返していたけれど、あまりにもにぎやかで、本当に子守歌かな。どうして大勢で歌っているのかな。」</li> <li>「4曲目は、長調の曲のよう。優しい声で、これなら安心して眠れそう。」</li> <li>地図や地球儀で位置を確認する。</li> <li>4地域のことについて調べる宿題を課す。</li> </ul>	<p>↓</p>

<p>いて考えるところから始めます。そして、子守歌がどうしてこのように違っているのか、共通していることはどんなことかを考えていきます。」</p> <p>・「この 4 つの子守歌が生まれたそれぞれの地域の気候などについて調べてきてください。」</p>		
<p>④ 再度 4 つの子守歌を鑑賞しながら、音楽の特徴とその地域の人々の生活がどのように関連しているかを考え、対話する</p>		
<p>↑</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・調べてきた気候などをもとに、その地域の人々の生活について考え、音楽の特徴との関連について考えてみましょう。</li> <li>・中央アフリカの子守歌は、1 人で歌うところと大勢で歌うところが交互に組み合わされて曲が構成されていましたね。あのよう大勢でにぎやかに歌う子守歌がどうして生まれたのだと思いますか。」</li> <li>・「私たちとは違う自然や環境の中で生活しているから、子守歌ひとつとってみても地域や国によって大きな違いがあるのですね。」</li> </ul> <p>↓</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・世界地図や地球儀などを用い、位置を確認しながら、気候や風土、生活がイメージしやすいようにする。</li> <li>・音楽の特徴が、気候や人々の生活などからも大きく関わっていることに気づかせる。 (予想される生徒の対話の例) <ul style="list-style-type: none"> <li>・「集団で暮らしていて、子育てをするのもみんなでするのではないか。だから、曲の中に大勢で歌っている部分があるのかな。」</li> <li>・「でも、あのにぎやかさでは、とても安心して寝られないと思うけど。」</li> <li>・「日本の感覚では考えられないけれど、本当にいろいろな地域があって、その環境に適したように音楽もあるんだな。」</li> </ul> </li> <li>・自分や他の人との対話を通し、音楽の特徴と人々の生活との関連や自分の感情の変化を考えられるようにする。</li> </ul>	<p>鑑②</p> <p>↓</p>
<p>⑤ 多くの違いがある中で、共通していることは何かを考え、多様性を感じ取る</p>		
<p>↑</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「そのような多くの違いがある中で、共通していることもあります。さて、どんなことでしょうか。」</li> <li>・「同じ子守歌なのに、本当にいろいろな曲があり、表現もまるで違いましたね。このようなことを、音楽の多様性といいますよ。」</li> <li>・「その時の生活に必要なから音楽が生まれてきたのかもしれないですね。」</li> </ul> <p>↓</p>	<p>(予想される生徒の発話例)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「子どもがいる限り子育てもあるから、世界中どこでも子守歌というものがあると思う。」</li> <li>・「子守歌はその地域の人たちの生活から生まれた大切な音楽だということ。」</li> <li>・「子を思う親の気持ちは変わらないので、子守歌に込められた思いは同じなのでは。」</li> <li>・「同じ思いだけれど、地域によって子守歌の特徴が違うし表現のしかたも違うな。」</li> <li>・「子守歌だけでなく、音楽は人間にとってとても必要だからあるのではないかな。」</li> <li>・相違点や共通点、固有性などを踏まえた上で音楽の必然性に気づき、音楽の多様性について感じ取ることができるようにする。</li> </ul>	<p>↓</p>
<p>⑥ 「子守歌」についての紹介文を保護者を書く</p>		
<p>↑</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「今日の学習をふまえて、保護者の方に『世界の子守歌』についての紹介文を書きましょう。これまで学んできた『世界の子守歌のいろいろ』や4つの子守歌の特徴、世界の国々の生活との関わり、そしてそこから得たあなたの意見を交えて書いてください。そして、それを伝えた時、あなたが幼いころ歌ってもらった子守歌の話も聞けるといいですね。」</li> </ul> <p>↓</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・考えたことを手がかりにして、音楽の特徴と人々の生活との関連について、また自分にとっての音楽の価値や意味などについて、保護者への紹介文のかたちで書くようにする。</li> <li>・聞き出した子守歌の話はWSその 2 に記入させ、多様性などについて新たに感じ取れるようにする。</li> </ul>	<p>関①</p> <p>鑑②</p> <p>↓</p>

6. 資料

■ 資料1 ワークシートの例

音楽学習シート（その1）

世界の民族音楽から『子守歌』

1年 番 氏名

1 どの地域の音楽か地図上で確認しましょう。



①北海道 アイヌの子守歌から ②台湾の子守歌から ③中央アフリカの子守歌から ④チェコの子守歌から

2 4つの子守歌を聴きくらべてみましょう。気づいたことをメモしながら聴きましょう。

聴くポイント	要素	①アイヌ	②台湾	③中央アフリカ	④チェコ
	音色				
	速度				
	旋律				
	構成				
あなたの気持ち、 曲の雰囲気など					

※特によく特徴が表れているところから書いていきましょう。（全部マスを埋めなくてもいいです）

3 音楽の特徴と地域の人々の生活などがどのように関連していると考えますか。

【 の子守歌について】

4 どうして違っているのでしょうか。

5 共通していることはどんなことでしょうか。

## 世界の子守歌を鑑賞して

1年 番 氏名

これまで学んできた『世界の子守歌のいろいろ』や4つの子守歌の特徴、世界の国々の生活との関わり、そしてそこから得たあなたの意見を交えて書いてください。

音楽学習シート（その2）

世界のいろいろな子守歌

1年 番氏名

☆わたしの聴いて育った子守歌とは？

歌ってくれた人	何歳くらいの時	こんなときに	こんな子守歌を《曲名または、ことば、旋律、声など》

☆その他に、保護者の方から聴いた話があれば書きましょう。

---

---

---

---

---

---

---

---

☆紹介文を紹介して、『世界のいろいろな子守歌』について、あらためて感じたことなどを書きましょう。

---

---

---

---

---

---

---

---

■ 資料2 生徒が記述したワークシートの例（音楽学習シート（その1））

音楽学習シート

世界の民族音楽から『子守歌』

1年 氏名

1 この地域の音楽が地図上で確認しましょう。



①北海道 アイヌの子守歌から ②台湾の子守歌から ③中央アフリカの子守歌から ④チェコの子守歌から

2 4つの子守歌を聴きくらべてみましょう。気づいたことをメモしながら聴きましょう。

聴くポイント	要素	①アイヌ	②台湾	③中央アフリカ	④チェコ
声	音色	高め 動物の音 (オオカミ)	→低い...おろした感じ	植物のざわめき、太鼓	母親らしい
ゆっくり?	速度	拍が一定でない、動物みたい	ゆっくりめ	速め	→ゆっくり
Xロディー言葉	旋律	まき舌		にまき舌、みんが音、重なり	ねがしつけている
言葉	構成	くりかえし	中切音がある、(くりかえし)	中心...小者、くりかえし	同じことばをくりかえし
あなたの気持ち、曲の雰囲気など		動物(鳥、オオカミ)の鳴き声	少し日本と同じ、ねがしつけている	ねがしつけている、あやす、9拍	ねがしつけている

※特によく特徴が表れているところから書いていきましょう。(全部マスを埋めなくてもいいです)

3 音楽の特徴と地域の人々の生活などがどのように関連していると考えますか。  
【中央アフリカの子守歌について】

大勢が暮らしているだけあってにぎやかで、あたたか。

4 どうして違っているのでしょうか。  
住んでいる戸数、習慣 → アイヌ 動物に近い、台湾、アフリカ、チェコ、大勢が暮らす → 1個人が11人くらい暮らす。

5 共通していることはどんなことでしょうか。

- 子供に対して歌っている
- ねがす & あやすをしている
- くりかえし
- 言葉? で呼びかける
- 女の人が歌っている
- 歌っている → 近くにいるよ! 優しいな。

世界の民族音楽～子守歌～を鑑賞して

1年 氏名

いろいろな国の子守り歌を聞いて、北海道などの寒いところでは、寒くてまき舌になったり、台湾はあたたかいから、曲がゆっくりだ、たりおたやかた、たりしてゆ、たりな感じになっていることが分かりました。このように、子守り歌のふんいきなどが、気候や生活の違いで、まったく違うイメージになっていておもしろかったです。私は、中央アフリカの子守り歌が、にぎやかで明るく、聞いていると自分も明るくなれるような感じがするので良いと思いました。

■ 資料3 生徒が記述したワークシートの例（音楽学習シート（その2））

音楽学習シート

世界のいろいろな子守歌

1年 氏名

☆わたしの聴いて育った子守歌とは？

歌ってくれた人	何歳くらいの時	こんなときに	こんな子守歌を〈曲名または、ことば、旋律、声など〉
母	保育園時	昼寝時 就寝前など	ゆくり ゆんゆん こりよん 優しい感じで おこりよん
祖母	'	五木	五木の子守歌(曲名)

☆その他に、保護者の方から聴いた話があれば書きましょう。

本の読み聞かせを行っていました。

☆紹介文を紹介して、『世界のいろいろな子守歌』について、あらためて感じたことなどを書きましょう。

私は今まで、日本の子守歌しか聞いたことがなかったけど、いろいろなリズムや声のトーンがあったりももしろいなと思います。中には「これで本当にお眠るのか？」と思っていたりしたけど、あとでそれがその国に合った曲になっていると思います。また、私は優しい感じの子守歌というイメージがあったけど、出たしから激しかったり、くり返しで歌ったり自分のイメージとは全然ちがったので、このほかにもたくさん国の子守歌を聞いてみたいなと思いました。

(佐久間 敦子)

### 題材の趣旨と学習指導のポイント

この題材では、人間にとって音楽の表現や鑑賞をするということにはどのような意味があるのか、音楽と人間の生活がいかに結びついているかを生徒に考えさせ、人間と音楽の関わりを理解させることが目的です。ですから、1年生の学習を土台にして理解が深められるよう、2年生の授業の1時間目に行うことがよいでしょう。

まず、耳を澄ますと聴こえる身の回りのたくさんの音に気づかせます。目に見えなくてもわかる風が吹く音、学校の前の道を走る車の音、廊下を歩く誰かの足音、友達が鉛筆で書く音など。耳を集中させると、ふだん気づかないようなかすかな音まで聴き取ることができ、人間の耳の素晴らしさに気づくことができます。この活動を通して、音を大切にしようという気持ちをつくります。そして音楽の起源を想像することにより、音楽は人間の生活の中から生まれ、現在までそれは変わらないということに気づかせます。

次に《アメージング・グレイス》《ヴォルガの舟歌》《ピレンツェの歌》の3曲を鑑賞し、知覚・感受しながら音楽の特徴をその背景となる文化・歴史と関連づけて、解釈したり価値を考えたりします。これらの曲には音楽を生み出しはぐくんできた人々の生活や気持ちが表れていて、それらを私たちは耳を通して感じ取ることができるものです。つまり言葉による説明以上に音楽が物語ってくれているという、音楽のもつ力に気づくことができるはずです。

この授業では、知覚・感受したことや自分なりの解釈などを生徒に発言させ、対話を通して授業を進めます。例えば要素に対する知覚は客観的なものですが、曲想の感受や楽曲全体の解釈は人それぞれ違い、いろいろな感じ方があるのだということを、あらためて再確認させます。さらに、自分の意見を発言する楽しさ、友達の意見を聞く楽しさ、互いの意見を交流する楽しさを味わわせ、積極的に発言できる楽しい雰囲気づくりを行うことも大切です。

最後に、なぜ学校に音楽の授業があるのかを考えさせ自分なりの答えを見つけさせます。これが今後の音楽の学習の動機づけとなります。生徒がこの題材で得た音楽を尊重する気持ちを大切に、今後の授業を進めていってほしいと思います。

1. 指導内容 音楽の文化的背景と多様性

2. 教材
- ・作曲者不詳 《アメージング・グレイス》
  - ・ロシア民謡 《ヴォルガの舟歌》
  - ・ブルガリアの伝統音楽 《ピレンツェの歌》

3. 題材目標

人間と音や音楽との関わりに興味・関心をもち、要素を知覚・感受しながら、音楽が人間の生活や文化・歴史と密接に関わっていることや音楽の多様性を理解する。

4. 評価計画

評価の観点	評価規準	評価方法
音楽への関心・意欲・態度	① 人間と音や音楽との深い関わりに興味・関心をもっている。	発話 観察
	② 音楽の特徴とその背景となる文化・歴史、音楽の多様性に関心をもち、学習に主体的に取り組もうとしている。	
鑑賞の能力	① 声の音色、リズム、旋律、テクスチャなどの要素を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感受している。	発話 WS
	② 知覚・感受しながら、音楽の特徴をその背景となる文化・歴史と関連づけて、解釈したり価値を考えたりし、鑑賞している。	発話 WS

5. 授業展開

←→ : 見つける

←→ : 考える

←→ : 生み出す

学習活動の内容と教師の発話例	指導上の留意点	評価
<p><b>① 人間の耳、自分の耳のすばらしさに気づく</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「1 分間静かに耳を澄まして、聴こえる音を全て書き留めよう。いくつ書けるかな？」</li> <li>・「目で見なくても、車がこっちから来てあっちに走っていたとか、風が吹いているとかわかったね。人間の耳ってすごいね。」</li> <li>・「静かに集中して聴くと、かすかな音まで聴き取ることができるね。音楽の時間は音を大切にしたいよね。今のように静かに集中する時間を大切にしていこうね。」</li> <li>・「この絵(日本の古代の生活場面(家族の食事風景など))のように電気もガスも水道もないずっと昔、自分たちで食べ物を取ったり育てたりして生活していた時代の人々は、どんな音を『美しい』と大切に思ったり、どんな音を聴いて『怖い』としたりしていたかな？」</li> <li>・「例えば暗闇の中で、家族の声によって安心したり、知らない人の声によってとなり村の人が襲ってきたのでは、とって怖くなったかもしれない。風の音を聴いて、この風が吹いたらそろそろ豆まきの季節だ、って考えたかもしれないし、動物の声を聴いて、この動物は危険だとか、この動物は食べられる、ごちそうだ！と思うこともあったと思うよ。」</li> <li>・「こう考えると、昔の人の方が現代の私たちより、よほど音に対して敏感で、音を聴くということは生活や命に関わることだったということが想像できますね。今の私たちは、周りに音が溢れすぎて、音に対して少し鈍感になっているかもしれないね。」</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自然音(風の音、雨の音など)、環境音(エアコンの音、廊下を誰かが歩く音など)を聴き取り、WS1に記入して発言させる。</li> <li>・WS2に記入して発言させ、対話させる。</li> </ul>	<p>関①</p>
<p><b>② 音楽の起源を想像し、音楽は人間の生活の中から生まれたことを理解する</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「人類に音楽が生まれたのはいつ頃で、それはどんな音楽だったと思いますか？」</li> <li>・「手や木を叩いていたらリズムが生まれて音楽になった。母の子守歌から、祈りから、踊りからなど、音楽の誕生については諸説あります。」</li> <li>・「これらはどれもみんな、人間の生活の中から生まれたものだね。それが現在の音楽につながっているんだよ。」</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ここで言う音楽とは、楽譜がある音楽ではなく、もっと素朴な音楽のことを指す。</li> <li>・WS3に記入して発言させ、対話させる。</li> </ul>	
<p><b>③ 《アメージング・グレイス》を鑑賞し、要素を知覚・感受しながら、音楽が人間の生活や文化・歴史と密接に関わっていることや音楽の多様性を理解する</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「《アメージング・グレイス》を聴いてどんな気持ちになったか、後で教えてね。この曲は英語で歌われているけれど、音楽から歌詞の内容を想像してみてね。」</li> <li>・(鑑賞後)「どんな気持ちになりましたか?」「どんな歌詞の内容だと思いましたか?」</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・WS4に記入して発言させ、対話させる。</li> </ul>	<p>関② 鑑①</p>

<p>↑</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「なぜそう思ったんだろう。あなたがそう感じた理由が音楽の中に必ずあるよ。例えば女声の音色とゆったりした速度が、やさしい感じがしたとか。今度はその理由も見つけてごらん」</li> <li>・「実はこの曲はこんな歴史があって、そこから生まれた曲なんだよ」</li> </ul> <p>(《ヴォルガの舟歌》《ピレンツェの歌》も同様に行う。)</p> <p>↓</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「3曲の中から自分が一番気に入った曲を選んで、その曲のよさを友達に伝える文を書こう。その時、これまで学んだことや対話で得たことを踏まえて書いてくださいね。」</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・知覚と感受を関わらせていく。</li> <li>・《アメージング・グレイス》が生まれた経緯など歴史的背景について説明する。</li> <li>・《ヴォルガの舟歌》では、ヴォルガ川や労働者の絵、《ピレンツェの歌》ではブルガリアの民族衣装や農園などの写真を見せると効果的。</li> <li>・WS5に記入させる。</li> </ul>	
<p>④ 音楽のもつ力について考え、音楽に対する理解を深める</p>		
<p>↑</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「音楽にはどのような力があるのだろう。何のために学校で音楽を学ぶのかも考えてみよう。」</li> <li>・「音楽には人間の心を動かす力があるよね。音楽は私たちに様々なことを感じさせてくれます。音楽を表現したり聴いたりして、楽しくなったり、踊りたくなったり、悲しくなったり。音楽は、音色や速度や強弱などいろいろな要素の組合せによってできていて、そこから私たちは、いろいろなことを感じるができるんだね。中学生の時期にいろいろなことを感じたり、友達の感じ方を知ったりすることって、とても大切なことだよ。」</li> <li>・「音楽は人間の生活とつながっていて、いろいろな国の文化や歴史とつながっていることがわかったね。今日は《ヴォルガの舟歌》を聴くことによって、ロシアの貧しい労働者の気持ちを感じたり歴史を知ったりすることができたよね。《ピレンツェの歌》を聴くことによって、ブルガリアの山の中で働く人々の気持ちを感じたり、ブルガリアの伝統を知ったりすることができたよね。音楽を通して、私たちは、過去に、世界に、つながることができるんだよ。」</li> <li>・「この1年間、いろいろな音楽にふれて自分の世界を広げよう！」</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分なりの答えが1つでも見つければよい。</li> <li>・生徒に発言させ、それらの発言を生かしながら、まとめる。</li> </ul>	<p>鑑②</p> <p>↓</p>

## 6. 資料

### ■ ワークシートの例

# 人間と音楽の関わりについて考えよう

1 耳をすまして、今、聴こえる音を、すべて書き留めよう。

--

2 昔の人々は、どんな音を大切にし、どんな音を<sup>おそ</sup>恐れていたと思いますか。

あなたの予想	その他

3 音楽はいつ頃、どんな形で誕生したと思いますか。

あなたの予想	その他

4 音楽を聴いて、歌詞の内容を考えよう

	曲名	歌詞の内容	理由
1	アメイジング グレース		
2	ヴォルガの舟歌		
3	ピレンツェの歌		

5 上の3曲の中からあなたが最も気に入った曲について、そのよさを自分の言葉で伝えよう。

--

(勝山 幸子)

キーワード: 声による表現 発声の違い 文化的背景 音楽の多様性

### 題材の趣旨と学習指導のポイント

我が国の伝統的な歌唱を扱う授業には、教師自身が苦手意識をもっている場合が少なくないです。しかし、苦手なもの得意とするものから学んではどうでしょう。あるいは、馴染みやすいものとの比較はどうでしょうか。このような観点から体験的な学習や比較鑑賞などでより興味・関心を喚起する手だてを考えてみました。また、生徒同士の学び合いの場を授業の中に組み入れたり、視聴覚教材の効果的な導入方法を考えたりすることで、生徒の知的好奇心を刺激し音楽文化の多様性を理解するための手だてを工夫しました。これらの学習によって音楽的な特徴を感じる力を養い、生徒たちが単なる気分を述べるのではなく、根拠をもって自分なりに批評する力を身につかせ、多様な音楽のそれぞれのよさを見つけることのできる生徒の育成を目指しました。

授業では、第1時にグレゴリオ聖歌と謡の声の響き方の相違を考えます。自分で響きの方向を矢印で示し、班で意見を交換したり実際に声を出してみたりしながら、「なぜこんな響きなんだろう」とその文化的背景にも意識を向けさせます。そして第2時では能《隅田川》と、《隅田川》を題材に作られたオペラ《カーリユーリバー》で、母の悲しみの表現の相違を視聴して考えます。声の響かせ方、楽器の使い方などを班で話し合うことにより、それぞれの音楽についてしっかりした自分の考えを導けるよう、教師の支援が必要です。「能」と「オペラ」の表現の違いは、日本と西洋の文化的背景の違いを考えることにもなり、音楽の多様性や表現の奥深さを感じることもできるようになります。

なお、余裕があれば、第1時と第2時の間に実際に謡に挑戦する時間を入れたいものです。ゲストティーチャーにお願いしてもいいですし、無理であれば視聴覚教材で「まねる」でもかまわないと思います。あれこれと教師も生徒も試行錯誤してみましょう。その後、能を視聴し第3時につなげれば、より深く味わえることと思います。

1. 指導内容 曲種に応じた発声の特徴と、文化的背景に興味をもった能とオペラの表現技法の相違の理解
2. 教材
  - ・グレゴリオ聖歌 《アレルヤ我が過ぎ来しのいけにえ》”(CD、VTR『中世の音楽』)
  - ・能 《羽衣》より「東遊びの数々に〜」(CD、DVD)
  - ・能 《隅田川》より「のう、舟人〜」(DVD)
  - ・ブリテン作曲 オペラ 《カーリユーリバー》より「Ferryman, tell me, what did it happen?」(CD)
3. 題材目標
  - 1 曲種に応じた発声の特徴や音楽の背景となる文化・歴史に興味・関心をもつ。
  - 2 背景となる文化・歴史との関わりから、能とオペラの表現技法の相違などを総合的に理解し、音楽の多様性を感じて楽曲を聴き取り、簡単な批評文にまとめる。

#### 4. 評価計画

評価の観点	評価規準	評価方法
音楽への関心・意欲・態度	① グレゴリオ聖歌と謡の声の音色や発声の相違に関心を持ち、謡の発声をまねることに意欲的である。	発話 WS
	② 能とオペラの表現の相違や音楽の背景となる文化・歴史に関心を持ち、意欲的に聴いて、その相違を言葉で表し、鑑賞する学習に主体的に取り組もうとしている。	発話 WS
鑑賞の能力	① 感じ取った相違を言葉や図でわかりやすく表している。	発話 WS
	② 自分が知覚・感受したことと友だちの意見を参考にしながら、能とオペラの表現の相違について自分の言葉で表し、能のよさや美しさを味わって聴いている。	発話 WS

5. 授業展開

←→ : 見つける   ←→ : 考える   ←→ : 生み出す

学習活動の内容と教師の発話例	指導上の留意点	評価
<p><b>① グレゴリオ聖歌（A）と謡（B）を聴き、それぞれの声の特徴を考える</b></p> <p>・「今日はAとBという2つの曲を聴きます。声の響かせ方に注意して聴いてください。たとえば、声の響きの方向、口の開け方、歌う姿勢や体の使い方に注目して聴きましょう。」</p> <p>・「AとBの特徴わかりましたか？ では、Aさんお願いします。」「Bさんはどうですか？」</p> <p>・「では、自分なりに感じたことをWSにまとめてみましょう。」</p> <p>・「Aはグレゴリオ聖歌と呼ばれるものの中の1つです。西洋で、1000年以上前から歌われている音楽です。これが楽譜です。ちょっと歌ってみましょう。」</p> <p>・「Bはわかった人も多いと思いますが、日本のものです。謡と言って、室町時代に盛んになった能で謡われているものです。今聴いたのは《羽衣》という能の一部で、こんな歌詞を謡っていたのですよ。これも歌ってみましょう。」</p> <p>・今日の学習の目標は「西洋の声と日本の声の響き方の特徴を捉えよう」です。どんなふうに関→に声の響かせているのか、自分の声で確かめたり、班で話し合ったりしながら確かめていきましょう。」</p>	<p>・聴く観点を黒板に板書する。</p> <p>・口頭のみ。「Aは四方八方に広がっている感じ」「Bはお経みたいに聴こえて、あまり口をあけていないと思う」のようにできるだけ具体的に言わせる。</p> <p>・巡視する。</p> <p>・楽譜（ネウマ譜）や歌詞を黒板に貼る。</p> <p>・AとBのそれぞれの一部分を歌う。全員でそれぞれの声を出してみても、各自が感じ取ったことを再現してみる。</p> <p>・本時の課題の提示。</p>	<p>関①</p> <p>↓</p>
<p><b>② 声の響かせ方について班で相談して特徴をつかむ</b></p> <p>・それぞれの声を出す際に共通したこと、異なっていたことを班で相談し、考えをまとめる。</p> <p>・まとめたことを頭部図に書きこみ、ホワイトボードに貼る。</p> <p>・相談したことを発表する。</p>	<p>・各班に頭部の図 2 枚を配布する。ネームペンで書き込ませる。</p> <p>・様子を見て再度聴かせる。</p> <p>・巡視し、言葉のでない班は支援する。 (予想される生徒の発話例)</p> <p>・「Aは上の方に響かせている感じがする。」</p> <p>・「AもBもおなかを使って強く声を出している。」</p> <p>・「Bは下あごを深く下げて発音している感じがする。」</p>	<p>関①</p> <p>鑑①</p> <p>↓</p>
<p><b>③ 感受したことを確かめながらもう1度聴く</b></p> <p>・「では、今それぞれの班で考えたことが、その通りかどうか、もう1度聴いてみましょう。」</p> <p>・「なぜこんな特徴があるのでしょうか。では、演奏場面をビデオで見てみたいと思います。演奏している場所や様子をよくみてみましょう。」</p>	<p>・確かめの鑑賞をする。 (予想される生徒の発話例)</p> <p>・「やっぱりAとBの響きの方向が違う。」</p> <p>・「どうやったら謡の声が出るんだろう。」</p> <p>・グレゴリオ聖歌は高い天井の石造りの協会でも歌われており、謡は能舞台上で座って謡われていることを把握させる。</p>	<p>関①</p> <p>↓</p>

④グレゴリオ聖歌と謡の演奏場面を視聴し、歴史や文化の違いと関連させながらその特徴を理解する

- ・「西洋の音楽と、日本の音楽の特徴は、演奏されている建物や、文化の違いというものが大きく影響していますね。でも、共通していることもありました。私たちは、まだまだ日本の音楽について知らないこともたくさんあります。これから、また、西洋の音楽と比較していきながら、日本の音楽の魅力を探っていきたいと思います。」
- ・「今日の鑑賞で考えたことをWSにまとめましょう。」

(予想される生徒の文章例)

- ・「どうして謡は響くのかと思ったが、壁のない板の間に響かせるためにおなかに力を入れてしっかり声を出しているのだとわかった。」
- ・「私たちの合唱の声はグレゴリオ聖歌の発声法をもとにしているのだとわかった。」
- ・「謡は能の中で謡われており、何か厳粛な雰囲気を感じさせた。りんとした中でカッコイイ感じがした。」

鑑①

⑤ 同じ題材の能とオペラの表現方法の相違に着目して聴く

- ・「実は、イギリスの作曲家で、日本の能を鑑賞して、とても感動し、同じ題材でオペラを書いた作曲家がいます。ベンジャミン・ブリテンという作曲家で、日本の《隅田川》という能を見て、《カーリュールバー》というオペラを書きました。これは、行方不明になった我が子を探して動転してしまっただけのお母さんが、約1年経って我が子の生息を知るといってお話です。お母さんはどんな気持ちだと思います？」
- ・「そうです。今回聴いてもらう部分は、わが子を亡くした母の悲しみの気持ちがよく表れている場面です。オペラと能とでは、同じ場面をいったいどのように表しているんだろうね。詞を書いた紙も配るので、それぞれの特徴を考えてね。」
- ・(能《隅田川》の「のう、舟人〜」とオペラ《カーリュールバー》の「Ferryman, tell me, what did it happen?」の部分と比較鑑賞して)「声の響かせ方や楽器の使い方などの特徴をWSにメモしておきましょう。」
- ・「グループになって、気づいたことを相談しましょう。他の人が気づいたことでなるほどと思うことがあったら、その他の欄にメモしておいてね。」

(予想される生徒の反応)

- ・「つらい」
- ・「悲しい」
- ・「苦しい」

- ・声の響かせかた(声の響きの方向)や強弱、楽器の使い方などの相違に着目させる。

(予想される生徒の発話例)

- ・「能は全然楽器の音がなかった。」
- ・「オペラはいろんな音が鳴っていた。なんだろう？」
- ・「太鼓とピアノかな？」
- ・「会話と会話の間に入っていたね。」
- ・「ちょっと後の方がわけわからなかった。」
- ・「音の大きさが盛り上がっていたね。」
- ・「能は面をつけているからこもっていた。」
- ・「でもすごい響きだった。あれはかなりお腹に力を入れているぞ。」
- ・「声だけだったけど、だからこそ悲しさが伝わっていか…」
- ・「あとで笛が入ってきたけど、風の音みたい。」

関②

- ・「面白い意見がたくさん出ましたね。同じ気持ちを表しているのに、演じている場所や動作、楽器などの違いがあって、ずいぶん表現方法が違っていましたね。みんなの意見も参考にしながら、能とオペラの表現の違いについて自分なりの言葉でまとめられるかな。もう1度視聴してみましょう。」

⑥ 能とオペラの表現の相違から、音楽の多様性を理解して視聴する

・「では、Cさん、紹介してください。」

・「Cさんは声を中心に考えてくれましたね。響かせ方の違いから、オペラからは激しさや迫力を感じたようです。楽器に着目して紹介してくれる人はいませんか。」

・「オペラの楽器は、気持ちの強さを表しているようだけど、能は、まず、静けさというものも大事な要素のようです。画面から何か気がついた人はいませんか。」

・「皆さんの中には、強弱や楽器の音の変化が大きいオペラの方がわかりやすい、と思った人もいますが、能の声の響きやしぐさ、楽器の音色から深い気持ちを感じ取った人もいます。能の表現の奥深さを家の人にも紹介できるよう、他の友だちの意見もまた参考にしてみてくださいね。」

・歌唱表現の特徴の相違を、建物や衣装、演技、楽器の相違に結びつけ、自分なりの言葉でまとめさせる。

(予想される生徒の発表例)

・「オペラは、声を張り上げるように出していて、音の強弱があって、気持ちの強さが伝わってきました。能は、オペラほど強弱の変化はないけど、こもったような声の響きをしみじみと聴かせることでじわじわと悲しみが伝わってきました。」

・「オペラは、楽器が気持ちを盛り上げていたと思います。逆に、能は、楽器を使わないことで悲しみの深さが伝わってきました。後に入ってくる楽器の音は、心の様子やその場の風の音などを表しているように感じました」

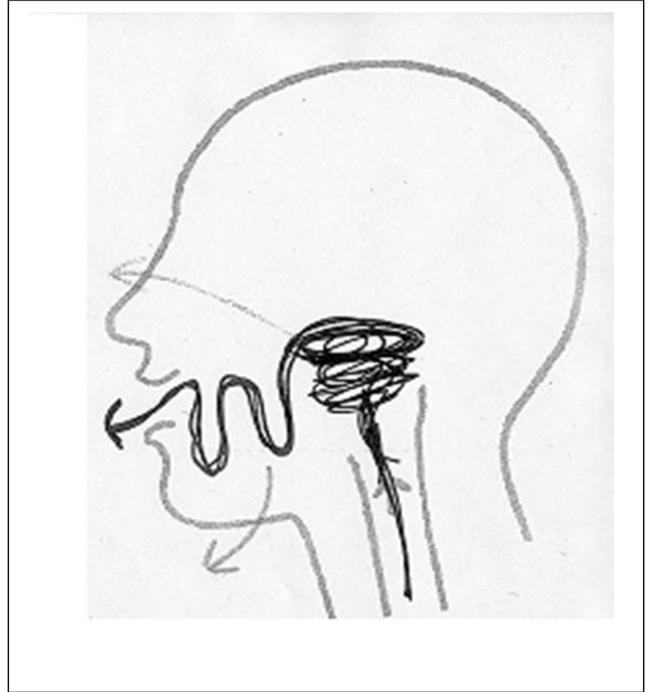
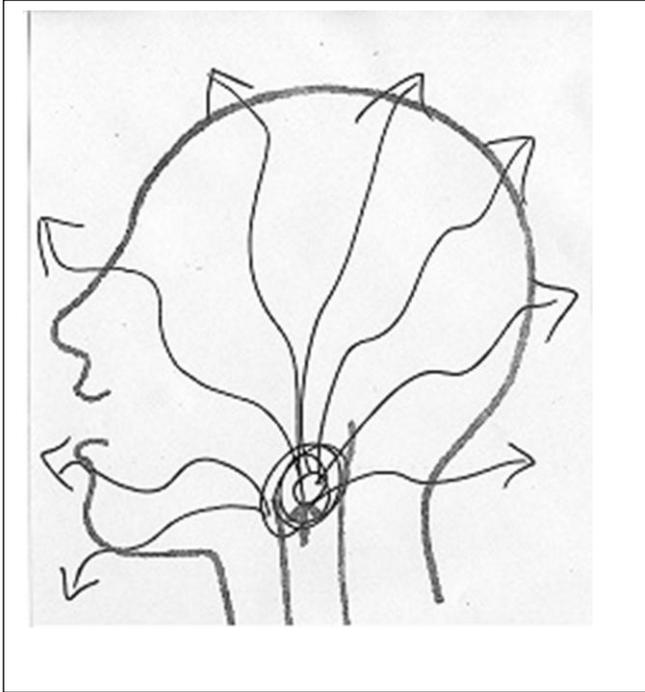
・「オペラの画面はなかったけど、何か手振りや身振りが激しいだろうと思いました。能は、舞台には何もないけど、観る人がその場を想像して味わうものじゃないかなと思いました」

・演奏される場所・歌う姿勢・声の響きの方向・表現方法の違いを画面からも見つけさせる。

関②  
鑑②

6. 資料

■ 資料1 第1時のワークシートの例 (班ごとに声の響きの方向を考えて頭部図に書いた例)



A : グレゴリオ聖歌  
いろいろな方向に声を響かせているイメージ

B : 謡  
声を口の中にためて下あごや鼻への響きを意識して響かせているイメージ

■ 資料2 第1時のワークシート

< 声の響かせ方 > 声の響きの方向 矢印で書きこもう		口の開け方	歌う姿勢や体の使い方	その他
A				
B				
視聴して気付いたこと				
2 年 組 名 前				

■ 資料3 グレゴリオ聖歌と謡の声の響き方の違いを言葉で表した例

- ・「グレゴリオ聖歌の声の響きは、頭蓋骨の上に突き抜けるような方向／口から出た声は上にも前にも下にも響く。」
- ・「謡の声の響きは、下あごを下げて声を木の床に響かせているような響き。」

<画面を見て>

- ・「たてもの（場所）や姿勢、声を出す表情が違う。」
- ・「グレゴリオ聖歌は高い天井に声を広げてのびのびと歌っているが、能は座って腹に力を入れている。」

■ 資料4 第2時のワークシート

\* 能とオペラの表現の違いを考えよう

	能「隅田川」より	オペラ「カーリユーリバー」より
	この部分は、「 <input type="text"/> を失った <input type="text"/> の <input type="text"/> 」を表しています。	
声の響かせ方 楽器の使い方 その他 まとめ	<input type="text"/>	<input type="text"/>
	2年 組 名前	

■ 資料5 能とオペラの表現の違いを言葉で表した例

- ・「オペラは、怒りや悲しみを音の大きさや響きで表していると思った。画面がなくても、声の大きさや響きで母の表情がわかるようだった。能の声は、こもっているが、独特の響きがあり、悲しみがにじみ出てくる様子がわかった。」
- ・「能は、こもった響きでゆっくりと悲しみを表し、楽器を使わないことで、さらに母の悲しみの深さや驚きが表現されている。オペラは、遠くに響かせるような声と楽器を多く使うことで、母の驚きや悲しみの強さが表現されていると思った。」
- ・「言葉の重みは能の方が重いけれど、気持ちの激しさが伝わったのはオペラだった。この強弱や打楽器の使い方、母の様子が能よりわかった気がした。」
- ・「能では、母の悲しみを、楽器を使わないで声だけで表現しているので、静けさで悲しみを伝えようとしている。オペラは、母の悲しみを、楽器を使って盛り上げて迫力を出している。能の静けさとは正反対だと思った。」
- ・「能は、音楽などなしに声と声との『間』をつくったり、聴いている人をこの物語に引き込むような感じがした。」
- ・「能は、声の調子や高さはあまり変わらないけれど、重々しい雰囲気などから、悲しみや絶望が伝わってくる。楽器は使っていない部分が多かったけど、だからこそ母の焦りと悲しみが伝わってくる。音が鳴ったときには『はっ』とした。セットが何もないのに、私たちの想像を広げ、深く気持ちを伝えているのがすごい！オペラは、声の調子や高低、雰囲気などで感情を伝えようとしている。太鼓などの楽器で、場面の転換、背景、盛り上がり、また母の感情の高ぶりを表現していた。」

■ 資料6 第2時で生徒に配布したそれぞれの歌詞

⑭	⑬	⑫	⑪	⑩	⑨	⑧	⑦	⑥	⑤	④	③	②	①
ワキ	シテ	ワキ	シテ	ワキ	シテ	ワキ	シテ	ワキ	シテ	ワキ	シテ	ワキ	シテ
今言は断 かの人 の墓所 を見せ 申し候 べし此 方へ渡 り候え	のう親類 とて親 とて母 ねぬこ そ物狂 いが尋 ぬる子 にて あら浅 ま	思いも よらぬ 事	まして 母とて も尋ね ぬよの う	親類と ても尋 ねこず	さてそ の後 は親と てもた ずねず	吉田の 某	父の苗 字は	梅若丸	主の名 は	十二歳	さてそ の稚児 の年は	去年三 月十五 日、し かも今 日に当 たりて	のう舟 人、今 の物語 はいつ の事 にて候 ぞ

- ① Madwoman  
Ferryman, tell me, when did it happen, this story you have told us?
- ② Ferryman  
Last year, at this time, on this very day, a year ago.
- ③ Madwoman  
Ferryman, how old was the boy?
- ④ Ferryman  
I told you, he was twelve, he was twelve.
- ⑤ Madwoman  
What was his name?
- Ferryman  
But I told you all about him! I told you what he was, and how he came here.
- Madwoman  
Ferryman, pray tell me, tell me what his name was.
- Ferryman  
Oh, how should I know? His father was a nobleman from the Black Mountains.
- ⑨ Madwoman  
And since then have neither, neither of his parents been here?
- ⑩ Ferryman  
No one of his family.
- ⑪ Madwoman  
Not even his mather?
- ⑫ Ferryman  
Not even his mather!
- ⑬ Madwoman  
No wonder no one came here to look for him! He was the child sought by this madwoman.

(松野 由美子)

キーワード: 主題の繰り返しや変化に伴う感情の移り変わり 形式のおもしろさや美しさ

### 題材の趣旨と学習指導のポイント

生徒は、数分の曲であれば聴き通すことができますが、ある程度の長さをもった曲になると、なかなか集中力や興味を持続させて聴くということができません。一方、日頃音楽に携わっていたり、また音楽に対して強い興味や関心をもっていたりする場合は、長く大きな曲を楽しみ、味わいながら聴くことができます。それは、そのような曲の聴き方を知っていたり、その曲に対するある程度の知識をもっていたりするからです。

この題材では、自分が気づき感じたことと楽曲の形式とに関わりをもたせて鑑賞できるようにすることを大切にしています。生徒の知覚・感受と知識理解を交互に繰り返しながら、徐々に形式を理解して聴くことができるようにします。そして、そのことによって、自分がこの曲にどのようなよさを感じたのか、またそれは音楽のどのようなことに起因しているのかについて友と紹介し合えるように授業を構想しました。

ある程度の長さをもった曲には、短い曲とは異なる感動やおもしろさがあります。しかし、授業で扱わなければ、多くの生徒が触れる機会を得ない可能性もあるため、授業での扱いは、生徒のその後の人生における音楽鑑賞の広がり大きな影響を及ぼします。

このような学習によって、楽曲の形式に興味をもち、ある程度の長さをもつ楽曲を見通しをもって聴き、そのよさやおもしろさを感じながら鑑賞を楽しむ姿が培われていくことが期待されます。

1. 指導内容 主題の繰り返しや変化に伴う感情の移り変わりを捉え、形式を理解して鑑賞すること
2. 教材 ベートーヴェン作曲 《交響曲第5番ハ短調》 Op. 67 より 《第1楽章》
3. 題材目標
  - 1 楽曲を聴いて感じた自分の気持ちの変化を、「音色」「旋律」「強弱」など関わらせて捉える。
  - 2 形式の特徴を知覚・感受によって発見し、それをもとに形式について理解した上で見通しをもって聴き、形式をもつ音楽のおもしろさや美しさを味わって聴く。

#### 4. 評価計画

評価の観点	評価規準	評価方法
音楽への関心・意欲・態度	① 作曲家の人生や楽曲に関わるエピソードに興味をもって、有名な冒頭から先の部分を聴こうとしている。	観察 WS
	② 主題の繰り返しや変化など、楽曲には特有の形式があることに気づき、そのことに興味をもって聴こうとしている。	観察 WS
鑑賞の能力	① 提示部を聴き、自分の気持ちの変化を、「音色」「旋律」「音の重なり方」「曲のつくり」などを根拠として説明している。	発話 WS
	② ソナタ形式を理解して、主題の繰り返しや変化のおもしろさ、形式をもつ音楽の整った美しさなどの魅力を記述し、楽曲を味わって聴いている。	発話 WS

5. 授業展開

⇔ : 見つける   
 ⇔ : 考える   
 ⇔ : 生み出す

学習活動の内容と教師の発話例	指導上の留意点	評価
① 作曲者ベートーヴェンについて知る		
<ul style="list-style-type: none"> <li>「この肖像画は、だれでしょう？」</li> <li>「皆さんもよく知っているベートーヴェンですね。ベートーヴェンについて何か知っていることはありますか？」</li> <li>「ベートーヴェンは、30 歳ごろから耳が聞こえなくなってきました。作曲家としての活動を始めていたベートーヴェンにとっては、絶望的なできごとで、死を決意した時期もありました。しかし、『心の中に音が聞こえる』ということに気づき、作曲を続けました。ちょうどそのような苦しみを乗り越えたころ作曲された曲をこれから皆さんに聴いてもらいたいと思います。」</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>多くの生徒がベートーヴェンであることに気づく。また、耳が聞こえなかったというエピソードを知っている生徒の発言を求め、作曲家や作曲時期について簡潔に説明する。</li> </ul>	
② 冒頭部分を聴き、「運命」と呼ばれる理由を知る		
<ul style="list-style-type: none"> <li>「この曲は、このように始まります。」</li> <li>「この曲の曲名は知っていますか？」</li> <li>「そうです。《運命》と呼ばれていますね。これはベートーヴェンが、『運命はこのように扉を叩くのだ(黒板などを実際ノックしながら)』と言ったと言われていて、ベートーヴェンがこの曲を作曲した当時の状況と重ねて、このエピソードが有名になり、そう呼ばれるようになりました。今日は、本当の曲名も覚えましょう。」</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>冒頭の動機の部分を聴取。</li> <li>このエピソードの真偽のほどは明らかではないこと、また「運命」という呼ばれ方は主に日本で用いられているものであることにも簡潔に触れておく。</li> <li>曲名を板書する。</li> </ul>	
③ 第 1 楽章の提示部を聴き、自分の感じたことやその理由を記述する		
<ul style="list-style-type: none"> <li>「この曲は長い曲ですが、始めの部分 1 分 30 秒ぐらいを聴いてみましょう。そして、自分がどのような気持ちになったか、またその理由は何かについてワークシート(資料 1)に記入しましょう。」</li> <li>(2 回聴取後)「では、発表してもらいましょう。」</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>理由を書く際、使ってほしい言葉として「音色」「旋律」「音の重なり方」「曲のつくり」などを示し、本題材で主として扱う「音楽を形づくっている要素」を確認する。</li> </ul> <p>(予想される生徒の発話例)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>「最初は力強かったけれど、途中で嵐が終わって晴れたような雰囲気になった。理由は、始めはタタタターンという旋律が続いたけれど、途中で優しいなめらかな感じの旋律が出てきたからだ。」</li> <li>発言内容を音で確認し、共有できるようにする。</li> </ul>	関① 鑑① ↓
④ 第 1 楽章を通して聴き、気づいたことをメモする		
<ul style="list-style-type: none"> <li>「今、発表してくれたように、この曲には『タタタターン』という旋律がたくさん使われていますが、ちょっと雰囲気の違う旋律も出てきますね。この 2 つがこの曲ではとても大切な意味をもっています。」</li> <li>「では、これからこの曲の第 1 楽章を通して聴いてみましょう。8 分 30 秒くらいありますが、先ほどの 2 つの旋律に注目して聴いてみましょう。そして、気づいたことをワークシートにメモしてください。」</li> <li>(鑑賞後)「では、今メモしたことを発表してください。」</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>第 1 主題と第 2 主題に関わる旋律の動きを図示する。 例:</li> </ul> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> <p>① ●●●■</p> <p>② </p> </div> <ul style="list-style-type: none"> <li>第 1 楽章を 1 回聴取</li> </ul> <p>(予想される生徒の発話例)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>「タタタターンが何度も繰り返している。」</li> </ul>	関② 

<p>・「(発言内容を板書しながら)いろいろなことに気づいてくれましたね。」</p> <p>・「(板書を指示しながら)この曲は、①と②が出てきた後、少し違う感じのところが出てきて、また①と②と似たようなところが出てきて、最後はより一層力強くなって終わっている、という感じになっていますね。」</p>	<p>・「曲の真ん中あたりで、少し違う感じのところがあった。」</p> <p>・「終わりの方で、①と②がもう1度出てきた。」</p> <p>・「終わりの方はより一層力強くなった。」</p>	
<p><b>⑤ ソナタ形式について知る</b></p>		
<p>・「この曲は、皆さんが気づいたような曲のつくりになるように、ある形式を意識しながら作曲された曲なんです。この形式を『ソナタ形式』と言います。」</p> <p>・「展開部では、第1主題または第2主題の旋律を使いながら、音楽を発展させていきます。この曲では、第1主題の『タタタターン』を主に使いながら、音楽を発展させていきます。」</p>	<p>・生徒が気づいたことをまとめた板書に「ソナタ形式」についての説明を書き加えていく。</p> <p>例:</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> <p>提示部 (第1、2主題)</p> <p style="text-align: center;">↓</p> <p>展開部 (主題を発展)</p> <p style="text-align: center;">↓</p> <p>再現部 (提示部の再現)</p> <p style="text-align: center;">↓</p> <p>終結部 (コーダ)</p> </div>	
<p><b>⑥ 再度、第1楽章を通して視聴し、「私のお気に入り度」を決め、その理由を紹介し合う</b></p>		
<p>・「では、ソナタ形式で作られていることを意識して、演奏場面を見ながら聴いてみましょう。そして、自分がこの曲に対してどのような気持ちをもったのかを『私のお気に入り度』として判断し、その理由を、これまで学んだことを振り返りながらワークシート(資料1)に書いてみましょう。」</p> <p>・「では、発表してもらいましょう。」</p>	<p>・ソナタ形式の流れが字幕などで表示される映像資料を用いて、鑑賞できるようにして(そのような資料がない場合は、カードなどを利用して、ソナタ形式が鑑賞しながら生徒に示すことができるように工夫して)、1回視聴する。</p> <p>(予想される生徒の発話例)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「お気に入り度はB。タタタターンが何度も出てくるところが楽しいし、第2主題のなめらかな旋律がきれいで、暗い気持ちや優しい気持ちなどいろんな気分が味わえるから。」</li> <li>・「お気に入り度はA。タタタターンの繰り返しの聴いているとドキドキして、なんだかベートーヴェンの焦りの気持ちのようなものを感じた。2つの主題の旋律、音色の違いや、再現部で『さっきと同じだ!』と思いながら聴いていると、他のソナタ形式の曲も聴いてみたくなったから。」</li> <li>・「お気に入り度はA。特に、主題を発展させた展開部の盛り上がりは聴いていてすごく緊張したし、再び冒頭と同じような場面(でも少し違う)になった時は、安心した気持ちになった。」</li> </ul>	<p>関② 鑑②</p>

6. 資料

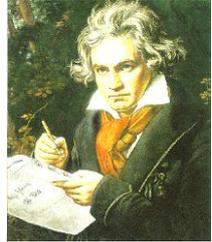
■ 資料1 ワークシートの例

♪形式をもつ音楽の魅力を探ろう♪

2年\_\_組\_\_番 氏名\_\_

曲名：「 \_\_\_\_\_ 」

作曲者名：「 \_\_\_\_\_ 」



1 この曲を聴いて、どんな気分になりましたか？

2 それは、なぜですか？

<説明するときに使うと便利な言葉> \*1つ以上使って説明してみよう。

- ①「音色」 ②「旋律」 ③「音の重なり方」 ④「曲のつくり」

3 第1楽章全体を聴いて、気づいたことをメモしましょう。

4 まとめ

(1) 私のお気に入り度 (該当するところに○印をしよう。)

<input type="checkbox"/>	A	ぜひまた聴きたい。家でも聴いてみたい。(とってもいい曲だ!)
<input type="checkbox"/>	B	また聴く機会があったら、聴いてみたい。(まあまあいい曲だ。)
<input type="checkbox"/>	C	また聴く機会はなくてもよいが、それほど悪い曲とは思わない。(ふんって感じの曲だ。)
<input type="checkbox"/>	D	聴いていて、あまり気分がよくない。嫌な気持ちになる。(嫌いな曲だ。)

(2) その理由 (2, 3の内容を使って、他の人にわかりやすい説明を心がけよう。)

### 題材の趣旨と学習指導のポイント

歌劇は様々な要素が融合して成立する総合芸術であり、特に物語と音楽が深く関わり合いをもっています。歌劇を鑑賞する楽しみは、物語の内容や、舞台や衣装、音楽などいろいろな視点で観ることにあります。音楽に視点をあてて鑑賞すると、物語の展開や登場人物の心情を、オーケストラや歌手たちの歌声などで表情豊かに表現していることがわかります。このように音楽が大きな役割を果たしているということに気づかせ、味わいを深めさせていくことで、総合芸術としての歌劇の楽しみ方が深まります。

学習指導要領には「音楽の特徴をその背景となる文化・歴史や他の芸術と関連付けて理解して、鑑賞すること」とあります。本題材は、物語を展開していく中で、音楽がどのような役割を果たしているかを客観的に捉えるため、歌手の歌声やオーケストラの演奏、音楽の構成などから、学習指導要領に示された(共通事項)の「強弱」、「音色」、「速度」に着目します。

そして歌手の歌声から、登場人物の「喜び」や「悲しみ」「憎しみ」などの心情を、コントロールされた歌声で、強弱や音色を工夫して表現していることを捉えさせ、自分なりに味わい、そのよさを見つける学習をします。オーケストラや合唱の役割についても、物語の展開や状況と音楽表現がどのように関わり合いをもっているのかについて思考しながら鑑賞していくような学習をします。

教材はヴェルディの代表作《アイーダ》を選曲しました。グランドオペラであり豪華な舞台、壮大なスケールの中で物語が展開していき音楽そのもののすばらしさも堪能できる作品です。中心に扱う場面は第2幕第2場からラストシーンの約5分、ラダメスの「国王は聖なる神にかけ、また玉座にかけ私の望みを叶えとお誓い下さった」の部分から最後までです。ここではすべての登場人物がそれぞれの思惑や心情を歌います。声種による表現の違いや魅力、独唱、重唱、合唱それぞれの表現力、管弦楽の豊かさなどについて生徒が主体的に聴き、登場人物の心情を音楽でどのように表現しているかなどを考えて、歌劇のよさなどを味わうことに適していると思います。

1. 指導内容 歌劇における音楽の役割

2. 教材 ヴェルディ作曲 歌劇《アイーダ》第2幕第2場よりラストシーン(約5分)  
ラダメス「国王、聖なる神と王冠にかけて、願いを叶えようと誓われた」から

3. 題材目標

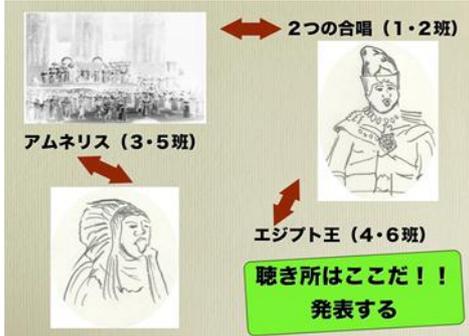
歌劇《アイーダ》の音楽の特徴に関心をもち、音色、強弱、速度、構成を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じながら、要素や構造と曲想との関わりを理解する。また、音楽の特徴をあらすじや演出などに関連づけて理解するなどして、鑑賞する。

4. 評価計画

評価の観点	評価規準	評価方法
音楽への関心・意欲・態度	① 歌劇における登場人物の声、物語の展開における強弱や速度の変化、音楽の構成などを知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じることに関心をもち、鑑賞する学習に主体的に取り組もうとしている。	発話 観察
鑑賞の能力	① ランフィスや国王、アムネリスなど登場人物の歌の特徴を、物語の展開と関連づけて知覚・感受によって発見することができる。	発話 WS
	② 発見したことをもとに、音楽があるからこそ伝わる繊細な心情や迫力感、場面を味わって聴いている。	発話 WS

5. 授業展開

↔ : 見つける    ↔ : 考える    ↔ : 生み出す

学習活動の内容と教師の発話例	指導上の留意点	評価
<p><b>① 2幕2場ラストシーンを鑑賞する</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>「これから全4幕7場ある歌劇《アイダ》から、最もスケールの大きな第2幕第2場のラストシーンを約5分間聴きましょう。」</li> </ul> <p><b>② ランフィスのレチタティーヴォを聴き、セリフと音楽の関係を確認する</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>「ランフィスの『王よ、お聞き下さい。そして、勇者なる戦士よ、そなたもよく聞かがいい。この捕虜たちは猛々しい敵だ、いつ何時再起を図らぬとも限らぬ！』の部分聴いてセリフの内容と音楽の特徴を見つけてみよう。」</li> <li>（鑑賞後）「ランフィスの『思い・気持ち』と『音楽の特徴』をWSに書いてください。」</li> <li>「何人かに聞いてみましょう。」</li> <li>「今、言ってくれたことを確認してみよう。」</li> </ul> <p>↑</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>「今度は、この部分から、こんなところがおもしろい、魅力的だと思うところ見つけて発表してください。理由も考えて述べてくださいね。」</li> </ul> <p>↑</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>「なるほど、歌手の歌声から強弱や速さ、さらに声色を工夫することで、ランフィスという役の思いや気持ちを表現していることに気づいて、自分はこんなところがおもしろい、と自分の考えを発表してくれました。」</li> <li>「このように、歌劇では登場人物の思いや場面の展開を音楽の表現を工夫することできめ細やかに、また感動的に表現することができるんですね。」</li> </ul>	<p>・数名に発表させる。 （予想される生徒の発話例）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>「その場にいる全員に聞かせるよう、割り込むように力強い声で歌い、オーケストラも強くなる」「ラダメスに対しては『考え直せ』と言っている感じでゆっくり、やわらかく歌っている。」</li> <li>発表された特徴について、部分的に聴かせて確認する。</li> </ul> <p>（予想される生徒の発話例）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>「ランフィスの感情を表すようにオーケストラの音楽が大きくなったりやさしくなったりする。それに合わせてランフィスの声も力強くなったり、どうしても・・・というところは語りかけるようにやさしくなったりするところがおもしろい。」</li> </ul>	<p>鑑①</p>
<p><b>③ 2つの合唱やエジプト王、アムネリスの音楽を聴き、聴きどころを発表する</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>「次はこのラストシーンの前半を聴いて、合唱とエジプト国王、アムネリスの表現についてグループで考えてみましょう。」</li> </ul>	<p>・以下のスライドを提示する。</p> 	<p>関①</p>

・「鑑賞のポイントは次の3点です。」

### 鑑賞のポイント

- 1：歌手や合唱団、オーケストラの音色（声色）
- 2：強弱
- 3：速度の変化

・（鑑賞後）「では、発表してください。」

・「それぞれの役にあった音楽の特徴があり、物語の展開や登場人物のセリフに音楽がつくことで、鑑賞している人により感動的にその思いが伝わってくるよね。音楽の魅力がそこにあると先生も思います。」

#### ④ 歌詞の朗読と演奏を比較し、歌劇における音楽の価値について考える

- ・「さて、これからすべての登場人物が登場し、それぞれの思いを同時に表現する場面を鑑賞しましょう。」
- ・「まず始めに皆さんの中から6人の役を担当してもらいます。アイダさん、アムネリスさん、他の皆さん、前に出てきてください。これからこの6人の皆さんにこの場面のセリフを読んでもらいます。」
- ・「皆さんはセリフをよく聴いて、物語の内容をチェックしましょう。」
- ・「ではここで確認です。この場面ではスライドにあるようにアムネリスは喜び、アイダ、ラダメスはこんなはずではなかったのに・・・と物語が急展開するところです。ここで、6人に歌劇アイダの構成と同じように朗読してもらいましょう。では、お願いします。」
- ・「ありがとう。ところで、今の発表はどうでしたか？何と言っていたかわかりましたか？」
- ・「さて、それでは後半を視聴してみましょう。それぞれの役者の思いはどのように表現されているでしょうか？後で、気づきや思ったことを発表してください。」

・グループ活動の進め方は以下のスライドで示す。

### グループ活動

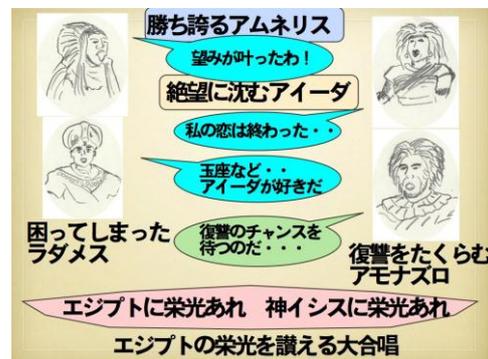
- 1：パソコンやCD等で聴きとる
- 2：話し合う
- 3：思い（気持ちをつかむ）
- 4：音楽の特徴をつかむ
- 5：みんなに聴いてほしいところ「ここだ！」を決定する  
\*今日は5を中心に行うこと
- 6：発表する

（予想されるグループ発表の例）

- ・2つの合唱では「司祭と民衆の思いの違いが音楽表現に表れていることが魅力だ。」
- ・エジプト王は「王様としての思い、また父親としての思いが声色に表れているところがいい。」
- ・アムネリスは「結婚できて、うれしい気持ちとラダメスの様子から素直に喜べないような複雑な心境を音色や強弱の変化で表現しているところが聴きどころだ。」

鑑②

・次のスライドを示し、後半の内容を確認する。



- ・「6人が同時にセリフを語ると、何を言っているのかわからなくてわからない」ということに気づかせる。
- ・次のようなポイントを示し、朗読と演奏を比較させ音楽の魅力に迫らせる。

- 歌声は・・・？
- 演技は・・・？
- 友だちの朗読と比べてみると・・・？
- 変化のあった場面は・・・？
- スケールはどうだった・・・？
- 歌詞はどうなっている・・・？
- うるさかった・・・？

<p>・「どうですか・・・？」</p> <p>・「音楽がつくことで、一人ひとりのセリフが旋律となりそれが重なってハーモニーが生まれているんですね。しかも、それぞれの歌詞は全く違うことを表現している。音楽の魅力が見えてきましたね。」</p>	<p>・朗読の時はうるさくて、言葉も聴き取れなかったけれど、演奏では音が重なり美しい音楽になっていることに気づかせる。</p>	
<p><b>⑤ 歌劇《アイダ》の鑑賞を通して、「私にとってのオペラの楽しみ」について考える</b></p>		
<p>・「では、最後にもう1度、第2幕第2場のラストシーンを通して鑑賞しましょう。今日の学習を思い出しながら視聴しましょう。鑑賞後「私にとってのオペラの楽しみ」というテーマで学習のまとめをします。友だちにこの作品(場面)の魅力を伝える文章でもかまいませんよ。」</p> <p>・「今回は『歌劇』という総合芸術を学習しましたが、総合芸術において果たす音楽の役割や魅力がわかりましたね。他にも音楽と他の芸術が一体となった総合芸術、例えば歌舞伎やバレエなどにも様々な魅力があります。またいろいろ鑑賞してみましょう。」</p>	<p>・ラストシーンのわずか5分であるが、歌劇の醍醐味が凝縮された場面である。総合芸術としての歌劇の魅力を感じ取らせたい。</p> <p>・さらに、他の総合芸術への興味を高めさせるような話をして授業を締めくくりたい。</p>	<p>関①</p>

6. 資料

■ 資料1 ワークシートの例

歌劇「アイーダ」第2幕第2場ラストシーン

2年 番 氏名

会話の内容と音楽のかかわりを考えよう。

音色 (声色)・強弱・速度

次のイラストの吹き出しの「会話」や「心の中の思い」を音楽はどのように表現していますか。音楽の特徴（音色や強弱、速度の変化など）と関連付けて書いてみよう。



ラダメス

「国王は聖なる神にかけ、  
また玉座にかけ私の望み  
を叶えるとお誓い下さった」

「いかにも誓ったぞ」



エジプト王

「それでは捕虜（ほりよ）たちに命と自由  
を与えて下さい」

気持ちと音楽の特徴

(なんですって!)



アムネリス



合唱2

(民衆)

不幸な人々に  
お恵みを!

祖国の敵には  
死を!



合唱1

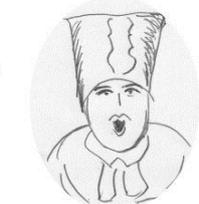
(司祭たち)

気持ちと音楽の特徴

「王よ、お聞き下さい。」

気持ちと音楽の特徴

若き勇者よ そなたもよく聞くのだ 心して賢者の忠告を。  
この者らは敵、しかも猛々（たけだけ）しい胸に復讐心を  
抱いている。情けをかければこれ幸いとまたも戦いを挑ん  
でくるだろう。」



司祭長 (ランフィス)



ラダメス

「勇猛なアモナズロがいなくなった今、  
その心配はないでしょう。」

「先の安全を願うなら、せめて  
アイーダとその親を残しておくよう」



気持ちと音楽の特徴

「その忠告に従おう。人質二人は神官に預けておく」

「ラダメス、我が国は君に全てを頼っている。褒美に

アムネリスと結婚させよう。いずれは王女と共にこの  
エジプトを治めるがよい。」



エジプト王

気持ちと音楽の特徴



アムネリス

「わかったか、アイーダ!  
できるものなら  
その人を奪ってごらん。」

Blank box for writing musical characteristics.

■ 資料2 ワークシートの例

ランフィスの思いと音楽の特徴

2年 組 氏名

セリフ	思い・気持ち	音楽の特徴
ランフィス 王よ お聞き下さい。 勇士なる戦士よ そなたもよく聞くがいい この捕虜たちは猛々 (たけだけ) しい敵だ いつ何時 (なんどき) 再起を図らぬとも限らぬ!  ラダメス 勇猛 (ゆうもう) な アモナズロが戦死した以上 彼らに希望はありません。  ランフィス せめて平和と安全の保障に アイダの父親を留 (とど) めておかれよ・・・		
みんなに聴いてほしいところ (この部分がおもしろい!!)		
わたしのこの場面の魅力は		

アムネリスの思いと音楽の特徴

班

セリフ	思い・気持ち	音楽の特徴
アムネリス さあ、アイダ 私から いとしい人を 奪ってみるがいい!!		
みんなに聴いてほしいところ (ここが聴きどころ!!)		

司祭・民衆の思いと音楽の特徴

班

セリフ	思い・気持ち	音楽の特徴
司祭たち (合唱1) 祖国の敵には死を!  民衆 (合唱2) 不幸な人々に お恵みを!		
みんなに聴いてほしいところ (ここが聴きどころ!!)		

エジプト王の思いと音楽の特徴

班

セリフ	思い・気持ち	音楽の特徴
エジプト王 ご意見に従おう。 捕虜を釈放する。  ラダメス、祖国の恩人たる そなたに アムネリスを褒美として 与えよう。 いずれは娘と共に このエジプトを治めるのだ		
みんなに聴いてほしいところ (ここが聴きどころ!!)		

■ 資料3 生徒が記述したワークシートの例

ランフィスの思いと音楽の特徴

2年4組 氏名

セリフ	思い・気持ち	音楽の特徴
ランフィス 王よ お聞き下さい。 勇士なる騎士よ そなたもよく聞くがいい この捕虜たちは騒々 (たけだけしい敵だ いつ何時(なんどき) 再起を圖らぬとも聞らぬ!)	ちよと下下さい! なよとがいきません お前ももうアツい考え 国の安全を考えると 敵が反激してはるも (おない!)	やさしくでも 遅く。 すし低くなる ゆっく、強め。 ゆっく)から遅くなる。 オーケストラ音が どんどん大きくなる。
ラダメス 勇猛(ゆうもう)な アマナズロが戦死した以上 彼らに希望はありません。		
ランフィス せめて平和と安全の保障に アイダの父親を留(とど) めておかせよ...	なよとほしくないが でも、せめてもの たいさくをとっておきた。	ゆっく、ゆっく やさしく
みんなに聴いてほしいところ (この部分がおもしろい!!)		
ランフィスの感情をあらわすようにオーケストラの音楽が、大きくなり、やさしくなったりする。そなにあわせて、ランフィスの声も力強くなったり、どうしてもしつこくは、語りかけようにやさしくなったりするところがおもしろい		
わたしのこの場面の魅力は		

アムネリスの思いと音楽の特徴

名前

セリフ	思い・気持ち	音楽の特徴
アムネリス さあ、アイダめ 私から いとしい人を 奪ってみるがいい!!	「さあアハハ」 奪えるものなら 奪ってやる! という気持ち。  いやいやつ 見くだして。	声が高くて響く
みんなに聴いてほしいところ (ここが聴きどころ!!)		
アムネリスは、結婚できるからうれしい気持ちで、音楽も、明るく、うれしい感じのうたはずだけど、音楽が暗く、力強い感じで、音もだんだん低くなります。それは、ほんとは、アイダはしゃぶくをして、ラダメスはよるにぶくはずなのに、おちこんでいる。というところをわけて悲しみがあることが伝わってきます。そをみなさんに聞いてほしいです。		

司祭・民衆の思いと音楽の特徴

名前

セリフ	思い・気持ち	音楽の特徴
司祭たち(合唱1) 祖国の敵には死を!	せつたいゆるせな。い。 敵を自由にすまなて ありえない! いかり、にくしみ	力強く 声がかたい? 民衆とつながりほしい。
民衆(合唱2) 不幸な人々に お恵みを!	お願いします。 助けて下さい。	弱く 重厚がおそい。 後ろのオーケストラも ゆっく) なるからに? たおた。
みんなに聴いてほしいところ (ここが聴きどころ!!)		
<p>○ 司祭たちと民衆の思いのちがいがいい。</p> <p>司祭たちは、エチオピア軍に対してゆるせなから、音が強く、ちよとはやくなっている。</p> <p>民衆は、助けしてほしいから、弱く、おそくなっている。</p> <p>後ろのオーケストラもゆっく) なるように、なっている。</p> <p>弦楽器のかなしくて、こらい音色がする。</p> <p>そんな司祭たちと民衆の思いのちがいを聞いてほしい。</p>		

(松岡 聡)

### 題材の趣旨と学習指導のポイント

思春期特有の心の葛藤をもっている中学生は、日常の生活の中でも、とかく自分の感情がどこから湧いてきたものなのか、それは何が原因で、何と表せばよいかわからない、自分でも理解できないような気持ちを体験することは少なくないでしょう。そんな彼らにとって、自分の心の中を見つめ、自分自身を理解できるようになることは、その感情への対処の仕方を考え、彼らを穏やかな心持ちに導いてくれるはずです。そうすることによって、情緒は安定し、豊かな情操を養うことにもつながると考えています。

この題材では、感情の起伏が豊かに表現される楽曲を取り上げます。そしてその曲における要素の働きをもとに、生徒が「音楽に込められた思い」を感じ取り、自分にも似通った感情を経験したことはないかを考え、自分の生活経験をクラスメイトと交流し合う活動を行います。「あの時、たしかこんな気持ちだった。」や「あの場面で感じたのはこれとよく似た感情だった。」など、自分の心の中をじっくり見つめ、意味づけることは、自己理解の糸口となることでしょう。作曲者が楽曲に込めた思いを自分の体験と照らし合わせ、鑑賞を通して追体験させることがポイントです。

教材は、知覚しやすい要素とそれら同士が織りなす曲想が醸し出す感情表現を感受しやすいものを選びました。あわせて、当時のロマニー民族の暮らしぶりといった文化的背景を知ることによって、彼らが苦境にあっても仲間と共に明るくたくましく生きた姿から、生徒たち自身のこれからの生き方を学んでくれたらと願います。

1. 指導内容 音楽の仕組みに対する知覚・感受をもとに、音楽に込められた心情の追体験をすること
2. 教材
  - ・モンティ作曲《チャールダーシュ》
  - ・ロマニー民謡《花の季節》(関連教材として)
3. 題材目標
  - 1 曲想が音楽を形づくっている要素や構造とどのように関わっているかを理解して聴く。
  - 2 音楽の中に込められた心情と背景となる文化(人の暮らし)との関連を理解して鑑賞する。
  - 3 音楽が醸し出している表情を自己の生活経験と結びつけて捉え、よさや美しさを味わう。

#### 4. 評価計画

評価の観点	評価規準	評価方法
音楽への関心・意欲・態度	① 音楽を形づくっている要素や構造と曲想との関わりや、曲の背景との関連に興味・関心をもっている。	発話 観察
	② 感じ取った曲想と自分の生活経験の結びつきを捉える学習活動に主体的に取り組もうとしている。	発話 WS
鑑賞の能力	① 速度や強弱などの様々な要素と構造を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感受しながら、自分の気持ちや曲に込められた心情とどのように関わっているかを理解して聴いている。	発話 WS
	② 音楽から感受した曲想を自分の生活経験と結びつけて、自分にとってのよさや美しさを味わって聴いている。	発話 WS

5. 授業展開



学習活動の内容と教師の発話例	指導上の留意点	評価
① 「気持ち」を言葉で表現する		
<ul style="list-style-type: none"> <li>・「今日は、自分の心と対話する授業です。今、あなたの心の中にはどんな気持ちがあるかな？」</li> <li>・「今の気持ちを言葉で表してみよう。」</li> <li>・「まずは、『楽しい』とか『悲しい』とか、簡単な言葉に表してごらん。」</li> <li>・「じゃあ、次に、その『楽しい』の原因や理由も含めて、もう少し詳しく表現してみて。」</li> <li>・「例えば、私の今の気持ちを表してみるね。『みんなの心の中をのぞかせてもらえると思うとワクワクして心がスキップしている。』って感じかな？ 誰か、このように詳しく表してみて。」</li> <li>・「気持ちは言葉で表すだけでもいろんな表現があるね。音楽も作曲家や演奏者の思いや気持ちを表現する方法の1つなんだよ。今日は、ある曲を聴いてそこに込められた『気持ち』を感じ取ってみましょう。」</li> <li>・「これから聴く曲には、作曲者のどのような思いや気持ちが表現されているのかな。途中で雰囲気が変わるところが何か所かあるけれど、その部分ごとにどのような気持ちが表れているか、気持ちの変化を感じ取りながら聴きましょう。WSの1番の上の段にメモをとりながら聴いてもいいよ。」</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・形容詞を使っての例を示したりしながら、難しく考えず答えやすいような雰囲気をつくる。</li> <li>・数名を指名する。</li> <li>・説明しようとしている「気持ち」が言葉と適合しているか、感情というものがどんなものであるかがわかっているかを確認する。</li> <li>・比喩を使うなどして自分の気持ちに適合した表現を見つけさせる。</li> <li>・表現されている「気持ち」に変化があることを予告しておくことによって、部分ごとの「気持ち」を捉えやすくする。</li> </ul>	
② 楽曲に込められた「気持ち」を感じ取りながら《チャールダーシュ》を鑑賞する		
 <ul style="list-style-type: none"> <li>・「気持ちの変化は何回ぐらい感じられたかな？」</li> <li>・「もう1度聴くから、今度は、変化していると思ったところで手をあげてね。あと、音楽のどんな要素がどのように変化しているかにも注意して聴いてみてね。これも、WSの1番の下段にメモをとりながら聴くといいね。」</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・曲が大きく4つの部分に分かれていることが捉えられているかを確認する。</li> </ul>	関① 鑑①
③ 曲想の変化を捉え、その原因を見つけながら《チャールダーシュ》を鑑賞する		
 <ul style="list-style-type: none"> <li>・「雰囲気が変わっているところは、みんな感じ取れたようだね。」</li> <li>・「みんなの感じたとおり、この曲は大きく4つの部分に分けられるね。それぞれの部分をA、B、C、Dとしましょう。」</li> <li>・「それぞれの部分から、どんな気持ちを感じられたかについて、音楽の雰囲気が変わった原因として見つけた特徴、つまり音楽の要素の働きと結びつけて発表しよう。」</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・音楽が変わる箇所が正しく知覚できているかも確認する。</li> </ul>	

**④ A～Dの部分についての自分の感受とその根拠を発表し合う**

・「A( B～D )の部分からはどんな気持ちが見つかったかな？」  
 ・「それは、音楽のどんなところからそう感じたの？」  
 ・「(Aの例)・・・バイオリンのかすれたような音色と独特の旋律がせつなさを醸し出しているように感じたわけだね。その部分をもう1度聴いてみようか。」

・感受←知覚の関係がわかるように、生徒の意見を整理しながら板書していく。  
 ・感受したことの根拠を要素の働きと結びつけて捉えられているか。  
 ・速度、強弱など要素を単独で捉えているだけでなく、要素同士の関連も含めて説明するように指導する。  
 ・述べられた特徴について、必要に応じて部分的に聴かせるなどして、確認する。  
 ・Bの部分では急激な速度の変化による、感情の高まりを、Cの部分では転調(ニ短調→ニ長調)による安堵や解放感を感じ取らせたい。

鑑①

**⑤ 音楽が生まれた背景を知る**

・「この曲から感じ取った気持ちについて、みんなの意見を発表してもらったわけだけど、作曲家自身はこの曲でどんな気持ちを表現したかったんだろうね。ここで、重要になってくるのが、この曲が生まれた背景です。」  
 ・「この曲は、前の授業で歌った《花の季節》と同じ、ロマニー音楽の代表的な形式であるチャールダーシュでできているんだよ。曲名もそのまま《チャールダーシュ》といいます。作曲者は、モンティという人です。」  
 ・「さて、ロマニーの音楽はどんな人々の生活の中から生まれたのだったかな？」  
 ・「定住生活をするのがままならず、言葉はあるけれど文字をもたず流浪の旅を続けたロマニーの人々は、その旅の記憶や苦難の歴史を歌や踊りに託したんだね。」  
 ・「そんなロマニーの人たちの生活を想像しながら、もう1度この曲を通して聴いてみよう。A→Dと音楽が進行する中で今度は、ロマニーの人々のどのような気持ちの移り変わりがあったかを考えながら聴いてね。」  
 ・「この感想はWSの2番に書きましょう。」

・曲名、作曲者名を板書する。  
 ・既習の《花の季節》で、ロマニー民族の流浪の旅の苦難の歴史とその生活について調べさせておきたい(この曲を単独で扱う場合は、ここでロマニー民族について調べ学習を宿題など課題として与える)。

関①  
鑑①

**⑥ ロマニーの人々の生活を思いながら《チャールダーシュ》を鑑賞する**

・「ロマニー音楽だとわかってから聴いてみると、どんな気持ちが伝わってきたかな？WSの2番にまとめたことを発表し合ひましょう。」  
 ・「特に音楽のどんなところがそのことを表していると思う？」  
 ・「Aはバイオリンの音色や旋律の最後の跳躍がせつなさを表しているのね。」  
 ・「Cの速度が再び遅くなって、ニ短調からニ長調に転調したところから、そう感じたのね。」

・「Aの部分はロマニーの人々の生活の中での哀しさが感じられた。」「Cの部分は、今日も1日の旅が無事終わってみんなで集まってホッとした時間を過ごしている」など、ロマニーの生活を思い浮かべた感受をさせたい。  
 ・音楽の要素との関連も合わせて確認していく。

鑑①

⑦ 自分の生活体験を振り返り、その時の気持ちを友達と交流し合う

- ・「さて、今日はロマニーの人々の思いが込められたモンティ作曲の《チャールダーシュ》という曲を聴いてきました。みんなは、もちろんロマニーの人々のような生活を体験したことはないだろうけれど、この曲を聴いて感じ取ったような気持ちを体験したことはないかな？」
- ・「少し時間をあげるから、『あの場面で感じたのはこんな気持ちだった』とか、似たような感情を体験したことがないか自分の心と対話してみよう。」
- ・「思い出した場面とその時の気持ちをWSの3番に書いてみてね。」
- ・「さあ、自分の体験とその時の気持ちについて紹介してくれるかな？」
- ・「こうしてみると、みんなも毎日の暮らしの中で、いろんな気持ちを抱きながら生活していることがわかるね。決して、自分にとって心地よい感情ばかりではないけれど、自分の心と向きあいながら、ロマニーの人たちのようにたくましく生きていきたいね。」
- ・「では、最後にもう1度、今度は今思い起こした自分の生活体験を思い出しながら、《チャールダーシュ》をじっくり聴きましょう。」

- ・《チャールダーシュ》と同じような気持ちの変化をたどっていなくても、Aの部分に似通った気持ちなど、部分的に取り上げてもよいことにする。
  - ・身近な出来事の体験とその時の感情を互いに交流し合うという共感の場を設定することによって、友達が体験した感情をも共有することができる。
- (予想される生徒の発話例)
- ・「Aの部分は、部活でちっとも上手くならなくてつらかった時の気持ちと似ている。Bはその時のあせり。Cはようやく出来るようになったときの嬉しさ・・・。」

⑧ 自分の体験を追体験しながら《チャールダーシュ》を鑑賞し、心と対話しながらよさを味わう

- ・「今日の鑑賞は、どうだったかな？ 自分の心に何か生まれたかな？ 音楽って作曲者や演奏者の思いを表現するものだけでなく、聴いている私たちの心も映し出してくれるものだったんだね。」
- ・「また、いろいろな音楽を聴いて自分の心を発見していこうね。」

6. 資料

■ ワークシートの例

# 心と対話してみよう♪

2年 \_\_\_組 \_\_\_番 氏名\_\_\_\_\_

1. 感じたこと、見つけたことを書こう。 —————▶ 演奏が進む

感じ取った気持ち	
根拠となる音楽の特徴	

2. 《チャールダーシュ》には、ロマニーの人々のどんな気持ちが込められているだろう？  
(気持ちの移り変わりも捉えながら聴こう。)

3. 自分の体験したことのあるよく似た感情は、どんな場面でどんな気持ちだったかな？

(森長 はるみ)

### 題材の趣旨と学習指導のポイント

これまで学習指導要領の(共通事項)に示されている音楽の要素や要素同士の関連を知覚・感受することは十分に学習されてきたことと思います。またこのことは、音楽評論の専門家が書く評論や批評においても見られるものです。まさに、音楽を鑑賞し批評することの基盤であることが確認できるでしょう。

この事例は、日本の最も著名な音楽評論家で、文化勲章も受章されている吉田秀和氏のエッセイを取り上げ、吉田氏が音楽の何を知覚し、どのように感受したか、また吉田氏の感情や価値判断したこと、作曲家や楽曲の背景が、どのように書き表されているか(主張)を、実際にその音楽を聴きながら考えてみる学習です。

評論家のエッセイから、音楽の聴き方や批評文の書き表し方が見えてくるものと思われます。

1. 指導内容 評論家が知覚・感受したことや評論家の感情、作曲家や楽曲の背景の主張
2. 教材 ブラームス作曲《子守唄》(Wiegenlied) Op. 49 の4
3. 題材目標
  - 1 音楽評論家を書いたエッセイに興味をもち、音楽を鑑賞することや批評することへのより一層の意欲をもつ。
  - 2 吉田秀和氏のエッセイから、吉田氏が知覚したこと、感受したこと、吉田氏の感情、意見、作曲家ブラームスの作風などについて記されていることを見つけ出し、実際の音楽を聴いて自分が抱いたそれらとともに確認する。

#### 4. 評価計画

評価の観点	評価規準	評価方法
音楽への関心・意欲・態度	① 音楽評論家を書いたエッセイに興味をもっている。	観察
	② エッセイに書かれた内容を理解することで、音楽鑑賞や批評することへの意欲が表れている。	観察 WS
鑑賞の能力	① エッセイにおける評論家の知覚・感受、感情、作曲家についての記述を見つけ出し、その名用を理解している。	発言 WS
	② エッセイから批評文の特徴を見つけ出している。	WS

5. 授業展開

 : 見つける
  : 考える
  : 生み出す

学習活動の内容と教師の発話例	指導上の留意点	評価
<p><b>① 《子守唄》を鑑賞する</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「誰もが知っている、ブラームスの《子守唄》を聴いてみましょう。」</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・エッセイに示されているシュヴァルツコプフ、エリー・アメリク、アンネ・ゾフィー・フォソ・オッターによる演奏が効果的だと思われる。</li> <li>・適宜、数回聴く。</li> </ul>	
<p><b>② 《子守唄》を歌う</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「日本語の歌詞で歌ってみよう。」</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・指導者の弾くピアノに合わせる。</li> <li>・適宜、数回歌う。</li> </ul>	
<p><b>③ 吉田秀和氏のエッセイを読み、批評文としての内容を読み取る</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「ここに音楽評論家の吉田秀和さんが書いた、この曲についてのエッセイがあります。読んでみましょう。」</li> <li>・「皆さんはこれまで、音楽の要素の働きを見つけ出すことや、要素の働きによってイメージを抱いたり雰囲気を感じ取ったりすることを学習してきましたが、このエッセイにもそういった記述があります。それをWSのQ1～Q4の項目ごとに拾い出してみましょう。」</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・グループで話し合いながら見つけ出させてもよい。</li> </ul>	<p>関①</p> <p>↓</p>
<p><b>④ 見つけた記述を発表し、音や楽譜で確認する</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「ではQ1について発表してください。」</li> <li>・「『シンコペーションでゆれるリズム』って、どこのことかわかるかな。歌ってみて？」</li> <li>・「確かに、変ホ、ト、変口の音の3つだけしか使われていないね。弾いてみるよ。」</li> <li>・「では、Q2について発表してください。」</li> <li>・「『網の目のように入り組んで』というのはこのことだね。」</li> <li>・「その音たちが『ゆったりとゆれるようなリズムを刻む』って吉田さんは感じたようだけれど、Aさんはどう感じたかな？ 一度弾いてみるよ。」</li> <li>・「では、Q3について発表してください。」</li> <li>・「ブラームスは、この《子守唄》のように、民謡風の歌曲が多いことが特徴だよ。例えば(歌曲《日曜日》などを</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・板書してまとめる。</li> <li>・挙げられた事項については音や楽譜で確認していく。</li> <li>(予想される発表例)                         <ul style="list-style-type: none"> <li>・「シンコペーションでゆれるリズム」</li> <li>・「初めの五小節は～出てくるだけだ」</li> <li>・「この曲は初めから～変わることなく続く」</li> </ul> </li> <li>・板書してまとめる。</li> <li>・挙げられた事項については音や楽譜で確認し、生徒はどのように感受したかを尋ねていく。</li> <li>(予想される発表例)                         <ul style="list-style-type: none"> <li>・「『大地の香り』をたっぷりと含んだ音楽を自然の源泉からじかに汲み上げてきたような」</li> <li>・「実にこまかく網の目のように入り組んで」</li> <li>・「ゆったりとゆれるような」</li> <li>・「微妙な生き死にの精妙な味わい」</li> <li>・「単調で眠くなる」</li> </ul> </li> <li>・板書してまとめる。</li> <li>・述べられたことに関連する楽曲の背景や、ブラームスに関する内容を適宜説明する。</li> <li>(予想される発表例)                         <ul style="list-style-type: none"> <li>・複雑で知的な構造の大建築物を立ち上げる力量を具え大音楽家～そうしないではいられ</li> </ul> </li> </ul>	<p>関①</p> <p>鑑①</p> <p>↓</p>

<p>ロズさんで)、こんなような節がそうだよ。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>一方で、『大建築物』のような曲としては、《交響曲第1番》などがそうだから、聴いてみるといいよ。」</li> </ul> <p>「では、Q4について発表してください。」</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>『「きく人の耳に優しく語りかけ、心の安らぎをつくり出すはたらきをもっている。』って、断言するような吉田さんの強い主張だよ。それでいて独善的ではなくて、みんなも納得しませんか。」</li> </ul>	<p>ない天与の素質を持った人だった」</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>「彼にはこの類の曲が少なくない」</li> </ul> <ul style="list-style-type: none"> <li>・板書してまとめる。</li> <li>・意見として、この曲の価値を述べている部分には注目させる。</li> <li>・注目した部分に関連させて、生徒自身の意見や価値判断の結果を述べさせる。</li> </ul> <p>(予想される発表例)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「きく人の耳に優しく語りかけ、心の安らぎをつくり出すはたらきをもっている。」</li> <li>・「《子守唄》作品四九の四は、そういう～兼ね備えているからだ」</li> <li>・「でも、その内奥では見事に統制された～働いている」</li> <li>・「民謡調の飾り気のない～心の底に訴えかけて来る力」</li> </ul>	
<p>⑤ 《子守唄》を再度鑑賞する</p>		
<ul style="list-style-type: none"> <li>「では、もう1度《子守唄》を聴いてみよう。黒板に書いたことやWSに書いたことを確認しながら聴いてみてね。」</li> </ul>		
<p>⑥ 優れた批評文の特徴を考える</p>		
<ul style="list-style-type: none"> <li>「このエッセイについて皆さんはどう思いましたか？ Bさん、どんなところがうまいなあ、とかすごいなあって思いましたか？」</li> <li>「Cさんは、どうですか？」</li> <li>「では、最後にQ5について考えて、書いてみよう。」</li> <li>「吉田さんのエッセイから学んだことを活かして、これから音楽の鑑賞を深めていけたらいいですね。」</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・対話をさせながら、適宜板書する。</li> </ul>	<p>関② 鑑②</p>

## 6. 資 料

### ■ 吉田秀和氏のエッセイ

「今はどうか知らない。かつてはブラームスの《子守唄》といえば、みんな知っていた。家庭の人も、歌好きの学生も。声楽家はもちろんのことで、独唱会のあと、予定したプログラムを全部消化し、そのあとも何曲かのアンコールの歌のサーヴィスをすませて、まだ大きな拍手がやまない時など、彼女たちは「今夜はこれでおしまい。お休みなさい」という挨拶代りにブラームスの《子守唄》を歌ったものだ。この慣行、ステージの上と下との暗黙のとりきめは、私の知る限りでも、シュヴァルツコプフのような大歌手からエリー・アメリンクのような往年の売れっ子の名歌手、さらには今日の大スターの一人で、どちらかといえば知的な風采の勝っているアンネ・ゾフィー・フォン・オッターのような人にまで、伝わってきている。事実、彼女には《ブラームス歌曲集》の名盤があるが、この曲はその中にも入っている。

この《子守唄》はごくやさしい親しみぶかい歌詞と節廻し、ゆりかごの軽くシンコペーションでゆれるリズムとでもって、きく人の耳に優しく語りかけ、心の安らぎをつくり出すはたらきをもっている。

ブラームスという人は複雑で知的な構造の音楽の大建造物を立ち上げる力量を具えた大音楽家であると同時に、《子守唄》のような民謡風の——つまりは「大地の香り」をたっぷり含んだ音楽を自然の源泉からじかに汲み上げてきたような曲を書く力を、いや、そうしないではいられない天与の素質を持った人だった。

《子守唄》作品四九の四は、そういうブラームスの典型的な曲である。私が、改めて、そういうのは、この曲が今いった彼の二つの面を兼ね備えているからだ。それは歌の出だしから終りまで、ずっとそうなのである。土台、この歌は誰が聞いたって、素直なわかりやすく親しみ易いものなのに、よくみると、初めの五小節は変ホ長調の主三和音（変ホ、ト、変ロの三つの音）だけで出来ている。違う音が出てくるのは五小節目の終り、六小節目の少し手前で経過的にふれられて出てくるだけだ。それまでの間、しかし、変ホ長調のドミソが実にこまかく網の目のように入り組んで使われているだけ。しかし、また、その網の目みたいに組まれた音たちはそれぞれ独立してゆったりとゆれるようなリズムを刻む。

この単純と複雑の組み合わせ。この極少の音から生れる響きの微妙な生き死にの精妙な味わい！

これがブラームスの精髓なのだ。この曲は初めから終りまで、ずっとこの調子で、変ることなく続く。変化が乏しいので、単調で眠くなる。でも、その内奥では見事に統制された機関が一刻の休みもなく働いている。

彼にはこの類いの曲が少くない。民謡調の飾り気のない率直さでありながら、沁み沁みときき手の心の底に訴えかけて来る力。」

吉田秀和『永遠の故郷 夜』（集英社）pp. 140-142 より転載  
（※ 転載許諾済み）

■ ワークシートの例

ブラームス作曲《子守唄》のエッセイを読んで

2年 組 番 氏名 \_\_\_\_\_

Q1 音楽の要素の働きについて書かれているところはどこかな？

Q2 要素の働きから吉田さんが感じ取ったことが書かれているところはどこかな？

Q3 ブラームスやブラームスの作風について書かれているところはどこかな？

Q4 吉田さんの気持ちや意見が書かれているところはどこかな？

Q5 吉田さんのエッセイを読んで、「さすがプロの評論家！」と思われるところはどこかな？

(宮下 俊也)

**題材の趣旨と学習指導のポイント**

この題材では我が国の伝統的な舞台芸能である「能」を取り上げ、音色、リズム、速度、旋律、テクスチャ、強弱を支えにしながら扱い、能の音楽の特徴を知覚・感受しながら、解釈し価値を考えて鑑賞する活動を通して、能のよさや美しさを味わわせていきます。また、「能」の鑑賞を通して、自分の感情の変化や自分にとっての価値についても批評文にまとめ、他者に届けさせます。

大まかな流れとしては、初めに能<<船弁慶>>の一部分を視聴させます。ここでは、能を鑑賞している自分の感情と向き合わせることが目的です。具体的には、能を鑑賞したことによる自分の感情の変化を見つけるとともに、感情の変化の要因となる能の音楽の特徴を知覚・感受させ、さらに音楽以外の特徴も捉えさせます。また、能(学習対象)に対しての疑問についてもまとめます。これら1時間目で学習することは、主体的に伝統的な音楽についての学習を進める上での根幹となります。

続いて2時間目には、それらの疑問・課題を解決すべく、グループごとに時代的な能の背景や音楽と他の芸術との関わりについてインターネット・図書などを活用して調べるとともに、グループ内での対話を通して追究します。

3時間目には、それまでの学習を踏まえ、能<<船弁慶>>(ダイジェスト)の鑑賞を通して、能のよさや美しさ(要因)と自分の感情の変化との関わりについて根拠をもって批評し、味わって鑑賞するとともに、自分にとっての伝統音楽の価値(大切さ)についても生み出していきます。

1. 指導内容 能のよさや美しさに対する解釈・価値判断

2. 教材 能 <<船弁慶>>

3. 題材目標

能のよさや美しさについて、自分なりに解釈したり価値を考えたりしながら、根拠をもって批評するなどし、味わって鑑賞する。

4. 評価計画

評価の観点	評価規準	評価方法
音楽への関心・意欲・態度	① 能の音楽に関心をもち、主体的に能のよさや美しさを理解し、味わって鑑賞する活動に取り組んでいる。	発話 WS
鑑賞の能力	① 能における音楽の特徴を文化・歴史と関連づけて理解し、解釈したり価値を考えたりしている。	発話 WS
	② 根拠をもって批評するなどして、能のよさや美しさを味わって鑑賞している。	発話 WS

5. 授業展開

 : 見つける
  : 考える
  : 生み出す

学習活動の内容と教師の発話例	指導上の留意点	評価
<p><b>① 能《船弁慶》の一部分を視聴し、自分の感情の変化を見つける</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「我が国の伝統音楽といえば何が思い浮かぶ？」</li> <li>・「みんな、能は知っているかな？」</li> <li>・「これから能の一部分を視聴するよ。」</li> <li>・「その時に、能を視聴する前の自分の感情、視聴している自分の感情、見終わった時の自分の感情について、WSに記入してみよう。」</li> <li>・「例えば、いらいら→ゆったり→すっきりのような感じで構わないからね。」(視聴後、WS①-1に記入させる。)</li> <li>・「どうでしたか？感情の変化はありましたか。」</li> <li>・「感情の変化があったとすれば、能の何かしらの魅力があなたの感情に働きかけたということかもしれないね。それでは能について学習を深めていきましょう。」</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・思い浮かぶ我が国の伝統音楽について、述べさせ、板書する。</li> <li>・自分の感情と向き合うことを確認する。</li> <li>・書き方について例示する。</li> <li>・何人か、感情の変化の有り無し、内容について発表させる。</li> </ul>	<p>関①</p>
<p><b>② 能《船弁慶》を再度、部分視聴し、能の音楽の特徴や音楽以外の特徴を見つける</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「これから同じ場面を視聴します。今度は映像や音から能の音楽の特徴や音楽以外の特徴を見つけてみましょう。」(視聴後、WS①-2に記入させる。)</li> <li>・「疑問に思ったことについても記入してみましょう。」(WS①-3に記入させる。)</li> <li>・「それでは、感じ取った能の音楽の特徴や音楽以外の特徴を発表してみましょう。どんなことを見つけましたか。」</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・感じ取った音楽の特徴や音楽以外の特徴について発表させ、適宜、内容を板書する。その際、発表内容について、同じように感じ取ったかどうかを全体にも確認する(挙手などで確認)。</li> </ul>	<p>↓</p>
<p><b>③ インターネット・図書などを活用して、能について調べ、グループ内で対話、追究する</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「能の音楽の特徴や音楽以外の特徴について、インターネットや図書などを活用して、調べてみましょう。」(適宜、WS②に記入させる。)</li> <li>・「能について、疑問に思ったことなどについても調べ、調べた内容を基に、能のよさや美しさについて考え、グループ内で対話、追究してみましょう。」</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・WSには、あらかじめ能や能の背景となる文化・歴史などについてまとめやすいように、重要語句を穴埋めさせる、囃子の四拍子の音を聴き、音色の特徴を感じ取らせるなどの工夫を施す。</li> <li>・各自の疑問や考えを積極的に交流させるように支援し、能のよさや美しさについて考えさせる。</li> </ul>	<p>鑑①</p> <p>↓</p>
<p><b>④ 能《船弁慶》を部分鑑賞し、解釈したり価値を考え、能のよさや美しさを味わう</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「これから、能《船弁慶》のダイジェスト(いくつかの場面)を鑑賞します。自分の担当する場面についての感情の変化や批評を通して、感じ取った能のよさや美しさを相手に伝えてください。」(適宜、WS③に記入し、発話させる。)</li> <li>・「それでは、交流で得られた内容を参考にまとめの鑑賞をしましょう。」</li> <li>・「これまでの学習を振り返って、自分にとっての能の価値(大切さ)を考えてみましょう。そして、まわりの人と交流して、広げてみましょう。」</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・鑑賞した場面における自分の感情の変化や感受した能のよさや美しさについて、根拠をもって批評及び交流させる。</li> <li>・場面ごとに、内容を板書し、整理する。</li> <li>・交流で得られた内容を全体で確認してから、まとめの鑑賞をさせる。</li> <li>・感じ取った能のよさや美しさ、自分にとっての価値について根拠をもってまとめさせる。</li> </ul>	<p>鑑①</p> <p>鑑②</p> <p>↓</p> <p>関①</p> <p>↓</p>

6. 資料

■ ワークシートの例

<能に親しもう> ワークシート①

3年 組 番 氏名

◆ 「能」を視聴して、感じ取ったこと（見つけたこと）を書いてみよう。

1 自分の感情（の変化）を見つけてみよう。

→ 「能」を視聴する前の自分の感情①と、視聴している時の自分の感情②、視聴し終えた時の自分の感情③に何か変化はあるだろうか。

①		②		③	
---	--	---	--	---	--

2 能を視聴して、その特徴を見つけてみよう。

① 自分なりに見つけた「能」の音楽の特徴は

② 自分なりに見つけた「能」の音楽以外の特徴は

3 「能」について、知りたいこと、疑問に思ったことを見つけてみよう。

## <能に親しもう> ワークシート②

3年 組 番 氏名

### ◆ 能や背景となる文化・歴史等について調べてみよう。

◇ インターネット等を活用して、次の空欄の部分を埋めてみよう。

◇ 能とは、( ) 時代に大成された我が国の伝統芸能

だれによって?

父 ( ) ・子 ( ) によって

● 能の源流…「散楽」(奈良時代, 唐から移入) → 「猿楽」(平安中期～鎌倉時代)

● 能の成立した環境

◇ 能は, 中世の諸芸能の集大成  
「延年(えんねん)」…寺院の芸能  
「様々な音曲」

大和猿楽…現在のシテ方4流儀の祖となる結崎(観世)座, 外山(宝生)座, 円満井(金春)座, 坂戸(金剛)座

・ 鎌倉時代に生まれた早歌(そうが)…七五調の句を八拍子のリズムで歌った長編歌謡。

・ 曲舞(くせまい)…舞を伴って寺社の縁起などを語った芸。

・ 平曲(へいきょく)…『平家物語』を琵琶法師が琵琶の伴奏で語ったもの

「田楽(でんがく)」

・ 田植えなどに際して行われた芸能→多様な芸→演劇形態「能」

### ◇ 能舞台の特色

① 舞台が ( ) であること。

② ( ) があること。

③ 客席の中に舞台が突き出ていること。

### ◇ 能の諸役

前半の主役 ( ) ・後半の主役 ( )

● 役の種類 ( ) 方…主人公・地謡・子方を演じるグループ

流派→観世流・宝生流・金春流・金剛流・喜多流

( ) 方…相手役を演じるグループ → 高安流・福王流・宝生流

( ) 方…アイ(演目の前半と後半をつなぐ狂言)を演じる。

→ 大蔵流・和泉流

( ) 方…能の音楽を担当→ 笛方・小鼓方・大鼓方・太鼓方(流派は略)

## ◇演技と音楽

- 囃子の特徴（それぞれの音を聴き、音色の特徴を感じ取ろう）

左←（座っている位置） 「四拍子」<sup>しびょうし</sup> →右

太 鼓	おお つづみ 大 鼓	こ つづみ 小 鼓	能管（笛）

- 謡いの特徴

（ ） … 主に場面や情景を描写し、劇の進行を語る。8人構成を基本とする。全員が同じ高さで謡い、ハーモニーは形成しない。

リズム … （ ）ノリ、（ ）ノリ、（ ）ノリの3種

発 声 … 謡は、「 」と「 」に分類

さらにフシは「 」と「 」に区別

（ ） … 能のテキスト。役者と地謡の歌う歌詞を書いたもの。

「 ・ ・ 」で構成されます。始めはゆったりと重々しく、次第にテンポを上げ、最後は急速に終わります。

## ●所作の基本<sup>しよさ</sup>

（ ） … 立ったまま腰に力を入れ、あごを引いた姿勢

（ ） … 床に足の裏をつけて、かかとを上げない歩き方

※能の演技は、これらの上に身体の動きを様式化した（ ）が、関わって成立。

## ◇能面と能装束

- 能面の特徴 …能面のことを「面（ ）」

※面をつけると歩行も困難なほどに視界が狭くなり、謡の発声も難しくなる。

素顔のときは「直面（ ）」

● 能面の種類 …約 ( ) 種類

次のそれぞれの演目で使われる面はどれか、調べてみよう。

- ① 能「羽衣」 → ( )
- ② 能「高砂」 → ( )
- ③ 能「船弁慶」 → ( )

ア	小尉 (こじょう)
イ	小面 (こおもて)
ウ	増女 (ぞうおんな)
エ	邯鄲男 (かんとんおとこ)
オ	姥 (うば)

● 能装束<sup>しょうぞく</sup>の特色

能装束とは、原則として衣裳だけではなくカツラや冠など、面以外の扮装用具すべてを呼ぶ。能の装束で代表的な唐織は、金・銀・色系で紋様が織りあげられていて、型がきまり、美しい迫力が伝わる。

装束は重くて動きづらい。硬い生地できており、直線的な動きや、木でつくられた能面との釣り合いをもたせている。

● 扇・小道具と作り物

扇は小道具の一つで大変重要な役割を果たす。扇の動きで笑う、泣くなどの感情を表現したり、あらゆるものの比喩や演技の糧となる。代表的な作り物(大道具)には、山、宮、車、船、藁屋などがあり、それぞれ非常にシンプルで象徴的な作りをしている。

※その他、能について調べたことを記入しましょう。

参考資料 文化デジタルライブラリー (日本芸術文化振興会)  
<http://www2.ntj.jac.go.jp/dglib/edc9/enjoy/index.html>

## <能に親しもう> ワークシート③

3年 組 番 氏名

---

### ◆ 能『船弁慶』を、能のよさや美しさを味わって鑑賞しよう。

#### ◇ 能『船弁慶』の【あらすじ】

兄の頼朝との仲が悪化した義経（子方）は、弁慶（ワキ）らを伴って西国落ちすることとなった。恋人の静御前（前シテ）は途中、摂津国大物まで同行していた。しかたなくここで別れとなり、酒宴が開かれ、静御前は悲運の義経のために別れの舞（序舞）を舞う。義経らが船出をし、壇ノ浦にさしかかると海が荒れ始め、平知盛の霊（後シテ）が現れる。壇ノ浦で滅びた平家一門が義経一行の行く手を阻もうとしていた。知盛は大立ち回りを見せるが、弁慶の祈祷にやがて静まっていく。

#### ◇ 各部分の能のよさや美しさを感じた根拠（Ⅰ※）と、それによって得られた感情の変化（Ⅱ）を書いてみよう。

…自分の担当は \_\_\_\_\_ 部分

	1 義経・弁慶一行の登場	2 静の登場・義経との対話	3 酒宴と静の舞
Ⅰ			
Ⅱ			
	4 別れ	5 船出と嵐・アイの活躍	6 平知盛の亡霊現れる
Ⅰ			
Ⅱ			

※能のよさや美しさの根拠⇒音楽の特徴や音楽以外の特徴との関わりに着目しよう。<裏面に続く>

◇ まとめの鑑賞

- 各場面の感じ取りの交流等を基に、次の部分を味わって鑑賞しよう。

7
亡霊と弁慶・義経の戦い
能のよさと美しさを感じた根拠
鑑賞によって得られた感情(の変化)

- これまでの学習を振り返って、自分にとっての「能」の価値(大切さ)を考えてみよう。

※学習をはじめる前の自分の「能」へのイメージや考えと、学習を終えた今では、何か変化があるだろうか。そして、もし、変化があったとしたら、その変化は、何によってもたらされたのだろうか。まとめてみよう。また、自分の考えを他の人と交流して、広げてみよう。

--

(嶋田 歩)

**題材の趣旨と学習指導のポイント**

この題材では、我が国の伝統的な舞台芸能である「文楽」を取り上げ、音色、リズム、速度、旋律、テクスチャ、強弱を支えにしながら扱い、文楽の音楽(義太夫節)の特徴を知覚・感受しながら、文楽の音楽以外の特徴との関わりから、解釈し価値を考えて鑑賞する活動を通して、文楽のよさや美しさを味わわせていきます。また、文楽の鑑賞を通して、自分にとっての文楽の価値についても批評文にまとめ、他者に広げさせます。

大まかな流れとしては、初めに文楽についての概要を学習させ、続いて文楽《平家女護島》より《鬼界が島の段》のあらすじを伝えた後に、一部分を視聴させます。ここでは、文楽に関心をもち、ストーリーの把握や、義太夫節(太夫と三味線)、人形の動きの特徴や雰囲気を感じ取らせることが目的です。

続いて2時間目には、グループごとに、主な登場人物の心情と太夫、三味線、人形の動きの関わりを考え、話し合います。この際には、太夫の語りの一部分を声に出してみるなど、太夫のさまざまな声の表現の特徴について、音色、間、旋律、速度などを感じ取らせることが大切となります。

3時間目には、それまでの学習を踏まえ、グループごとに話し合った場面における太夫、三味線、人形の動きの関わりを交流することで、文楽の音楽の特徴を基軸とした文楽のよさや美しさについての理解を深めさせます。

最後にまとめとして、文楽《平家女護島》より《鬼界が島の段》(ダイジェスト)の鑑賞を通して、文楽のよさや美しさについて根拠をもって批評し、味わって鑑賞するとともに、自分にとっての伝統音楽(文楽)の価値(大切さ)についても生み出していきます。

1. 指導内容 文楽のよさや美しさに対する解釈・価値判断

2. 教材 文楽 《平家女護島》

3. 題材目標

文楽のよさや美しさについて、自分なりに解釈したり価値を考えたりしながら、根拠をもって批評するなどし、味わって鑑賞する。

4. 評価計画

評価の観点	評価規準	評価方法
音楽への関心・意欲・態度	① 文楽の音楽に関心をもち、主体的に文楽のよさや美しさを理解し、味わって鑑賞する活動に取り組んでいる。	発話 WS
鑑賞の能力	① 文楽における音楽の特徴を理解し、解釈したり価値を考えたりしている。	発話 WS
	② 根拠をもって批評するなどして、文楽のよさや美しさを味わって鑑賞している。	発話 WS

5. 授業展開

 : 見つける
  : 考える
  : 生み出す

学習活動の内容と教師の指示例	指導上の留意点	評価
<p><b>① 文楽の概要を知り、《平家女護島》の大まかなあらすじを理解する</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>「みんなは、人形劇を見たことがあるかな？」</li> <li>「実は、我が国の伝統的な舞台芸能に、人形が関わっているのですが何か知っているかな？」</li> <li>「答えは、文楽です。」「知っている人、手を挙げてみてください。」「文楽は人形浄瑠璃とも呼ばれますよ。」</li> <li>「それでは、文楽について、大まかにまとめたビデオがあるので見てください。」「見終えたら、ワークシートの空欄にあてはまる言葉を書いてみましょう。」(視聴後にWS1に記入させる。)</li> <li>「ワークシートの空欄のところには何が入るかな、一緒に確認してみましょう。」</li> <li>「続いて、これから鑑賞する、『平家女護島』より『鬼界が島の段』のあらすじを読んでください。」</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>人形劇について思い浮かぶことを自由に、述べさせる。文楽に関わる内容が発言の中にあつた場合、それを取り上げ板書する。</li> <li>モニターに文楽の様子(人形の画像)を映す。</li> <li>文楽について既知の生徒に、どの程度の内容かを発言させる。</li> <li>ビデオを準備し、ワークシートを配付する。</li> <li>ビデオを見せ、ワークシートの空欄に記入させる。</li> <li>太夫、三味線、人形遣いについて、補足説明する。</li> <li>あらすじや主な登場人物について、確認する。</li> <li>主な登場人物の心情を考えさせる。</li> </ul>	<p>関①</p>
<p><b>② 文楽《平家女護島》の一部分を視聴し、文楽の音楽の特徴と人形の動きの関わりを見つける</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>「これから『平家女護島』より『鬼界が島の段』の一部分を視聴します。映像や音から文楽の音楽の特徴と人形の動きの関わりを見つけてみましょう。」(視聴後、WS2-①に記入させる。)</li> <li>「それでは、感じ取った文楽の音楽の特徴や人形の動きの関わりを発表してみましょう。」</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>感じ取った文楽の音楽の特徴や人形の動きの関わりについて発表させ、適宜、内容を板書する。その際、発表内容について、同じように感じ取ったかどうかを全体にも確認する(挙手などで確認)。</li> </ul>	<p>鑑①</p>
<p><b>③ 主な登場人物の心情と太夫、三味線、人形の動きの関わりをグループ内で対話、追究する</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>「主な登場人物の心情と太夫、三味線、人形の動きの関わりから、文楽のよさや美しさについて考え、グループ内で対話、追究してみましょう。」(適宜、WS2-②に記入させる。)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>考えを積極的に交流させるように支援し、文楽のよさや美しさについて考えさせる。</li> <li>鑑賞し感受した文楽のよさや美しさについて、根拠をもって批評及び交流させる。</li> <li>内容を板書し、整理する。</li> </ul>	<p>鑑①</p>
<p><b>④ 文楽《平家女護島》を鑑賞し、解釈したり価値を考え、文楽のよさや美しさを味わう</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>「これから、文楽《平家女護島》のダイジェスト(いくつかの場面)を鑑賞します。それぞれの場面について、感じ取った文楽のよさや美しさなどを相手に伝えてください。」</li> <li>「それでは、交流で得られた内容を参考にまとめの鑑賞をしましょう。」</li> <li>「これまでの学習を振り返って、自分にとっての文楽の価値(大切さ)を考えてみましょう。そして、まわりの人と交流して、広げてみましょう。」(適宜、WS2-③に記入し、発話させる。)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>交流で得られた内容を全体で確認してから、まとめの鑑賞をさせる。</li> <li>感じ取った文楽のよさや美しさ、自分にとっての価値について根拠をもってまとめさせる。</li> </ul>	<p>鑑① 鑑② 関①</p>

6. 資料

■ ワークシートの例

<文楽に親しもう> ワークシート1

3年組番氏名

◆文楽について、大まかにまとめてみよう。

・文楽は、が一体となって成り立つ

日本の伝統的な舞台芸能です。

・文楽の音楽をといいます。通常は、と

が一人ずつで演奏します。

・人形遣い…文楽の人形は頭（かしら）と右手を操る、左手を操る

、足を操るの3人で動かします。

◆文楽『平家女護島』より『鬼界が島の段』のあらすじを知ろう。

平家を倒そうとした俊寛・康頼・成経の3人は、孤島に流罪になる。絶望の生活の中、最年少の成経が島の海女・千鳥と結婚することとなる。喜んでいたところ、罪を赦すことを伝える遣いの者が船で到着する。遣いの瀬尾は康頼・成経の名前だけを伝える。赦しをもらえなかった俊寛は絶望し、悲嘆にくれる。すると、別の遣いの者が、俊寛も赦され帰ることができることを告げる。一同は大いに喜ぶが、船に乗ろうとすると、千鳥の乗船は拒否されてしまう。もはや家族同然の千鳥が残されることと、都にいる俊寛の妻が殺されたことを告げられた俊寛は、瀬尾を斬り、自分を残して代わりに千鳥が乗船することを願う。一度は、現世への未練を断ち切った俊寛だったが、出航する船に叫び続け、岩の上でいつまでも呆然と見送り続ける。

俊寛の心情は…

## <文楽に親しもう> ワークシート2

3年 組 番 氏名

◆文楽『平家女護島』より『鬼界が島の段』を視聴して、キーワードを基に、音楽（義太夫節）の特徴や人形の動きとの関わりを①見つけ、文楽のよさや美しさを②考え、③深めよう。

キーワード 音色、リズム、速度、旋律、テクスチャ、強弱 など

	音楽（義太夫節）の特徴		人形の動き
	太 夫	三味線	
①			
②	文楽のよさや美しさ		
③	自分にとっての文楽の価値（大切さ）		

(嶋田 歩)

**題材の趣旨と学習指導のポイント**

「この色、どんな匂い?」「今朝の空気、どんな味がした?」「午前7時30分の露草ってどんな色?」(※)と聞かれると、たちまち頭の中が想像の世界一色に変わります。色に匂いはありませんし、空気に味はありません。それに「露草の色は?」と聞かれれば「青」と答えるかもしれませんが、「午前7時30分の露草」だったら、どんな青が具体的に想像しなければなりません。このような問いは、想像力を高めるのにとっても効果的なものだと思います。

さて、印象派の音楽と風景や色彩は切っても切れない関係にあります。その作品から描かれた風景や色彩を想像することは、印象派の音楽を鑑賞する醍醐味です。本事例で扱うドビュッシーの交響詩《海》は、印象派の代表的傑作です。この曲を鑑賞し、中学生はどのような風景や色彩を想像するのか、興味があるところです。生徒の言葉に対応させて、この曲の特徴、例えばハープによるグリッサンド、時折鳴らされるトライアングル、管楽器によるトリルなどの使用と効果はぜひ見つけ出させたいものです。特に、全音音階は印象派音楽の特徴でもあるので、すべての生徒にその知覚と感受を求めてください。その時、全音音階の作り方を説明するのではなく、例えば、全音音階をピアノなどで弾いてみて、「この部分があなたの頭の中に『波のゆらぎ』をイメージさせたんじゃない?」といったように学習させるとよいと思います。

それからこの事例では、鑑賞の前に、絵から音を想像することと、言葉から色を想像する体験を仕組んでいます。提示した例の他にも、色々な導入が考えられるので、ぜひ工夫してみてください。

(※)「午前7時30分の露草」は、「500色のクレヨン」(フェリシモ社)のうちの色の名称。

1. 指導内容
  - ・音楽から想像する風景や色彩
  - ・全音音階の知覚と感受
  
2. 教材
  - ・ドビュッシー作曲 交響詩《海》より、第2楽章《波の戯れ》
  - ・ドビュッシー作曲 《牧神の午後への前奏曲》など
  - ・エリック・カール著 もりひさし訳 絵本『うたがみえる きこえるよ』(偕成社)
  - ・「500色のクレヨン」(フェリシモ社)の色彩名についての小学生の作文
  
3. 題材目標
  - 1 音楽から風景や色彩を想像し、その想像をもたらした印象派の音楽の特徴を知ることに関心・興味をもつ。
  - 2 《海》の特徴を、自分が想像した風景や色彩をもとに理解する。

4. 評価計画

評価の観点	評価規準	評価方法
音楽への関心・意欲・態度	① 音楽から風景や色彩を想像することに意欲的である。	発話
	② 風景や色彩を想像させた要因を知ることに関心・興味をもっている。	発話 WS
鑑賞の能力	① 《海》から、風景や色彩を想像することができる。	発話 WS
	② 全音音階に対する知覚・感受ができています。	発話 WS
	③ 自分の想像と、それをもたらした要因を含めて、《海》の特徴を述べるができる。	発話 WS

5. 授業展開



学習活動の内容と教師の指示例	指導上の留意点	評価
<p><b>① 絵本の絵から音を想像する</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>「今日はまず、絵本を読みます。でも、『読む』といっても、この絵本には文章がありません。1枚1枚の絵から、どんな音が聴こえてくるか、想像してみてください。」</li> <li>「(絵本の24ページと25ページの絵(資料2)を見せ「さあ、どんな音が聴こえるかな?」</li> <li>「Aさんは、『ティンパニを激しくたたいた時に出る音』って言うてくれたけれど、どうしてその音が聴こえたのかな?」</li> <li>「このとんがっている三日月型と、はっきりした濃い目の色合いからそう感じたんだね。」</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>「『うたがみえる きこえるよ』をゆっくりとページをめくりながら見せる。スライドで大きく映写すると効果が上がる。」</li> <li>「どのページの絵でも可。多くの生徒に語らせて対話する。」</li> <li>「色彩や形、模様などから音が想像されることを確認する。」</li> </ul>	
<p><b>② 言葉から色を想像する</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>「さて、皆さんは『500色のクレヨン』があることを知っているかな。それらには1本1本、色の名前がついているんだけど、どんな名前がついているか想像できるかな。」</li> <li>「ここに、ある小学校5年生が書いた作文(資料3)があります。これは『500色のクレヨン』が発売されたという新聞記事についての感想文です。読んでみましょう。」</li> <li>「Bさん、この小学生が一番言いたいことは何かかな?」</li> <li>「先生は、『色は自分の経験と結びついておぼえていくものだ』というところだと思います。そこに下線を引いておいてね。」</li> <li>「では聞きますが、『露草(の花)』って何色でしょうか?」</li> <li>「では、『500色のクレヨン』に『午前7時30分の露草』という色があるのですが、一体どんな色でしょう。想像してみてください。」</li> <li>「このように、絵から聞こえない音を想像したり、言葉から見えない色を想像することって、とても楽しいし想像力が豊かになりますね。」</li> <li>「では次に、今度は音楽から風景や色を想像することをしてみたいと思います。」</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>「資料2を配布して読む。」</li> <li>「おそらく「青」「青紫」などの色名で答えると思われる。」</li> </ul>	
<p><b>③ &lt;&lt;波の戯れ&gt;&gt;を鑑賞し、情景と要因を探る</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>「これから聴く音楽はドビュッシーの交響詩&lt;&lt;海&gt;&gt;の中の&lt;&lt;波の戯れ&gt;&gt;という曲です。どのような波の表情か、を想像しながら聴いてみてください。WSのQ1の左側に書き取りながら聴いてもいいですよ。」</li> <li>「(鑑賞後)「さあ、どんな波が『見えた』かな? さっきの『500色のクレヨン』の色の名前のように、具体的に述べてくださいね。それから、さっきの絵本の題名のように『…が見えた』って言ってみましょう。」</li> <li>「『キラッと光っている波』は、どんな音から見えたのかな?」</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>「曲名を伏して聴かせてもよい。曲名を伝えると、イメージをより具体的に焦点化させて聴くことができる。(予想される生徒の発話例)             <ul style="list-style-type: none"> <li>「小さな波と大きなうねりのような波が見えた。」</li> <li>「時々、キラッと光っている波が見えた。」</li> </ul> </li> </ul>	<p>関① 鑑①</p>

<ul style="list-style-type: none"> <li>・もしかして、トライアングルの音かな。確認してみよう。」</li> <li>・「ここは(ハーブのグリッサンドが出てくるところ)」はどのような波かな？」</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・このように、見えた風景の要因を述べさせたり、教師が部分的に聴かせてヒントを与えたりしていく。</li> </ul>	
<b>④ 再度鑑賞し、WS (資料1) に記入する</b>		
<ul style="list-style-type: none"> <li>・「ではもう1度聴きますから、今度はQ1の右側と左側に、見えたことと、今考えたようなその時の音楽の特徴を書いてください。たくさん見つけなくても、『これだ!』って思ったものだけでもいいですよ。」</li> <li>・(鑑賞後)「では、何人かに発表してもらいましょう。先生が黒板に整理していくので、皆さんは、Q1の残っているところに、色を変えて書き加えていってね。」</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・聴いていながら、「特徴的だ」と直感した時に、それを書き取るように指示する。</li> <li>・数人の発表に対し、それを板書し、音で確認していく。</li> </ul>	 
<b>⑤ 全音音階の知覚と効果の感受</b>		
<ul style="list-style-type: none"> <li>・「先生はね、実はこの音型(資料4と資料5をピアノで弾きながら)に『小さな波に光が反射している』風景が見えたんだ。」</li> <li>・「この音型と比べて、これ(資料4のCisをCに、資料5のHisをHに直して弾く)は、Cさんどう思いますか？」</li> <li>・「たった半音の違いなのに、色合いが全然違うでしょ。」</li> <li>・「この曲にはこの音型がたくさん出てくるんだよ。最初からいきなり出てくるから確認してみよう。」</li> <li>・(冒頭部を鑑賞後)わかった人？」</li> <li>・「先生はこれが『小さな波に光が反射している』ように見えたんだけど、Dさんはどんな風景が見えましたか？ Eさんは?…」</li> <li>・「この音型の作り方は簡単なんだ。Fさん、ピアノのところに来てごらん。どの音からでもいいから、この音型になるように、上がったたり下がったりしてみて。」</li> <li>・「この音型(音階)を『全音音階』っていうんだ。WSのQ1の最下段に『全音音階』って書き入れてあるけれど、もう1度、この音型を聴いて見えた風景をその左段に書いてね。(再度、冒頭部を聴く)」</li> <li>・「もう1つ、別のドビュッシーの曲で全音音階を確認してみよう。」</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・④で、全音音階に関わる内容が出てこなかったら、このような発言を試してみるのもよい。</li> <li>・知覚を確認する。全員が知覚できるまで数回聴かせる。</li> <li>・感受を確認する。</li> <li>・例えば、Cからなら上行形は、C→D→E→Fis、下行形は、C→B→As→Gesになる。</li> <li>・《牧神の午後への前奏曲》など、全音音階が用いられている箇所を聴かせ、知覚できたかどうか確認する。</li> </ul>	 
<b>⑥ 再度鑑賞し、《波の戯れ》について、学んだことを踏まえて批評文を作成する</b>		
<ul style="list-style-type: none"> <li>・「ここで大事なことをいくつか教えてあげるよ。」</li> <li>・(再度、鑑賞後)「WSのQ2に、これまで学んだことを含めて批評文を書いてみよう。」</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・次の文化的背景について適宜伝える。 <ul style="list-style-type: none"> <li>・「印象派」について。</li> <li>・ドビュッシーは、印象派の画家や浮世絵から影響を受けたこと。</li> <li>・全音音階も印象派の音楽の特徴の1つであること。</li> <li>・ドビュッシーは、単に風景を描写するのではなく、風景から受けた印象を音楽で表そうとしたこと。《海》も海を想像して作曲したこと。</li> </ul> </li> </ul>	 

6. 資 料

■ 資料1 ワークシートの例

ドビュッシー作曲 交響詩《海》より、第2楽章《波の戯れ》を聴いて

3年 組 番 氏名

Q1

どのような波が「見えた」かな？	それはどうしてかな？
	全音音階

Q2 次のことを含めて批評文を書きましょう。

- ・《波の戯れ》あなたが想像した風景とその要因
- ・全音音階から見えた風景
- ・ドビュッシーや「印象派」の音楽について
- ・あなたが思う《波の戯れ》についての意見

■ 資料2 エリック・カール著 もりひさし訳 絵本『うたがみえる きこえるよ』（偕成社）より



表紙



24 ページ・25 ページ

(※掲載許諾済み。©1973 by Eric Carle)

### 色の名前の不思議な力

買ったばかりのクレヨンのふたを開けた時、だれもが、何を描こうかなと、わくわくした気持ちになります。ふつうは、十二色か二十四色、多くても三十六色ですが、この新聞記事のクレヨンは何と五百色もあるそうです。何を描こうかな、と思うよりも、きっとどんな色があるのか、一色ずつまず色を調べてみたい気持ちになるでしょう。

この五百色のクレヨンには、「鯉のぼりの泳ぐ空」など、それぞれ一色ずつに「想像力を膨らませる名前」がついているそうです。鯉のぼりの泳ぐ初夏の空の青が、どんなにすてきなものか知っている人には、大好きな色になるだろうな、と思います。

私は、美術館によく行くのですが、きれいな色に出会う事がたくさんあります。フェルメールの「青いターバンの女」に使われているすばらしい青を人に説明するのに、青に少し黒をまぜて、少し水を加えてかがやきを持たせたような色」と表現しても、なかなかうまく伝わりません。「フェルメールの『黒いターバンの女』のあの青」と言ったほうが、正確に伝わるのではないかと思います。ふく雑な色になるほど人に伝えるのがむずかしくなるのです。でも、フェルメールの青を見た事がない人には、どんな色なのか伝わらないのは、残念な事です。つまり、色は自分の経験と結びついておぼえていくものだと思うのです。

小さい子ども達が使う十二色のセットには基本的な色がおさめられています。「ももいろ」は果実のもも、「オレンジ色」はみかんの色から名前がつけられていて、小さい子にはとても分かりやすい色です。経験の少ない小さい子にとって、色数の多いクレヨンセットは使い切れないのではないのでしょうか。

もし私が五百色のクレヨンを使う事を考えてみると、きっといままで見た事もないような色のクレヨンもあるでしょう。「初めての口紅」と名前のついた色などは、まだ経験していないので、どんな色なのか想像が付きません。でも、色につけられた言葉から、その色の意味を夢みる事ができます。そして、自分とつながっている色が増えていくのです。色につけられた言葉にはすごい力があるのだと、思いました。私も、これから色々な経験をして、たくさん色で自分の未来を描いていきたいです。

神奈川新聞 2010年11月24日付記事より

■ 資料4



■ 資料5



### 題材の趣旨と学習指導のポイント

この題材では、尺八音楽の魅力を味わい、尺八音楽は日本の誇る文化の一つであることを理解させるとともに、日本の文化を世界に向けて発信することは文化の創造への貢献につながるということを理解させ、経験させることが目的です。この趣旨は、箏、長唄、民謡など、我が国や郷土の伝統音楽を扱う題材においても同じように行うことができます。

本題材ではまず、尺八とリコーダーとを比較して、その共通点や相違点、尺八の固有性を見つけ、音色や奏法など尺八の特徴を理解します。次に《巢鶴鈴慕》が描くストーリーを知り、そのストーリーおよび音色や奏法などの知覚・感受を手がかりに、鶴の親子の情景が尺八によって巧みに表現されていることに気づかせます。その後、楽曲全体を味わって聴いて批評文を書き、互いの解釈や価値意識を交流させます。鑑賞して見いだした尺八音楽のよさなどを、グループあるいはクラスでまとめ、学校ホームページを通じて世界に発信します。この題材によって、我が国の音楽文化に愛着をもつとともに諸外国の音楽文化を尊重する態度の育成につなげることができます。

1. 指導内容 尺八音楽の音色や奏法と尺八音楽の特徴

2. 教材 尺八曲 《巢鶴鈴慕》(鶴の巣籠)

### 3. 題材目標

尺八音楽に興味・関心をもち、尺八の音色、奏法などを知覚・感受しながら、要素や構造と曲想との関わり、尺八音楽の特徴と音楽の多様性を感じ取って、解釈したり価値を考えたりし、よさや美しさなどを味わい、尺八音楽のよさを世界へ発信する。

### 4. 評価計画

評価の観点	評価規準	評価方法
音楽への関心・意欲・態度	① 尺八や尺八音楽を形づくっている要素や構造に関心をもち、尺八音楽のよさなどを味わう学習に主体的に取り組もうとしている。	発話 観察
	② 音楽の多様性に関心をもち、尺八音楽のよさを世界に発信する学習に主体的に取り組もうとしている。	発話 観察
鑑賞の能力	① 尺八の音色、奏法や息遣いによる音色や強弱の変化、奏法による旋律、音高の微妙な変化などの要素を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じている。	発話 WS
	② 音楽の特徴から音楽の多様性を感じ取り、解釈したり価値を考えたりしたことを人に伝えられるようにまとめている。	発話 WS

5. 授業展開

 : 見つける
  : 考える
  : 生み出す
  : 広げる

学習活動の内容と教師の発話例	指導上の留意点	評価
① 《巢鶴鈴慕》の冒頭部分を聴き、尺八の特徴（構造、音色、奏法）を理解する		
 <ul style="list-style-type: none"> <li>・(鑑賞後)「この音は何という楽器の音だと思いますか？」</li> <li>・「尺八の音色ってどんな感じがするかな？」</li> <li>・「この尺八を見て、リコーダーとの共通点と相違点をさがしてみよう。楽器の構造(つくり)と音色に注目してみよう。」</li> <li>・「尺八は指孔は5つしかないのに、いろいろな音を出せるんだね。そのために尺八にはいろいろな奏法があるからなんだよ。これから尺八の奏法を紹介するDVDを見ます。どんな奏法から、どんな音色や旋律が生み出されるかに注目してみよう。WSの3に書いていってね。」</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・《巢鶴鈴慕》の冒頭部分を聴かせ、音色から楽器名を考えさせる。</li> <li>・オノマトペで表してもよい。</li> <li>・感じたことを発表させる。</li> <li>・生徒の発言から、音色に対する知覚と感受を整理する。</li> <li>・尺八(あれば実物)を見せて、構造(竹でできている、指孔は5つ、歌口の形など)や音色の特徴を見付け出させる。見つけたことをWS2に記入させる。</li> <li>・《巢鶴鈴慕》に使われている尺八の代表的な奏法(カリ、メリ、ユリ、スリ、ウチ、オシ、コロコロ、ムラ息、タマ音)を取り上げ、知覚した音を図形でWS3に記入させる。</li> <li>・記入した図形を発表させ、板書する。</li> </ul>	関① 鑑①
② 尺八や楽曲の背景にある文化・歴史を理解する		
 <ul style="list-style-type: none"> <li>・「尺八という楽器は、いつ頃からどんな人たちが吹いていたんだろうね。」</li> <li>・「この曲は《巢鶴鈴慕(鶴の巣籠)》といって、鶴が出てくるんだけど、鶴と聞いて思い出すものは何だろう？」</li> <li>・「いろいろな昔話に出てくるように昔、鶴は日本人にとって身近な鳥だったんです。それに、鶴の夫婦はとても仲が良くて死ぬまで一緒にいるとか、子どもをととても大切に育てるとか、長生きする鳥だということが知られていて、『愛情と長生きのシンボル』とされているおめでたい鳥なんですね。ご祝儀袋にも鶴が描かれているのは、『鶴のようにいつまでも夫婦仲良くしてください』というメッセージがこめられているんだね。日本の素敵な文化ですね。」</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・尺八の歴史について説明する。</li> <li>・WS4に記入して対話させ、適宜、板書する。 予想される例: ・「鶴の恩返し」「千羽鶴」「鶴は千年」など。</li> <li>・鶴の飾りのついたご祝儀袋を見せて説明すると理解しやすい。</li> </ul>	↓
③ 《巢鶴鈴慕》を鑑賞し、尺八の音色、奏法や息遣いによる音色や強弱の変化、奏法による旋律、音高の微妙な変化などの要素を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を受感する		
 <ul style="list-style-type: none"> <li>・「この曲は、鶴が誕生して、鶴の親が子どもを育てて、その子どもが大きくなって遠くへ旅立って行って、親が最後に力尽きて死ぬ・・・という鶴の親子の様子を音楽で描いた曲です。」</li> <li>・「まず曲の初めの部分を聴きます。どんな奏法や旋律に注目したか、たとえば『ウチの奏法』や、『タリーラリーという旋律』というように。そして、その部分から、鶴のどんな様子を想像したか、例えば、鶴の親が2羽並んで楽しそうに仲良く飛んでいる様子、というような感じで聴いていって下さい。聴きながらでも聴いた後でもWS6にそれを書いてくださいね。」</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・《巢鶴鈴慕》の描く内容を知らせる。</li> <li>・鶴の鳴き声を聴かせてWS5に記入させ、鳴き声も尺八で表現していることを知らせる。</li> <li>・知覚・感受したことをWS6に記入して発言させ、交流させる。</li> <li>・知覚と感受を関わらせていく。</li> </ul>	関① 鑑①

<p>(曲の中間部分、曲の終わりの部分もそれぞれ同様に行う。)</p>		<p>↓</p>
<p><b>④ 音楽の特徴から音楽の多様性を感じ取って、解釈したり価値を考えたりし、尺八音楽のよさを味わう</b></p>		
<p>↑ ↓</p> <p>・「これまで知らなかった尺八のよさを、たくさん見つけることができたと思います。では、皆さんが見つけ考えたこの曲や尺八のよさをまとめてみましょう。」</p>	<p>・WS7に批評文を書く。</p>	<p>関② 鑑②</p>
<p><b>⑤ 尺八音楽の魅力を世界に発信する</b></p>		
<p>↑ ↓</p> <p>・「みんなが見つけたたくさんの尺八音楽のよさをまとめて、日本の文化としての尺八音楽を、学校のホームページを通じて海外の人に紹介しよう。」</p>	<p>・尺八音楽のよさをグループあるいはクラスで発表し合い、まとめる。</p> <p>・できあがったものを英語科と協力して英文に訳す。(英語科の授業の中で生徒が英文に訳す活動ができるとういが、それが難しければ教師に訳してもらおう。)</p> <p>・ホームページ担当者と協力して、授業紹介コーナーを設け、尺八を紹介する英文を掲載する。</p> <p>・その後の授業で、学校のホームページに英文に訳された批評文が掲載されたことを生徒に伝える。</p>	<p>↓</p>

## 尺八の音楽の魅力を見つけよう

そうかくれいほ

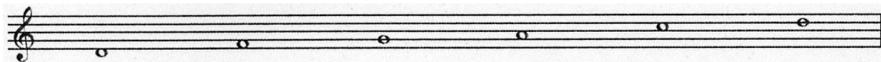
鑑賞曲名：「巢鶴鈴幕（鶴の巢ごもり）」作曲者不詳（18世紀半ば頃）

### 1. 尺八ってどんな楽器？

尺八は、奈良時代に大陸から雅楽と一緒に伝わった古代尺八と、鎌倉時代に僧が中国から伝えたといわれる普化尺八がある。江戸時代には「虚無僧」といわれる僧たちが、普化宗という宗派を作ってお経を唱える代わりに尺八を吹いた。尺八は竹から作られる。

約54cmの長さで、昔風にいうと「一尺八寸」になる。ここから「尺八」という名前がつけられた。尺八の穴は前に4つ、後ろに1つ、合計5つある。

<尺八の音階>



### 2. 尺八の特徴・・・・・・・・尺八とリコーダーの、つくりや音色を比べてみよう・・・・・・・・

### 3. 尺八のさまざまな奏法

奏法の分類	奏法の名前	演奏方法	音の図形
あごによる奏法	カリ	あごを出すようにして吹く。	
	メリ	あごを引くようにして吹く。	
	ゴリ	あごを細かく動かす。	
指による奏法	スリ	指を少しずつ動かす。	
	オシ	ふさいでいる音を瞬間に離し、またふさぐ。	
	ウチ	指穴を打つ。	
	コロコロ	指穴を押さえたり離したりを素早く繰り返す。	
息による奏法	ムラ息	息を強く吹き込んで激しく吹く。	
	タマ音 <sup>ね</sup>	巻き舌などを使って吹く。	

4. 鶴と日本人との深いかわり \_\_\_\_\_

5. 鶴の声ってどんな声？

鳴き声 「 \_\_\_\_\_ 」

何の奏法で表していると思う？ \_\_\_\_\_

6. 場面を想像しよう (鶴の誕生～成長～親子の別れ～親鳥の死)

	音楽の特徴	想像した鶴の様子や情景
〈1〉 初めの部分		
〈2〉 中間の部分		
〈3〉 終わりの部分		

7. まとめ

「棠鶴鈴慕」を鑑賞し、この曲や尺八のよさを自分なりに伝える文を書こう。

キーワード: 批評の貢献 演奏者への発信 表現と鑑賞のつながり

### 題材の趣旨と学習指導のポイント

批評の能力を身につけると、音楽に対する思考力、判断力、そしてそれを伝える表現力が、生徒の内に生成されます。一方、表現した批評は、鑑賞した音楽を一層豊かなものとして新たな生成を導きます。そもそも批評は、「作者と鑑賞者たちに指針と手がかりを与える活動」(佐々木健一(2006)『美学辞典』東京大学出版会、p.228)という目的をもつものです。

この学習では、教師が演奏者になり、その演奏に対して生徒が批評し、その批評によって演奏の質が高まっていくことを通じて、演奏の向上に自分たちの批評が貢献できたことを実感させるものです。

先生が演奏するという事は、生徒にとってとても魅力的なことです。加えて、自分たちの意見によって演奏される音楽がその場でどんどん変わっていくことは、批評することは音楽を創っていくことに貢献し、鑑賞は創造的なことだという理解がもたらされるでしょう。また、意見を伝える時、自分の言いたいことが的確に演奏者に伝わるような「言葉」が大事になることがわかるでしょう。またその時、音楽用語を用いれば便利だということもわかってくると思います。

本事例ではピアノ演奏になっていますが、その他の楽器であっても、歌唱であっても構いません。また演奏する楽曲は、短いもので、生徒にとって表現の工夫を幅広く考えることのできるものがふさわしいと思います。また、外部講師として演奏家を招いた時もこのような場を設けることにより、単に鑑賞するだけではなく、鑑賞の学習として生徒にとっても、また外部講師にとっても意味のある時間になることでしょう。

教師と生徒のやり取りは、対話を中心に進められます。教師は、指導者、司会進行、演奏の3つの役をこなしていくこととなります。生徒一人ひとりの意見を大事にし、同時にそれらの意見をまとめていく技量が求められますが、経験を重ねていくうちに、楽しい役割として感じるようになると思います。

1. 指導内容 批評がもたらす音楽表現の変容

2. 教材 千住明作曲《Still Blue》

### 3. 題材目標

- 1 自分の批評によって音楽が創り変えられていくよろこびを体験する。
- 2 音色、速度、強弱などの要素の働きや、楽曲全体の雰囲気などを知覚・感受し、自分のイメージに基づいた意見を適切に述べる。
- 3 批評によって音楽が変容したことを知覚・感受し、創造的に鑑賞する。

### 4. 評価計画

評価の観点	評価規準	評価方法
音楽への関心・意欲・態度	① 自分の批評によって音楽が創り変えられていくよろこびを感じている。	発話
鑑賞の能力	① 演奏される音楽に対し、知覚・感受したことと自分のイメージに基づく改善点を、音楽用語などを用いて適切に表現できる。	発話 配布楽譜
	② 変容した音楽について、その特徴を具体的に述べ、味わって聴いている。	発話

5. 授業展開

 : 見つける    
  : 考える    
  : 生み出す    
  : 拡げる

学習活動の内容と教師の発話例	指導上の留意点	評価
<p>① 平凡に演奏される《Still Blue》を鑑賞する</p> <p>                  ・「これから先生がピアノを演奏します。上手に弾くから聴いてね。」                  ・(演奏後)「Aさん、どうでしたか？」                  ・「Bさんは？」                   ・「そうですね。それではこれから、皆さんから意見をもらいながら、少しずついい音楽にしていこうかな。」                   ・「ではもう1度弾いてみます。弾き終わった後で、皆さんの改善案を聞きますから、『もっとこうの方がいい』と思うことを、楽譜にメモしながら聴いてください。」             </p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・少人数のクラスであれば、ピアノを囲み、皆で対話がしやすいように机や椅子を配置しておく。</li> <li>・音色の変化、強弱やアーティキュレーションなどをつけずに平凡に弾く。</li> </ul> <p>(予想される生徒の発話例)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「いい曲だったけど、何か物足りないような気がする。」</li> <li>・「なんか、感情がこもっていない。」</li> </ul> <ul style="list-style-type: none"> <li>・曲名、強弱、テンポの表示などを削除した楽譜を配布し、その拡大コピーを黒板に掲示する。</li> </ul>	
<p>② 鑑賞しながら意見を述べ合い、それによって音楽が変容し新たに創られていくことを経験する</p> <p>[対話の進め方の例]</p> <p>                     T: (A部を弾き)「安部さん、ここまでのところの先生の演奏はどうでしたか？」                  阿部:「強弱がよくない。」                  (Tは強弱の知覚を確認する)                  T:「強弱がどうだった？」                  阿部:「変化がなかった。」                  (知覚が確認できる。次に改善案を問う)                  T:「そうか、じゃあ、もっとどんな強弱をつけていったらいいかなあ？」                  阿部:「2回繰り返すから、1回目は強めで2回目はそれより弱くした方がいい。」                  T:「なるほど。飯田さんは強弱についてどう思いますか？」                  飯田:「私は逆に、1回目は弱め、2回目は強めにした方がいいと思います。」                  T:「よし、じゃあ、阿部案と飯田案の両方を弾いてみるよ。」                  T:(2パターン弾き)「上野さんは、どちらが好きですか？」                  上野:「飯田案の方が、ぼくはしっくりきました。」                  (上野のイメージを確認しながら理由を問う)                  T:「それはどうしてかな? 上野さんは頭の中にどんな情景が浮かんだのかな?」                  上野:「なんか、この曲って夜が明けていくような雰囲気があるから、最初から強いよりは、だんだんだんだん明るくなっていくように、最初は弱く始めた方がいいように思います。」                  T:「なるほど、上野さんのイメージでは飯田案が合っていることがよくわかりました。じゃあ、ここは飯田案を採用することにしようか。阿部さんの意見も大事にしておくからね。感じ方はいろいろあっていいんだからね。」                  T:「飯田案を楽譜に書き入れてみるよ。江田さん、なんて書いたらいいかな?」                  江田:「出だしのところは『弱め』、3小節目は『1回目より少し強く』。」                  (拡大楽譜に「弱め」、「1回目より少し強く」と記入する)                  T:「こうして日本語で示すのもいいなあ。もしもっと簡潔に音楽記号で書くとしたら何を書きますか?」                  岡田:「最初は <i>p</i>、3小節目は <i>mp</i> かな。」                  笠原:「えっ、<i>pp</i> と <i>mp</i> の方がいいよ。違いがもっとはっきりするから。」                  (中略)             </p>		<p>関① 鑑① 鑑②</p>

T:「全体的な雰囲気として、先生の演奏どうでしたか？」  
 (楽曲全体について問う)

原田:「なんか、先生の弾き方、雑なような気がする。もっと、優しく弾いてくださいよ。」  
 (原田がどのようなイメージをもっているかを問う)

T:「おう、なかなか言うねえ。この曲の全体的な雰囲気って、原田さんはどんなイメージでしたか？」

原田:「澄み切った空のようかなあ。」

樋口:「最初は、春が来て動物が冬眠から覚めようとしている感じかな。途中のところは、外に出ようかまだ寝ていようか迷ってもぞもぞしている感じで、最後は決意して外に出て大きくあくびした感じかなあ。」

T:「なるほど、なんとなく樋口さんのイメージ、先生もわかる気がするよ。『あくびする』って言ってくれたけれど、もしかしてこのところじゃない？」(D部終末部の大きなクレッシェンドの箇所を弾く)

樋口:「あっそうそう、そこです。」

T:「よし、そのところへ来たら、樋口さんの言う『あくび』をイメージでして弾いてみるね。」(楽譜に「あくび」と書く。)

T:「それでは、最後に、みんなから言われたことに注意して、でも、先生だって、本当は弾きたいイメージがあるから、それをみんなに伝えるような気持ちで弾いてみるよ。」

T:(掲示の楽譜を確認しながら、全曲を通して弾く。弾き終わった後で)「皆さんのおかげで、いい演奏になったでしょ。鑑賞して、思ったことを述べたり書いたりするってことは、音楽をもっといいものにするためのメッセージでもあるんだよ。今日は、演奏者がここにいたからすぐに反映できたけれどね。」

T:「皆さんの手元にある楽譜は、強弱などや、曲名を消してあるんですが、そこに先生が拡大楽譜に書きこんでいったように、今度は皆さん自身のイメージに基づいて、配布した楽譜に言葉や音楽記号で指示したいことを、次の時間までに書いてみてください。」

T:「この曲の題名や、記号などが書いてある元の譜面は、次の時間に配りますので、自分が書き込んだものと比べてみましょうね。」

### ③ 書き入れた楽譜を共有し、それに基づく演奏を鑑賞する

- 「皆さんに、Cさんと、Dさんと、Eさんの楽譜を配りましたが、先生が見ながら、それぞれの要求通りに頑張って弾いてみるね。」
- 「Cさん、先生の演奏、Cさんのイメージ通りに弾けていたかな？」
- 「Fさん、Dさんの要求通りに弾けていたと思いますか？」
- 「それでは、この曲の元の楽譜を配ります。作曲者がつけた曲名や表現の指示は、皆さんのイメージと比べてどうでしたか？」
- 「音楽を演奏する時、作曲者のイメージを楽譜から読み取ることが大事ですし、それと同じぐらい、演奏者が自分自身のイメージを沸かせ、それを表現していくことも大事なんだね。」

- 生徒が楽譜に示したように弾き、その生徒に批評を求める。
- その生徒以外にも求める。
- 作曲者のイメージと自分のイメージの違いを考えさせる。
- 再現芸術といわれる「演奏」の意味を伝える。

鑑②

## 6. 資料

### ■ 資料 拡大楽譜に記入していくシーン



(宮下 俊也)

### 題材の趣旨と学習指導のポイント

郷土の伝統芸能は、全国各地で、四季折々の豊かな自然と人々の暮らしの中ではぐくまれ、伝承されてきたものです。それぞれに、他の地域にはない特徴やよさがみられます。21世紀は地方の時代と言われ、マスメディアでも各地域の名勝や食文化、伝統芸能などを紹介したものが多くみられるようになりました。しかし、時代の流れとともに、過疎化や少子化に伴う伝統芸能の後継者の問題や音楽についての価値意識の変化などで、郷土の伝統芸能や音楽が危機的な状況にあるところも少なくありません。

ここでは、自分たちの地域に存在する伝統芸能や音楽を今一度みつめ、学び、それを他の地域の中学生に対して発信していくことを行います。それにより、異なる2つの地域に暮らす生徒が互いにそれぞれの文化を学び、認め、尊重し合う気持ちを高めていくことができるでしょう。そして、自分が見いだした伝統芸能や音楽に対する価値を発信することが、伝統文化の存続や発展に貢献するという実感がもてるものと期待されます。

また、本事例は全国どこでも可能な実践だと思えます。交流の方法は、生徒が書いた文章を相互に交換し合いました。電子メールでも可能ですが、生徒直筆のワークシートを交換し合うのも、温かみが伝わってよいものだと思います。

1. 指導内容
  - ・ 神楽の特徴とその文化的背景
  - ・ 他地域の神楽とその文化的背景
2. 教材
  - ・ 熊本県芳野地域の神楽
  - ・ 熊本県蘇陽地域の神楽
3. 題材目標
  - 1 神楽の特徴とその背景となる文化や生活との関わりを理解し、他の地域の中学生と鑑賞で交流することを通して、音楽文化の共通性や多様性に興味・関心をもって鑑賞する学習に主体的に取り組む。
  - 2 神楽の特徴を知覚・感受し、自分にとってのその音楽の意味や価値を考え、他者に対して表す。
  - 3 他の地域の神楽との共通点や相違点、固有性などから、音楽の多様性を理解して、そのよさを味わって鑑賞する。

#### 4. 評価計画

評価の観点	評価規準	評価方法
音楽への関心・意欲・態度	① 神楽の音楽の特徴や、音楽と演技（舞）との関わりに興味・関心をもち、鑑賞する学習に主体的に取り組もうとしている。	発話 観察 WS
	② 他の地域の中学生と鑑賞で交流することを通して、文化の共通性や多様性を考えることに興味・関心をもっている。	観察 WS
鑑賞の能力	① 神楽の音楽の音色や旋律、リズム、速度の変化などを知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じ取って、関連させて聴いている。	発話 WS
	② 神楽の音楽の特徴と、神楽と地域の人々との関わりや神楽をとりまく現状などを関わらせて聴き、自分にとっての神楽の意味を考え他者に対して表している。	発話 WS
	③ 他の地域の神楽との共通点や相違点、固有性などから、音楽の多様性を理解して、味わって鑑賞している。	発話 WS

5. 授業展開

 : 見つける
  : 考える
  : 生み出す
  : 拡げる

学習活動の内容と教師の発話例	指導上の留意点	評価
<p><b>① 「芳野の神楽」の音楽を聴いて（楽器を弾いてみる体験をして）、音楽の特徴を捉える</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>「芳野の神楽の音楽を聴きます。いつもは神楽の舞を見ながらこの音楽を聴いていることと思いますが、今日は音楽だけに耳を傾けて聴いてみてください。」</li> <li>「どんな気持ちになりましたか。または、どんな雰囲気を感じますか？WS(その1)の1に記入しましょう。」</li> <li>「となりの人と、意見を出し合ってみましょう。」</li> <li>「もう1度音楽を聴き、今度は音楽の特徴を見つけてみましょう。」</li> <li>「特徴を確認してみましょう。」</li> <li>「この音楽の冒頭の部分の太鼓と笛をそれぞれ鳴らしてみよう。」</li> <li>「太鼓はどのようなリズムや音などに特徴がありましたか？」</li> <li>「笛はどのような旋律や音などに特徴がありましたか？」</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>WS(その1)の1に記入させ、となりの人と意見を交換させる。 (予想される生徒の発話例)                     <ul style="list-style-type: none"> <li>「なんだか懐かしい感じがする」、「楽しい」、「どきどきする」、「何かが出てきそう」。</li> </ul> </li> <li>WS(その1)の2に記入させ、全体で発表させ確認する。</li> <li>範奏と一緒に、太鼓は手で机を叩く、笛は篠笛で吹くなどして、音楽の一部を体験することで、あらたに音楽の特徴をみつけるようにする。 (予想される生徒の発言例)                     <ul style="list-style-type: none"> <li>「だんだん速くなるような打ち方をするときがある。強くなったり弱くなったりして波うつように叩いているんだな。」</li> <li>「指打ちをしたり、飾りの音たくさん使ったりしている。実際に弾いてみると難しいな。」</li> </ul> </li> </ul>	<p>関①</p>
<p><b>② 音楽から心に浮かんだ自分のイメージと音楽の特徴を関連させて聴き、述べ合う</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>「もう1度音楽を聴いてみましょう。最初にどんな気持ちになったかをメモしていますが、何か変化があるかもしれません。それをふまえて、あなたの気持ちとこの音楽を形づくっている要素を関連させてWSの表にまとめてみましょう。矢印などを使って書き表してみようね。」</li> <li>「各班で発表し合おう。その際、他の人の意見を聴いて、なるほどと思ったことや、新たに思い浮かんだイメージや発見した特徴があったら、ペンの色を変えてメモしておこうね。」</li> <li>「音楽を聴いて確かめてみましょう。」</li> <li>「次の時間は、みんなの生活と神楽がどのように関わっているのかを考えてみましょう。」</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>最初にWS(その1)の1に記入した気持ちとの変化にも注目させながら、WS(その1)の2に記入させる。 (予想される生徒の発話例)                     <ul style="list-style-type: none"> <li>「はじめは気づかなかったけれど、太鼓のだんだん速くなる打ち方で、今から何かが始まるという感じがしてドキドキしてくるようだな。」</li> <li>「毎年お祭りで、聞こえてくる笛の音にわくわくしていたのは、指打ちをして飾りの音を出し華やかな感じにしていたからかな。」</li> </ul> </li> </ul>	<p>鑑①</p>
<p><b>③ 芳野の神楽が、この地域に住む人々の生活とどのように関わってきたのかを考え、対話する</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>「芳野の神楽の歴史や、人々とどのように関わっているかを考えてみましょう。総合的な学習の時間に神楽の班が発表しましたが、もう1度、発表してもらいます。」</li> <li>「それでは、『神楽と人々の関わり、生活』について、自分の気持ちや考えをWS(その1)の2に書いてみましょう。」</li> <li>「班で意見を出し合ってみましょう。WS(その1)の3になるほどと思ったことはメモしておくといいですね。」</li> <li>「現在芳野に住んでいる皆さんの神楽への思いを聴かせてください。」</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>総合的な学習の成果を生かす。                     <ul style="list-style-type: none"> <li>芳野の神楽の歴史</li> <li>神楽と人々との関わりや生活</li> <li>過疎化と後継者の問題 など</li> </ul> </li> <li>(予想される生徒の記述例)                     <ul style="list-style-type: none"> <li>「神楽があるとみんなが集まっているいろいろ話をする。交流の場になっていると思う。」</li> <li>「10月の祭りはみかん農家でみんな忙しい。それでも神楽をすることに何か意味があると</li> </ul> </li> </ul>	<p>鑑②</p>

	思う。」	
<p><b>④ 芳野の神楽を視聴し、自分にとっての芳野の神楽の価値や意味を考え、紹介文を書く</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>「これまで学習してきたことをもとに、この芳野の神楽を他の地域の中学生に紹介しましょう。あなたが感じた芳野の神楽のよさを文に表し、しっかりアピールしてください。」</li> <li>「書けたらとなりの人と読み合わせをしてみましょう。あらたに思いついたことがあれば、書き足してもいいですよ。」</li> <li>「紹介ボードに貼ります。他にも、この芳野の生活がわかるように、総合的な学習で学習したことの中から紹介したいことを選んで作ってみましょう。」</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>前時での音楽の特徴の知覚・感受や本時での感情の変化も文に表しながら、自分にとっての芳野の神楽の価値や意味を考えて、批評文を「他校生へ紹介する紹介文」というかたちで書く。</li> <li>総合的な学習の成果を活かして、簡単な説明文や写真を紹介ボードに貼りつける。</li> <li>芳野の神楽、自然、農業、観光 等</li> </ul>	<p>関② 鑑②</p>
<p><b>⑤ 他地域の神楽の音楽を鑑賞し、芳野の神楽との相違点や共通点を見つけ対話する</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>「熊本県と宮崎県境にある蘇陽中学校の皆さんと鑑賞学習で交流します。まず、この地区にある二瀬本神社に伝わる二瀬本神楽を聴きましょう。どんな特徴があるでしょう。どんな気持ちになるでしょうか。WS(その2)の1に記入しましょう。」</li> <li>「もう1度音楽を聴き、今度は音楽の特徴を見つけましょう。あなたの気持ちや曲の雰囲気などと関連させて聴き、WS(その2)の2に記入しましょう。」</li> <li>「音楽の特徴など、芳野の神楽と違うところや似ているところがあるでしょうか。WS(その2)の3に記入しましょう。」</li> <li>「班で出し合しましょう。その際、あらたな発見があったらメモをとっておくといいですね。」</li> <li>「蘇陽中学校の皆さんが制作してくれた紹介ボードも参考にしながら、この神楽を育んだ蘇陽地域についても考え、『二瀬本神楽の音楽の良さ』について書きましょう。」</li> <li>「2人で読み合い、話し合ってから2人で1つの批評文を書きましょう。蘇陽中学校の皆さんに送りますよ。」</li> </ul>	<p>(予想される生徒の記述例)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>「太鼓の音が低くて体にずんずんと響く感じ。芳野の神楽の太鼓の響きとは違う。」</li> <li>「途中からテンポが速くなり、太鼓と鈴が同じリズムを繰り返している。こちらまで体がしげんにのってくる感じがする。聴いていて楽しい。」</li> <li>「使われているお面は何種類もあるよ。芳野は鬼の面だけだけど。」</li> <li>「芳野のように、神楽がなくならないようにみんなで守ってきたのだと思う。神楽を大切に思う気持ちは芳野と一緒にのではないかな。」</li> <li>これまでの学習をもとに、自分が感じる二瀬本神楽の良さについて、WS(その2)の3に批評文を書く。</li> <li>ペアで批評文を読み合い、対話しながら2人で1つの批評文(蘇陽中へ送る)を書く。</li> </ul>	<p>関② 鑑②</p>
<p><b>⑥ 他校生が書いた『芳野の神楽の良さ』の記述を読み、再度、芳野の神楽を鑑賞する</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>「先日、皆さんが書いた『二瀬本神楽の良さ』を蘇陽中学校に送りました。そして、今日、蘇陽中学校の皆さんが書いた『芳野の神楽の良さ』についての文章が届きました。それをプリントで配布しますので読んでみましょう。私たちが気づかなかった特徴や良さを発見してくれているかもしれませんよ。」</li> <li>「では、もう1度、芳野の神楽を聴いてみましょう。」</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>両校の教師があらかじめ交換しておく。</li> <li>自分たちが気づかなかった指摘について確認合う。</li> <li>他校の指摘を確かめながら聴く。</li> </ul>	<p>鑑③</p>
<p><b>⑦ 音楽の多様性を理解して、両方の曲を鑑賞し、芳野の神楽のこれからについて考えを書く</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>「今回の学習で蘇陽地域の二瀬本神楽に出会い、再びこの芳野の神楽についていろいろ考えたことでしょう。学習のまとめとして、『芳野の神楽のこれから』について、あなたなりの考えを書きましょう。」</li> <li>「今回、交流するためにいろいろと考え、何らかのかたちでたずさわっていかうとする気持ちをもって紹介文を書きましたね。このような行動でも十分、地域文化の伝承や創造に貢献していることにつながっていますよ。」</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>意見を出し合い、対話をした後でWS(その2)の5に記入させる。</li> </ul>	<p>鑑③</p>

6. 資料

■ 資料1 ワークシートの例

郷土の伝統音楽～良さを再発見し他の地域と交流しよう（その1）～  
2年 番 氏名

- 1 芳野の神楽の音楽を聴いて、どんな気持ちになりますか。またどんな雰囲気を感じますか。メモしておこう。
- 2 音楽を聴いたり篠笛や太鼓で演奏したりして、あなたの気持ちと音楽の要素との関連について考えてみましょう。

見つけた音楽の特徴・要素	関 連 (矢印などで)	あなたの気持ち 見つけた音楽の特徴や、要素が生み出す雰囲気

※他の人の発表を聴いて、新たに感じたことをつけ加える場合は、色を変えて記入しよう。

- 3 『芳野の神楽』の次のことについて、意見を交換しよう。

〇神楽と人々との関り、生活    〇地域文化の伝承    〇地域に生きる

《私の意見》	《他の人の意見》

- 4 他校生に『芳野の神楽』を紹介します。  
『芳野の神楽』の音楽のよさについて、また、自分にとっての『芳野の神楽』について書きましょう。

---



---



---



---



---



---



---

郷土の伝統音楽～良さを再発見し他の地域と交流しよう（その2）～

2年 番 氏名

- 1 『二瀬本（にせもと）神楽』の音楽を聴いて、どんな気持ちになりますか。またどんな雰囲気を感じますか。メモしておこう。

- 2 あなたの気持ちと音楽の要素との関連について考えてみましょう。

見つけた音楽の特徴・要素	関 連 (矢印などで)	あなたの気持ち 見つけた音楽の特徴や、要素が生み出す雰囲気

※他の人の発表を聴いて、新たに感じたことをつけ加える場合は、色を変えて記入しよう。

- 3 『二瀬本神楽』と『芳野の神楽』を聴きくらべて、どんなところが違いましたか。どんなところが似ていましたか。

《違ってるところ》	《似てるところ》

- 4 蘇陽中学校の人たちへ、『あなたが感じる二瀬本神楽のよさ』について書きましょう。

---



---



---



---



---

- 5 『あなたが感じる芳野の神楽のよさや価値』について書きましょう。

---



---



---



---



---

■ 資料2 生徒が記述したワークシートの例 (その1)

郷土の伝統音楽～良さを再発見し他の地域と交流しよう～ (その1)

2年 氏名

1 芳野の神楽の音楽を聴いて、どんな気持ちになりますか。メモしておこう。

- ・楽しい気持ち。
- ・気持ちが高ぶってくる。

2 音楽を聴いたり篠笛や太鼓で演奏したりして、あなたの気持ちと音楽の要素との関連について考えてみましょう。

見つけた音楽の特徴・要素	関連 (矢印などで)	あなたの気持ち 見つけた音楽の特徴が生み出す雰囲気
強弱が太鼓の乱打の所では、 最初弱く後が強くそして最後に また弱くたなっていた。  ・太鼓 (小太鼓) ・すず <small>たんぱんおそから</small> ・笛 <small>たんぱんおそから</small> ↓ <small>たんぱんおそから</small> 速度が速くなりたり遅くなりたりを 繰り返していた		場を盛り上げようとしている。 太鼓の力強い音。 いきやか。 あかるい。 なごむ。

※他の人の発表を聴いて、新たに感じたことを付け加える場合は、色を変えて記入しよう。

3 『芳野の神楽』の次のことがらについて、意見を交換しよう。

○神楽と人々とのかわり、生活 ●地域文化の伝承 ○地域に生きる

《私の意見》	《他の人の意見》
・神楽の伝統をしっかりと後世に伝えるのが一番大切だ。もっと興味をもってもらおう。 ・地域の人とのかわりが大切だと思ふ	ふれあい！ 交流の場、情報収集の場。

4 他校生に『芳野の神楽』を紹介します。

『芳野の神楽』の音楽の良さについて、また、自分にとっての『芳野の神楽』について書きましょう。

芳野の神楽は笛のびびきのある音と太鼓の力強い音、鈴の音と舞が一つになっているすばらしい芳野の伝統芸能です。阿蘇にも神楽はあると思いますが、また一味ちがった芳野の神楽はどうですか？ その地域ごとに変化した神楽はどれも味があっていいですね。このように神楽にもたくさん良さがありますよ。

ぼくは、実際に保存会に入り太鼓をたたいているのですが、たくさんむずかしい所があり、ゆからしっかりと受け継ぐのも大変ですが、ぼくは芳野の神楽が好きなのでずっと続けていきたいです。

■ 資料3 生徒が記述したワークシートの例 (その2)

郷土の伝統音楽～良さを再発見し他の地域と交流しよう (その2)～

2年 氏名

1 『二瀬本 (にせもと) 神楽』の音楽を聴いて、どんな気持ちになりますか。メモしておこう。

- ・神が降りてきているような感じ (若干 暗い・お経ようだ)
- ・神楽という感じがあまりない。
- ・楽しい

2 あなたの気持ちと音楽の要素との関連について考えてみましょう。

(音楽の多様性)

見つけた音楽の特徴・要素	関連 (矢印などで)	あなたの気持ち 見つけた音楽の特徴が生み出す雰囲気
① <b>楽器</b> ・笛が速い(リズム) ⇒ 気持ちいいになった。 ・太鼓・笛・鈴が使われていた。 ・太鼓⇒ 低くてずっしりとしたムキ	→	・神が降りてきているような。
② <b>拍</b> ・他(成(半拍)・2拍子系・2音くらゐ旋律。 ・他(太鼓と他(鈴)がなっている。同じリズムの くり返し	→	・お経のような感じ
③ <b>太鼓</b> ・同じリズムのくり返し(速い) ・鈴が少し早くなっている。	→	・楽しい (テンションが上がる) ・明るい

※他の人の発表を聴いて、新たに感じたことを付け加える場合は、色を変えて記入しよう。

3 『二瀬本神楽』と『芳野の神楽』を聴きくらべて、どんなところが違いましたか。どんなところが似ていましたか。

《違ってるところ》	《似てるところ》
○歌が途中から入ってくる ○リズム(拍子が速いところがある) ・テンポが遅いところ ・楽器の高さ	・太鼓・笛・鈴が使われているところ (使われている楽器)  (・踊りがある)

4 蘇陽中学校の人たちへ、『あなたが感じる二瀬本神楽のよさ』について書きましょう。

二瀬本神楽のよさは、芳野の神楽にない「歌」や「リズム」がある事だと思います。歌が入る事によって明るく楽しめるし、リズムは、速くなって、のりりになれるので良いなあと思いました。また、芳野の神楽と共通点と  
思った事は、たこさんの人々が関わって1つの「神楽」ができていくという事です。たこさんの人々が  
関わらないと、伝統は壊れてしまうので、地域の人々との協力と団結が必要だと思います。だから、こ  
れからも地域の人々と協力して生活し、二瀬本神楽のよさである、「歌」と「リズム」、そして、二瀬  
本神楽を支え続けている、阿蘇の自然を守ってほしいです。

5 『あなたが感じる芳野の神楽のよさや価値』について書きましょう。

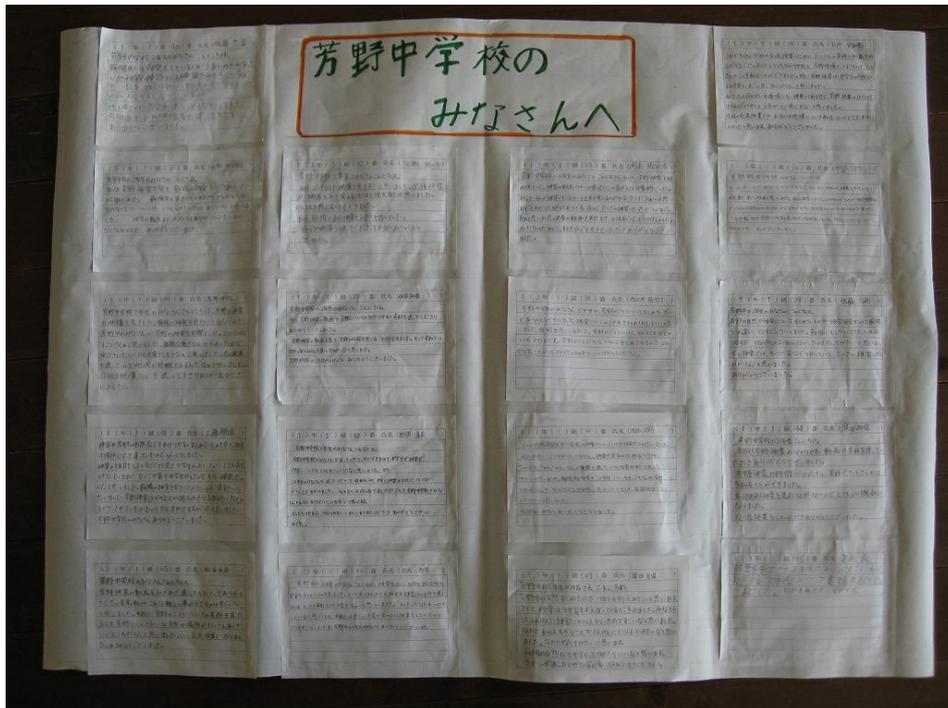
私は、蘇陽中の人たちからのメッセージを読んで、自分達の気持ちが伝わっているように感じたので嬉し  
かったです。その1つは、私達が芳野自然と神楽等の伝統文化を大切に思っているという事が伝  
わっていた事です。とても嬉しかったです。また、これから大切に守ってほしいと思いました。もう1つは、蘇  
陽中の人々が地元にながら二瀬本神楽を見た事がなかったという人が「芳野の神楽を見て、見てみ  
たい」と書いてくれて嬉しかったです。それは、興味がありました人に興味を持ってもら  
うきっかけになったからです。このような事から私もどんどん芳野の神楽を見て、守り続けていきたいと  
改めて強く思いました。

■ 資料4 批評文による交流の実践

芳野中学校から蘇陽中学校へ



蘇陽中学校から芳野中学校へ



(佐久間 敦子)

キーコンセプト: 表現することの意味 演奏者の感情 演奏者への発信

題材の趣旨と学習指導のポイント

感動のない鑑賞活動は、音楽学習として全く意味がありません。人間としての演奏家の人生を知って音楽を聴くと、より深く強い感動を得られることがあります。特に、舘野泉さんの演奏はそうです。

日本を代表するピアニスト舘野泉さんは、ご存じのようにフィンランド、タンペレでの演奏会の途中、脳溢血で倒れ、右手が不自由になりました。しかしその後、懸命なリハビリを続け、左手のための作品を演奏することで復帰を果たされました。復帰後第1回の演奏会の時のことを、舘野さんは次のように記しています。

「病気で倒れてからも、以前のようにこの世界、自然には美しい、不思議な魅力をもったことが数え切れぬほどあり、それはそれで自分の心を満たしてもくれたのですが、やはり演奏することには敵わないのです。1本の手でも描ける充実した世界に触れて、はじめて私はまだ生きている、いや、また生きているとしみじみ思ったのです」。

一時は、「人生でやりたいことは一応やり終えたところで、倒れるべくして倒れたのかなと思います」と語った舘野さんですが、舘野さんの止むことのない音楽への思い、そして舘野さんを支える周囲の人々の深い友情を知ると、音楽で得る感動とは、音楽を創り、奏でる人間に対する感動でもあることを感じずにはられません。

左手のみで弾く舘野さんの演奏と舘野さんの人生、そして舘野さんを支える人々がどのように応援をしているのかを知ることによって得られる感動を、この学習によって多くの中学生に与えたいと思います。そして、この学習をする中学生も、舘野さんから与えられた感動を舘野さんにお返することで人生とは何かを考えていってほしいと思います。

引用は、舘野泉公式サイト(<http://www.izumi-tateno.com/>)より。

1. 指導内容 演奏者の人生を知ることによる新たな感動

2. 教材 舘野泉によるピアノ演奏  
 《3つの聖歌 ー左手のためのー》(AVCL-25138)より  
 ・カッチーニ作曲・吉松隆編曲 《アヴェ・マリア》  
 ・シベリウス作曲・吉松隆編曲 《フィンランディア賛歌》  
 《風のしるしー左手のためのピアノ作品集ー》(AVCL-25028)より  
 ・間宮芳生作曲 《風のしるし・オフフェルトリウム》(舘野泉に献呈) など

3. 題材目標

- 舘野泉さんの人生を知り、演奏を聴いて、人が音楽を創り表現することの意味や、音楽に感動すること、感動をともに分かち合うことに関心をもつ。
- 演奏者の人生を知ることによって新たに得られた感動を経験し、それを言葉で表し伝える。

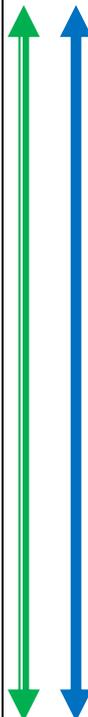
4. 評価計画

評価の観点	評価規準	評価方法
音楽への関心・意欲・態度	① 演奏者の人生を知り、演奏を聴いて、人が音楽を創り表現することの意味や、音楽に感動すること、感動をともに分かち合うことに関心をもつ。	観察 WS
鑑賞の能力	① 舘野泉さんのこれまでの人生を知り、知った時の自分の気持ちを語るができる。	観察 WS
	② 舘野泉さんの人生を知り、その上で演奏を聴いた時の新たな感動を、人に伝えることができる。	観察 WS

5. 授業展開

 : 見つける
  : 考える
  : 生み出す
  : 広げる

学習活動の内容と教師の発話例	指導上の留意点	評価
<p><b>① 《アヴェ・マリア》と《フィンランディア賛歌》を聴く</b></p> <p>・「率直な感想を聞かせてください。」</p>	<p>・館野さんのことは話さず聴かせる。                  ・2度聴かせてもよい。                  ・数名に語らせる。</p>	
<p><b>② 館野さんについて、簡単に説明する</b></p> <p>・「この曲はね、左手だけで演奏する曲なんだよ。」                  ・「この曲を演奏している館野泉さんは、演奏会の最中に突然脳溢血で倒れ、右手が不自由になりました。その後、絶望の淵から復帰し、左手だけで演奏活動を始めました。このCDは館野さんのために左手だけで弾けるように作られた曲で、館野さんが弾いているものです。」</p>	<p>・フィンランドを愛したピアニストであること、病で左手でしか演奏できなくなってしまったこと、この曲は左手だけで演奏できるように館野さんのために書かれた曲であり、それを館野さんが演奏していること、ぐらいを簡単に説明する。</p>	
<p><b>③ 再度、《アヴェ・マリア》と《フィンランディア賛歌》を聴く</b></p> <p>・(鑑賞後)「館野さんのことについて、皆さんにもっと詳しく知ってほしいのです。資料を提示するので、次の時間までにWSのQ1とQ2を完成させてきてください。」</p>	<p>・館野さんについてのより詳しい資料や情報(資料1)を提示したり配布したりし、WSに記入する宿題を出す。</p>	<p>関① ↓</p>
<p><b>④ 館野さんについて、知ったことを発表する</b></p> <p>・「館野さんについて知ったこと(Q1)を発表してください。」                  ・「館野さんのことを知った時の皆さんの気持ちや感想を発表してください。Q2を読み上げてもいいですし、改めて自分の言葉で語ってくれてもいいですよ。」                  ・「館野さんの次の言葉は、人間が生きることと音楽をすることの意味を考えさせられますね。」</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・『長男がブリッジ作曲《3つのインプロヴィゼーション》の楽譜を見つけてくれたのです。第一次世界大戦で右腕を失った友人のピアニストのために書いた作品です。その作品を弾いたとき、氷が割れたのです。蒼い大海原が目の前に現れました。水面がうねり、漂い、爆ぜて飛沫をあげているようでした。自分が閉じ込められていた厚い氷が溶けて流れ去るのが分かりました。』</li> <li>・『音楽をするのに両手であろうと片手であろうと関係ない。左手だけで十分な表現が出来る。なにひとつ不足はない。そのことをしっかりと納得したのです。』</li> <li>・『65年もピアノを弾いてきて、これほどまでに無心に音楽ができるなんて想いもしませんでした。弾けるということがひたすら嬉しくて幸せでただただ夢中できました』</li> <li>・『私を病の深い溝から導いてくれたのは、音楽でした。何十年前にその時誰かのために書かれた左手の音楽であったのです。音楽を愛する人には、いつの時代もどんなことがあっても、音楽を心</li> </ul>	<p>・WS、Q1について数名に発表させる。                  ・発表後、事前にクラス全員または一部のQ2をプリントして配布して確認してもよい。                  ・指導者自身も、館野さんに対する思いを生徒に伝える。</p>	<p>関① 鑑①</p>

の糧に活躍してほしいと願っています。』		 関① 鑑② 
⑤ 舘野さんのために作られた他の曲を数曲聴く	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「それでは、舘野さんの演奏する別の曲をいくつか聴いてみましょう。舘野さんが、どのような気持ちで演奏しているかを想像しながら聴いてみてくださいね。」</li> <li>・指導者が選んだ曲を聴かせる。</li> </ul>	
  	⑥ 舘野さんの人生や演奏に対する感動を書き、舘野さんへ届ける	<ul style="list-style-type: none"> <li>・舘野さんは、『私を病の暗い深い溝から導いてくれたのは、音楽でした。何十年も前にその時誰かのために書かれた左手の音楽であったのです。音楽を愛する人には、いつの時代もどんなことがあっても、音楽を心の糧に活躍してほしいと願っています』と述べておられます。また、舘野さんは、他にも右手が不自由なピアニストのために、左手による作品を作曲家に作曲依頼することや、ハンデをもつ音楽家の支援のために『左手の文庫』と名づけた基金を集める活動をされています。音楽家による音楽による文化・社会貢献って素晴らしいですね。皆さんも大人になったらぜひ、協力を考えてくださいね。」</li> <li>・舘野さんの人生を知った上で音楽を聴くと、また新たな感動が得られたことと思います。皆さんも、舘野さんを応援することで文化・社会貢献が果たせると思うので、皆さんの率直な気持ちを綴って、舘野さんに届けたいと思います。Q3に、この学習で学んだことを含めて、皆さんの感動を書いて、届けることにしましょう。」</li> <li>・舘野さんによる「左手の文庫」について触れ、音楽によって文化・社会貢献を果たせることを伝える。</li> <li>・舘野さんの人生について知ったことを踏まえて、演奏を聴いて得られた感動を、自分の言葉で舘野さんに伝わるように書かせる。</li> </ul> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px; text-align: center;"> <p>送付先:  <a href="mailto:miyashit@nara-edu.ac.jp">miyashit@nara-edu.ac.jp</a>  <small>(マネジメントを通して舘野さんに送ります)</small></p> </div>

6. 資 料

■ 資料1 ワークシートの例

ワークシート

舘野泉さんの人生と音楽

2年 組 番 氏名\_\_\_\_\_

Q1 舘野泉さんについて知ったことを書きましょう。

Q2 舘野さんのことを知って、あなたの思ったことを書きましょう。

Q3

## ■ 舘野泉さんについての情報資料

以下の文献から、適当な個所を適宜コピーして配布する。全員同じものでない方がよい。

- ・舘野泉『左手のコンチェルト ―新たな音楽のはじまり―』（佼成出版）
- ・舘野泉『ひまわりの海』（求龍堂）
- ・小泉英明編著『脳科学と芸術』より、舘野泉「左手のピアニストとしての新生」（工作舎）
- ・舘野泉オフィシャルウェブサイト <http://www.izumi-tateno.com/>

(宮下 俊也)

キーワード: 自分が感じた魅力の要因 友だちが感じた魅力の要因 魅力の共有

### 題材の趣旨と学習指導のポイント

生徒は、音楽の授業や日頃の生活経験の中で、様々な音楽を聴き、自分のなりの感想をもったり、好みの曲を選んだりしています。これは、音楽を聴いて感じ取ったことをもとに、自分なりの価値判断をしている姿の1つと言えるでしょう。しかし、そのように判断した理由が曖昧なため、自分の考えを友だちと共有したり、友だちの考えを聞くことによって自分が感じ取れていなかったその音楽の新たな価値に気づいたりして鑑賞を深めることにはやや不十分な面が見られます。

この題材では、「音楽の魅力を探り、友と伝え合うこと」を大切にしています。複数の曲を聴き、自分の感じ取ったことをもとに、自分が気に入った曲を選択し、その曲を繰り返し聴いてその曲のよさやおもしろさについて友だちと意見交換をしながら、その曲の魅力、音楽を形づくっている要素と関わらせて明らかにし、友だちや、さらには家族に伝え合うことができるように授業を構想しました。

そのことによって、生徒は音楽を深く聴き込んでその音楽のよさを捉えたり、友だちの考えをもとに新たな発見をしたりしながら、鑑賞を深めていくことができるでしょう。

この学習によって、自分の感じた音楽の魅力、音楽を形づくっている要素と関わらせて捉えたり、他者の捉えたことや感じたことを自分なりに解釈したりして、自分なりの価値判断を導きだしながら鑑賞を楽しむ姿が培われていくことが期待されます。そのことで家庭においても音楽についての楽しい会話がはずむように仕組みでいます。

1. 指導内容 感じ取った音楽の魅力の伝え合い

2. 教材 ムソルグスキー作曲・ラヴェル編曲 組曲《展覧会の絵》より  
第1曲《こびと》、第3曲《チュイルリーの庭》、第4曲《ブイドロ》、  
第5曲《卵の殻をつけた雛の踊り》、第10曲《キエフの大きな門》

3. 題材目標

- 1 楽曲を聴いて、言葉や絵で自分の感じ取った印象を友に伝える。
- 2 自分が気に入った1曲を選択し、モチーフとなっている絵や音楽を形づくっている要素を根拠として紹介文を書き、その曲のよさやおもしろさについて友と共有しながら味わって聴く。

4. 評価計画

評価の観点	評価規準	評価方法
音楽への関心・意欲・態度	① 《展覧会の絵》のそれぞれの楽曲のもつ雰囲気の違いに興味をもって活動に取り組んでいる。	観察 WS
鑑賞の能力	① 「リズム」「速度」「強弱」「構成」のいずれか、または複数モチーフとなっている絵の予想の根拠として、妥当な具体例を挙げながら自分の考えをまとめている。	WS
	② 自分がその曲を気に入っている理由を、曲の特徴(音楽を形づくっている要素)に具体的に触れながら記述し、楽曲を味わって聴いている。	発話 WS

5. 授業展開



学習活動の内容と教師の発話例	指導上の留意点	評価
① 《展覧会の絵》が作曲された背景について知る		
<ul style="list-style-type: none"> <li>「これから聴く曲は、ムソルグスキーという作曲家が、35歳という若さで他界した友人ハルトマンの描いた絵から受けた印象を音楽で表した作品です。ムソルグスキーがこの絵を目にしたのは、ハルトマンの遺作展のときだと言われています。」</li> <li>「ムソルグスキーは、亡き友人への思いを大切に、一つ一つの作品を後世の人たちに残したいと考え、10枚の絵をモチーフに、ピアノ組曲としてこの曲を作曲しました。」</li> <li>「後に、この作品に魅力を感じたフランスの作曲家ラヴェルが、オーケストラ用に編曲をしました。皆さんには、そのオーケストラ編曲の演奏で、5曲聴いてもらいます。この曲を聴きながら、自分の心の中に、様々な絵を描いてみてください。」</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>この作品が、ムソルグスキーとハルトマンとの深い友情関係の上に成り立っていることが意識できるように話す。</li> <li>この作品が世に出るきっかけもまた、ムソルグスキーの作曲家仲間への心遣いであったことに触れ、温かい人間関係を感じ取れるようにする。</li> <li>必要に応じて「編曲」について簡潔に説明する。</li> </ul>	
② 《展覧会の絵》を聴き、絵の内容について想像したことをメモし、それをもとに絵の題名をつける		
<ul style="list-style-type: none"> <li>「皆さんには、ムソルグスキーと逆のことをやってもらいたいと思います。この曲を聴いて感じたこと、思い描いた情景を、絵や言葉を使って書き表してみましょう。」</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>2～3分の間隔を空けながら、5曲聴かせ、ワークシート(資料1)に記述するよう促す。</li> <li>記述する際、自分の感じ取ったことを大切にするため、互いに見合わないことを確認する。</li> </ul>	関①
③ この曲のモチーフとなったすべての絵を見て、それぞれの曲の元になった絵を予想したり、「私の選んだ1曲」を決めたりする		
<ul style="list-style-type: none"> <li>「このプリントにハルトマンが書いた10枚の絵(資料は略)があります。皆さんの聴いた5曲の元になっている絵は、どれだと思いますか？ グループで話し合ってみましょう。予想を言ったらその理由も言えるといいですね。」</li> <li>「では、自分の予想を発表してもらいましょう。理由も教えてくださいね。」</li> <li>「自分の感じたことを大切に、予想をしてくれたね。友だちの考えを聞いたら、余計に迷ってしまったという人もいないかもしれないね。」</li> <li>「この5曲の中から、『私の選んだ1曲』を決めてほしいんです。自分が『いいなあ』と思った曲、『この曲はきっとこの絵が元になっているぞ』と思った曲、『この曲、いったい何だ？』と興味や疑問をもった曲など、自分でこの曲をさらに聴いてみたいと思う曲を選んでください。」</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>話し合いによって、1つの結論を導くのではなく、それぞれが感じたことを自由に述べ合えるようにする。</li> <li>予想とその理由を数名に問う。(予想される生徒の発話例)             <ul style="list-style-type: none"> <li>「第1曲は《バーバ・ヤーガの小屋》だと思う。理由は、なんだか荒々しくて不気味な感じがして、魔女の家っぽかったから。」</li> <li>「第10曲は《キエフの大きな門》だと思う。理由は、大きな音で、荘大な感じがして、自分もこの曲を聴いて、大きな建物を想像したから」…などが予想される。</li> </ul> </li> </ul>	↓

<p><b>④ 選んだ曲を繰り返し聴き、予想の根拠を「リズム」「速度」「強弱」「構成」などと関連づけてまとめる</b></p>		
<p>・『私の選んだ 1 曲』の元になっている絵を予想した理由を、友達に納得してもらえるように説明できるかな？きっと、『何となくそんな感じがした』なんて言っても、友だちにはわからないよね。『この〇〇が□□になっているから』とか、『〇〇の部分が□□に聴こえるから』とか言えるとわかりやすいね。皆さんの予想の理由を、音楽を聴きながら探っていきましょう。」</p> <p>・「では、自分の選んだ曲を繰り返したり、一時停止したりしながら聴いてみましょう。同じ曲を選んだ友達と意見交換しながら考えてみるといいですね。」</p>	<p>・これまでの鑑賞題材で学んだ「音楽を形づくっている要素」を確認する(例:音色、リズム、旋律、形式など)。</p> <p>・本題材で主として扱う、また新たに学んでほしい「音楽を形づくっている要素」について確認する。</p> <p>・5 つのコーナーを設け、自分の選んだ曲を繰り返して聴くことのできる環境を整える。</p> <p>・ワークシート(資料 2 参照)</p>	<p>鑑①</p>
<p><b>⑤ 予想と根拠を発表し合う</b></p>		
<p>・「では、発表してもらいましょう。」</p>	<p>(予想される生徒の発話例)</p> <p>・「第 5 曲の元になっている絵は「卵の殻をつけた雛の踊り」だと思う。それは、この旋律に繰り返し現れる短い音を使ったリズムが雛の動きを表しているように聞こえるし、全体的に小さめな音で演奏されていることから、雛のような小さいものを表しているように感じるからだ。」</p> <p>・発表内容に関わる部分を、全員で聴きながら確認できるようにしておく。</p>	<p>鑑①</p>
<p><b>⑥ 「展覧会の絵」の紹介文を書き、友だちと紹介し合い、楽曲を聴き味わう</b></p>		
<p>・「友だちの発表を聞いて、どうでしたか？『なるほど』と思うことがたくさんありましたね。」</p> <p>・『展覧会の絵』について、いろいろわかってきましたね。ここまでの鑑賞で自分が感じたことやわかったことをもとに、この曲のよさを紹介文という形で表してみましょう。」</p> <p>・この紹介文もとに、皆さんの家族に「展覧会の絵」を紹介してみてください。そして、ワークシート(資料 3)に家族の皆さんの反応を記入してください。」</p>	<p>・ワークシート(資料 2)</p> <p>・ワークシート(資料 3)を配布し、紹介の仕方について説明する。</p>	<p>鑑②</p>
<p><b>⑦ 紹介文をもとに、家族に「展覧会の絵」を紹介する</b></p>		
<p>・「家族の皆さんの反応はどうでしたか？」</p> <p>・「自分の感じた音楽の魅力が、他の人に伝わったり、そのことによって、その音楽に興味をもってくれる人が増えたりすることって、とてもうれしいことですね。そのことによって、家族の音楽の世界がまた少し広がったんですね。」</p>	<p>・数名を指名し、「家族が興味をもってくれてうれかった」等の発言を取り上げ、全体に広げる。</p> <p>・このような学習によって、自分が音楽文化を広げる担い手になり得ることを感じ取れるようにする。</p>	<p>鑑②</p>

6. 資 料

■ 資料1 ワークシートの例：「見つける」

♪ 組曲「展覧会の絵」 ♪ (全10曲) ムソルグスキー作曲 (ラヴェル編曲)

3 年 組 番 氏名 \_\_\_\_\_

♪プロムナード

第1曲 [ \_\_\_\_\_ ] \* ( \_\_\_\_\_ )

♪プロムナード

第2曲 \* ( \_\_\_\_\_ )

♪プロムナード

第3曲 [ \_\_\_\_\_ ] \* ( \_\_\_\_\_ )

第4曲 [ \_\_\_\_\_ ] \* ( \_\_\_\_\_ )

♪プロムナード

第5曲 [ \_\_\_\_\_ ] \* ( \_\_\_\_\_ )

第6曲 \* ( \_\_\_\_\_ )

第7曲 \* ( \_\_\_\_\_ )

第8曲 \* ( \_\_\_\_\_ )

第9曲 \* ( \_\_\_\_\_ )

第10曲 [ \_\_\_\_\_ ] \* ( \_\_\_\_\_ )

♪ 音楽の魅力を探り、友と伝え合おう ♪

3年 組 番 氏名 \_\_\_\_\_

私の選んだ1曲！

第	曲	
	私の題名：「	」
	予想した絵：「	」

※そのように思う理由を、下の□の中の言葉（音楽を形づくっている要素）を2つ以上使って、友だちに納得してもらえるように説明しよう。その際、下線のついている言葉は必ず1つ使ってください。

音色   リズム   速度   旋律   強弱   構成   音と音との関わり合い

【説明】	【聴いてほしいところ】
	<div style="border-left: 1px dashed black; border-right: 1px dashed black; height: 100px; width: 80%; margin: 0 auto;"></div>

友だちからの評価（A～D）	（   ） □んから（   ）	（   ） さんから（   ）	（   ） さんから（   ）
---------------	-----------------	-----------------	-----------------

\*A…「なるほど!」、B…「そうだね。」、C…「まあ、そうとも言えるかな。」、D…「そうかなあ?」

「展覧会の絵」の紹介文を書こう！

- 条件1：「私の選んだ1曲」について触れよう（上記の説明の一部をそのまま使ってもよい）。
- 条件2：この曲全体について、自分はどのような感想をもったのかについて、理由を含めて書こう。
- 条件3：この曲を聴いたことのない人が、この曲に興味をもてるように書こう。

---



---



---



---



---

## 『展覧会の絵』の魅力を家族に紹介しよう

3年 組 番 氏名 \_\_\_\_\_

紹介した家族： \_\_\_\_\_ (例：父)

\_\_\_\_\_(父) は『展覧会の絵』を…

ア) 知っていた

イ) 知らなかった

(どちらかに○印)

\_\_\_\_\_(父) の好きな曲やその理由

紹介文を読んで…

(該当したものに○印をしてください)

ア) \_\_\_\_\_(父) と一緒にこの曲を聴いた。

イ) \_\_\_\_\_(父) とこの曲のよさについて語り合った。

ウ) \_\_\_\_\_(父) から、次のような紹介文の感想をもらった。

紹介文を読んで…

(該当したものに○印をしてください)

ア) \_\_\_\_\_(父) は、『展覧会の絵』を聴いてみたくなると言った。

イ) \_\_\_\_\_(父) は、『展覧会の絵』を聴いてみたくなり、さらにCD等がほしくなったと言った。

ウ) \_\_\_\_\_(父) は、『展覧会の絵』を、あなたと一緒に聴いてみたいと言った。

エ) \_\_\_\_\_(父) から、次のような紹介文の感想をもらった。

## ♪ 心の中に絵を描こう ♪

3年 組 番 氏名 松井 華子

私の選んだ一曲！

第 5 曲
私の題名：「 森 の 朝 」
予想した絵：「 リモージュリ 市場 」

※そのように思う理由を、下の□の中の言葉（音楽を形づくっている要素）を二つ以上使って、友だちに納得してもらえるように説明しよう。その際、下線の付いている言葉は必ず一つ使ってください。

音色   リズム   速度   旋律   強弱   構成   音と音とのかかわり合い

<p><b>【説明】</b></p> <p>* 5曲目の最初から終わりまで、ほげれのいいリズムで進むテンポの早い曲。強弱は、クレッシェンドが多い。</p> <p>曲の構成は、高音域が旋律と奏でている。テンポ・リズム</p> <p>曲調は、大きく変化しない。</p> <p>この曲から、市場の活気ある雰囲気と、野菜や果物、魚なども、新鮮な事がわかる。テンポも早いのと朝の早い雰囲気。</p> <p>時間帯は、休日の早朝、日が出て海が光に当たって輝いている様子。</p>	<p><b>【聴いてほしいところ】</b></p> <p style="font-size: 1.2em;">&lt; 初め ~ 50秒 &gt;</p>
---	---

友だちからの評価 (A~D)	( 佐藤 ) さんから (A)	( 鈴木 ) さんから (A)	( 伊藤 ) さんから (A)
----------------	-----------------	-----------------	-----------------

\*A…「なるほど!」、B…「そうだね。」、C…「まあ、そうとも言えるかな。」、D…「そうかなあ?」

「展覧会の絵」の紹介文を書こう!

条件1:「私の選んだ一曲」について触れよう(上記の説明の一部をそのまま使ってもよい)。

条件2:この曲全体について、自分はどのような感想をもったのかについて、理由を含めて書こう。

条件3:この曲を聴いたことのない人が、この曲に興味をもてるように書こう。

この曲は、曲の初めから、終わりまで、早いテンポでほげれのいいリズムで
進んでいる事から、朝市場の活気がある雰囲気や、野菜・果物・魚
などが新鮮という事が想像できます。また朝日が出てきて
海が輝いている風情も感じられる曲です。歩きながらこの曲を聴いて
いけば、つい早足に歩いたりしてしまう様な、明るい雰囲気曲です。

## 「展覧会の絵」の魅力を家族に紹介しよう

3年 組 番 氏名 松井 華子

紹介した家族： 母 （例：父）

母 は『展覧会の絵』を…

ア) 知っていた

イ) 知らなかった

(どちらかに○印)

の好きな曲やその理由

紹介文を読んで…

(該当したものに○印をしてください)

(複数選択可)

ア) 母 は、『展覧会の絵』を聴いてみたくなったと言った。

イ) \_\_\_\_\_ は、『展覧会の絵』を聴いてみたくなり、さらにCD等がほしくなったと言った。

ウ) 母 は、『展覧会の絵』を、あなたと一緒に聴いてみたいと言った。

エ) 母 から、次のような紹介文の感想をもらった。

紹介文を読んで…

(該当したものに○印をしてください)

(複数選択可)

ア) \_\_\_\_\_ と一緒にこの曲を聴いた。

イ) \_\_\_\_\_ とこの曲のよさについて語り合った。

ウ) \_\_\_\_\_ から、次のような紹介文の感想をもらった。

華子が、この曲を選んだのは、少し予想外でした。早いテンポで活気がある曲なので…と想像しています。「リモージュの市場」と「グイドロ」の2曲を一緒に聴いてみたいと思います。そして、みんなで展覧会の絵を語り合いたいですよ

### 題材の趣旨と学習指導のポイント

中学生と同じ今を生きる日本の作曲家の現代作品に対し、鑑賞者である中学生がそれを批評し、批評の結果を作曲家自身や世界に示して、新しい芸術文化の創造に貢献する経験を与えようとする題材です。作品の価値を中学生ならではの視点で創出していく趣旨から、作曲者の表現意図や構造上の特徴を理解させることよりも、それを積極的に見つけ出していく学習を仕組んでいます。その後で、作曲者からのメッセージによってそれを知ること、感動とともに新たな視野が拓かれることが期待できます。また、見つけ出したそれらが、自分の感情の変化をもたらしていたことにも気づかせたいところです。指導者は、鑑賞者の感情を揺さぶるような音楽が、芸術として永く後世に受け継がれていくものであることを伝えてほしいと思います。

この事例では、ある中学校3年生のA子さんの批評文とその英訳文を掲載しています。英文は中学生自身に書かせてもよいですし、学校の英語の先生に訳や校閲をお願いしていただいてもよいかと思います。それを学校のホームページなどで発信すれば、この事例の趣旨が果たせるものと思います。

1. 指導内容 楽曲全体のイメージやストーリー、及び自分の感情の変化の要因
2. 教材 西村 朗 作曲 《管弦楽のためのファンファーレ》 (TEBR-0012)
3. 題材目標
  - 1 音楽を聴いてイメージが描き出されることと、そのイメージが浮かんだ要因を音楽の仕組みから考えることに興味・関心をもつ。
  - 2 自分のイメージを具体的に述べ、その要因を、音楽を形づくっている要素や要素同士の関連に対する知覚をもとに探る。

#### 4. 評価計画

評価の観点	評価規準	評価方法
音楽への関心・意欲・態度	① 日本の現代作曲家が創造した音楽や、それに対して自分なりの価値づけをして、作曲家や世界の中学生と交流することに意欲的である。	観察 WS
鑑賞の能力	① 自分の感情の変化を見つけ、それを発話や記述によって表している。	観察 WS
	② 楽曲全体のイメージやストーリーを、発話や記述によって表している。	観察 WS
	③ 知覚・感受によって楽曲の特徴を見つけている。	観察 WS
	④ 自分の感情の変化や描いたイメージやストーリーの要因を、楽曲の特徴と結びつけて捉えている。	WS
	⑤ 作曲者の創造意図と、自分の感情の変化や描いたイメージやストーリーを踏まえて、自分にとっての価値を他者に対して表している。	WS

5. 授業展開

 : 見つける
  : 考える
  : 生み出す
  : 広げる

学習活動の内容と教師の発話例	指導上の留意点	評価
<p><b>① 自分の感情の変化を意識して、全曲を鑑賞する</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>「この曲を聴いてどんな気持ちになったか、を意識して聴いてね。」</li> <li>「Q1の欄にメモしながら聴いてもいいよ。」</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>「気持ち」と「イメージ」が混同されやすいのでそれぞれ例を挙げて示しておく。</li> <li>鑑賞後、メモを整理する時間を少しとる。</li> <li>鑑賞後、2、3人に問う。</li> </ul>	
<p><b>② 楽曲全体の情景やストーリーを意識して、全曲を鑑賞する</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>「『どんな情景やストーリーが浮かんだか』を意識して聴いてね。」</li> <li>「ストーリーや情景は曲の流れの中でいろいろと変わると思うから、Q2の欄にメモしながら聴いてもいいよ。」</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>鑑賞後、メモを整理する時間を少しとる。</li> <li>鑑賞後、2、3人に問う。</li> </ul>	
<p><b>⑤ ①②について対話する</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>「同じ音楽でも聴く人によって気持ちや思い描く情景、ストーリーは違うんだね。」</li> <li>「自分の気持ちや感情の変化を知ることって大事なことなんだよ。」</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>対話をさせながら、適宜板書する。</li> <li>可能な限り「単語」ではなく「文」にして述べさせる。</li> </ul>	鑑① 鑑② 
<p><b>④ 全曲を2回鑑賞し、6つの部分の特徴（要素の働き）を見つける</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>「この曲の特徴ってなんだろう？もしかしたらその特徴が、みんなの気持ちを変化させたり、情景を思い描かせたりしているのかもしれないよ。それを探しに行こう。」</li> <li>「この曲は6つの部分に分かれているよ。そのそれぞれの部分で特徴的なことを見つけてみよう。」</li> <li>「今、どこの部分なのか、は指示するから、自分の担当の部分が来たらよく注目して、そこでの特徴を見つけ出してね。Q3の『仕組み』欄にメモしながら聴いてもいいよ。2回聴くからね。」</li> <li>「聴き終わったら、『仕組み』欄にまとめて、その仕組みによってみんなはどんなイメージをもったかを、Q3の『イメージ』欄に書いてね。」</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>「特徴」は、要素の働きであることを確認する。</li> <li>要素の知覚と感受を求める。</li> </ul>	鑑③ 
<p><b>⑤ 見つけた特徴（知覚と感受をともに）を述べ合う。述べられた内容に即し、その部分を再度聴いて確認したり、楽譜を見たり、拍子に合わせて手を動かしてみたりする</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>「自分の担当した部分以外については、他の人の意見をQ3に書いておいてね。」</li> <li>「楽譜を見ながら音楽に合わせてタクトを振ってみよう。」(第1部分)</li> <li>「今、『同じ旋律がずれて出てきた』って言ってくれたけれど、これは以前学習した『フーガ』と同じだね。」(第2部分)</li> <li>「木管と弦のパートと、金管パートとの違いを楽譜で確かめてみよう。」(第3部分)</li> <li>「2つの違いを手で表してみたらどうなるかな？」(第4部分)</li> <li>「確かに楽譜がずいぶん白くなったよね。」(第5部分)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>「第1部分」「第2部分」「第3部分」「第4部分」「第5部分」「第6部分」と掲示し、意見を適宜板書する。</li> <li>「フーガ」や「反復」など、出てきた意見に対して適宜音楽用語と結びつけて示す。</li> <li>以下の特徴があるが、それに限定する必要はない。                      第1部分(冒頭～90小節、0:00～2:32)                      ・小節ごとに変わる拍子(しかし、8→9→7→5→4→6と、8→9→7→5→4→7のセットが交互に表れる)                      ・アジア的な旋律</li> </ul>	

<p>・「『激しい』っていう意見が出たけれど、楽譜にはどんな記号が書かれているかな？」(第6部分)</p>	<p>第2部分(91小節～114小節、2:33～3:13)          ・フガートとしての旋律の出現と重なり</p> <p>第3部分(115小節～149小節、3:14～4:31)          ・金管と弦・木管の役割の対比</p> <p>第4部分(150小節～165小節、4:32～5:11)          ・管と打の応答          ・反復          ・跳躍</p> <p>第5部分(166小節～180小節、5:12～5:51)          ・これまでとの大きな転換          ・コラール風な響き</p> <p>第6部分(181小節～終末、5:52～)          ・クライマックスに至るダイナミクスの変化          ・第1部分との比較(拍子は一定、リズムは類似)</p>	
<p><b>⑥ Q1、Q2とQ3で関連しているものを線で結ぶ</b></p>		
<p>・「Q3に書いたこととQ1やQ2に書いたことが関連しているな、と思ったら、線で繋げてみてごらん。気持ちの変化や思い描いた情景やストーリーの理由がわかるかもしれないよ。」</p>	<p>・気持ちの変化やイメージの原因は、音楽の仕組みによってもたらされたことを理解させる。</p>	鑑④
<p><b>⑦ 作曲家からのメッセージを読む</b></p>		
<p>・「実は、この曲の作曲家からみんなにメッセージが届いているんだ。それを読んでみるよ。」</p>		関①
<p><b>⑧ 全曲を鑑賞して、これまでの学習や作曲家のメッセージの内容を確認し、作曲家やこの曲をまだ知らない人々に対してメッセージ(批評文)を書く</b></p>		鑑⑤
<p>・「じゃあ、最後にもう1度全曲をかけるから、西村さんのメッセージや6つの部分を確認しながら聴いてみてね。」</p> <p>・「この曲は、みんなと同じ、今を生きている日本人の作曲家西村さんが作った新しい曲だけど、西村さんや、この曲をまだ知らない世界の人々に、みんなの言葉で、この曲の特徴やよさ、それにみんなが感じたことや考えたことを伝えてみようよ。」</p> <p>・「ワークシートに書き込んだことや、西村さんのメッセージも生かしながら書いてね。」</p>	<p>・根拠をもってできるだけ具体的に表現できるように、線で結んだ事柄に注目させる。</p> <div data-bbox="874 1570 1342 1720" style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> <p><b>メッセージの送付先</b>  <a href="mailto:miyashit@nara-edu.ac.jp">miyashit@nara-edu.ac.jp</a>          その後、西村朗さんに送付します。</p> </div>	
<p><b>⑨ 優れたワークシートと、英訳されたメッセージをクラスに配布し、共有する</b></p>		
<p>・「Aさんのメッセージは、自分の意見がわかりやすく述べられていていいね。」</p> <p>・「Bさんのメッセージは英訳してHPに載せようと思うけれど、世界の中学生に伝わるといいね。」</p> <p>・「西村さんもみんなのメッセージを受けて、これからたくさん曲を書いてくださるといいですね。」</p>	<p>・鑑賞して批評することは、文化の継承や創造に繋がることを伝える。</p>	

6. 資 料

■ ワークシートの例

<	>鑑賞 ワークシート 3年 ___組 ___番 氏名_____		
Q1 感情の変化を見つけてみよう			
メモ欄			
Q2 浮かんだ情景やストーリーを考えてみよう			
メモ欄			
Q3 各部分の仕組みと、それによって得られたイメージを書いてみよう。 自分の担当は_____部分。			
	第1部分	第2部分	第3部分
仕組み			
イメージ			
	第4部分	第5部分	第6部分
仕組み			
イメージ			
Q4 この曲を、あなたの言葉で世界に発信しよう。 ワークシートに書き込んだことや、西村さんのメッセージも生かしながら書いてね。			

## ■ 作曲者からコメント

中学生の皆さんへ

このたびは、私の「管弦楽のためのファンファーレ」を聴いていただきありがとうございます。ありがとうございます。

「ファンファーレ」とは、一般的に、金管楽器群によって祝典や儀式の際に演奏されるものです。しかし私はこの曲で、管弦楽、すなわち、弦楽器や打楽器も登場させ、すべての楽器が出会い、活躍し、そしてそれぞれの楽器のもつ多彩な音色や合奏効果によって、ファンファーレのもつ祝典や儀式性を表現しました。

皆さんも気が付いたかと思いますが、ビート自体が揺れ動くことによって生まれるダイナミズム、旋律のうねり、そして終末部に表れるコラール風の静かな祈りなど、いくつかの違ったシーンを描くことで曲全体の変化を築き、祝典や儀式にある物語を交響詩のように表現しました。

皆さんは、壁画を見たことがありますか。壁画を目の当たりにしたとき、画家が描いた筆のタッチなど、壁画の部分よりも、まず壁画全体を見て、最初の感動を得るのではないのでしょうか。私のこの作品も、まず楽曲全体を捉えて、いろいろな情景やストーリーを感じ取っていただけたらと思います。皆さんは、これを聴いて、最初にどのような物語や映像をイメージしたのでしょうか？ 例えば、私の好きなボロディン作曲の「ダッタン人の踊り」を聴いて、どのような舞踊の場面をイメージするか、また、先ほど述べた交響詩なども聴いて、そこで描かれている物語を想像してみるのもよいでしょう。そのように、まず音楽全体をイメージをもって捉えることを大切にいただきたいと思います。

私の他の作品では、アジア的な宗教や宇宙観から導いた微妙な音のゆれ（ヘテロフォニーといいます）を用いたものが多くあります。それらもまた是非聴いてみてください。



## ■ 批評文の例（H中学校3年生、A子さんの批評文）

私がこの曲を一言で表せば、「調和」と表します。

西村さんは、弦、管、打の楽器を使って1つの曲を作り上げています。聴いた時の第一印象は、「不安」や「緊張」といったものですが、この曲が、楽器の多彩な音色を存分に使って作った曲、と聞けば、やはり「調和」という言葉を感じられずにはられません。

この曲には大きな特徴があります。それは、旋律を作ることに多くの工夫をしていること。同じ旋律を重ねてみたり、違った拍子を1小節ずつ変えてみたり。その違う作り方をしたことによって部分部分で異なった印象を受けます。

皆さんも、西村さんの様々な工夫で作られた「管弦楽のためのファンファーレ」を聴いてみてください。

I want to describe my impression of the "Fanfare for Orchestra" by Akira Nishimura "harmony". Mr. Nishimura, one of the most famous composers in Japan, named the piece "Fanfare", though he used the strings, winds, and the percussions in this piece. When I listened to this music, I felt "uneasy" and "tense". However I couldn't help but feel "harmony" when I knew that he used various tones of the instruments.

There are some important characteristics in this music. I found, in my analysis, the devise of melody, the different meter in every measure in the 1<sup>st</sup> part, and the use of counterpoint in the 2<sup>nd</sup> part. I think the different characteristics in each part give us different impressions.

So, I'd like to recommend "Fanfare for Orchestra" to junior high school students in the world. Please listen and appreciate it!

(宮下 俊也)

**題材の趣旨と学習指導のポイント**

日本の中学校の音楽科教育の目標は、音楽を愛好する心情、音楽に対する感性、音楽活動の基礎的な能力、音楽文化についての理解、豊かな情操の育成が掲げられています。一方、これからの世界の芸術教育の指針には、芸術教育によって今日の世界が抱える対立や貧困、環境などの諸問題への解決や、異文化理解のための国際交流を果たそうとする点も強く主張されています(ユネスコが2006年に提示した「芸術教育のためのロードマップ」(Roadmap for Arts Education)より)。日本の音楽科教育を受けた生徒たちは、そこで培った能力を用いて世界の平和や環境など、持続可能な社会や文化構築のために貢献して欲しいものです。

本事例は、まず、音楽のもつメッセージ性、特に「平和」をアピールしている曲を聴いて、メッセージを音楽によって訴えることの意味を鑑賞者の立場から考える学習をします。そこで音楽による社会貢献の方法に関心をもたせた後、その関心をもとに、「総合的な学習の時間」として、カンボジアの子どもの歌や、音楽家が演奏によって地域や国々の平和や環境、芸術文化の発展に貢献している事例を出発点に、音楽による社会貢献について調べ、考えていきます。そして、自分たちもどのようにしたら音楽による社会貢献ができるのかを見つけ出していきます。

中学生が鑑賞によってできる平和への貢献の1つは、世界や日本の様々な音楽文化とそれを創った人々を理解し、それらに対する自分の意見を述べ、交流し合うことだと思います。それこそが音楽鑑賞による批評のもっとも重要な点であり、批評することのこうした意義を、中学生に理解させたいと思います。

1. 指導内容 音楽のメッセージ性と音楽による社会貢献
2. 教材
  - ・宮沢和史 作詞・作曲 《島唄》
  - ・北川悠仁 作詞・作曲 《Hey 和》
  - ・谷川俊太郎作詞・武満徹作曲 《死んだ男の残したものは》
  - ・カタルーニャ民謡・パブロ・カザルス編曲 《鳥の歌》(パブロ・カザルスの演奏による)
  - ・寺島尚彦 作詞・作曲 《さとうきび畑》(森山良子によるロングバージョン)
  - ・カンボジアの子どもの歌 (CDや歌絵本 はNPO法人「幼い難民を考える会」(CYR) <http://www.cyr.or.jp/> から入手可能)
  - ・城之内ミサ作曲 《組曲 大和路シンフォニー～悠久のやまと》より《II・祈り》
  - ・五嶋みどり、川井郁子、北川悠仁(ゆず)、ホセ・カレーラス、飯森範親指揮による山形交響楽団の演奏

3. 題材目標

様々な音楽から喚起された自分のイメージや感情を具体的に述べ、その要因を、音楽を形づくっている要素や要素同士の関連に対する知覚をもとに探り、音楽のメッセージ性などを捉える。

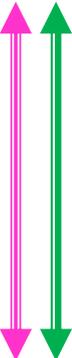
4. 評価計画

評価の観点	評価規準	評価方法
音楽への関心・意欲・態度	① 音楽がもつメッセージ性や、音楽による社会貢献について、興味・関心をもって意欲的に考えている。	発話 WS
鑑賞の能力	① 音楽が主張するメッセージを捉え、そのメッセージが音楽のどういった仕組みや演奏表現から捉えられるのかを述べるができる。	発話 WS
	② メッセージ性のある音楽を聴いて、それを受け取った時の自分の感情を、音楽から感受したことと関わらせて述べるができる。	発話 WS
「総合的な学習の時間」として扱う部分は、指導者が適宜、観点を定めて評価する。 (例) ・テーマに対して興味・関心をもって意欲的に取り組んでいる。 ・音楽に対する社会貢献について、調べたことをもとに自分たちの意見を主張することができる。 ・資料や情報などを適切に用いて検討している。		観察 プレゼンテーション など

5. 授業展開



学習活動の内容と教師の発話例	指導上の留意点	評価
<p><b>① 平和への思いが込められた3曲を鑑賞する</b></p> <p>・「音楽には、聴く人に対してある1つのはっきりとしたメッセージを伝えるためにつくられたものがあります。例えばコマーシャルソングは、売りたい商品を印象づけ、買ってもらうとするメッセージがありますね。」</p> <p>・「では、これから聴く3曲に共通するメッセージはどんなことでしょうか。」</p> <p>・(《島唄》《Hey 和》《死んだ男の残したものは》を鑑賞後)、「これらの曲が共通して訴えているものはなんだと思いましたが、Aさん？」</p> <p>・「平和だと思った理由はなんですか？」</p> <p>・(歌詞を提示して)「歌詞は確かに平和を主張していますね。では詩だけでもいいのに、どうして歌にしたのでしょうか？」</p> <p>・「以前、『表現するということは、表現したいものがあって、それを音や色や動きや言葉などで、外に表すことだ』と学習しましたね。これら3曲の詩を作った人も、作曲した人も、そして演奏する人も、『平和を訴えたい』という『表現したいもの』があったのでしょうかね。」</p> <p>・「では、それを受け取る側、つまり、『音楽を鑑賞する人』は、音楽による主張をどこでどうやって受け取るのでしょうか。耳かな、頭かな、それとも…。」</p>	<p>・曲名を伏して鑑賞させる。</p> <p>(予想される生徒の発話例)</p> <p>・「平和」「反戦」「祈り」など。</p> <p>・「歌詞」</p> <p>・「作曲した人も平和を訴えたい気持ちがあったから」</p> <p>・「人々に歌われることによって、その主張が伝わるから」</p> <p>・「音楽になることによって、平和の尊さや戦争の悲しみなどがより強まるから」</p> <p>・《島唄》の歌詞の意味がわからないようだったら、簡単に紹介する。</p>	<p>関① 鑑①</p>
<p><b>② カザルスが演奏する《鳥の歌》を鑑賞し、奏でられる音からカザルスのメッセージを考える</b></p> <p>・「もう1つ、あるメッセージが込められた曲を聴いてみましょう。カザルスというチェリストが演奏する《鳥の歌》です。どんなメッセージを受け取ることができるかな。」</p> <p>・(鑑賞後)「カザルスさんの一音一音に込める感情や、弾いている表情を想像しながら、もう1度聴いてみよう。」</p> <p>・(2度目の鑑賞後)「Bさん、カザルスさんの主張やメッセージはなんだだったと思いますか？」</p> <p>・「Cさんは？」</p> <p>・「実はこれも『平和』を訴えている演奏なんですよ。」</p>	<p>・曲名は伏して聴かせてもよい。</p> <p>・意見を自由に出させ、対話する。その時、どうしてそう思ったのか根拠も考えさせ、述べさせる。」</p> <p>(予想される生徒の発話例)</p> <p>・「すごくゆっくりと音を繋げながら弾いていたから、何か強い悲しみを表していたように思う。」</p> <p>・「音の動きが少ないし、鳥もうれしそうにさえずっているようには思えない。死者を弔っているように聴こえた。命の大切さを訴えているんじゃないかな。」</p> <p>・適宜、以下について説明する。</p> <p>・カザルスが、自由と平和を愛し、当時独裁と内戦が続く故郷スペインを離れたこと。</p>	<p>関① 鑑①</p>

	<ul style="list-style-type: none"> <li>・核実験禁止運動にも参加した平和主義者であったこと。</li> <li>・国連会議場で次のメッセージを伝えた後で《鳥の歌》を演奏したこと。</li> </ul> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> <p>「これから短いカタルーニヤの民謡《鳥の歌》を弾きます。私の故郷のカタルーニヤでは、鳥たちは平和（ピース）、平和（ピース）、平和（ピース）！と鳴きながら飛んでいるのです。」</p> </div>	↓
<b>③ 《さとうきび畑》を鑑賞し、表現の仕方から平和の訴えを感じ取る</b>		
<div style="display: flex; align-items: center;">  <ul style="list-style-type: none"> <li>・「最後にもう 1 曲、平和を訴えている曲を聴いてみましょう。《さとうきび畑》です。じっくり聴いてくださいね。」</li> <li>・(鑑賞後、歌詞と楽譜を配って)「歌詞を見ると、戦争の悲惨さや平和を訴えていることがわかりますね。ではもう1度かけますから、森山良子さんの歌い方など、音楽の表現を通して訴えかけてくる平和の主張を聴き取ってみてください。そしてそれを受け取ったあなたの気持ちとともにWS(資料 1)に書いてください。聴きながらメモしていてもいいです。」</li> </ul> </div>		鑑② ↓
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; display: inline-block;">       次の④または⑤は、ここまでの学習の発展として「総合的な学習の時間」として行う。     </div>		
<b>④ 《カンボジアの子どもの歌》を鑑賞し、子どもたちがこの歌を歌う環境や心情を想像してみる</b>		
<div style="display: flex; align-items: center;">  <ul style="list-style-type: none"> <li>・「ここまで、平和を訴える音楽を聴いてきました。これからある国の子どもたちの歌を聴いてみます。」</li> <li>・(歌詞の日本語訳を配布して 5 曲鑑賞後、以下のような問いを投げかけ対話する)           <ul style="list-style-type: none"> <li>・「旋律や歌い方、声の音色などから、どこの国の子どもたちの歌だと思うかな？」</li> <li>・「歌詞や音楽から、どんな様子が浮かんでくるかな？」</li> <li>・「日本のわらべ歌や童謡はこどもの生活と関わっているものが多いけれど、この歌を聴いてこの国の子どもたちはどんな環境で、どんな生活をしているか想像できるかな？」</li> </ul> </li> <li>・「これらの曲は、カンボジアの子どもたちの歌です。カンボジアって聞くと、第一印象として、難民、地雷、恵まれない国、などが頭をよぎると思いますが、現在のカンボジアの状況はどうなっているのでしょうか。そうしたことを調べることによって、カンボジアの子どもたちがどのような生活環境の中で、どのような気持ちでこうした歌を歌っているのか、いろいろと想像できると思います。」</li> <li>・「そこで、次の 3 つのテーマについてグループで調べたり、考えたりしてきてください。」</li> </ul> </div>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・グループで話し合い、その後発表させてもよい。</li> <li>・理由を添えて、意見を述べるように指示する。</li> <li>・適宜、繰り返して鑑賞させる。</li> </ul> <ul style="list-style-type: none"> <li>・カンボジアの子どもたちの暮らしや環境など、適宜、資料や以下のサイトなどを紹介したり、調べ方のアドバイスをしたりする。  <a href="http://www.cyr.or.jp/">http://www.cyr.or.jp/</a>  <a href="http://www.tufs.ac.jp/common/fs/ase/cam/komado/index.html">http://www.tufs.ac.jp/common/fs/ase/cam/komado/index.html</a> </li> </ul>	

テーマA：カンボジアの子どもたちにとって、これらの歌はどのような存在なのだろう？  
 テーマB：カンボジアの子どもたちは、どのような気持ちでこの歌を歌っているのだろう？  
 テーマC：音楽を通して、カンボジアの子どもたちを支援するには、どんな方法があるだろう？

テーマに迫るための方法

- ①：カンボジアという国について調べてみよう
- ②：カンボジアの子どもたちの生活や環境、教育について調べてみよう。
- ③：カンボジアの音楽文化について調べてみよう。



- ・「調べてきたことを基に、各グループの意見を発表してください。」
- ・「皆さんが調べて得られた意見や、他のグループの意見をもとにして、この子どもの歌について、カンボジアの子どもたちに向けてのメッセージを書いてみましょう。」  
(資料2)

- ・調べた後、各グループにプレゼンテーションさせ、テーマに対する見解を報告させる。
- ・各グループのプレゼンテーションを聞いたのち、再度、カンボジアの子どもたちの歌を鑑賞し、各グループから報告されたことを踏まえて、これらの曲について、カンボジアの子どもたちに届けるメッセージを批評文として書く。

**メッセージの送付先**

[miyashit@nara-edu.ac.jp](mailto:miyashit@nara-edu.ac.jp)

その後、NPO 法人「幼い難民を考える会」(CYR)へ、送付します。

**⑤ 音楽家による社会貢献のための活動を知り、自分たちも音楽活動によってどのような社会貢献ができるか考える**



- ・「前回は平和を訴える曲を鑑賞して、音楽にメッセージ性があることを学びました。今度は、音楽家が演奏を通して社会や地域のために貢献している活動について考えてみたいと思います。」
- ・「まず初めに、城之内ミサさんの《組曲 大和路シンフォニー～悠久のやまと》より《Ⅱ・祈り》を聴いてみましょう。」
- ・(鑑賞後)「どんな雰囲気を感じたかな？」
- ・「それはどうしてかな？」
- ・「城之内ミサさんはね、…」

- ・数名から意見を聞く。  
(予想される生徒の発話例)
  - ・「全体を通して日本の楽器が使われているので、古代の日本の感じがしました。」
  - ・「大きく2つに分かれていて、前半は日本の過去、後半は日本の未来を描いているような気がしました。理由は、前半はテンポがゆっくりで尺八がのどかな旋律を奏でていたから。後半は日本の楽器を使いながら軽快なリズムになっていったからです。」
- ・城之内ミサさんとこの曲の背景や以下の点について適宜説明する。
  - ・「ユネスコ平和芸術家」として、平和祈念、世界遺産保護のために作曲、演奏、音楽監督などを通してユネスコの理念を伝えている。
  - ・世界遺産である奈良での平城遷都1300年記念コンサート、9.11 テロの遺族を招待した平和記念のコンサートなどを行い、世界的にも高い評価を受けている。

 <ul style="list-style-type: none"> <li>・「もう1度聴くので、WS(資料3)に記入してください。」</li> <li>・「城之内さんのように、ただ音楽を作曲したり演奏したりするだけではなく、音楽によって平和や環境など、社会のために貢献しようと活動している音楽家がたくさんいます。」</li> <li>・この学習では、そうした音楽家たちの演奏を聴き、そのような社会貢献のための活動をしているかを調べてみたいと思います。</li> <li>・皆さんに調べてほしい音楽家は、次の人たちです。 <ul style="list-style-type: none"> <li>・五嶋みどり</li> <li>・川井郁子</li> <li>・北川悠仁(ゆず)</li> <li>・ホセ・カレーラス</li> <li>・山形交響楽団と指揮者飯森範親</li> </ul> </li> <li>・「まずは、この人たちの演奏を聴いてみましょう。」</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「心の平和、畏敬の念」の思いを込めて氏が作曲した作品を演奏する「世界遺産トーチランコンサート」を行っている。</li> <li>・《組曲 大和路シンフォニー～悠久のやまと》は、「祈りの精神、子を思う親の想い、愛する心、理想、野心、平和への祈念」といった普遍性に想いを馳せ作曲された(CD:TECG-39039～39040のライナーノーツより)。</li> <li>・グループごとに1人(組)を選んで調べさせる。</li> <li>・他の音楽家でもよい。また、生徒にこの他に活躍している音楽家を探させてもよい。</li> <li>・5人(組)の演奏を鑑賞させる。</li> </ul>
<p>調べ、発表すること</p> <p>①：経歴</p> <p>②：どのような社会貢献を行っているか</p> <p>③：その社会貢献に対するグループの意見、感想</p> <p>④：自分たちでできる音楽による社会貢献として、どのようなことが考えられるか</p>	
 <ul style="list-style-type: none"> <li>・「それでは、4つの事項について各グループの意見を発表してください。」</li> <li>・「今の発表について何か質問はありますか？ あるいは思ったことや感想、意見があったら述べてください。」</li> <li>・「それでは、この演奏家の演奏を、もう1度聴きますね。」</li> <li>・(5グループの発表後)「『なぜ音楽によって社会貢献ができるのか』を考えて、意見文としてWS(資料4)に書いてみてください。次の時間に、皆さんが書いたものを印刷して全員に配ります。」</li> <li>・(次時、意見文を配布して)「Aさんの言いたかったことはどのようなことですか？」</li> <li>・「Bさん、あなたたちが考えた『自分たちができる音楽による社会貢献』について、もう少し詳しく話してくれますか？」</li> <li>・「Cさん、それについてどう思いますか？」</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・4つの事項について、各グループにプレゼンテーションさせる。</li> <li>・各グループのプレゼンが終わるごとに、質問を受けたり意見を述べ合ったり、教師からの補足を適宜行う。また、その音楽家の演奏を鑑賞していく(最初に聴いた演奏と別の曲が望ましい)。</li> <li>・対話を行いながら、次の点などを確認していく。 <ul style="list-style-type: none"> <li>・音楽による感動が人々の感情を豊かにすること。</li> <li>・豊かな感情をもつことにより平和で豊かな社会が構築できる可能性があること。</li> <li>・政治や経済などととも、社会において文化の存在が重要であること。</li> <li>・感動を伝え、感動を受けるコミュニケーションが、人間関係を良好なものにしていくこと。</li> <li>・秀でた音楽の才能を、後継者の育成に還元していくことにより、音楽文化の発展につながること。</li> </ul> </li> </ul>



・「最後に、この学習のまとめとして、皆さんが調べた人たちに向けて、活動に対する応援メッセージを書いて送りたいと思います。ただ演奏についての感想だけではなくて、なされている社会貢献についての皆さんの感想や意見、そして、『自分たちができる音楽による社会貢献』についても書いてください。」

**メッセージの送付先**

[miyashit@nara-edu.ac.jp](mailto:miyashit@nara-edu.ac.jp)

その後、各マネージメントへ、送付します。

6. 資 料

■ 資料1 ワークシートの例（1）

ワークシート

《さとうきび畑》が訴えるもの

3年 組 番 氏名

Q1 歌詞以外で平和を訴えていることがわかることはどんなことでしょうか？  
（歌い方、表情、1番から10番までの変化のつけ方、速度、強弱などを手がかりに見つけ出してみよう。）

Q2 《さとうきび畑》を聴いて、あなたの気持ちや思ったことを書きましょう。  
（Q1で見つけたことをもとに書いてみよう。）

■ 資料2 ワークシートの例（2）

カンボジアの子どもたちに向けてのメッセージ

3年 組 番 氏名

（カンボジアの子どもたちの歌を聴いて想像したり考えたりしたこと、テーマABCについてわかったことを含めて書きましょう。）

■ 資料3 ワークシートの例（3）

ワークシート

《組曲 大和路シンフォニー～悠久のやまと》より《Ⅱ・祈り》を聴いて

3年 組 番 氏名

Q1 この曲についての感じ取った雰囲気を、理由とともに書いてみましょう。

Q2 城之内ミサさんの活動についてわかったことをまとめておきましょう。

■ 資料4 ワークシートの例（4）

[ ]へのメッセージ

3年 組 番 氏名

(発表した①～④の内容を含めて書きましょう。)

■ 資料5 《カンボジアの子どもたちのうた》の歌詞

はすの花よ

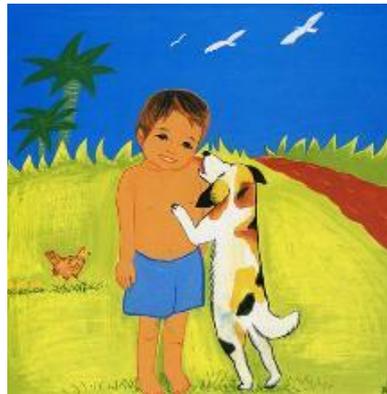
船をこぐ音が聞こえる  
はすの花を とりに 行くのね  
はすの花よ はすの花よ  
泥の中から咲いているのに  
どうしてそんなに きれいな  
実も 根も 粉も みんなとても いいにおい  
泥の中から 生まれてくるのに



(歌絵本第1集「ぼくの犬アーキー」より)

ぼくの犬アーキー

ぼくの犬アーキー ぼくを家で待っている  
アーキーは手をあわせて あいさつもできるし  
後足だけで 立っても歩ける  
もし おかしをやれば  
後足で歩きながら しっぽを振ってみせるよ



(歌絵本第1集「ぼくの犬アーキー」より)

つるのさかなとり

つる1 つる2 つる3がさかなをとりに行きました  
つる4も さそって行きました  
つる5は 気分がよくなって  
つる6を 呼びにやりました



(歌絵本第1集「ぼくの犬アーキー」より)

ものまねどり

ものまねどりさん どこいくの  
ちかくをとんで とおくはおやめ  
もどっておいで もどっておいで  
とおくへとぶと つかまるよ  
はやく はやく もどっておいで



(歌絵本第2集「クメールのさと」より)

クメールのさと

クメールのさとの つきよのぼんは  
むらじゅう そろって ほら はたらくよ  
おとこたちが かなかけして いえたてる  
おんなたちは ほら こめつきだ  
ほりものするひと さとうをにるひと  
きれいなむすめたちは ほら はたおりだ



(歌絵本第2集「クメールのさと」より)

※ 以上、認定NPO法人 幼い難民を考える会 (CYR) 発行 歌絵本①②より転載。  
※ 転載許諾済み。

(宮下 俊也)

## 事例についての問い合わせ先

臼井 学	u-manabu@msd.biglobe.ne.jp
勝山 幸子	miyashit@nara-edu.ac.jp (研究代表者代行)
佐久間 敦子	atsuko0215@live.jp
嶋田 歩	shimada@hak.hokkyodai.ac.jp
松岡 聡	satobo2@hi.enjoy.ne.jp
松野 由美子	yumiko323@mail.goo.ne.jp
宮下 俊也	miyashit@nara-edu.ac.jp
森長 はるみ	moricho9@yahoo.co.jp



## おわりに ー謝辞にかえてー

本研究にあたり、多くの方々に大変お世話になりました。

研究分担者の大熊信彦先生には、行政の立場から私の気づかない点までの確にご指摘いただき、またすべての事例について、我が国の求める鑑賞教育の方向性を見据えた建設的な修正を施してくださいました。

研究協力者の先生方、臼井学先生、勝山幸子先生、佐久間敦子先生、嶋田歩先生、松岡聡先生、松野由美子先生、森長はるみ先生には、ご多忙にもかかわらず、趣旨を踏まえた素晴らしい実践例を作成していただきました。これらは、先生方の日々の優れた実践の中から生まれ出たものであると思います。必ずやこの事例が広まって、全国の音楽鑑賞教育の発展に寄与するものと確信しています。

また、海を越えて米国カリフォルニア州の先生方にも、うれしいご協力をたくさんいただきました。カリフォルニア州立大学の D. コナーズ博士、C. ノーデル先生、D. ブレイク先生、P. カルドザ先生、M. シュスター先生。そして S. マーフィー先生には本研究の経過報告を行った日本学校音楽教育実践学会の課題研究に、発表者として来日してくださいました。本当にありがとうございました。

そして、本報告書をまとめるにあたり、奈良教育大学卒業生の宇野加奈子さん、同大学院生の吉田真実さん、角廣愛さんに、協力をいただきました。ありがとうございました。

最後になりますが、この報告書を多くの方々に高覧いただき、いろいろな視点から忌憚のないご意見、ご助言を賜ることができれば、この上ない幸せです。

平成 25 年 (2013 年) 2 月 14 日

研究代表者

奈良教育大学大学院教育学研究科 (教職大学院) 教授 宮下 俊也



# 付 録



## 1. 交付決定額（配分額）

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
平成 20（2008）年度	1,500,000	450,000	1,950,000
平成 21（2009）年度	800,000	240,000	1,040,000
平成 22（2010）年度	900,000	270,000	1,170,000
総計	3,200,000	960,000	4,160,000

## 2. 交付期間内における研究成果の発表

宮下俊也（2008）「対話型音楽鑑賞での高校生の発話における批評の発現」『奈良教育大学研究紀要』、第 57 巻、第 1 号、pp. 145-156

宮下俊也（2009）「音楽科カリキュラムと授業実践の国際比較研究〔その 3〕批評の扱いをめぐってー日本と米国カリフォルニア州との比較を通してー」『学校音楽教育研究』、第 13 巻、p. 2、pp. 5-8、p. 17

宮下俊也（2010）「鑑賞領域で育成する学力と子どもの姿ー批評と言語活動を通してー」『季刊音楽鑑賞教育』、第 1 刊、財団法人音楽鑑賞教育振興会、pp. 31-39

宮下俊也（2010）「音楽鑑賞における批評の構造と思考過程の検討」『学校音楽教育研究』、第 14 巻、pp. 251-262

宮下俊也（2010）「鑑賞における批評の哲学的・美学的原理とその思考プロセス」『学校音楽教育研究』、第 14 巻、pp. 171-172

宮下俊也（2010）「感性育成のための指導指針ー芸術鑑賞における批評を通してー」『学校教育実践研究』、第 2 巻、pp. 43-52

宮下俊也・大熊信彦・松岡聡（2011）「『批評を取り入れた新しい音楽鑑賞授業のためのガイドブック（中学校編）』試案と授業実践」『学校教育実践研究』、第 14 巻、印刷中

大熊信彦（2008）「思考力・判断力・表現力の学習活動ー体験から感じ取ったことを表現する」『日本語学 第 27 巻第 8 号 7 月号』（三樹敏・編集兼発行人）明治書院、pp. 4-11

- 大熊信彦 (2009) 「特別掲載『中学校音楽の新しい学習指導要領について～伝統音楽・創作・鑑賞の充実』」『音楽鑑賞教育 3月号』、財団法人音楽鑑賞教育振興会、pp. 32-37
- 大熊信彦 (2009) 「中学校音楽科の授業改善について～新学習指導要領の趣旨を生かした授業づくり～」『中等教育資料』文部科学省教育課程課編、pp. 80-85
- 大熊信彦 (2010) 「音楽科の移行期最終年度の実践課題とその対応」『初等教育資料』文部科学省教育課程課編、859号、pp. 12-13
- 大熊信彦 (2010) 「論考『これからの鑑賞領域の学習指導～中教審の答申、新学習指導要領の目標、内容を中心として～』」『季刊音楽鑑賞教育』、第1刊、財団法人音楽鑑賞教育振興会、pp. 24-29
- 大熊信彦 (2010) 「論考『新学習指導要領における我が国や郷土の伝統音楽の学習指導について』」『季刊音楽鑑賞教育』、第2刊、財団法人音楽鑑賞教育振興会、pp. 24-29
- 大熊信彦 (2011) 「論考『音楽の新しい学習評価について』」『季刊音楽鑑賞教育』、第4刊、財団法人音楽鑑賞教育振興会、pp. 18-29